
交わる無限の哀色世界～テイルズオブエクシリア～

月詠輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交わる無限の哀色世界〜テイルズオブエクシリア〜

【Nコード】

N0683X

【作者名】

月詠輝夜

【あらすじ】

『あなたのこと、信じてないから』

人を嫌い、信じることを忘れてしまった巫子姫。
けれど旅をしていくうちに、少しずつ変わっていく。

『みんなのことなら、もう一度信じてみてもいいかな、って思ったんだ』

大切な人が危機に陥って、彼女は変わってやると決めた。
もう迷ってはならない、逃げてはならない、と。

テイルズオブエクシリア二次創作小説。
自営サイトと重複投稿です。

オリキャラが登場致します。
傾向は傭兵寄り恋愛シリアス微ギャグ。
オリキャラ設定は濃いです。

本編のチャットです <http://ncode.syosetu.com/n0967x/>

オリキャラ設定（前書き）

かなり濃いです
ネタバレ有

オリキャラ設定

verite

ヴェリテ・ヘイゼルシーグ

「わたしはあなたたちを信じない。
あなたたちもわたしを信じないで」

年齡：16歲
誕生日：

身長：163 cm
体重：45 kg

クラス：術剣舞士

武器：短劍、鐵扇

特性：連舞
連続攻撃が無制限になる

サポート：パワートレス

固有能力：一定の確率でパートナーの攻撃力と特攻を二倍に上げる

無意識に人を遠ざける

“人間不信の巫女姫様”

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

性格

物事を素早く理解する
直ぐに人との距離をとる

強気で負けず嫌い

警戒心が強すぎる腹黒いところが間々ある

意外と熱血なところもある

まだ子供な一面もあったり

容姿

容姿端麗 華奢

美人：6 可愛い：4

髪は銀髪で瞳は翡翠色

髪は長く腰辺りまであり、後ろで三つ編みをして前に垂らしている武器である短剣と鉄扇は直ぐに取り出せるように袖に隠している

備考

二・アケリアにおいてマクスウエルの巫女を務めている人と関わることを避けている

ミラをミラとして見ているために、村人とかから酷く疎まれている幼い頃からそれがずっと続いたため、人嫌いになった

人に近づかれるだけで無意識に後ずさる拒絶反応がでる触られると息を忘れるくらいに激しく動揺する

五感が人より優れている

イバルとは双子の兄妹

行き過ぎたシスコンであり、ミラに異常な執着心を持っているイバルをバカと呼んでいる

兄妹と思われるのが嫌なため、ファミリーネームは自分で付けた別にイバルのことは嫌いではないらしく、その証拠に誕生日に貰った服をちゃんと着ている

何故か治療は根っからダメ

今でもひっそりと治療術を練習していたりするがやっぱり無理

人を頼らず、信用しない

ある程度の高さなら平気だが、かなりの高所恐怖症

[illegible]

嫌い：人間、甘いもの

お相手：アルヴィン

Voice:

Song:

ここから下は夢絵。

アルヴィン×ヴェリテのイラストです。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 1 \\
 & 9 \\
 & 4 \\
 & 4 \\
 & \hline
 & 4 \\
 & 0 \\
 & 6 \\
 & 1 \\
 <
 \end{array}$$

術技

「術」

ファイアボール

火炎弾を発射する

アクアレイザー

高圧の水流で直線上の敵を貫く

ロックブレイク

地面から鋭利な岩を発生させる

グランドダッシャー

地面に地割れを起こす

ウィンドカッター

周囲に数回風の刃を起こす

イラプション

地面から溶岩流の火柱を噴き上げる

エアスラスト

周囲に無数の風の刃を起こす

セイントバブル

大量の水泡を爆発させる

エナジーブラスト

エネルギーを炸裂させる

サンダーブレード

頭上から電撃の剣を地面に突き刺し、周囲に稲妻を発生させる

ホーリーランス

五本の聖なる槍で敵を一気に貫く

デモンズランス

結晶化した闇の力を槍のように突き刺す

バリアー

味方ひとりの防御力を上昇させる

フィールドバリアー

味方全員の防御力を上昇させる

シャープネス

味方ひとりの攻撃力を上昇させる

アグリゲットシャープ

味方全員の攻撃力を上昇させる

リキュペレート

範囲内にいる味方の状態異常を回復する

エスプレイドレイズ

味方全員の状態変化を打ち消す

ジャツジメント

範囲内に裁きの光を降らせる

「技」

フェルリアスロンド

回転ジャンプし、空中で2度敵を斬り、さらにそこから無属性の魔法を打ち出す

フラティワルツ

物凄い早さで前後から敵を八回斬りつけ、地を這う無数の衝撃波を放つ

瞬迅剣

突きを繰り出して敵を吹き飛ばす

魔神剣

地を這う衝撃波を放つ

真空裂斬

回転ジャンプしながら連続で斬り、空中で上昇してさらに斬りつける

蒼破追蓮

剣で風ぎ払うと同時に貫通性能がある真空波を2連続で放つ

「共鳴術技」

エアリアルファイア>ジュード<
巻空旋×ファイアボール

アクアフエスト>ジュード<
魔神拳×アクアレイザー

風刃絶破>ジュード<
魔神拳×ウィンドカッター

閃烈華>ジュード<
無影掌×フェルリアスロンド

リザルトライン>ジュード<
治癒功×リキュペレート

エンシエントフレア>ミラ<
ファイアボール×イラプション

ルティスウィンド>ミラ<
ウィンドランス×ウィンドカッター

アクアウオーリア>ミラ<
スプラッシュ×アクアレイザー

アースフエンデ>ミラ<
ロケットライ×ロックブレイク

ラストテンプレーション>ミラ<
アサルトダンス×フラティワルツ

紅蓮剣＞アルヴィン＜

虎牙破斬×ファイアボール

蒼破瞬翔斬＞アルヴィン＜

瞬迅剣×蒼破追蓮

蓮舞殺撃破＞アルヴィン＜

爪竜連牙斬×フェルリアスロンド

襲爪雷斬＞アルヴィン＜

魔神閃光断×サンダーブレード

衝破十文字＞アルヴィン＜

瞬迅剣×瞬迅剣

ピコレイン＞エリーゼ＜

ピコハン×ウインドカッター

ヒールストリーム＞エリーゼ＜

ハートレスサークル×ロックブレイク

エナジーヒーリング＞エリーゼ＜

ハートレスサークル×エナジーブラスト

カオスメモリー＞エリーゼ＜

ネガティブゲイト×ホーリーランス

サンダープレッシャー＞エリーゼ＜

ティポプレッシャー×サンダーブレード

フェイタルボム>ローエン<
セヴァードフェイト×ファイアボール

アイシクルレイン>ローエン<
ロックトライ×アクアレイザー

円舞烈華>ローエン<
マーシーワルツ×フラティワルツ

舞撃・爆碎蓮迅>ローエン<
エアプレッシャー×魔神剣

ヒールストリーム>レイア<
キュア×ロックブレイク

衝破十文字>レイア<
瞬迅爪×瞬迅剣

真・旋舞翔乱>レイア<
巻空旋×フェルリアスロンド

エレメンタルガーデン>レイア<
ファンシーエレメンツ×ジャッジメント

「秘奥技」

>ホーリーランス<
フェアリー・ジャッジメント

悠久の気高き光の使者よ 全てを浄化し 闇を飲み込め
「仲間のHP、TPともに全快させ、同時にフィールド全体に七属性の攻撃を与える」

>デモンズランス<

ブラッド・ダークネスロンド

崇高なる闇の使者よ 全てを暗黒に染め 光を打ち破れ

「闇の力を纏った武器で四方から斬りつけ、更に闇の精霊術で敵を押し潰す」

戦闘ボイス

戦闘開始時

「団体」

『片づけるわよ!』

『さあ、行こうか』

『あまり期待しないでね』

「味方<敵」

『多いわね...』

「味方>敵」

『楽勝!行くわよ!』

『あら、少し物足りなくてよ』

「強敵」

『慎重に行きましょう』

『恐れないで。大丈夫』

「瀕死」

『つやばいんじゃないかしら』

『ちよつとこれはキツイ...』

「サプライズエンカウント」

『っ 囲まれたわ!』

『氣を引き締めていきましょう!』

「アドバンテージエンカウント」

『早い者勝ち!』

『一気に攻め込むわよ!』

戦闘中

「通常攻撃」

『やあっ』 『えいつ』 『はっ』

『やっ』 『はあっ』 『たあっ』

「術技」

『これ受けてみる?』 (攻撃術)

『援護するわね』 (補助術)

『弱点見つけた!』 (弱点)

『効かないわ...』 (耐性)

「ダメージ」

『うっ』 『うわっ』 『っきゃ』

『痛いわね!』 (クリティカル)

『これはちょっと...』 (ピンチ)

『つやばいわね…』（全滅寸前）

「ガード」

『効かないわ』

『そんなものは当たらなくてよ』

「ブレイク」

『うわっ！』

『ちよっと…っ！』

「戦闘不能」

『ごめん、なさい…』

『こんなことって…』

「仲間が戦闘不能」

『しっかりしなさい！…』

『戦力が減るのは気に食わないわ』

『さあ、どう料理しようかしら』

「回復」

『手間かけたわ』

『…ありがとう』

「戦闘不能回復」

『不覚…っ!!』
『もう負けない…!!』

「敵を倒す」

『次!』

『もたもたしない!』

『次、かかってきなさい』

「アイテム使用」

『使っわね』(オート使用予告)

『っ』(自分に使用)

『仕方ないわね』(仲間に使用)

『やめておくわ』

(アイテム使用中止)

「逃走」

『ここは一時撤退よ』

「挑発」

『まとめて相手してあげる』

『殺れるものならどうぞ?』

「警告」

『詠唱中よ!』

『敵に詠唱させないで!』

「秘奥義発動時」

『わたしの本気、見せてあげるわ』

『さあ、後悔の時間よ』

+

『崇高なる闇の死者よ 全てを暗黒に染め 光を打ち破れ』

『悠久の気高き光の死者よ 全てを浄化し 闇を飲み込め』

+

『これがわたしの舞曲』

『これで終劇！』

「勝利」

>ポーズ<

「A」腰に手を当てる

「B」腕を組む

「C」短剣を前に突き出す

「D」顔をそらす

「E」遠くでへたり込む

「F」三つ編みをいじる

「通常」

『わたしは負けないわよ』「A」

『次、行きましょう』「F」

『あら、終わりかしら？』「B」

『はい、終了っ』「C」

『よし、いい調子!』「A」
『このまま進みましょう』「C」

「楽勝」

『あら、呆気ないわね』「B」
『口程にもないわ』「F」
『手応えないわね』「D」
『楽勝楽勝!』「A」
『相手、間違えたわね』「C」
『もう終わっちゃった?』「B」

「辛勝」

『…ふう』「E」
『…疲れた』「C」
『終わった…?』「F」
『ギリギリつてとこかしら』「A」
『可もなし不可もなし』「B」
『…やば、しんど…!』「E」

「秘奥義」

『この調子で次も行くわよ!』「C」
『これがわたしの力…』「D」
『もう、負けない…』「F」
『巫女の力、思い知った?』「C」
『負けるわけにはいかないの』「A」
『うんうん、いい調子!』「B」

「対人戦」

「…これで、いいのよ」 「D」

「レベルアップ」

「第一歩って感じ？」 「A」

「もっと、もっと強く…」 「C」

「これでまた強くなれた…」 「B」

わたしはこの世界が好き

でも、この世界の

人間は、大嫌い

人は願を胸に抱き、叶えばと空を見上げる。精霊と人が暮らすこのリーゼ・マクシアでは、みながそうして暮らす。人の願いは精霊によって、現実のものとなり、精霊の命は人の願いによって守られる。故に、精霊の主マクスウェルは、全ての存在を守るものとなりえる。世に、それを脅かす悪など存在しない。あるとすれば…それは人の心か。

二・アケリア。そこがわたしの故郷。でも故郷と言えるほど、いい思い出はない。いつも疎まれて、村ではずっと一人だった。そ

んなわたしに手を差し伸べてくれたのが、精霊の王、マクスウェルであるミラだった。わたしは巫女の血族であり、ミラのお世話を仰せ仕わされた。でもミラはミラとしてここに存在している。だからわたしは人と接するようにミラと接してただけ。なのに、それがなぜいけないことなのだろうか。みんな巫女の癖に、とわたしの態度を否定する。そんなわたしを庇ってくれるのがミラだった。

『ミラ、遅いな…』

数日前、精霊が死んだと言って出て行ったきり帰ってこない。帰りが遅いと、あのバカも飛び出してどこかへ行ってしまった。わたしはミラの社でそのふたりの帰りを待っている。村にいても疎まれて邪魔者扱いされるだけだから。

『ん？声…？』

生まれながらに五感が人並み以上のわたしは半ば離れた距離なら声が聞き取れる。目を瞑って精神を研ぎ澄ませば待ち望んでいた声が聞こえてきた。立ち上がって扉を上開けると、そこにはミラと知らない男二人がいた。

『…ミラ…?』

「ん？なんだ、お前はまたここにいたのか」

『え、ええ…』

なぜ、だろう。今にでも飛びつきたいはずなのに、わたしは後ずさっていた。これは無意識に出る、拒絶反応だった。しかしすぐにハッとし、首を振る。大丈夫、と心を落ち着かせてから、今の位置から少しずれてにっこり笑った。

『お帰りなさい、ミラ!』

「ああ。ただいま」

ミラが社に入ったあと、わたしは後ろのふたりを見る。

『あとで説明してもらおうよ。ミラのことと四大様のこと』

「！…うん、分かった」

「おーおー、怖いねえ……」

ふたりが世精石を持つてる時点で四大様に何かがあったということ
が分かった。その四大様に何かがあったということは、ミラは今、
四大の力を失っている。そういうことなのだろう。

『ひとつ貸しなさい』

「でもこれ重いし……」

『わたしは巫子よ。これは元々わたしの仕事』

つたく、なんであのバカまだ帰ってないのよ、とぶつぶつ言いなが
ら黒髪の少年から世精石を奪うように預かった。社に入ると素手に
ミラは中央に座っており、わたしたちはその四方に世精石を置いた。

「これで、いいの？」

「うむ、助かった」

『じゃあ、下がってて』

そう言つて彼らを少し下がらせ、ミラに目配せをすると、彼女の雰囲気が一変した。何かに押しつぶされる感覚。これが威圧感というものだろう。ミラは精神を統一すると、陣を展開し始める。それはミラの頭上にも大きく現れ、世精石にそれぞれの色の光を降らせる。しかし次の瞬間

パン！

まるで弾けるように世精石が砕け散った。わたしは一目散に彼女に駆け寄り、体を支える。

『ミラ！！！！』

「ミラ！」

（どういうこと？四大様が死んだから、四元精来還の儀を行ったわけじゃないの…？）

ミラは何度も、深く息を吐いたり吸ったりしていた。わたしが口を開こうとした次の瞬間、社の扉が勢いよく開かれ、見知った人物が入ってきた。

「ミラ様！」

そう叫んだあと、ミラの前で片膝をつく。

「イバルか」

「ミラ様。心配いたしました」

わたしは顔を上げた彼、碁、バカの頭を鉄扇でぶつ叩いた。バカは頭を押さえながらわたしを見上げた。

『今更歸つて來たつて遅いんだけど。自分の使命、分かつてる？ねえ』

「わ、悪かった！ひとりにして悪かった！」

「そーゆー意味じゃ、ない!!!」

もう一回頭をぶつ叩いてやった。深くため息を吐いてから後ろのふたりをみやる。

『事情を話してもらっわよ』

「うん…」

わたしも、このバカも、この事態を見過ごすわけにはいかなかった。
黒髪の少年は覚悟を決めるように、顔を上げた。

巫子としてではなく、ただ単にミラのこと大切だから、わたしは
すべてを知りたかった…

00（後書き）

ヴェリテがバカとか言ってるけど管理人はイバルが大好きです（キラリッ）

今度はちゃんと

わたしが守らなきゃ

そう心に誓った

それから今までの経緯を聞いた。簡単に説明すると、ミラはイル・ファンの軍の研究所で黒髪の少年、ジュードと出会い、そしてミラは目的である黒匣を壊そうとして四大様の力を失った。軍の施設に侵入したことでミラとジュードは指名手配され、軍から追われる身になった。その時、ジュードの逃亡を手助けしたのが、傭兵であるアルヴィン。アルヴィンは戦えなくなったミラに剣を教えてくれたという。ミラは四大様を再召喚出来れば力が戻るんじゃないか、とニ・アケリアに戻ってきた、ということらしい。

「そんなことが…」

「んで、精霊が召喚できないのってそいつらが死んだってこと？」

「バカが。大精霊が死ぬものか」

『死ぬといってもちよつと違うのよ。微精霊も、大精霊も死んだら化石になる』

アルヴィンの言葉にバカとわたしで説明をする。

「だが、力は次の大精霊へと受け継がれる！」

「…って、言われてるね。見た人はいないけど」

わたしたちの説明でアルヴィンは納得したように頷く。そんな彼らを見てバカは鼻で笑う。

「存在は決して死なない幽世の住人。それが精霊だ」

『だからこうやって、儀を行えば四大様たちは再召喚される、は。でもそれが成せなかったということは、四大様は死んでいないという事よ』

直後、ジュードは人差し指をこめかみに押し当てて何かを考え始めた。

「だったら四大精霊は、あの装置に捕まったのかも」

ミラはその言葉に目を細める。それならばわたしも納得する。普通ならば四大様を捕えることなど不可能。四大様はマナの塊だ。マナを貯蔵するという機能があの黒匣あると考えれば妥当かもしれない。

「バカが！人間が四大様を捕えられるはずがない！」

『いえ、その可能性は十分にあり得る』

「え…？」

わたしはポツリと呟いてジュードを見る。どうやら彼も同じことを思っていたらしく、小さく頷いた。

「うん。ありえないことでも、他に可能性がないなら、真実になり得るんだよ」

「何もない空間で、卵がひとりでに潰れた場合、その原因は卵の中にある…？ハオの卵理論？ってやつだな。さっすが優等生、…と巫子姫様」

ニツと笑ったアルヴィンが見てくるが、すぐに顔を反らす。反らした先には悔しそくに拳を握るバカの姿。別にバカにされてるわけじゃないから怒ることないのに。まあバカだから仕方ないか。

「四大を捕えるほどの黒匣だったというのか。あの時…私はマクスウェルとしての力を失ったのだな」

寂しそうなミラの声が嫌に耳に残った。こういう時、耳がいいって困るものだな。

「ミラ…」

ジュードの声にハツとしたミラは立ち上がり、わたしたちに背を向けた。そしてバカがそれを庇うかのようにジュードたちの前に出た。

「さあ！貴様たちは去れ！ここは神聖な場所だぞ！ミラ様のお世話をするのは、巫子である俺と」

「イバル、お前もだ。もう帰るがいい」

「は？」

帰れというミラの言葉に間の抜けた声を出し、ミラを振り向くバカ。

「そうだな、有り体に言っぞ。うるさい」

振り向いたミラはバカにそう告げた。バカはそれほどショックだったのか目に涙を浮かべ、そしてまるで生気が抜けたようにフラフラしながらジュードたちとともに社を出て行った。

「ヴェリテ。お前は……いや、なんでもない。お前も帰っていいぞ」

そう言われたがわたしは動かなかった。ミラはそれに気付かず、そのまま懐から何かを取り出して見つめていた。

「……………四大を救い出すのにも、これがなければならぬ、か」

『……………ねえ、ミラ』

「！　まだいたのか、ヴェリテ…なんだ」

わたしが声をかけると、ミラは驚いたように肩を跳ねさせ、持っていたものを隠すようにしまった。だがわたしは気にせず話を続ける。

『わたしね、考えたの。わたしこの村にいてもみんなに疎まれてるからさ、いてもいなくてもいいと思うの。こっちはバカに…イバルに任せる。だからさ、ミラ。わたしと一緒に連れて行って』

真っ直ぐにミラを見つめてわたしは言う。やがてミラは諦めたように溜息を吐いて、そして優しく、綺麗に笑った。

「ヴェリテには負けるよ。お前は一度決めたことは絶対に曲げない奴だからな。…いいだろう。お前がいてくれれば力強い。ついてきてくれ」

『ありがとう、ミラ！じゃあわたし、キジル海漠で待ってるから！』

「わかった。少ししたらわたしも向かう」

わたしは頷いてから社を出た。ふと目に去っていくバカの後ろ姿が見え、わたしは急いで後を追う。アルヴィンに声をかけられたが、今はバカに用事があったため、応えなかった。

『バ…………イバル！』

「！ ヴェリテ、ミラ様は？」

『もう少ししたら出てくるって。それよりイバル、頼みたいことがあるの』

そういつと嬉しそうに目を輝かせてくるバカ。尻尾があれば千切れるくらいに振ってそうだ。

「ヴェリテから頼みって珍しいな！何だ？言ってみろ」

『わたし、ミラと一緒にいこうと思うの。だから代わりにみんなを守って』

「！！ ミラ様はまたどこかへ行かれるのか？それにお前まで…」

『心配は無用よ。わたしはわたしとしての使命を果たす。だからイバルは…』

そこでピタリと足を止めるバカ。思わずわたしも足を止めてしまった。するとバカは、ガツとわたしの両肩を掴んだ。

「俺も行く！」

『はあ！？なっ、バカ！ミラにはわたしがついて行くって言うてるでしょ！？』

「ミラ様とヴェリテが行くなら俺が行かないわけにはいかないだろう！！」

ああもう、わたしじゃ埒が明かない、と両肩の手を払ってバカを指さす。

『じゃあミラに聞いてみなさいよ！ミラが良いっていったならついてこればいいわ。ミラはあなたにみんなを守れって言うと思うけどね』

「よし、わかった！」

このバカもミラの言葉には逆らえない。ミラはきつと、イバルにみんなを守るよう言ってくれるはず。イバルには悪いけど、わたしなんかに守られるより、みんなはイバルに守られたほうがいいだろう。

『じゃあわたしは先に行くから』

わたしは踵を返して自分の家に向かう。村人たちから疎まれているためわたしは村の中に住んでいない。ミラの社から少し行った場所にある。そこで必要なものを揃えてから私は村に向かった。勿論村

の中には入らず、村を迂回してキジル海幕にやってきた。途中、ミラたちが集会所に入っていくのが見えたが、村の中なので声をかけるのをやめておいた。

『ん…？』

「お？巫子姫様じゃねーか」

キジル海幕で待っていると、アルヴィンが村のほうから歩いてきた。わたしは声をかけてきたアルヴィンを横目で見てから口を開く。

『あなた、もう解雇されたの？』

「ま、もう金はもらったけど、これ多すぎなんだよな。報酬に見合った仕事をするのが俺のモットーなもんで。だからミラたちについて行こうかと」

どこか胡散臭いアルヴィンに、ふうん、と呟いてそれから口を閉じた。彼は苦笑いをしてからわたしの近くの岩にもたれた。それが嫌でわたしはアルヴィンから見えない岩陰に移動すると同時に、ミラの姿を発見した。

「ヴェリテ、待たせたな」

『ミラ！…と、ジュー、ド？』

ミラの後ろから出てきたジュードを目にして、わたしは眉を潜めた。まさかこの子まで一緒とは思っていなかった。まあバカじゃなかったことだけマシか。

「僕、ミラの役に立ちたいんだ…だから、一緒に行っていいかな…？」

『…ミラが決めたことにわたしが文句を言う筋合いはないわ』

「ありがとう。えっと…」

『ヴェリテよ。ヴェリテ・ヘイゼルシーグ』

それだけ言っただけでミラを振り向くと、難しそうに眉間に皺を寄せて考え込んでいた。

「どうしたの、ミミ？」

「イル・ファンへ船で行けぬ場合はどうするか考えていたんだ。ヴェリテ、わかるか」

『そうね…山みや』

「山脈越えは難しいから、ア・ジュールからの陸路の線はないだろうなあ」

『む…』

「「アルヴィン！？」」

わたしは台詞を遮られてイラつとしたが、ふたりは驚いたようにアルヴィンを見た。彼は悪びれる気もなく、右手の人差し指と中指を額に当てて、その手を軽く前に出した。

「サマンガン海停からカラハ・シャルル方面になるんじゃないか？」

「どうしたの？一体」

「あのイバルとかいう巫子殿に頼まれてね。三人じゃ心配なんだと。その上、仕事に見合った以上の報酬をもらっちゃまうのは矜持に反するしな」

バカの名を聞いた瞬間、わたしは盛大に溜息を吐いた。心配性すぎるにもほどがある。心配するなって言ったのに。

「ふふ、そうか。心強いよ、アルヴィン」

「うん、ありがとう」

…まあミラがいろいろ言ってるからわたしは口を出さないけど。

「礼なら巫子殿と村のみんなに。んで？どんなご予定で？」

「まずハ・ミルに向かい、ラ・ジュガル軍の動向を探ってみる」

「まだいたただけだね」

「なら、これやるよ。念のためだ。持っておいて方がいいだろ」

アルヴィンはそう言ってワールドマップをジュードに託した。そしてふたりの肩を叩いて、わたしの方を振り返った。

「んじゃ、行きますか」

なんでわたしを見て言う。わたしを見て。

些細なことかもしれないけど、これほど短い期間に、ミラとこのふたりとの絆が築かれていたなんて、すごく悔しかった。

いつからかわたしは

人を信じなくなった

人が、怖くなった

二・アケリアで会ったジュードとアルヴィンと、そしてミラとともにハ・ミルに行くため、キジル海漠を歩いていった。岩ばかりで歩にくいのが、言ってもいられない。村から出るのは初めてだったので何もかもが新鮮だった。でもやっぱり人間と関わるのは嫌いだ。だからわたしはミラたちから一メートルくらい離れて歩いている。

「えーっと、ヴェリテ、だっけ？」

『そうだけど…』

そんな中、不意にアルヴィンが足を止めて声をかけてきた。わたしは答えながら顔を上げて彼を見る。正直放っておいて欲しかった。別にふたりと仲良くしたいわけでもないし。それにやっぱり拒絶反応で無意識に後ずさっていた。

「…ヴェリテってさ、巫子なのにあのイバルとは大違いだな」

『あれはバカだから。わたしはミラのこと、マクスウェルとして見てない。ミラはミラだって思ってるから、普通に接してるの』

「ふうん」

『まあ、だからバカ以外には遠ざけられてるんだけど』

村のことを思い出すとむしゃくしゃしてくる。確かにミラは大精霊であるマクスウェルだ。でもそれだけ。なのになんで村の人たちは必要以上にミラに頭を下げるんだろうか。ミラだってそうして欲しいと願ってるわけでもないのに。

「で、その嫌われ者の巫女様はなんでミラについて来たの？」

『あのね、それを言ってる時点で半分は分かってるでしょ？』

「んじゃあとの半分は？」

その言葉にわたしは目を細めてから前を向く。

『…そんなにわたしに興味があるの？』

「興味っつーかなんっつーか…まあ、そうとも言っかな」

正直アルヴィンの思考がわからない。会った時から胡散臭いとは思ってるんだけど、ほんとに胡散臭くなってきた。いつかミラに危害を加えないだろうか。もしそんなことしたら切り刻んでやるっ。

『じゃ、あなたの本心を教えてよ』

「本心？」

アルヴィンの方を振り向かないまま、わたしは少し前を歩くふたりを見ながら話す。

『わたしね、あなたのこと、信じてないから。ミラとジュードは頼りにしてるみたいだけど、わたしはあなたを頼ったりしない。これだけは覚えておいて』

「あれ？俺ってそんなに警戒されてるの？あっちの巫子殿は信頼してミラとヴェリテを俺に任せたのに」

『別に頼んでないし。…あいつはバカだからこういうことには疎い。敵かどうかを見抜くのはわたしの仕事なの』

三つ編みの長い髪をいじりながらわたしは肩越しにアルヴィンを振り向く。

『あなたもわたしのこと、警戒しておいてね。いつ寝首をかけられるか、わからないから』

「おっかないねえ…」

につこりと笑ってから再び前を向いて歩きだした。アルヴィンはそんなわたしの背中を見ながら、まるで探るように言ってくる。

「じゃあジュードはどうなのさ」

そんなの決まっている。わたしは振り返らずに答える。

『もちろん信じてないわよ。でもあなたほどではないわ』

「警戒しすぎだって、巫子姫様」

『あら。警戒しておいて損なことはないわよ』

「…おたくには勝てそうにないね」

『褒め言葉として受け取っておくわ』

ほんと、どうして放っておいてくれないんだろう。…それにしても人とこんなに話したのは初めてなんじゃないだろうか。それでも自分の中で拒絶反応が出ている。人なんて信じなければそれでいいんだ。

「ああ、そうだヴェリテのことだが…」

前を歩いていったミラが突然話し出す。

「ヴェリテは人間が信用できないらしくてな。人間が近づくと拒絶反応が出るんだ。ふたりとも、そこだけ気を使ってやれ」

「そ、そうなの!？」

「…人間不信ね…だからそんなに離れて歩いてたわけ」

『言ったでしょ。村人から疎まれてるって。それが十数年続けばそうなるでしょ、普通』

これはミラなりの気遣いなんだろう。それがとても嬉しかった。ちやんとわたしのことを見ててくれてるってわかったから。

「でもこれからいろんな街を回るんだよ？大丈夫なの？」

「それは心配ない。な、ヴェリテ」

『大丈夫。慣れは必要だと思うの。別に人と仲良くなりたいわけじゃないけど、このままじゃ色々と不便ですもの』

につこり笑って言うと、ジュードに感心された。

「ミラもそうだけど、ヴェリテも強いんだね」

『強くないわよ。強かったら最初から拒絶反応なんてもの出ないし、村の人たちとも和解しようとするわよ。わたしのはただのプライド。一度決めたことは決して曲げない。その目的を阻むのであれば排除する。それだけのことよ』

そう。この旅を拒絶反応が邪魔するなら、それを克服すればいいだけのこと。難しいかもしれない。でもそうしないと前には進めないから。

「やっぱおっかねえのな、巫子姫様は」

「それがヴェリテだからな」

『さ、とっとうと行きましよう』

わたしの言葉に三人は深く頷いた。

暫く歩いたところで運悪く魔物と遭遇する。前の三人はすぐに戦闘態勢に入った。ミラは剣を、ジュードは拳を、アルヴィンは銃と大剣を構える。

「ヴェリテ、お前戦えんの？」

『あら。巫子をバカにしないで欲しいわ。何のための巫子だと思っ
て？ 実戦経験は豊富よ。わたし、ミラ意外に負けたことないから』

ニツと笑って袖から短剣と鉄扇を取り出した。それを見たアルヴィ
ンは口笛を吹いて称した。

「んじやリアルオーブもってんじやね？」

『当たり前じゃない』

敵を斬りながらアルヴィンの問いに答える。すると勝手に共鳴された。

『あつ、ちよつと!』

「いいから。ほら、来たぜ」

『ちいッ!』

めんどくさそうに舌打ちしてから、アルヴィンとの共鳴戦闘に集中する。わたしが前から攻撃し、アルヴィンが背後からガードブレイクする。それに少しばかり感動が芽生えた。

『なるほど…これが共鳴戦闘…』

「あれ？おたく共鳴は初めて？俺の意志が伝わってくるだろ？」

『気持ち悪い』

「あつ」

一匹倒し終わると共鳴を切って一人で戦う。でも悪くはなかった。不思議と嫌でもなかったし、戦いもすごく楽しかった。

「終わったか」

『うん、こつちも』

「それにしてもヴェリテの戦い方ってまるで踊ってるようだよね。扇を持ってるってのもあるけど」

『ああ、確かバカにも言われたわね。まあ元々踊りが好きだったからそれを戦いにアレンジしたただけなんだけど』

いつも家にひとりだったからバカが退屈しないようにと色々教えてくれた中で一番気に入ったものだった。好きなものを戦いに入れるとそれだけで楽しいじゃない。と説明したらアルヴィンに笑われた。

「戦いを楽しむとか戦闘狂かよ」

『何事も楽しくなければやる気はでないでしょ』

「それはごもつともだな」

みんな武器を片付けて、再び歩き出した。登ったり下りたり、ほんとうに複雑な海漠だ。このままじゃきつといつか足が太くなってしまう。これからもたくさんいろんなところを歩くんだろうな。

「ねえ、聞いていい？」

『わたし？』

もう少しでハ・ミルと言うところでジュードが私を振り返って聞く。

「あのイバルって巫子とヴェリテ、もしかして兄妹だったりする？」

「まさかあ…だってあれとヴェリテだぜ？そんなのあり得るわけ

…」

『認めたくないけど、あれはわたしの双子の兄よ』

わたしが呆れたように言うと、アルヴィンはともかく、聞いたジュード本人まで驚いていた。

「まじで！？しかも双子！！？」

「そっちの考えはなかったよ……」

「ふふ、誰がどう見てもイバルとヴェリテが兄妹で双子だとは思わないだろうな。ふふふ」

ふたりの反応を見て、ミラは面白そうに笑う。あれと兄妹と見られるのは正直言っただけ、いや、かなり嫌だ。かといって聞かれてウソをつくのもわたしの矜持に反する。

「どうやってたらあんな風に育つんだ……」

『それはこっちが聞きたい。めっちゃシスコンだし、ミラには常にああだし……』

「兄妹と思われるのが嫌で、ヴェリテは自分でファミリーネームを考えたんだと」

「…イバル可哀そう…」

あはは、とジュードは苦笑いをし、ごめん、と謝った。別に聞かれて困ることも無かったのだけど。とりあえずはハ・ミルへ急ぐことにした。

わたしだってミラの役に立ちたい。
そのためにわたしはここにいるんだから。

わたしはずっと孤独だった

だからだろうか

同じように感じるんだ

やがてハ・ミルについた。果物の甘い香りが辺りに溢れており、自然に笑顔になる。しかし広場の方から怒鳴り声がしたのを聞いたわたしたちは顔を見合わせてからそちらに向かった。広場に近づくとつれ、声が大きくなってくる。その中には小さな女の子の声もしていた。

「出て行けよ、おら！」

そこにいたのは村人たちと、村人たちに囲まれている小さな少女。
わたしはその光景を見て、無意識に何歩か後ろへ下がってしまった。

「疫病神！あんたなんかいるからっ！」

そして村人たちは地面に落ちている石を拾って、それを少女に投げつける。それはまるで自分を見ているようだった。わたしも疎まれて、出て行けと言われて、石を投げられて。これだから人間は…

「きやつ……。やつ……」

「やめて、ヒドイことしないで。お願いだよー！」

『っ…』

わたしは咄嗟に小さく蹲る彼女にを庇うように立ちはだかった。

「なっなんだお前は…」

『お前たちこそなんなんだ。こんな小さな子をいじめて楽しいか』

「お前に何がわかる！」

『分かりたくもないな。お前たちの事情なんざ知ったことじゃない。だけど、こういうのは間違ってると思わないの？それじゃあ人間終わりね』

「お前！！！」

ガッ、と投げられた石が額に当たって血が出る。しかしわたしは気にせず村人たちを睨み付けると、ひっ、と怯えた声が聞こえた。

「ヴェリテ」

『…ふん』

ジュードに名前を呼ばれて我に返ったわたしは、すぐにその場から去った。きっとジュードに止められてなかったらわたしは…

『何してるんだ、わたし…』

その後わたしは、村の中にあつたバレンジの木の上で嫌悪していた。人と関わるのを嫌がっていた癖に、人助けするなんてわたしらしくない。なんであの時助けたんだろ。あの子がわたしと同じだったから？

『わからない…』

「何がわかんねえの、巫子姫様」

『うわっ！！？』

ひょっこり現れたアルヴィンに驚いて慌ててその場から下がる。何しに来たんだと問えば、治療しに来た、と消毒液とガーゼを見せられた。

「それよりさ、もうちつと女らしい声出せねえの?」

『るっさい。ってか近づかないで。自分でやる。貸して』

「額だぜ? 見えねえだろ。おら、こっち来い」

アルヴィンに手招きされて、仕方なくじりじりと近づく。それが面白かったのか、また笑われた。むすつとすれば、悪かったと謝られる。

「手当するだけだろ」

『分かってるわよ...』

分かっているが、それでも体は言うことを利かない。やっぱり長年人を嫌っているところなってしまうんだろつか。…多分わたしだけだろうな。そんなことを思いながらも、手当できるくらいの距離まで近づけた。

『…ミラとジュードは...?』

「ミラは情報収集。ジュードはさっきのお姫様のところ。だから俺が巫子姫様の手当をしに来たわけ」

ま、治療術使えないんだけど、と申し訳なさそうに笑った。自分で治療出来ればいいのだが、生憎わたしは治療術は根っからダメで、逆に補助術はかなり優れているらしい。あのバカ曰く。

『治療術使えるジュードが羨ましい…』

「ん？」

『昔ね、あのバカ…イバルを怪我させたことあって。わたし人嫌いだから助けてって村にも行けなくてね…たくさん勉強してるんだけど、どうにも治療術が』

そう言いかけてわたしはハツとする。何を話してるんだろう。信用してるわけでもない彼に、昔の話をするなんて。石をぶつけられた時にどこか痛めたんだろうか。そうでなきゃわたしがこんな話をするわけない。

「ははっ、お前、おもしれえのな」

『もういい。やっぱり自分でやる』

「おいおい、怒んなって」

『怒ってない』

「怒ってんじゃねえか。もう笑わねえから。ほら座れって」

結局アルヴィンに治療されました。

それからわたしは直ぐに村の出口へ向かった。またあんなことが起こった直後だし、村にいない方がいいだろう。そう思って出口から出た少し先の坂の上で三人を待っていた。

「ヴェリテ」

『あ、ミラ。もう行くの？』

「ああ。あと…」

そう言った後、ミラは後ろを振り向く。そこには先ほどの少女が立っていた。まさかこの子も一緒に行くというのか。少し無謀ではないか。でもミラが同行を許している時点でわたしが口を出すことはしない。

「いい、よね」

『…ええ。好きにしたらいいわ』

ジュードにそう言い放ってわたしは少し離れた最後尾を歩き出した。暫くして、ふ、と前を歩く小さな少女に目を向ける。歳はわたしより少し下だろうか。妙に愛着のあるぬいぐるみを腕に抱いていおり、ふわりとした綺麗な髪が歩く度に揺れる。わたしが彼女を見ていると、突然こちらを振り向き、わたしを見る。

『！』

「あのっ、あの…さっきは助けてくれて…ありがとう、です」

「ありがとうー！助かったよー！」

少女に続いて持っていたぬいぐるみが喋った。さっきも喋っていたのを見ていたためか、それほど驚きはなかった。

『いいの。気にしないで』

「はい。あの、わたし、エリーゼ・ルタス、です」

「ぼくはティポ！君の名前はなんていうのー？」

ぬいぐるみ、基、ティポに聞かれて、そうか、と呟く。わたしはあの時離れた場にいたため、自己紹介をしていなかった。ジュードたちもわたしが人間不信なことを知っていたため話さなかったらしい。正直子供だとしても関わるのは苦手だ。

『ヴェリテ・ハイゼルシーグ』

「ヴェリテ…！よろしく、です」

「よろしくねー！ヴェリテ君！」

エリーゼに笑いかけると、恥ずかしそうに頬を染めた。その彼女を見た瞬間、先ほどの光景が脳裏に蘇る。エリーゼとわたしは境遇が似ていた。やっぱりそうだからわたしはエリーゼを助けるのだろうか。そんなことを考えていると、エリーゼがわたしを不思議そうに見上げてるのが目に映った。

「ヴェリテ。ヴェリテはどうしてみんなから離れて歩いてるんですか？」

「……エリーゼには分かるかも知れないけど、わたし、村で酷く嫌われてたの。エリーゼと同じように疎まれて、出て行けって言われて石を投げられて。だから人間不信になった。こうやって離れて歩かないと、わたしはわたしを保てないから」

「ヴェリテ……」

「でもね、不思議とエリーゼは嫌いじゃないの。拒絶反応も出ない。エリーゼと似てるからかしらね」

そこまで言うと、ふとミラが目に入った。……なぜだろう。二・アケリアに帰ってきたミラの雰囲気は変わっていた。四大様の力を失ったせいだろうか。わたしは無意識に人を遠ざけてしまう癖がある。もしかしてわたしは心の奥でミラを人間のようなだと思ってしまっているのかも知れない。

「……ちょっと喋りすぎたわ。さ、行きましょう」

「……ヴェリテ、大丈夫ですよ」

『え？』

先を歩いている三人を追いかけようと早足になろうとした私の腕をエリーゼが掴んで止めた。わたしはそれとエリーゼの言葉に驚いて振り返った。

「ヴェリテとミラは、友達、です」

「ぼくもヴェリテ君と友達だよー！」

「ヴェリテとわたしも、友達です！」

意外な発言に目を見開き、足を止めた。

友達。そんなことを考えたことは無かった。生まれてこのかた、友達というものに縁が無い。ミラは…そうだ。ミラは、元は精霊だから友達なんておかしいって思っていたんだった。

「友達は、仲良しです」

『仲良し、か…それが出来れば嬉しいんだけど』

「大丈夫です！友達ですから」

『ああ、もう、エリーゼには負けるわ…』

人間と関わる気なんてさらさらなかったのに、どうしてだろう。エリーゼにはなんの嫌悪も感じない。こういう純粹なところは、わたし、エリーゼと似てないのね。

『エリーゼは正直すぎるわね…』

「正直ですか？」

『いい子ってこと』

そう言つて頭を撫でると、エリーゼは嬉しそうに笑つた。不思議とその笑顔に酷く安心させられた。

「あれ？巫子姫様ってばいつの間にお姫様となかよくなつちやつたわけ？」

エリーゼと一緒に歩いているといつの間にか後ろに下がって来ていたアルヴィンがもの珍しそうにわたしを見てくる。わたしはジト目で彼を見やった。

『あなたには関係ない』

素っ気なく言うと、あっそ、とだけ返ってきた。するとエリーゼが嬉しそうに私の手をぎゅっと掴んでくる。どうしてだろう。いつもなら条件反射で手を振り払うはずなのに。やっぱり心の問題なんだろうな、わたしの人嫌いは。

「ヴェリテとわたしは友達、です」

「そうなのヴェリテ？ んじゃ俺とも友達に」

『なりません』

「やっぱりキツイなあ、巫子姫様は…」

キツパリ言い放つと、アルヴィンは残念そうに頭をかいた。本心じゃないと思うけど。

村から出たことがなかったわたし。
初めて人の暖かさに触れた気がした。

いつの間にか

みんなに溶け込んで

いるような、いないような

イラート間道を進み、イラート海停に向かう途中、何度か魔物と戦闘になった。その度にジュードたちと共鳴し、共に魔物を倒していく。なんかそれが定着してきてるような気がしてきた。最初からひとりで戦うつもりだったのに、この樂さを覚えてしまった以上それを使わない手はない。

「ヴェリテ！」

『ええ、ミラ!』

『「?エンシェントフレア?!!」』

ミラとの共鳴術技が決まり、魔物は絶命した。アルヴィンたちも終わったようで、こちらに集まって来る。ちゃんとジュードの後ろにエリーゼもいる。それだけでほっとした。

「いやあ、それにしてもあの巫子殿とヴェリテが兄妹だとはいまでも信じられねえよ。似てるとこといやあ髪と目の色くらいか」

「いきなり何言ってるのさ」

「いやいや、ヴェリテを見てると巫子殿の顔が浮かんできてな」

おい、それは失礼だとは思わないのか。似てないのならバカの顔が浮かんでくるのはおかしいだろ。

「イバルは少々短気なのが欠点だが、腕は確かだぞ」

『まあ、剣術もわたしと変わらないくらい強いし…でも社の掃除とか、使いとか、パシリ要員だった気がするけど』

「そう言えばイバルにはこの服を考え、しつらえてもらったな」

ああ、確かそうだった、と呟けばジュードは驚き、アルヴィンは感心したように声を上げた。

「巫子殿、いい趣味だ」

「だろう。動きやすくて私も気に入っている」

『わたしは反対したんだけどね』

楽しそうに服をしつらえてるバカを見ればあとは何も言えなかったんだけど。あの時のバカを思い出していると、そういえば、とアルヴィンがわたしをじろしろ見てくる。

「逆にヴェリテは露出を抑えてあるよな。やっぱり人の目を気にしてるから？」

『セクハラ罪で訴えるわよ。…まあそれもあるけど、これはバカが誕生日にくれたものでね。いつもはあんなのだけど、兄には変わらないから』

「ヴェリテのお兄さん、優しいです」

「兄妹愛ってやつだねー」

『あいつは行き過ぎてるから苦手なのよ…』

はあ、と大きく溜息を吐く。なんでこんな話に…そもそもアルヴィンが話の発端じゃん。村から出てきてまでバカの話なんてしたくないんだけど。

「まあまあ。それよりほら。海停、見えてきたぜ」

『海、か』

「海、ですね」

「そっか。ヴェリテとエリーゼは村から初めて出たんだけ。じゃあ海や船を見るのも初めて？」

わたしとエリーゼは同時に頷く。教本で見たことはあったが、実際に見るのはこれが初だ。海停に近づくにつれ、塩の香りが風に乗って流れてくる。

「ここがイラート海停だよ」

『海だ…』

「海…！」

「すごい！おっきいねー！！」

考えてみれば私もまだ子供なのだ。こういう風に感動してもいい、よね。おかしくないよね。いやいや、だめだ。またアルヴィンに笑われる。うん、やめようそうしよう。

「ぶっ」

『！？』

「百面相しすぎだよ。まだ十六なんだろう？はしゃげばいーんじゃねえの？」

『…子ども扱いしないで』

ふん、とそっぽを向いてジュードたちを追った。わたしたちはすぐ

に船乗り場へ行き、近くの船員に声をかけて、イル・ファン行きの船はいつ出るのかと尋ねる。

「すみません。首都圏全域に封鎖令が出たおかげで全便欠航なんです」

やはりそうなっているだろう。顔を見合わせたわたしたちは話していた通りに、サマングン海停からカラハ・シャルル方面へ向かうことになった。

『ふう……』

わたしは先にミラと一緒に船に乗り込んでいた。船の手すりに肘を付き、下を見下ろすと、アルヴィンが鳥を腕に止まらせているのが見えた。今時鳥で文通でもしてるのだろうか。まあわたしの知ったことじゃないけど。そんなこんなでやっと船が出発する時間になった。

「あの子、あの村で何してたんだ」

「監禁されていたのだろう?」

海を見て嬉しそうに声を上げていたエリーゼを見て、思い出したようにアルヴィンが問う。わたしは少し離れた場所でその話を耳に、海を眺めていた。

「逆かも。匿われてたって可能性もあるんじゃないかな」

直後、エリーゼの叫び声が聞こえたのだが、何ともなかったようで安堵した。ジュードは苦笑いをしてこちらを振り向いた。

「悪い子じゃないよ」

「そうみたいだな」

「引き取ってくれるいい人が見つかるかな?」

「それは君が探すしかない。それが責任というものだろう?」

「う、うん…」

そう告げて言ってしまうミラの背中をみて、ジュードが申し訳なさそうにしていた。その隣にアルヴィンが並んでミラを見やる。

「んー、いつもあんな調子じゃないか？ミラは。むしろ意外だな、俺としては。エリーゼのことはバツサリ拒否すると思った」

「どうして？」

「目的の邪魔になることには、もっと一方的かと思ってたよ」

「ミラは、そんなに冷たくないよ」

ジュードはずいっとアルヴィンに押し寄ってそう唱える。そうかなあ、と呟いたアルヴィンは不意にわたしを引き寄せ、わたしとジュードの肩に腕を回してくる。

『！　ちよ、いきなりっ、何すんのよ！！』

「そっぴや聞いたぜ。イル・ファンの研究所じゃ大変だったらしいな」

「ミラから聞いたの？」

人の話を、聞け。

「あいつ、あそこから何か奪ったんだって？国の研究所じゃ、そりゃ、軍も出動するって」

「なんだろ、僕も知らない」

「本当かあ？ヴェリテも知らない？」

あからさまにわたしの言葉を無視して、その上質問までしてくるなんてほんと何様だ。

『っるっさいな…』

「隠しててもすぐわかるぞ。ほら、ミラには黙っててやるって」

「ごめん、ホントに知らないんだ」

「はー…まあ巫子姫様なら知ってるっしょ？」

そう言っでわたしの顔を覗き込むなり、慌ててわたしから離れたアルヴィン。わたしはその場にへたり込んでしまった。

「わ、悪い…まさかそこまで人が嫌いだったなんて思わなくて…」

きっと今のわたしの顔は自分でも見たことないくらい真っ青だろう。少しだけ体も震えている気がする。すぐに立ち上がって呼吸を落ち着かせ、アルヴィンをひと睨みしてから逃げるように船内に入ってしまった。

「アルヴィン。あとでもう一回、ちゃんと謝るときなよ…」

「…そうした方がいいだろうな…」

ただでさえ人に近づくのは嫌いだった。なのにあんなことされちゃわたしの精神がもたない。全然わかってなかったんだ、わたしのことなんて。ジュードもアルヴィンもわたしの人嫌いを軽く見すぎなんだ。…それは自分も同じことだった。

『はあ……』

少し落ち着いた頃、わたしは再び甲板に出てきた。丁度船の汽笛が鳴り、海岸線にサマンガン海停が見えてきた。

「ミラ、エリーゼ」

「ああ。そろそろ到着のようだ。ん？ヴェリテはどうした」

「あ……えーっと」

『ちょっとお手洗いに行っていただけよ』

何事もなく戻ってきたわたしを見て、アルヴィンは一瞬驚いた顔を見せた。

『何』

「いや、何も……さて、ラ・シュガルの警戒がどれほどのものなのか、な」

わたしと視線が合う度、アルヴィンはスツと反らす。一体なんなんだ。さっきまであんなに一方的に親しげだったというのに。それとどうやらミラとエリーゼとティポはわたしがどこかに行ってる間に仲良くなったみたいだった。ミラはどう思ってるか分からないのだけれど。

「思ったほど嚴重じゃないが…」

「兵士は配備されてるね。注意しないと」

船から降りたわたしたちは辺りを見回してみる。確かに疎らではあるが兵士の姿がある。

「妙だな……。一時はア・ジュールにまで兵を出していたというのに」

「君らを追うよりも重要なことができたか、な」

「好都合だ。気づかれぬうちにイル・ファンへ向かおう」

考えていても始まらない、ということだろうか。それはそれでいいのだが、確かに妙ではある。警戒しておいてそんなことは無い。

「…ごめんね、エリーゼ。大きな街に着くまで、もう少し待ってね。そしたら、きっと引き取ってくれるいい人がいると思うんだ」

「…え、でも…わたし…」

「ジュード君、それなんのことー？」

ヴェリテ、とじつとエリーゼはわたしを見てくる。そりゃそんなこといきなり言われたら驚きもするわね。ジュードってば気遣いが足りないな。

『エリーゼ、行きましょう』

「…うん」

俯くエリーゼを促して、ミラたちを追った。

「お、そういや、ここの宿って他と違って、ずいぶん寝心地がいいベットだったな」

不意にアルヴィンがそんなことを言った。何故かちらりとわたしの方を一度見て、そしてジュードに向き直った。

「変なところ覚えてるんだね」

「よし！泊まってこーぜ」

「そんなのんびりしてていいのかなあ」

「お姫様も巫子姫様も船旅で疲れ切った顔してんじゃねえか。な？」

急に話を振られて顔を顰める。まあわたしはともかく、エリーゼはどこか疲れている様子でもあった。お腹も減ってるだろ、とミラにも同意をもらおうと声を掛けていた。

「ふむ。そうだな。今夜くらいは大丈夫だろう」

と、ミラはアルヴィンに同意した。そういえば四大様の力を失ったミラは今はご飯で栄養を取って、夜は睡眠も取ってるんだっけ。なんかそれこそ人間みたいだ、と思ってしまうた。

「そうと決まれば行こうぜ、ヴェリテ」

『…わかったわよ』

仕方なさげに言うと、アルヴィンはさっさと宿屋に向かって行った。

『なんだかなあ…』

「あはは、アルヴィンってば強引だなあ」

『いつもあなの？あの人』

「うーん…考えてみればそうかも。出会った時もそうだったし」

わたしは興味なさ気に、ふうん、と呟いてから彼らに続いて宿屋に入った。すると丁度チェクインし終わったのか、カウンターからこちらにアルヴィンが歩いてきた。

「部屋、取っただけ」

「ありがとうアルヴィン」

「うむ。ではまず食事にしようか」

「ミラってば…」

ご飯を食べるようになったミラはなんだかすごく生き生きしてるように見えた。それから日も落ちて、そろそろ寝ようかと思っていた時、コンコン、と部屋の扉が叩かれた。どうぞ、と軽く言うと、入って来たのはアルヴィンだった。

『あら、こんな夜遅くになんの用かしら』

「いや、あのよ…」

申し訳なさそうに頭をかくアルヴィンを見て悟ったわたしは、小さく溜息を吐く。

『わざわざこうやって謝るためにここに泊まるうつていったの？別に謝らなくてもいいわ。わたしの説明が不十分だったってことにしておくから。これでいい？』

「…悪かった」

『…！謝らなくていいってば。わたしは…』

「お前がそうやって強気な態度だからって、俺はお前の人嫌いを甘く見ていた」

もう一度、悪かった、と頭を下げられた。そんなに酷いように見られたのだろうか、あの時のわたしは。いや、実際そうなんだ。自分でも思った以上に人を拒絶していた。

「人が嫌いならそれでもいい。でもお前は変わろうとしてんだろ？なら…」

『余計なお世話ね。わたしは誰も頼らない。信用しない。それがわたしのプライド。利用できるものなら利用するだけ』

「それなら…俺は進んでお前に利用される」

真っ直ぐわたしを見るアルヴィン。わたしは今日何度目かの溜息を

吐いて布団に潜った。

『あなたがわたしに構うのはお金のためでしょ』

「それは……ま、そういうことにしとくわ」

いつものアルヴィンの声色に戻った後、パタン、と背後で扉の閉まる音が聞こえた。何も考えたくなかったわたしは、そのまま深い眠りに落ちていった。

例えこの体が動かなくなろうとも
わたしは絶対に誰も頼らない
ひとりで前に進んで見せる…

一緒に旅をしている

わたしにとっては

たったそれだけの関係

なんだかなあ、と手に持った紙を持って溜息を吐く。今朝、海停を出るときに持ってきたものののだが、正直これはどうかと思う。前を歩くミラの手にも同じものがあつた。視線を戻せば、ある意味芸術的とも思われる絵。掲示板にこの紙、所謂手配書が貼り付けてあったのだ。何度見比べてもジュードたちに見えないのだが、油断は禁物だ。そう思ってから、それをファイアボールで燃やした。

『ん？』

突然前の四人が止まった。わたしは彼らの視線の先に目をやると、そこには検問所が設置されていた。今あそこを通るのは危険すぎる。

「あつちには何があるのー？」

ティポの言葉に、左を向いてみれば、崖の上の道が奥へ続いているようだった。

「あつちは樹界なんだ」

「上手く抜けるとカラハ・シャルルの街に出られるんだ」

それを聞いたミラは迷わず崖に向かって歩き出すが、ジュードはエリーゼの安全を考えて、ミラに抗議する。

「こうなることは予想できただろう」

ジュードはそれに反論出来なかった。確かにそうだ。ミラもジュードも指名手配犯。一緒にいるだけで危険だということは分かっていただろう。それに、ミラは目的のためなら危険な道なんて迷わず進んでしまう。ジュードも理解してるハズだ。

「わたし…あの、だいじょうぶ…です。だから…」

「ケンカしないで。友達でしょー」

「エリーゼ…」

迷惑かけたくないと思ってか、エリーゼはそう言った。

「エリーゼも了解した。これで文句はあるまい」

わたしはただミラの意志に従うだけ。ミラが行くと言えば行く。捨てると言ったら捨てる。それが巫子に与えられた使命。わたしのプライド、……よね。

「ヴェリテ……」

『…行こう、エリーゼ』

いつの間にかぼーっとしていたわたしに声を掛けてくれたエリーゼ。わたしはにっこり笑って、エリーゼとともにミラたちの後に続いた。

崖を上った先に、薄暗い森が広がっていた。わたしたちはそこに足を踏み入れ、辺りを見回す。

「深そうな森だな」

「はぐれないように気をつけなきゃ」

そういつて四人は出来るだけ固まって歩いていた。そこに入れないのがわたし。心配そうにエリーゼとジュードがこちらを何度か振り返るが、わたしは平気だと笑顔で答えた。

「行き止まり…？」

少し広い場所に出たとき、道がないことに気付いたミラが立ち止まる。不意に首筋にピリツとしたものを感じ、上を見上げた。ジュードたちも気づいたらしく、同じ場所に目を向けていた。

『魔物…』

そこにいたのは狼のような魔物。魔物は動かず、じっとこちらを見やがて何もせず去って行った。

「何だ？ありや…」

「警告かな…これ以上立ち入るなって」

「その警告も、ミラには効果がないみたいだな」

それから、ミラとエリーゼが通れる道を見つけ、先に進むことになった。

『あの魔物…』

「ん？どうかしたか」

小さくつぶやくと、アルヴィンが気づいたようにこちらを振り返った。わたしはどうしようかとも考えたが、告げておいた方がいいだろう。

『さっきの魔物、あれ、従わされた魔物だった』

「！ 従わされた…？」

繰り返したジュードにわたしは小さく頷く。

『わたしとあのバカには動物や魔物と会話が出来て、使役する力があるの。わたしも何度か魔物を従わせたことがあるからなんとなくわかるのよ』

「だったらさっきのは…」

『この先、何が起ころうともおかしくない。警戒を怠らないで』

わたしの言葉にみんなは深く頷いた。敵だとは限らないが、敵じゃないとも限らない。危険を覚悟して、わたしたちは奥へ進む。

『！ エリーゼ！…！』

「きゃ…」

突然長いムチのようなものがエリーゼを襲った。それがエリーゼに当たる寸前にわたしは防御でそれを受けた。

『くっ…』

「ヴェリテ！…！」

「エリーゼ、離れて！」

わたしはエリーゼを後ろに押しやって戦闘態勢に入る。しかし、その魔物は長く伸びた手でわたしたち全員に攻撃する。すぐさまガードし、ダメージを抑えた。

『っ！』

「こいつ、攻撃範囲が広い！全員がダメージを食らっちゃまずぞ」

「やっかいだな」

武器を構えなおして前を向く。直後、小さな悲鳴が聞こえて振り向けば、下がっていたエリーゼがわたしの近くに来ようとしていた。それに気づいたジュードは、来ちゃダメだ、と声を上げる。

「ジュード！」

そんな中、魔物から視線を反らしていたジュードに攻撃が当たる。ジュードはそのままわたしの近くまで吹っ飛んできた。

『…血が…!』

攻撃をモロに食らったためか、ジュードの額から血が流れていた。わたしに治癒術が使えれば。そう思っても、才能がなければどうにもならない。

「…つつつ…」

するとエリーゼがジュードの元へ駆け寄ってきた。刹那、暖かい光がわたしたちを包む。不思議と体の疲れや痛みが取れた気がした。やがて光が止み、ハツとしてジュードを見れば、さっきまで流れていた血が止まっていた。

「これは、みんな一斉に…!?!」

「元気出して!ぼくたちがいるよー!」

「今の回復術…」

「エリーゼが使ったのか!？」

ジュードとミラが驚いたようにエリーゼを見る。すごい。わたしはただ、その言葉しか出てこなかった。

「みんな、来るぞ!お嬢ちゃんは下がってろ!」

「わたしだって、役に立ってます!」

動き出した魔物は一直線にこちらに向かってくる。わたしとアルヴィンはエリーゼを守るように前に立ち、ジュードとミラは魔物の背後に回る。

『エリーゼ、手伝ってくれる?』

「!...はい!」

肩越しにエリーゼを見て、小さく笑う。頷いたのを確認すると、わたしはエリーゼと共鳴し、魔物に向かって行く。

「？アサルトダンス?!」

「？魔神拳?!」

ふたりの援護のお陰で怯んだ魔物に、わたしとエリーゼは共鳴術技を発動させる。

『遅れないでね、エリーゼ!』

「大丈夫です…!」

『「？ピコレイン?!」!』

エリーゼが生み出した無数のピコハンを、風の力で舞い上げ、魔物の頭上から降らせた。それによって魔物は気絶する。わたしはそのままアルヴィンを振り向く。

『アルヴィン!』

「! おーけー!」

すぐに共鳴を切りかえる。

『「？紅蓮剣?!！」』

わたしが放った炎の力を受けたアルヴィンが、魔物を斬り上げて飛び、さらに炎の闘気を飛ばした。それは外れることなく命中し、魔物は息絶えた。

「だいしょーりー！」

「すごいよ、エリーゼ！」

「まだ震えが止まりません…」

余程怖かったのだろう。いくら今までわたしたちの戦闘を見てきたからって、いきなり実戦を経験したんだ。わたしは物心ついた頃から魔物と戦っていた。幼いころから実戦を繰り返してきたわたしと違って、エリーゼはきつとこれが初めてだったんだろう。

「まさかこの歳で、こんな術が使えるとはね」

『靈力野の発達が良かったことよ』

「エリーゼに救われたな」

ジュードは小さく震えながら泣いていたエリーゼと視線を合わせるようにしゃがんだ。

「エリーゼ。もう恐くないよ」

「ちがうの…」

「仲良くしてよー。友達は仲良しがいんだよー!」

ティポの言葉にわたしたちは顔を見合う。

「わたし…邪魔にならないようにするから…だから…」

なるほど。ミラとジュードが喧嘩をしていたことが自分のせいだと思っていたのか。

「エリーゼに免じて許してやれば？」

「免じるも何も、別に私は怒ってなどいないが…」

「ウソーン。ミラ君とジュード君、もっと仲良しだったもんねー」

エリーゼは自分の胸に手を当てて、ミラを見上げる。その瞳は真っ直ぐで、とても綺麗だと感じた。

「わたし……がんばるから…！」

わたしたちがミラの方を向けば、彼女は少しだけ眉を寄せ、しかしすぐに小さく笑って、わかったよ、と呟いた。

「ほれ。エリーゼに言うことあるだろ？」

言いながらアルヴィンはミラとジュードの肩に腕を回した。こんな時だけど、今回は被害は食らわなかったかもしれないが彼から離れておいてよかったと思った。

「心配かけちゃってたんだね。エリーゼ、ありがとう」

ジュードがアルヴィンの言葉に頷いてそう言うと、エリーゼとティポは嬉しそうに笑った。

「ミラもエリーゼの術があれば頼もしいでしょ」

「…ありがとうエリーゼ。これからはアテにするぞ」

につこり笑ったミラ。エリーゼはさらに頬を赤く染めた。

「それじゃ、レッツゴー！」

元気なティポにみんなは頷いて先を目指す。わたしも行くか、と少し歩いてから、

「あんな術者と一緒ね…運いいわ、俺」

と、後ろでアルヴィンが呟いたのを聞いた。少し気になったが、関わる気もなかったのでそのまま歩き続けた。

わたしは役に立っているのだろうか
足手纏いになっていないだろうか…

酷く残る幼いころの記憶

一人が寂しかった毎日

人が怖いと感じた、あの日

相変わらずみんなと離れて歩いていた。時折狭い通路をしゃがんで通ったり、鳶に捕まって登ったり、飛び降りたり。いくら毎日鍛錬してたといったって女ということには変わりない。もう少し体力をつけないといけないな、と思いながら歩いていると、みんなからかなり離れてしまった。まあいいか。はぐれたらはぐれたで自分で出口を見つければいい。そう思って彼らの背中を見て歩いていると、アルヴィンが遅れているわたしに気づいて足を止めた。

『何』

「いや、巫子姫様も疲れるんだなって思ってた」

わたしが大方追いつくと、それほど近くない距離でアルヴィンがわたしに速度を合わせて歩き始める。はぐれたら迷惑だとか思われているんだろう。

「なあ、ヴェリテ」

『何よ……』

「さっきの戦闘さ、おたくから共鳴してくるなんて、どういつ風の吹き回し？俺、信用されてないんじゃないかなかったわけ？」

なんだ、そんなことが。わたしはひとつ息を吐いて口を開く。

『ええ、信用していないわ。言ったでしょ？利用できるものは利用するって』

「あつそ。でもさ、最近やたら俺との共鳴、受けてくれるよな？そ
っちはどうなの？」

『……………特に深い理由はない』

「その沈黙が気になるんだけど？」

不思議とアルヴィンとの共鳴が一番リズムに乗れる。そんなこと口
が裂けても言えるか。言ってたまるか。

『逆にあなたはどうなの』

「俺？そーだなあ…ならもう一回、俺のこと名前で呼んでくれたら
教えてあげてもいいぜ」

『は？名前？わたしがいつあなたの名前を…』

そこまで言つて、あ、と声を漏らす。さっきの戦闘中に一回呼んで
いた気がする。だからと言って呼べと言われて呼べるほど、わたし
のプライドは安くない。

『誰が呼ぶもんですか』

「あーらら、残念」

残念そうに聞こえない声色のアルヴィン。ふと彼の前に視線をやれば立ち止まってるミラと目が合う。

『どうしたの？』

「いや、別に何もない。ここから降りられる。行くぞ」

ミラの言葉に首を傾げたが、あまり気にせず、わたしも続いて飛び降りる。だが、着地時に何かを踏んづけてしまい、急に視界が悪くなる。それと同時にそれが喉を刺激した。

「ごほごほっ！みんな、無事？」

「どごご...ごほごほっ。.....どこですか？」

「勘弁してくれ。この煙はなんだ？」

「げほっげほっ！くー、目がしみる。催涙性の孢子だな、これ」

『さいっあく！けほっ、けほけほっ！』

みんな同じように咳き込んでいた。やっと煙が晴れたところに、その正体がわかった。

「これ、ケムリダケじゃないかな。目や鼻に入ると…ごほごほっ！しばらくは…涙が止まらないんだ」

「でも、そこに関しては巫子姫様は平気そうだぜ？」

『けほっ…わたしはそういうのには耐性があるから…けほ…っ』

昔から不思議と自然のものの影響は受けたことがない。このケムリダケの症状も然り、花粉症も然り、草によるかぶれも然り。

「みんな、大丈夫か？」

『わたしはもう大丈夫。エリーゼは？』

「わたしも、なんとか…」

「僕も」

「んじゃそろそろ行きますか」

しばらくしてからみんな症状が治まり、再び出口を目指すことになった。そこから何度か戦闘をしながらも、着々と進んでいくわたしたち。そろそろ出口なんじゃないか。そう思っていた中、森に入ってきたときに出くわした狼のような魔物がわたしたちを囲んだ。

「こいつら…」

「今度はやる気になったようだな」

「どこからでもかかってこーい！」

囲まれたのにもかかわらず、余裕なミラは流石だ。わたしたちが武器を構えようとしたとき、森の奥から人が出てきた。しかも見上げるくらいの大きさの人間。顎には長い髭を蓄え、黄色を基準にしたコートのようなものを着ていた。

「あんたは…」

「おっきいおじさん…！」

「ヴェリテの勘は大当たりってわけか……」

どうやらわたし意外のみんなはこの人物を知っているようだった。

「おうおう。よう知らせてくれたわ」

『！　あなた、魔物の言葉が……』

「イバルとヴェリテの他に、魔物と対話できるものがいるとはな」

なるほど。この人がこの魔物たちを操っていたということか。でもこの程度ならわたしにだってできるだろう。ただ、戦闘まで持つていこうとするとかなり難易度が上がる。

「あなたは、ジャオさんですね」

「ん？お前たちには名乗っておらんはずだがのう」

「ハ・ミルの人たちにな。んで？どんなご用で？」

「知れたこと。さあ、娘っ子。村に戻ろう」

アルヴィンが聞けば、ジャオは言いながらこちらへ歩み寄って、エリーゼに向けて手を差し伸べた。

「少し目を離しているあいだに、まさか村を出ておるとはのう。心配したぞ」

エリーゼは隠れるようにわたしの方へ駆け寄ってきた。ティポも素早くジュードの後ろに隠れる。

「ぬっ…」

『エリーゼ…』

「あなたがエリーゼを放っておいて、どうなったと思ってるんですか」

ジュードが言えば、ジャオは申し訳なさそうな表情になる。エリーゼはギュッとわたしの服を握っていた。どうしてだろうか。彼女はわたしが守ってあげないと。そう思うようになっていた。

「お前は、エリーゼとどういう関係なんだ？」

「その子が以前いた場所を知っておる。彼女が育った場所だ」

「なら、彼女を故郷に連れて行ってくれるんですか？」

しかしジャオは答えない。黙って顔を背けるだけだった。

「…また…ハ・ミルに閉じ込めるつもり？」

「お前たちには関係ないわい！さあ、その子を渡してもらおう！」

『渡せるわけないでしょう。この子がどんな気持ちであの小屋にいたと思う？エリーゼの気持ちかわからないくせに、よくそんなことが言えるわね！』

わたしは誰よりも早く武器を構える。こっいつタイプは言葉で言うより力でねじ伏せるほうがいい。

「…仕方あるまい！」

ジャオも持っていた大きなハンマーを、みんなも各々の武器を構えた。

「エリーゼ、わしと一緒に来い！」

「やだー！」

「嫌です！」

「聞き分けのない子だ！」

「お前こそ聞き分ける！」

わたしとエリーゼはジャオに向かって行くミラとジュード、アルヴィンの邪魔にならないように周りの魔物を倒していく。

「？ピコハン？！」

『？？ウィンドカッター？！？アクアレイザー？！…続けて、？魔神剣？！』

やっとすべての魔物を倒し、わたしたちは振り返る。そこには今にも倒れそうなみんなの姿。わたしはエリーゼとアイコンタクトを交わす。

『再生の光よ』

「渦巻け、聖なる力！」

『「？ヒールストリーム？！！！」』

すぐにみんなに駆け寄り、共鳴術技で治癒を施し、さらにジャオを押しやるようにエナジーブラストを放つ。体力が回復したみんなはすぐに武器を構え直した。しかしこれでは埒が明かない。

『はあ、はあ……』

「おいおい、どんだけタフなんだよ」

やばい。マナを使いすぎた。少しフラフラする。だけど倒れるわけ

にはいかないし、頼るわけにもいかない。

「…何故だ、娘っ子。その者たちといても、安息はないぞ？」

「…ともだちって言うてくれたもん！」

「もう寂しいのはイヤだよ！」

わたしの後ろから訴えるように言うエリーゼ。わたしも応えるようにエリーゼの前に立つ。

『ジュード、あなたならいい策、思いつくわはずよね』

彼にだけ聞こえる声で言うと、こめかみ辺りに指を当てて辺りを見回し始めた。そして小さく頷くと、アルヴィンとミラに簡単に指示を出した。

「正直に言おう。わしも、連れて行くのは本意ではない。…許してくれ」

『エリーゼは、渡さない…』

わたしが言うと同時に、アルヴィンが銃を構えた。

「もうやめておけ」

刹那、ジャオに向けられていた銃口が彼の頭上の折れたに向けられる。アルヴィンがそれに何発が弾を撃ち込むと、崩れるように木の破片が落下してくる。それは辺りに生えていたケムリダケの上に落ち、その胞子がわたしたちがいた空間に広がった。

「口を押さえて！」

その隙を狙って、わたしたちは出口に向けて一直線に走り出した。もう目の前がくらくらとしていたが、なんとか森の外までは逃げてこられた。

『はあっ、は…っ、はあ…っ』

「おい、大丈夫か…？」

近くの木に体を預けて息を整えていると、アルヴィンがわたしに近づく。

『来ないで！…大丈夫。ちょっと、マナを使いすぎただけ……っ』

「それって結構やばいんじゃないのか？」

『…どうってことない』

ふうっ、と息を吐いて立とうとするが、やはり上手く立てなくて再び木に体を預ける形になった。もう少しセーブしておけばよかった。

「おぶってやろうか？」

『冗談』

「はは、悪いな。今日はここで休むか」

『わたしだけのために休んでもいられない』

「俺が疲れたんだよ」

そう言ってわたしに手を振って、ミラたちに休む提案をしにいくアルヴィン。

『なんだかなあ……』

特に理由なんてないはずなのに、なぜか自然と笑顔になった。そしてそのまま木を伝って座り込み、意識を飛ばした。

人と関わるのが嫌いだった
でも今は、こんなにも自然に
人と話せている自分がいた…

ちょっとずつだけと

前に進めたかな、なんて

思ってみる

今朝起きたら体にアルヴィンの上着がかけてあつて驚きつつも、まだ少しだるかったのでそのままでいた。しかし上着をかけられたということは近づかれたってことでしょね。いつもなら寝てても人に近づかれると起きてしまうのだが、マナを大量に使ってしまったことや、いままでの疲れがたまつてか、それはなかったみたいだ。初めてのことに、自分でも驚いていた。

「あ、起きた？大丈夫？ヴェリテ」

気付いたジュードが心配そうに声をかけてくる。彼もまた、わたしを刺激しまいと、少し離れてくれている。

『まだちよつとだるい…』

「うーん…熱は…？」

ふるふると首を振ると、もう少し休んでおこうか、ミラたちに言ってくる、と言って少し離れた場所にいるミラたちの元へ走って行った。確かジュードは医学生だったっけ。多分わたしみたいな状態の人は放っておけない性質なんだろうな。

「ヴェリテ、大丈夫なのか？」

しばらくしてミラがわたしの元に来た。ミラとは小さな頃から一緒にいたためか、それとも精霊だからか、こうやって触れられてもなんとか自分を保てていた。

『ミラ…うん、もう少ししたらいけそうな気がする』

「そうか…」

でもたまに思うんだ。なんだかミラが人間らしくなって来ていないかって。本当に四大様がいらないからだけなのだろうか。いや、あまり深く考えないほうがいいか。

『ごめんね、足引っ張っちゃって』

「いや、お前も初めて村を出たのだからいろいろ思うところもあったのだろう。樹界で疲れたような表情をしていたのには気づいていたが、元気にふるまうお前をみてると思えたら忘れてしまっていた」

ミラらしいや、と小さく笑うと、ミラはわたしの頭を撫でてくれた。ミラ曰く、落ち込んでいるときの人間はこうすると喜ぶという。育児本に乗っていたことだったが、少なくとも今のわたしには効果的であった。

「ヴェリテ君、顔色よくなったねー！」

「はい。いつもの、ヴェリテです…」

『エリーゼにも心配かけたのね…』

そう笑いかけると、エリーゼも同じように笑ってくれた。そういえばこれをかけてくれたアルヴィンの姿が見当たらない。聞けば少し辺りを見まわってくると、どこかへ行ってしまったらしい。やがて彼が帰ってきたころにはわたしの体調も十分に回復していた。

「お、もういいのか？」

『ええ。あの……これ、……あ、ありが、と……』

アルヴィンの上着を腕に抱えて、自分なりに頑張って彼に近づいた。多分顔は強張ってると思うけど、自分にしては上出来だと思う。

「…まさかお礼を言われるなんてな」

『そ、れ……どういう意味……』

「警戒すんなって。触りやしねえよ」

両手を上げてわたしを見るアルヴィン。それを確認して、恐る恐る上着を差し出す。

『は、はやく、取って…っ!』

「あ、わ、悪イ…」

息を止めてしまいそうなくらい苦しくて、わたしはギリギリまで手を伸ばすと、アルヴィンはすぐに受け取ってくれた。直後、わたしはその場から五メートルくらい後ずさった。しばらくキョトンとしていたアルヴィンだったが、息を整えるわたしを見て、少し頬を緩めた。

「…ははっ！相変わらずだなあ、巫子姫様は」

『それでも、頑張ったのよ!』

「ああ、そうだな。お疲れさん」

そう言ってアルヴィンは笑った。

「ねえミラ、なんかすごく初々しい恋人同士を見てる感じなんだけど」

「うむ。まったくだ」

「ジュード、見えないです！」

「エリーゼは見なくていいよー」

『誰が恋人だあ！！』

わたしは振り返って叫ぶ。ああもう、だからこついつ時に耳がいいって困るんだよ。アルヴィンは笑ってるし、ミラとジュードも興味津々に見てるし。エリーゼだけがわたしの癒しだと思う。うん。

「やっとカラハ・シャルルに着いたね」

あれからまた歩き続け、わたしたちはカラハ・シャルルへと辿り着いた。辺りは凄く賑わっていて、わたしが苦手な場所でもあった。でも今逃げるわけにはいかない。できるだけ人と目を合わさないように、近づかないように、と警戒しながらミラたちの後に続く。

「えらく遠回りしちゃったな」

「もうでっかいおじさん来ないかなー？」

エリーゼに抱かれたまま、ティポが振り返って言う。きっとこんな街中までは追ってこないだろう。追ってきたとしてもこの中で戦いは吹っかけてこないと思う。

『…あれは…』

「目を合わすなよ」

街に入り口にいた兵を見てみると、わたしにだけ聞こえる声でアルヴィンがそう言った。わたしが頷くのを確認すると、アルヴィンは

目の前の店のものを眺め始めた。

「おつ、この店、なかなかいい品がそろってるな」

そこには沢山の骨董品が並べてあった。

「いらっしやい！どうぞ見ていってくださいよ」

「骨董か…ふむふむ」

特に興味はなかったが、その場凌ぎにはなりそうだ。そう思ったわたしはできるだけ人に近づかないように、店の品を順に見ていた。

「なんだか、街のあちこちが物騒だな？」

「ええ。なんでも首都の軍研究所にスパイが入ったらしくてね。王の親衛隊が直々に出張ってきて、怪しい奴らを検問してるんですよ。まったく迷惑な話で…」

言わずもがなミラたちのことだろう。さっき門のところにいた兵は他の兵と話し込んでいたようだったから、何とか通れたけど油断はできない。

「キレイなカップ」

エリーゼは自分の前にいる女の人が手に取ったカップを見てそう言った。

「でも、こーゆーのって高いんだよねー」

「そりゃあ、そいつは？イフリート紋？が浮かぶ逸品ですからねえ」

「？イフリート紋？！イフリートさんが焼いた品なのね」

店の主人の言葉にわたしは目を細める。ミラもなにか引っかけたのか、女性からカップを奪い、指の先で器用にカップを回して見せた。

「ふむ。それは無かろう。彼は秩序を重んじる生真面目な奴だ。こんな奔放な模様は好まない」

「ほっほっほ、面白いですね。四大精霊をまるで知人のように」

ミラの言いように、女性の隣で佇んでいた、口と顎に髭を蓄えた老年の男性が目を細めて笑う。

「確かに、本物のイフリート紋はもつと幾何学的な法則性をもつものです」

言いながら、彼はカップが置かれていたお皿を取り、裏に書かれた文字を見やった。そこには十八年前にこのカップが作られたことが示されていた。

「おかしいですね。イフリートの召喚は二十年前から不可能になっていませんか？」

その言葉に主人は言葉を詰まらせた。女性は眉を落とし、ミラの手

にあったカップを包むように持った。

「残念、イフリートさんがつくったんじゃないのね……でも、いただくわ。このカップが素敵なことに変わりないもの」

なんてきさくな人だのだろう。普通の人ならば怒ったりなんなりするはずだ。彼女はまるで絵に描いたように綺麗で優しくて素敵な女性だった。

「ふふ、あなたたちのおかげで、いい買い物ができちゃった。ドロツセル・K・シャルよ。よろしくね」

「執事のローエンと申します。どうぞお見知りおきを」

物腰もしつかりとして、礼儀も正しい。まるでどこぞのお嬢様みたいに思えた。いや、執事付きならば確実にお嬢様だなんだろうな。

「お礼に、お茶にご招待させて頂けないかしら？」

「お、いいね。じゃあ後でお邪魔するのでしょうか」

「私の家は、街の南西地区です。お待ちしておりますわ」

ドロツセルはにつこりと微笑んでから、執事とともに去って行った。その背中を見ながらミラは、そんな暇などないのだが、と困ったように呟いた。

「ま、この街にいる間は利用させてもらう方がいろいろ好都合だろ」

「確かにそうかも。こんなに嚴重じゃ宿にも泊まれなさそうだし」

「ふむ。では街の様子をうかがってからお茶にするとするか」

根ではお茶をしたかったのだらうというミラのその言葉に、ジュードとアルヴィンは笑みを零した。そのあとアルヴィンはわたしを振り返る。

「ヴェリテもいいよな？」

いいよな、ってわたしは何も言っていないんだから聞かなくてもいいんじゃない……

『わたしは、別に……』

「なら決定な」

ほんと強引な人なんだから。でもミラが楽しそうならいいと思った。わたしも少しずつこういうのに慣れていかないと、と考えて街の様子を見て回ってる間、いつもより数歩近づいて彼らと歩いていた。

それでも人は嫌い。
でもいつかは克服しないと。
最近はそう思うようになっていた。

まだ逃げてる

わたしは向き合えない

恐いんだ…

しばらく街を見回った後、わたしたちはドロツセルの好意に甘えさせてもらおうと、南東地区に向かっていた。そこには一際目立つ、大きな屋敷があった。その屋敷の前にドロツセルとローエンさんの姿を見つけた。まさかここが彼女の家なのか、そう思っていると、ドロツセルはわたしたちの姿を見つけ、手を振った。わたしは口を引きつらせる。まさかこんな大きな屋敷に住んでいるとは思わなかった。

「お待ちしておりましたわ」

「すごいお屋敷…」

ジュードはそれを見上げながら呟いた。ふと玄関の方へ目を向けると、兵士が出てきたところだった。しかもラ・シュガル兵だったのでわたしたちは少し身体を強張らせる。

「待て」

剣を抜こうとしたミラに、アルヴィンが静止の言葉をかける。先ほどの兵士に続いて、今度は巨体の男と、細身の男が屋敷から出てきた。彼らはわたしたちに見向きもせず、そのまま馬車に乗り込んで行ってしまった。

「今のは…」

「…お客様はお帰りになりましたか」

ドロツセルはそのままわたしたちを振り返って、どうぞ、と屋敷のほうへ案内してくれた。そんなわたしたちを迎えてくれたのは、優しそうで、かつ凜とした青年の男性であった。

「やあ、お帰り。お友達かい？」

「お兄様！」

なるほど、ドロツセルのお兄さんだったのか。よく見てみれば確かにどこか似ている。

「紹介します。…あ。まだみんなの名前を聞いてなかった」

「ははは、妹がお世話になったようですね。ドロツセルの兄、クレイン・K・シャルです」

こういうところも似ていて、これが兄妹なのか、と考え込む。わたしとあのバカは全然似てるところがない。あるといえば…そうね、プライドの高さ、かしら。

「クレイン様は。カラハ・シャルを収める領主様です」

「この街の領主…！？」

この若さで領主というのはたいしたものだ。ただでさえ大きなこの街。しかしここまで成り立っているということは、彼はそれほどの技量の持ち主なのだろう。

「立ち話もなんです。さあ、どうぞ屋敷の中へ」

クレインさんは笑顔でわたしたちを招き入れてくれた。やはり中は見た目通り広くて、インテリアもすごく落ち着いており、床や絨毯などには埃ひとつなさそうなほど、きっちり整えられていた。

「なるほど、また無駄遣いするところをみなさんが助けてくれたんだね？」

事のあらましを話すと、クレインさんは可笑しそうに笑った。それを見たドロツセルは少しばかり口を尖らせる。

「無駄遣いなんて！協力して買い物をしたのよね」

「ねー」

ドロツセルは同意を求めるようにエリーゼを向く。笑ったティポがそれに答えると、クレインさんは眉を潜めて笑った。そんな中、ローエンさんがやって来てクレインさんに何かを耳打ちする。

「…わかった。みなさんのお相手を頼むよ」

「かしこまりました」

用事が出来たようで、クレインさんは柔らかく断ってから去っていった。

「俺も、ちょっと」

「アルヴィン？」

アルヴィンはクレインさんが去っていくとき、僅かだが目で追っていた。わたしは目を細めて、横目でじっと彼を見やった。

「生理現象。一緒に行くかい？」

そう言つてジュードにウィンクするが、ジュードは慌てて顔を背けた。軽く笑つたアルヴィンはそのまま行つてしまった。その背中が見えなくなるまで見つめていたが、やがて視線を元に戻した。

「ねえねえ、みんな旅の途中なんでしょう？旅のお話を聞かせて」

目を輝かせ、わたしたちを見回し、最後にエリーゼを見やる。

「あの…わたし…」

「私、この街から離れたことがなくて…だから、遠い場所のお話を知りたいの」

「わたしも…外に出たことなかつたです。でも…」

「ジュード君たちが、エリーを連れ出してくれたんだー。海と森を通ってねー、波やキノコがすごかったー」

ティポはエリーゼの言葉を代用するように話した。そう言えばこんな他愛ない話をするのも、聞くのも初めてな気がする。少しだけ自分が場違いに感じた。

「ね、ヴェリテ。あなたもこっちに來て話しましょう」

急に声を掛けられてわたしは目を見開く。顔を上げれば笑顔のドロツセルの顔が目に入る。わたしは少しばかり動揺する。

『え、あ…わたしは、その、ちょっと外の空気を…』

「具合が悪いの？」

『そんなところかしら…ごめんなさい』

別に体調なんて悪くない。ただ、…ただやっぱり近づくのは怖かつ

た。わたしは屋敷を出て空を見上げる。願わくばあの雲のように何にも囚われないように、自由にミラたちと旅をしたい。

『ん…？』

ふと耳を澄ますと、どこからか話し声が聞こえてきた。この声はアルヴィンとクレインさんだ。わたしはそっと柱の影に隠れ、様子を伺った。

「ル……所……情報……か……だ」

「…った………王……」

少し遠い、か。耳が良いわたしでも所々しか聞き取れない。聞き取れた単語は、イル・ファン、研究所、情報交換、王。顎に手を置いて少し考える。まさかアルヴィンはミラたちを売るつもりなのだろうか。やがてクレインさんと共に騎士が屋敷内へ入っていったのを見てわたしは柱の影から出る。どうやら二人ともわたしには気付いていないようだった。わたしは背を向けて広場の方へ歩いていく。アルヴィンを見つめてから気付かれないように後を追った。

『待ちなさいよ』

「！ ヴェリテ…なんだ。みんなといたんじゃないのか？」

広場にやって来た時、わたしは後ろから彼を呼び止めた。クレインさんは優しいし、ミラたちの人柄も分かってくれている。きっとミラたちは大丈夫。そう思い込んでもなかなか怒りは収まらなかった。

『さっき、クレインさんと何話してたの？』

「聞いてたのか。…別に。ただの情報交換だよ」

『それで、ミラたちを売ったの？』

「だから情報交換だって。シャルル卿は今の政治に不満を持っているって有名だからな。情報を得るには打ってつけてやつよ」

軽々しく言うアルヴィンに、ギョツと唇をかみ締める。わたしは怒りに任せてアルヴィンに近づき、彼のスカーフをぐいっと強く引っ張った。

『勝手なことしないで！誰にも何も相談せずにこんなこととして一体何を考えているのよ！！傭兵つてもんは信頼を大切にするんではない？ミラたちを裏切るような真似しないでよ！！！！』

ミラたちはアルヴィンを信用してるはずだ。わたしにはその気持ちは良く分からない。でも裏切られたら心が痛くなることを知っている。それでも人間だから。

『わ、たしは……あ、…っ！』

「っ落ち着け、ヴェリテ！」

突然声が出なくなり、息が苦しくなる。直後のアルヴィンの言葉にハッとしてわたしは息をする。彼のスカーフをそっと離し、震える手で胸を掴む。

『はあ……、はあ………』

「ヴェリテ！」

『来ないで……来ない、で……』

あれ、わたしいつから息してなかったっけ。アルヴィンに話しかけたくらいから、だったかな。ああもう、こんなんじゃないや。いつまでも治らないや。

「ああもう、くそっ！」

『な、ちょ、離して……！』

乱暴に、ガッ、と腕を掴まれて再び息を忘れる。

「いいか。ゆっくり息しろ。落ち着け。大丈夫だ。何もしねえから」

あまりにも真剣な目で言われ、わたしは大人しくそれに従う。大丈夫、大丈夫、と何度も自分を落ち着かせる。捕まれたトコからじわりと暖かくなって、それから段々と軽くなっていく。

『……あ……』

「どうだ、ヴェリテ」

『なんか、違う…』

夢なんじゃないだろうか。人に触れられて、わたしは落ち着いていく。たったこれだけのことだったのに、何故か不思議と世界が違って見えた。

「お前って短気だなあ。そこんこは巫子殿と変わらないのな」

『！ ああ、そういえばそうかも』

さっきわたしが怒鳴ったことを思い出したのか、アルヴィンは苦笑いをしてしながら言う。認めたくないけど確かにわたしは直ぐに怒る癖があるようだ。プライドが高くて短気で負けず嫌い。やはり兄妹ということか。

「……お前から前に進まないで、これからこのままだぜ？」

『…大きなお世話よ』

「それだけの元気があれば十分だな。……今回のことは悪かった」

『…………』

そう言つて笑顔になり、わたしの腕をそつと離した。どうしてだろ
う。信用してないし、ミラを売る（アルヴィン曰く情報交換）とい
う酷いことされた。許してはいけないのに、なぜか許している自分
がいる。

「お、来た来た」

考え込んできると、アルヴィンは腕を高く上げ、そこに真つ白な鳥を
止まらせた。確か誰かと文通してるんだっけ。じつと見てる間
にアルヴィンは鳥の足についた手紙を受け取り、そして自分が書い
たであろう手紙を変わりに付けた。

「また頼むな」

それに応えるかのように鳥は飛び立っていった。それから振り返つ
たアルヴィンはわたしの後ろに視線をやり、よっ、と誰かに声をか

ける。そちらを振り向けばミラたちがそこにいた。

『あ……』

「アルヴィン！それにヴェリテ！」

「アルヴィン君、ヒドイよー！バカー、アホー、もう略してバホー！」

飛び掛ってこようとするティポをミラが止め、そして射るような目でアルヴィンを見やる。

「なぜ、わたしたちをクレインに売った」

ミラの問いに、先ほど言ったことと同じようにアルヴィンは答えた。お陰でとは言いにくいだが、ミラたちもクレインさんから何か情報は聞けたようだった。

ラ・シュガル王ナハティガル。その人が全ての元凶らしい。

「王様を討つの…?」

「ああ。君たち国民は混乱するだろうが、見過ごすわけにはいい」

「うん…人から無理矢理マナを引き出して犠牲にするようなこと、放つてもおけない…」

きつとそれが一番良い方法なのだろう。それがマクスウェルであるミラの使命であり、望みなことから。わたしはただ、ミラの力になるだけ。ただそれだけだ。

わたしの中で、少しだけど
何かが変わった気がしたんだ…

少しずつ

わたし自身も

変わっていかないと、な

不意に誰かがこちらに視線を向けているのに気付いた。バツと振り向くと、そこには兵士がこちらへやってきて、わたしたちを見て声を上げる。

「お前らは…手配書の!？」

「はっ、往来で堂々としすぎたかもな」

ここまで逃げてきたのだ。いま捕まるわけにはいかない。わたしとミラは互いの武器に手をかける。

「南西の風？……いい風ですね」

聞き覚えのあるその声にわたしたちはピタリと手を止める。ふと視線を反らすと、ローエンさんが落ち着いたようすで歩み寄ってきていた。

「この場合は、私が……」

「おい！じいさん！こっちを向け！何を企んでる」

兵士に怒鳴られたローエンさんは振り向きざまに、何かを宙に投げやった。わたしはそれに気づかないふりをしてローエンさんを見る。何をする気なのかしら。

「おおっと。恐い恐い……」

両手を胸の前に上げたあと、ローエンさんの表情が少し変化する。

「おや？後ろのお二人。陣形が開きすぎていませんか？その位置は、一呼吸で互いをフォローできる間合いではないですよ？」

すると後ろの兵士二人が顔を見合わせ、やがて距離を詰めた。

「貴様：余計な口をきくな！」

「そしてあなた。もう少し前ではありませんか？それでは私はともかく後ろのみなさんを拘束できません」

その兵士は鼻で笑ってから、前ではなく後ろに下がった。まるでそれを予想してたかのように、ローエンさんの目が細められる。刹那、三人の兵士たちを囲むようにナイフが地面に刺さる。先ほど彼が投げたものだろう。それは淡い光を放ち、三角の結界で彼らを閉じ込めた。

「では、これで失礼します。さあ、みなさんこちらへ」

わたしたちは助けてくれたローエンさんと共に、再びシャル家の前に戻る。

「ローエン君、すごいー！こわいおじさんたちもイチコロだね！」

「いえいえ、イチコロなど、とてもとても。私程度では、ただの足止めです」

そう言ってローエンさんは謙遜するが、あの計算高い物言いは、決して素人にできるようなものではないことくらい、わたしでも分かった。

「助かりました。ありがとう。えっと…ローエンさん」

「ローエンで結構ですよ。みなさんも是非そう呼びください」

ローエンさん、改め、ローエンが紳士のような振る舞いでお辞儀をする。

「それでローエン。我々に用がるのだろうか？」

「おや、直球ですね」

彼の僅かな表情の強張りに気づいたのか、ミラが腕を組んで問いかける。確かによく見れば少しばかり焦っているように見える。

「実は、みなさんにお問い合わせなんです」

「お尋ね者のいる一行に？あんまり楽しそうな話じゃなさそうだ」

アルヴィンの言葉にローエンは苦笑いをしてから、少し早口で話し始めた。

「先ほどラ・シュガル王が屋敷に来られ、王命により町の民を強制徴用いたしました」

「何？ナハティガルが来ていたのか？」

一歩踏み出し、ミラが聞く。どうやら最初屋敷に来たとき、出て行った巨体の男がナハティガルだという。強制徴用。まさかとは思うけど…

『これって…もしかして…』

「…人体実験…？」

ローエンを見るが、そこまではわからないような表情で首を振る。

「民の危機を感じた旦那様は、徴集された者たちを連れ戻しに向かわれました。しかしナハティガルは反抗者を許すような男ではない……」

「ドロツセルのお兄さん……危ないの？」

思いつめたようにローエンは頷く。エリーゼは不安そうに、ギョッ、

とティポを抱きしめた。

「力を貸していただけませんか？クレイン様をお助けしたのです」

わたしたちを見回して、ローエンは頼み込む。きっと彼にとってクレインさんはかけがえのない存在なのだろう。そして領主であるクレインさんは何よりも民が大切。だからここまで必死なんだ。

「クレインさんもだけど、連れて行かれた人たちも心配だし、助けに行こう」

「あーあ。優等生のお節介に火がついちまったよ？」

『でもそれがジュードなんじゃないの』

今までのジュードの話の話を聞いているとそう思わざるを得ない。無関係のミラに関わっていたり、エリーゼを村から連れ出して来たり。人それぞれだし悪いことだとは思わないけど。

「いいだろう。あれを使おうというナハティガルの企みは見過ごせ

ない」

「だってさ」

「ありがとうございます」

それから街の人たちが連れ去られたというバーミア峡谷に向かうことになった。

「すごい地層だね……」

やっとのことでバーミア峡谷に着いたわたしたち。聳え立つ地層に感嘆の声を上げる。改めて自然の力はすごいと感じた。

「ここは、ラ・シュガルでも有数の境界帯ですからね」

「もしかして、ここ登るのー？疲れちゃうよー」

エリーゼは峡谷を見上げる。確かに彼女にとっては酷な場所かもしれない。わたしは彼女の隣で、体力づくりにはいいかな、とか思っている、不意に視界の端に何かが揺らいた。

『エリーゼ！』

風を切る音がした瞬間、エリーゼとティポを抱きしめてそこから飛び退く。僅かに矢が肩を掠め、ドサ、とエリーゼを庇うように倒れこむ。同時に再び矢がみんなを襲った。わたしたちは岩陰に身を潜め、様子を伺う。

『っ痛…』

「！ ヲヱリテ、怪我を…！」

「ぼくたちを庇ったからだね…」

『ちょっと反応が遅かった。ごめんね、エリーゼ、ティポ』

そう言って笑うと、エリーゼは慌てて治療してくれた。お陰ですぐに痛みは取れ、傷も綺麗に治った。ありがとう、と囁くと嬉しそうにエリーゼは笑った。

「軍か」

「よほど見られたくないことをしてるのだろう。アルヴィン！」

アルヴィンは銃を構えて敵を狙おうと立つが、場所が悪く狙いを定めるのさえ難しい。

「なんとか隙をつくれれば…」

ミラの言葉にジュードが囁役を引き受けると提案する。危険だと心配そうに言うミラだったがジュードの大丈夫と言う言葉に小さく頷いた。

「…そうか。では任せる」

「うん」

それからミラは狙撃兵から死角の道を通り、近くの岩の陰に身を潜める。ジュードは岩陰から出てきて、目の前の敵を見据えた。そして矢が放たれる。それはジュードの顔に向けて一直線に飛んできた。しかしギリギリで顔を反らし、矢を避けた。

『どういう反射神経してんのよ…』

流石に思ってたなかったことをしたので、口角を引きつらせた。兵もそれには驚いていたのか、少しばかり隙ができ、ミラが懷に飛び込む。慌ててボウガンを向ける兵であったが、アルヴィンが銃でそれを撃ち落とした。そのサポートもあって、見事作戦は成功した。

「助かった」

「そう言われるポイントで活躍するのが傭兵のコツなんだ」

『そーゆーところが微妙よね、あなたって』

もう少し謙遜すればいいものを。そう言えばアルヴィンは頭をかい
て苦笑いした。直後、先の洞窟で何かが光り、妙な気配が漂ってく
る。

「これは…イル・ファンで感じた気配…？」

「なにになに？お化け？」

「まさか…ここにもあの装置が？」

急ぐぞ、とミラは我先に走り出す。わたしたちもそれを追って洞窟
内に入った。その先にあつたのは妙な大きな機械。いくつもある機
械から、光が放射され、上にある繭のようなものに照射されていた。
しかし結界のようなものが張られており、中までは入ることができ
なかった。

「これは…」

辺りを見回せば、ガラス張りの檻にクレインさんや街の人たちが閉
じ込められていた。今にも飛び出していきそうなローエンだったが、
危険だと分かっているからか、結界には触れようとしない。

「今の、研究所でハウス教授を殺した装置と似てるんだ！」

「ここでも黒匣の兵器をつくろつというのか？それほど容易く造れはしないはず……」

するとミラは結果に向き直って何かを取り出した後、黙り込んでしまった。声を掛けるがミラはじっと先の装置を見据えていた。

「……私たちを追うのをやめた理由がこれか。くだらぬ知恵ばかり働く連中だな」

ポツリ、とそう呟くのが聞こえた。

「……展開した魔方陣は閉鎖型ではありませんでした。余剰の精霊力をドレインしていると考えるのが妥当です。谷の頂上から侵入して術を発動しているコアを破壊できれば……」

「みんなを助けられる？」

ローエンの考えを理解したジュードはそう続ける。確かにその方法しか考えられないだろう。他にこの中に入れる手段など見当たらない。

「…行こう、ジュード」

ミラもそれには賛成だったのか真っ直ぐな目でジュードを見た。勿論誰も反対することなく、わたしたちは頂上を目指し、峡谷を登り始めた。

これがミラが壊し続けていたもの。
精霊たちを苦しめていたもの。
絶対に許してはいけない。
途端にそう思った。

？大丈夫だ？

そう言ってくれた

あなたの言葉に酷く安心した

険しい峡谷を登り続けて、やっと頂上に辿り着いた。ああもう足動かしたくない。っていうか、高い。膝に手を置いて息を整えてから顔をあげると、そこから激しく光…精霊力が噴出されてるのが目に入る。その激しさ故、辺りの地面も僅かに揺れている。

「くっ…コアが作動してる！けど、この高さ…」

「どうするよ?」

「時間がありません。噴き上がる精霊力に対して魔方阵を展開します。それに乗ってバランスをとれば、無事に降下できるかもしれません」

つまりそれは飛び降りる、と言うことだろう。下まで結構な高さがある。しかもあまり時間をかけていられないため、コアを狙うチャンスは一度きり。迷ってもいられない。

「…行こう。みんなを助けなきゃ」

「ああ。他に手はない」

「ふふふ。なかなか度胸があたりだ」

「見かけによらずな」

度胸はやらなければいけないという使命からであろう。それから口――エンはエリーゼに視線を向ける。

「お嬢さんはここで待っていますか?」

ふるふると首を振ったエリーゼはローエンの差し出した手をぎゅっと握った。彼はエリーゼに優しく微笑む。

「手を離さないくださいね」

その言葉にエリーゼは強く頷いた。それからミラはわたしを見やる。

「ヴェリテ、大丈夫か」

『……なんとか……』

頷いたがわたしは顔を引きつらす。

「まさかとは思っけど高所恐怖症？」

『…否定はしない…』

今までのちょっとした高さなら大丈夫だったのだが、今回は結構来てる。だめだめっちゃ怖い。よくよく考えてみればわたしってばダメなところだらけだな。

「手、握っててやろうか」

『調子に乗らないで』

わたしはキツとアルヴィンを睨み付けて、穴に向き直った。大丈夫。きっと大丈夫。落ち着いたら全部が上手くいきそうな気に…ならないけど、なんとかかなりそう。

「ヴェリテさんもいいですね。では、参りますよ!」

わたしの表情を確認したローエンは、ナイフを宙に投げ、魔方陣を展開する。それは所謂紙飛行機のような形になり、ゆっくりとこちらに降りてくる。

「落ちないように気を付けてください」

こんな小さなスペースに乗れというのが。みんなが乗ってからわたしは戸惑っていた。ドクン、ドクン、と心臓が大きく跳ねる。ただでさえ高いところから降りるという恐怖にさらされているのに、さらに人と密着するくらいの狭いこれに自分から乗る。その状況に今にも息を忘れそうになる。するとそれに気づいたアルヴィンがそつと手を差し出してくれた。

「大丈夫だ、ヴェリテ」

『！』

「来い」

落ち着け。大丈夫、なんの心配もない。わたしは前に進まなきゃ。そうでないと、何も変わらない。ぐつ、と唇を噛みしめてからわたしはその手を取り、それに飛び乗る。

「上出来！」

『っ』

手を放そうと思ったが、意外に強く握りしめられていたためわたしは振り払うのを諦めた。そして紙飛行機の魔方陣は穴に向かって急降下していく。

『ひっ…』

「ヴェリテ」

落ちていく感覚に思わず小さな悲鳴をあげる。まるでわたしを安心させるような声色でアルヴィンがわたしの名を呼ぶ。悔しいがそれだけで少しばかり安堵した気がした。

「見えた！アルヴィン！」

やがて激しい光の渦の中で機械を動かしているであろう核を見つけ た。ジュードの言葉にわたしの手を離し、銃を構える。しかし途端に恐怖があふれ出し、わたしは咄嗟にアルヴィンの服にしがみつく。

「！ヴェリテ、手伝え」

『え…っ』

「こう揺れちゃまともに狙えねえ。だから俺を支えろ」

『っでも！』

「早く！！」

わたしは言葉を詰まらせ、そして覚悟を決めて彼の前に移動して腕を支える。後ろでアルヴィンが笑った気がした。

『アルヴィン…！』

「分かってる！」

そしてコアがアルヴィンの弾によって貫かれ、碎け散った。機械は起動を停止し、クレインさんたちを閉じ込めていた檻の扉も開いた。わたしたちは魔方阵から飛び降り、無事着地した。しかしわたしは腰が抜けたのかその場にへたり込んだ。

「ヴェリテ！」

「わ、たしは大丈夫…それより、街の人たちを…」

につこり笑って言うと、ジュードたちは急いでクレインさんと街の人たちに駆け寄る。みんなマナを抜き取られて、立ってるのもやつの状態だった。

「お前はもうちょい自分の心配をしるよな」

「…わたしは、別に…」

「大丈夫じゃねえんだろ？」

「……うん、怖かった」

図星をつかれ、俯いてそう呟く。高いところから降りるのも、人に近づくのも、全部、全部怖かった。それに、とさっきのことを思い出す。アルヴィンの手が離れて、怖くなって、アルヴィンにしがみついて、それから…それから……。そこまで思い出してあとはやめた。

「いっつもそうやって素直だったらしいのにな、巫子姫様っ」

『うるさいな…』

アルヴィンとのそんな話がわたしを落ち着かせ、やっと立てるようになった。クレインさんもどうやら無事のように、ローエンに支えられていた。ミラがナハティガルのことを問い掛けるが、クレインさんは首を横に振った。

「もー、こんなところ、早く外に出よーよー!」

「だな。長いは無用だ」

ふと妙な違和感にわたしは上を見上げる。ミラたちも気づいたのか、一斉に視線を繭のようなものに向ける。その繭は突然光だし、中から蝶のような、螭螂のような、虫を象った何かが現れる。

「な、何こいつ…!?!」

「来るぞ、構えろ!」

ミラの言葉に一齐に武器を構える。ローエンはクレインさんを安全な場所に移動させた。

「これは…強力な精霊術を纏っています！」

その攻撃を避けながらローエンが言う。

「こいつを生むのがやつらの目的か!？」

ミラは眉を潜めて叫ぶ。でも、とジュードが悩むように呟く。

「なんだろう…この感じ、どこかで…」

「分析は倒してからにしてくれ！」

銃でそれを狙い撃つアルヴィン。七色に輝くその羽は、魔物と違って、それを見てるうちにその存在が何かもつと身近なものに感じられた。

「ヴェリテ！ー！」

『！わ…っ！』

考え込んでいると、ガッ、と回転した尻尾がわたしに直撃する。慌てて体勢を立て直し、それに向き直る。今は確実にわたしたちに敵意がある。まずは動きを止めることを考えよう。

『？ロックブレイク？ー！』

わたしの精霊術がその動きを止め、ミラたちは一気に畳み掛ける。さらにわたしとミラは共鳴術技を発動させた。

「ヴェリテ！」

『任せてミラ！ー！』

『「？ロックフェンデ？！！！」』

地面から現れた岩の棘と、わたしたちから放たれた槍のような岩がそれを貫く。しかし素直に倒れてはくれなかった。

『やっぱり、この感じ…』

「ヴェリテ？」

『ううん。それより前！』

わたしが言つや否や再びその攻撃がわたしたちに向かってくる。わたしとミラは互いに別の方向へ避け、武器を構えなおす。

「埒が空きませんね…」

「ちっ」

「どうでしょう…！」

『わたしが援護するわ！？アグリゲットシャープ？！』

みんなの武器に力を宿し、さらにフィールドバリアーで守りを固くする。これなら行けるはず。そして再び攻守が始まる。ミラたちの攻撃にそれは怯み、その攻撃も纏ったバリアーでダメージが軽減される。

「ジュード！アルヴィン！」

やがてミラが一撃を食らわせた時、そのバランスが僅かに崩れた。ミラは隙を見逃さず、ジュードとアルヴィンを振り返る。

「行くぜ、優等生！」

「うん、アルヴィン！」

「「？魔神連牙斬？！！」」

攻撃力の上がった二人の技は見事命中し、それは力なく倒れた。死んではいけないようだったのでわたしはほっとした。しかしミラが止めをさそうと武器を構えた。

『ミラ、落ち着いて!』

「ヴェリテ!？」

わたしはミラの前に立って手を広げる。そしてゆっくりと倒れていくそれを見やった。

『ほら、ミラ…』

「…よく、感じてみてよ」

ジュードも気が付いていたのか、そう言って同じようにそれを見つめる。すると突然優しい光が放たれた。

『ミラもよく知ってるでしょ?』

「微精霊だよ!」

ふわり、と微精霊の体が浮き上がり、まるで吸い込まれるように消えて行った。それは美しく、そして壮観であった。

「…ありがとう」

『ミラ…』

「我を忘れ、危つく微精霊を滅するところだった」

『ミラも熱くなりすぎるとわたしみたいに我を忘れちゃうから、ね。そんなわたしが落ち着いていられたのは』

そういつてアルヴィンを見た。わたしの視線に気づいたアルヴィンと目が合うが、わたしはゆっくりと視線を戻す。ミラが首を傾げてみってくるが、なんでもないと小さく笑った。

『認めたくないけど…きっとさっきのことがあったから、わたしは落ちつけたんだと思う』

そう、誰にも聞こえないように呟いた。少しは役に立てたかな、と笑って言うミラがわたしの頭を撫でてくれた。わたしにとってそ

ミラの役に立てることがが今の一番の幸せであった。

ミラが嬉しそうに笑えば、
自然とわたしも嬉しくなるんだ。

気付いたらわたしは

一緒にいるみんなのことを

認めているのかもしれない

カラハ・シャルルへと戻って来たわたしたちはシャルル家に集まっていた。ドロツセルもクレインさんの姿を見て、嬉しそうにしていた。ああいう笑顔はわたしも悪くないと思っていた。やがて落ち着いたクレインさんがわたしたちの元へやってきて現状報告をする。

「徴集された民もみな、命に別状はないようです」

「みなさん、本当にありがとうございました」

「私からも、お礼を申し上げます。ありがとうございました」

本当に素晴らしい人たちだと改めて思った。街の人たちのために動く領主さん。それを慕う執事のローエンさんや街の人。わたしがあの村に閉じこもったままだったら、彼らにも一生会えなかっただろう。

「みんな無事でよかったです」

「では、私たちは行くでしょう」

「え！もう行くのー？」

ミラの言葉に残念そうにするエリーゼとティポ。

「ここからだガンダラ要塞を抜ける必要があるな」

「ガンダラ要塞ということは…みなさんの目的地はイル・ファンですか」

そうだ、とミラは頷く。そんな彼女に、クレインさんは心配そうにわたしたちを見回す。

「ガンダラ要塞をどう抜けるつもりなんですか？」

「押し通るしかないかもしれないな」

とことんミラらしい。確かにそれしか方法がないのだろうが些か大胆すぎだと思う。クレインさんも流石にそれは難しいだろうと告げた。

「僕の手のことを潜ませて通り抜けられるよう手配してみます」

「僕たちに協力したりして大丈夫なんですか？僕たち、軍に追われる見ですし……」

ジュードが身を案じるかのように聞く。

「元々、我がシャル家はナハティガルに従順ではありませんし。先ほど軍に抗議し、兵をカラハ・シャルから退かせるよう手配したところです」

「これ以上軍との関係は悪化しようがない、ということか」

ミラの呟きに頷くクレインさん。なんの考えもなしに要塞を通り抜けるとは思わない。わたしたちはその好意に甘えることとなった。手配が上手くいっても、しばらくは時間がかかるかもしれないからそれまで滞在させてくれるらしいのだ。迷惑にならないといいのだが。

『…んー…』

夜、久しぶりにゆっくりお風呂に入って用意してもらったベッドにダイブした。部屋の都合でわたしは一人部屋。しかし本当に広いお屋敷だなあ。二・アケリアは忘れられた村ともいわれているため、昔ながらの建物が多い。それはそれで好きなのだが。

『…少し出るか』

昼間あんなこともあったため落ち着いていられなかった。ほんと、今日は一生分の恐怖を使った気が、しないけどそれくらい怖かった。部屋を出て階段の踊り場に目を向けると、そこにはルアルヴィンがいた。何してるんだろう、と彼をじっとみていると、不意に目があった。

「よ、ヴェリテ。つーかなんつー恰好してんだよ。風邪引くぞ」

アルヴィンは未だ濡れてるわたしの髪と薄着の服を見てそう言う。

『あ、のさ』

「いいから、来いよ」

ほら、と手招きされてわたしはゆっくりと近づく。手を伸ばせば触

れられる距離まで来ても、わたしは自分を保っていた。これも彼のお陰と言うやつなのだろうか。

「ずいぶん慣れたみたいだな」

『…慣れとかなきゃいけないでしょ』

いつものようにツンとして言うと、ふわり、と暖かいものが肩にかけられた。ビックリしてアルヴィンを見やると、すぐにわたしから離れた。

「つと、悪い。やっぱり無理だったか？」

『あ、いや、そういうわけじゃ…』

ないけど、と小さく続ける。ただ、警戒していない自分がいて驚いただけだった。わたしはぎゅっと彼のコートを握って俯く。どうしてだろう。他の人は怖いって感じるのに、ミラとエリーゼだけじゃない。ジュードやアルヴィン、それにドロツセルやローエン…。最初はすごく警戒していた癖に、いまここにいるみんなのことは全然怖くなくなっていた。

『…今日は、ありがとう…』

「ん？何が？」

『……なん、とゆーか…その、手…安心した…』

伏せ目がちに話す。あそこで置き去りにされるのも嫌だったし、何より足手まといにはなりたくなかった。アルヴィンの手助けもあつて、わたしは前に進むことができたのだ。

「いやあ…そんな改まって言われると調子狂うんだけど」

『う、うるさいな！…でも、助かったのは、ほんとだから』

素直にそう言えば。アルヴィンは目を瞬いてわたしを見た。が、すぐいつものように笑った。

「どういたしまして、巫子姫様」

『じゃ、わたし部屋に戻るから。お休み、アルヴィン』

「ああ、おやす…ん？あれ？いまお前俺の名前…」

わたしは問い詰められる前に逃げ帰った。いや、てかなんで逃げたんだわたし。

「…お前は、今以上に俺を嫌うだろうな」

あれから数日経った。しかしガンダラ要塞からは連絡が来ていないらしい。わたしたちが顔を見合わせ困っていると、急ぎならローエンを向かわせますか、とクレインさんは提案してくれた。ゆっくりしている時間もなかったためそれに甘えることにした。

「ではローエン。よろしく頼む」

「かしこまりました」

「ローエン、どれくらいで戻って来るの？」

ドロツセルがそう聞くと、馬を使えば一日あれば戻ってこれるとロ
ーエンは言った。すると彼女は悲しそうに眉を潜める。

「それならもしかしたら明日にはみなさんとお別れかもしれないの
よね」

「首尾よく進んでいればそうなるかもしれないな」

エリーゼとティポも同じように眉を下げる。

「それなら、エリー、ミラ、ヴェリテ。お買い物に行きましょう
」

「お買い物もの？行こう行こう！」

「へ！？」

パン、と手を合わせて言うドロツセルに、嬉しそうにティポが返事
をする。なんでわたしまで、と妙な声を上げたが、エリーゼが上目

遣いでわたしを見てきたので仕方なく折れた。どこでそんな可愛い技を覚えたのエリーゼ。

「決まりね さっそく行きましょ」

ミラはドロツセルとエリーゼに腕を掴まれて連行される。わたしは苦笑いをしてその後ろについて行った。

「まで、話がみえない」

「エリーとお買い物物の約束したもの。明日お別れかもしれないのならチャンスは今日だけよね？」

「それはそうだな。行ってくるがいい」

『あはは...』

ドロツセルとエリーゼが笑いあい、高く腕を振り上げた。

「じゃあ、出発」

「「出発」」

ミラは二人にずるずると引き攣られていく。わたしもティポに後ろから押されて彼女たちを追う。

「いいんじゃないの？」

「たまには人間の女の子っぽいことするのも面白いかもよ」

「ふむ、なるほど。だが厳密には私に人の性別の概念は当てはまらないぞ。現出する際に人の女性の像を成したが…」

『ミラ、諦めよう』

それからわたしたちは広場の方へと足を進めた。こういう女の子らしいことをするのもわたしにはあまり縁のないことだった。やがてわたしたちは広場にある一軒のアクセサリーの店に立ち寄った。ドロツセルは悩むようにまじまじと商品を見つめ、悩んだ末に一つのアクセサリーを手に取った。

「決めた。エリーには、これをプレゼントするわね」

「うわー。高そうー。ドロツセル君はお金持ちだねー」

「あら、ティポったら」

確かにドロツセルが手にしているそれはちょっとやそつとの値段ではなかった。でもそれほどまでエリーゼのことを好いていているんだろう。わたしはそれを微笑ましく見てから一つのピアスに目を向ける。造りはシンプルだけど、よく見れば細かな装飾が施されていた。

「ヴェリテに似合いそう」

『え、いや、わたしは…』

「じゃあヴェリテにはこれをプレゼントするわ」

『！ でもわたし…』

これも結構高そうだし、それにドロツセルともあんまり話したことなかったし、と小さく言う彼女はくすくすと笑った。

「ヴェリテもちゃんと私の友達よ」

『…ありがとう、ドロツセル』

につこり笑ってからふと隣を見ると、ミラはとあるネックレスに目を止めていた。

「ミラ、そのペンダントが気に入ったの？」

するとミラは首を振って、ペンダントについている珠を指差し、これと同じようなものを持っている、と懐から青い小さな珠を取り出した。それにはわたしも見覚えがあった。いつかミラが見せてくれたものだ。そのガラス玉はミラが初めて人間の子どもに貰ったものだという。それをドロツセルたちにも話した。

「大切にしてきたのね。なら、失くさないようにしないと」

その話を聞いていた店の店主が、ペンダントにして差し上げます、と薦めてくれた。ミラが頷くと店主は素早くガラス玉を加工していった。それは十分もしないうちにペンダントに変わった。ガラス玉

は丈夫に金具で止められており、ちょっとやそつとじゃ取れないようになっている。

「これはなかなかよさそうだ。店主、感謝するぞ」

ミラがそれを目の前に掲げて言った直後、後ろで街の人たちの叫び声が聞こえてきた。何かと振り向けば、ラ・シュガル兵が街中に踏み込んできていて、街の人たちを襲っていた。わたしたちはドロツセルに続いて兵士たちの前に立ちほだかる。

「乱暴はおやめなさい！一体なんのつもりです！ラ・シュガル軍は、この街から退去するよう、領主からの命を受けたはずですよ！」

「あなたは…？」

ドロツセルが凜とした声で兵士たちに向かって叫ぶ。その奥から以前屋敷から出てきた細身の男が歩み出てきて、彼女に問う。

「シャルル家の者です」

「ふん、何も知らぬ小娘が」

鼻で笑った兵士を細身の男が制す。

「これは王勅命による反乱分子掃討作戦。おとなしくしていただき
ましょうか」

「な、なんですって？」

信じられない、とドロツセルは目を見開く。少し口角を上げた男が
兵士たちに、捕らえなさい、と命を下す。わたしとミラが武器を構
えると、男は腰を抜かして座り込む。なんだ大したことない、と目
を細めてそれをみていると、兵士たちが指示に従ってわたしたちに
斬りかかってきた。

『ドロツセル、下がって！』

「う、うん！」

ドロツセルを退かせ、わたしが兵士に向かって行こうとした刹那、

身体に電撃がはしった。

『うぁ！？』

「ぐぁ！」

『きゃぁー！』

「きゅー…」

同じようにミラたちも電撃を食らい、地面に倒れ込んだ。ドロッセルの悲鳴のような声が耳に響く。

「全員捕らえなさい」

ひとりの兵士がわたしに触れようとしたが、わたしは力を振り絞って刀で兵士を斬りつけた。

「な…っ！？おまえ、まだ…！」

『わたしに、触れるな……!!』

しかしさっきの電撃で頭がフラフラし、正直限界だった。わたしはそのまま闇へと墜ちた。意識を失う瞬間、アルヴィンがわたしの名を呼んだ気がした。

「ヴェリテ……」

ミラたち以外が
わたしに触れようとした瞬間、
気持ち悪い感覚が、
ぐるぐると身体中を巡り巡った。

毎日が辛かった

だからわたしは逃げたんだ

逃げて、逃げて

結果的にひとりになった

思い出すのは小さなころの記憶。あの頃、わたしは巫子としてミラの社に初めて行ったんだ。初めて会ったミラにわたしは憧れを抱いた。でも同時に自分と同じようなものを感じた。だからミラはミラとして見るようになったのだ。それが村の人たちには考えられなかったことらしい。警告されても態度を直さなかったわたしに恐れて、彼らはわたしを疎み始めた。いつか天罰が下る、と。

「ヴェリテ…！ヴェリテ…！」

『ん…エリー…ゼ…？』

声を掛けられてわたしは目を覚ます。ゆっくり体を起こすが、まだ少しくらくらする。…嫌な夢を見た。昔の夢なんていつ以来だろうか。思い出したくないものだ。ふと隣をみればミラもドロツセルに起こされていた。

「ふたりとも、よかった…」

「ここは…牢…か」

「ガンダラ要塞に連れてこられたの」

そう、と呟くとさっきの男が声を掛けてきた。

「お目覚めのようですね」

「貴様は！」

ガッ、とミラは鉄格子を掴む。しかし男はそれを気にすることなくミラを見やった。

「私は、ラ・シュガル軍参謀副長ジランド」

「ふん。ナハティガルの犬というわけか」

「ふふふ。褒め言葉と受け取りましょう。あなたに伺いたいことがあります。アレの？カギ？を持ち出しましたね？」

その言葉にミラは目を細め、知らないと答えた。しかしジランドは問い詰めるように続ける。

「その上、どこかに隠したそうじゃありませんか？」

「知らないと言ったはずだが」

悪まで白を切るミラに鼻で笑うジランド。隣の兵士に合図を送った

あと、出る、と武器を突きつけられる。わたしたちは牢のあった部屋の外に出され、何かの前に立たされる。ゾクリ、と背筋が凍った。ここから先に足を踏み入れてはダメだ、と本能がそう言っている気がした。

「もう一度問います。？カギ？をどこに隠したのですか？」

「知らんと言つたらう」

ミラが言った直後、ひとりの兵士が女の人を突き飛ばす。彼女が何かの先に倒れこんだ次の瞬間、爆発が起こった。パタリ、と女の手が力なく落ちた。気持ち悪くなるような異臭が鼻につき、わたしは思わず口元を両手で押さえる。

「自分たちの足をごらんない。彼女と同じものがついていてるでしょう？それをつけたまま、あの呪帯に入ると……ご覧の通りです」

「このような暴虐許されませんよ！サマングン条約違反ですわ！」

ドロツセルの言葉にもただ薄く笑っただけだった。ジランドは再びミラに向き直る。

「さあ、？カギ？の在処はどこです？」

「くだいな。知らん」

その言葉にジランドが合図すれば、近くの兵士がエリーゼに手を伸ばす。わたしはその手を払い退けた。ジランドがわたしを見やるが、そんなものには怖気ない。しかしエリーゼの代わりにわたしが兵に捕まれた。横目でミラを見れば、小さく頷いたのがわかった。

「お前たち人の尺度での脅迫など、なんの意味もない。傷つくこと、失うことは私にとって恐怖にならない。私でも、その者たちでもそこに突き飛ばしてみる」

あまりの冷徹な言葉にエリーゼとドロツセルは目を見開く。大丈夫。わたしはミラを信じている。

「私の言っていることがウソではないとわかるだろう」

辺りはシンと静まった。するとジランドの元にひとりの兵が駆け寄って、それから彼に耳打ちをする。それにジランドは頷いた。

「ここは任せますよ。必ず？カギ？の在処をはかせなさい」

そう言い残してジランドは去って行った。代わりに女の兵がミラに剣を突きつける。しかしミラはそれにも動じない。

「ふふ。困っているな。脅しが効かない時点で策は尽きたか？なんなら身体検査してみればどうだ？もってないとわかるはずだ」

女の兵はその言葉を聞き、ミラの体を探り始める。そして刹那、ミラがわたしに視線をやった。わたしとミラは同時に兵の隙について、ミラは兵の剣を奪い、わたしは隠し持っていたナイフを兵の首筋に宛がった。

「こんなくだらぬ罫に嵌まるとは。平静を失っては、なすべきこともなせないぞ」

『残念。油断は禁物って習わなかった？』

「そちらには人質は効果的だろう？武器を捨ててもらおうか」

兵たちは大人しくそれに従った。わたしは彼らの首に手刀を食らわせ気絶させ、それから牢へぶち込んだ。

「さあ、脱出するぞ。ドロツセル、剣は使えるか？」

ドロツセルは首を振ると、ミラがエリーゼに目を向ける。しかしエリーゼもふるふると首を振った。

「わたし……ティポがいないとダメなんです……ティポがいないと戦えない……」

エリーゼは目に涙を溜めながら言う。ぽろぽろと流れ出す涙を見て、ドロツセルは彼女の肩を抱いた。

「ヴェリテ」

『分かってる…大丈夫。わたしがちゃんと守ってみせるわ』

ミラだって本気で彼女たちを見捨てようとは思っていないだろう。
その証拠にミラはわたしを信じてくれたのだから。

「では行こう。まずはこの呪環を外さねば」

『…駄目ね。それロックがかかってる』

「どうやらキーがないと制御装置で解除するしかないらしい。制御装置を探そう。ティポも、な」

ほら、いつだってミラは優しいんだ。エリーゼもミラの言葉に嬉しそうに頷いた。

何度が戦闘をして、やっと制御室とエレベーターののカギを手に入れた。ミラが前衛で戦って、わたしがエリーゼとドロツセルを守るように後衛で戦う。一対一で戦ったことはあったのだが、ふたりつきりで共同戦線というのは初めてだった。

『…ここ、かしら…』

エレベーターで降りた先にある部屋に入ると、ガラス張りの展望台から下を見降ろしすと、そこにはジランドの姿があった。そこでは人体実験が行われており、カプセルの中の人が霧散していくのを目にした。近くにはティポの姿もあり、それを見たエリーゼは思わず叫ぶ。

「ティポ！」

「行くぞ、ヴェリテ！！！」

『わかった！』

わたしとミラは同時にガラスを突き破り、下に着地するとすぐさまジランドを睨み付ける。ああもう飛び降りるの怖い。勢いに任せるんじゃないかった。

「何！？お前たち、どうしてここに！」

逃げ腰になるジランドを余所に、ミラはエリーゼとドロツセルにそこから飛べと指示した。

「え、そんな…無理…」

『大丈夫。わたしたちが受け止める。安心して』

しかしエリーゼは言葉を詰まらせる。

「おまえの大事な友達がまた連れ去られてしまつかもしれんぞ」

「ティポ…！」

研究服を着た人物がティポを掴んだのを目にして、エリーゼは小さく声を上げる。わたしたちは上を仰ぐ。

『飛んで、エリーゼ、ドロツセル!』

「自分の意志で!」

ふたりはぎゅつと目を瞑ってから、同時にそこから飛び降りた。あまり衝撃を与えないように、タイミングを計らって、わたしはエリーゼを、ミラはドロツセルをキャッチする。

『えらいよ、エリーゼ』

「ヴェリテ…」

『ほら』

そつと下してティポに視線をやると、エリーゼは走ってティポを奪い返しに行った。取り返したティポを大事に抱え、わたしの隣に戻ってくるエリーゼ。

「茶番だな。実にくだらん」

ドクン、と一瞬胸が激しく鼓動した。その声にももの凄い威圧感を感じたのだ。

「ナハティガル王！」

向かいの扉から入ってきたのは以前見た巨体の男。ローエンにも教えられた通りだ。彼がラ・シュガルの王、ナハティガル。彼は部屋を見回してジランドを見据えてからこちらに目を向けた。

「ナハティガル！」

ミラは剣を抜き放ち、その場から飛び出した。ナハティガルはそれを片手で受け止める。わたしはミラを止めなかった。…ううん、止められなかった。

「この者が？」

まるで見定めるようにナハティガルはミラを見る。そしてあろうことか抜き身の剣先を手で握った。

「貴様のような小娘が精霊の主だと……？この程度で笑わせる！」

ナハティガルはそのままミラを宙に投げ、腹に鉄拳を食らわせた。その衝撃でミラは壁際まで吹っ飛ぶ。

『つよくも！』

無謀にも我を忘れ、わたしはナハティガルに斬りかかる。しかしわたしの攻撃も軽々止められてしまった。そのまま振り翳された腕で床に叩きつけられる。

『ぐ…っ！？』

「小娘が…」

「ヴェリテ！」

アルヴィンの声が聞こえた。もしかして助けに来てくれたのだろうか。

「僕は、クルスニクの槍の力をもってアジュールをもたいらげる」

「それでカラハ・シャルを…！どうしてこんなヒドイことばかり…」

さらにジュードの声がすぐ後ろで聞こえた。わたしは力を振り絞って、ぐっ、と体を起こす。

「下がれ！貴様のような小僧が出る幕ではないわ！」

「ナハティガル王！」

『ミ、ミ…！』

不意にミラに視線が向けられた。

「貴様などに我が野望阻めるものか」

『ミラ…！』

わたしが守らないと。ナハティガルが剣を振りかぶったのを見たわたしはミラの方へ駆け出す。しかしふらつく体ではうまく走れず、足が纏れた。もうダメ、と思った瞬間、投げられた剣がナイフによって阻まれる。

「イルベルト、貴様が…！？」

ローエンを見て言うナハティガル。その名前にジュードは目を見開いた。

「イルベルト…？歴史で習ったあの？指揮者イルベルト？！？」

「国も軍も捨てたあなたが、今更なんのご用ですか？」

魔方阵で降りてきたローエンはジランドの問いを無視し、ドロッセルとエリーゼの元へ行く。ナハティガルとローエンは知り合いのよ
うな雰囲気を漂わせていた。

「陛下、こちらへ！このような者どもにこれ以上構う必要はありません」

ナハティガルはそのまま踵を返して扉から出て行った。ここで逃がしてはいけない。あいつが、ナハティガルがクルスニクの槍の元凶なんだ。いまあいつを討たないと、いまがチャンスなのだ。

「逃がさん！」

『行かせるものか！！！』

「ミラ！」

「おい、ヴェリテ！！！」

ミラに続いてわたしはナハティガルを追う。後ろでジュードたちの
呼ぶ声がしたが、そんなの気にしてられなかった。

ミラが行くなら、

どこまででもついていこう。

ミラは強いかも知れないけど、

ミラを守るのがわたしの使命なの。

昔、ミラが守ってくれたように、

今度はわたしがミラを守るんだ。

誰かに決められたことじゃない。

わたし自信が決めた、

巫子としてのわたしの使命。

ずっと、ずっとそう思ってたのに。

わたしは弱かった

誰も信じず

誰にも頼らず

ただただ自分の決めた使命を

守らなきゃと

突っ走っていただけだった

わたしとミラはナハティガルを追う。後ろで扉が閉まる音がしたが、わたしもミラもそれどころではなかった。こういう場面ではほんと

に冷静になれないなと頭で思いつつも、わたしはこの衝動を抑えることができなかった。ミラは黒匣を破壊するためにいつもひとりで危険に飛び込む。それを止めるのも、わたしの役目なのに、わたしは…

「待て、ナハティガル！」

『ハッ！！』

「はあっ！」

前に目的の人物を見つけた瞬間、わたしはアクアレイザーを、ミラはファイアボールをナハティガルに向けて撃つ。しかし呪帯に、黒匣によって阻まれる。

「無駄だ、小娘と自称マクスウエル」

煙の中、目を細めながらナハティガルを睨み付ける。

「…答える。なぜ黒匣を使う？なぜ民を犠牲にしてまで、必要以上

の力を求めるのだ？王はその民を守るものだろうか？」

『民を守れない王など、王ではない』

わたしたちが声を張って抗議するも、ナハティガルは顔色ひとつ変えず、こちらを見ている。

「ふん、お前らにはわかるまい。世界の王たる者の使命を！己が国を！地位を！意志を！守り通すためには力が必要なのだ！」

そして嘲笑うかのように、見下ろすようにわたしたちを見て言い放つ。

「民は、そのための礎となる。些細な犠牲だ！」

『人の犠牲で成り立つ国など、国ではない！！それはただのお前の自己満足だ！！民あってこそその国でしょう！！』

今にも飛び出しそうなわたしを、ミラが片手で制す。隣のミラはすごく落ち着いてて、それでいて凜としていた。でも彼女に怒りはピ

リピリと感じられた。

「…貴様はひとつ勘違いをしている」

「なんだと？」

ミラは一度自分の足についた呪環を見、そして呪帯を見上げる。

「このようなもので自分を守らねば…、黒匣の力など頼らねば、自らの使命を唱えられない貴様に、できることなど何もない。なすべきことを歪め、自らの意思を力として臨まない貴様などに」

それからわたしに目配せをする。そこを動かす、とでもいうような鋭い視線でわたしを見る。わたしはその射るような瞳に吸い込まれそうになり、無意識に頷いてしまっていた。ミラは満足そうに笑う。

「はっ！儂に傷ひとつ負わせられぬお前が何を言っても負け惜しみにしか聞こえんわ」

しかしミラは悉く冷静だった。そのミラに少なからず体が震えた。これが精霊の王である、マクスウェル。世界を守ろうとする、精霊の王の姿。

「勘違いはひとつではないようだな」

「何？」

『え…』

刹那、視界からミラが消えた。そして前方から爆発音が聞こえた。咄嗟に振り向けば剣を振り下ろしたミラと、それを庇って倒れたナハティガルの姿があった。

「ばっ、バカな!？」

『ミラ!?!』

わたしが彼女の名を呼んだ瞬間、再び爆発が起こった。

わたしが行かないと。わたしが止めないと。わたしが守らないと。

でもミラにここを動くなと言われ、わたしはそれに頷いてしまった。
一度頷いたことには逆らっちゃいけない。いけない、のに…

『っ！！！』

「ふ、ふはは！それが意志の力とやらか？やはり傷ひとつ負わせられぬではないか」

「陛下あ！」

「貴様に使命を語る資格はないっ！」

爆発の煙で何も見えない。何が起こってるのかもわからない。その中で何度も、何度も、爆発が起こる。途端に恐怖を覚えた。ミラが、ミラが死んでしまう。わたしの前からいなくなってしまう。そんなのは、いやだ。

「ミラッ！！ヴェリテッ！！」

覚悟を決めて飛び込んだ時、扉の方からジュードの声が聞こえた。そして同時に誰かがわたしの腕を力強く引っ張った。

「ヴェリテ!!」

『アル、ヴィン…っ!やだ!離して!ミラが!!ミラが…!!!?』

直後、わたし目が見開かれる。やっと煙が晴れ、わたしの目に映ったのは倒れて動かなくなったミラ。彼女を見た瞬間、わたしの足から力が抜けた。それをアルヴィンが支えてくれた。

「ミラ!!」

『どうしよう…ミラが、ミラ、が…!わたし、が、止めなきゃ、いけなかったのに…!!わたっ、し…止めっ、止められなかつた…っ』

アルヴィンを見てから、わたしはジュードに抱えられたミラをみる。ミラは体中に大火傷を負っていて、足は見られないほどにぐちゃぐちゃだった。ジュードは後から来たエリーゼと共にミラの治療をしていたが、それも出来ないうちに兵士たちに見つかってしまった。

「落ち着けヴェリテ。ともかく、これ以上は無理だ。ジュード、カラハ・シャールに帰ろう」

ふわり、と体が浮いたと思えば、アルヴィンに横抱きにされていた。慣れたせいだろうか。こんなに密着されたら何かしら症状がでるのだが、今回に限ってそれはなかった。

そこからどうやってカラハ・シャルルに戻ったかはあんまり覚えていない。ただ、心配そうにわたしを見る、アルヴィンの顔だけが酷く記憶に残っていた。

わたしは眠っているミラの手をずっと握っていた。怖かったんだ。ミラがいなくなるんじゃないかって。精霊は死んでもまた新たな命に生まれ変わる。でも、ミラはミラ。だからミラが死んでしまったら、わたしは生きてる意味をなくなってしまう。ミラがわたしの身を案じて動くなと言ってくれたのはわかる。それでもわたしは今までミラのために生きてきた。ミラに恩返しをしたかったから。なのに、どうしてこんな…

『ミラ…ミラ、ミラ…っ』

「…ヴェリテ…」

後ろから心配そうにジュードが声をかけてくる。わたしは、ぎゅつ、と強く唇を噛み締めた。

『わたしがいけないんだ。わたしが、ミラを止められなかったから…っ』

「それは、違うと思う…」

『っでも！！わたしが止めていたらミラはこんな大怪我しなくて済んだわ！！』

涙を溜めてジュードを振り向く。今にも涙は零れ落ちそうだったが、わたしは流さないようにぐっと堪える。

「確かにミラは一人で突っ走ったけど、でもそれはヴェリテのせいじゃないよ。ヴェリテだってミラの立場だったらああしてたでしょ？」

『それは…っでも………！』

「気持ちはみんなおんなじだよ。みんなだつてミラを止められなかった。だからヴェリテ。一人で抱え込まないで。僕はヴェリテのこ
と信頼してるんだから。こんな時こそ頼つてよ」

どうして、どうしてなの。わたしはジュードのこと信じてないつて
言ったのに、なんで優しくしてくれるの。なんで信頼してるなんて
言うの。

『ジュード…っ』

「きつとミラなら大丈夫だよ。ちゃんと目を覚ましてくれるから」

『……っっ、あ……っ』

わたしはミラの手を頬に当てて生まれ初めて涙を流した。ぼろぼ
ろと止めどなく流れていく涙。ジュードに信頼してると言われて、
さつきより胸が軽くなった気がしたんだ。まだ短いけど、ずっとこ
こまで一緒に旅してきた？仲間？なのよね。ジュードもエリーゼも
みんなわたしを仲間だと思つててくれてたのよね。

『っつわぁあぁん！ジュードお！！』

そんなことを考えてしまつて我慢できなくなる。わたしは恥ずかしながら、ジュードに抱きついてしまった。するとジュードは驚きながらもそつとわたしの背中をさすってくれた。

『わたし…恐かった…ッッ！！！』

「うん」

『わた、しのせいでっ、ミラが…っいなくなっちゃうかもって、思つて…っ！！』

「うん」

『そう、考えたら…わたしが、わたしでいられ、なくなりそうだった…っ』

「…うん」

『でも、でもっ！……っなんでジュードはそんなにお人好しなんだよばかぁ！……あほぉ！……バホー！……！』

それでもジュードは優しく笑ってくれた。ああもう、だからお人好しだって言われるんだってば。でも、今は感謝してもし切れない。やがてわたしが泣き止んだ頃、ジュードはわたしの頭をそつと撫でる。

「寝てないんでしょう？休みなよ、ヴェリテ」

『年下なのに、生意気』

「なっ……」

『ウソ。ありがと、ジュード』

「ヴェリテ……」

それからミラが目を覚めたのは翌日の昼だった。そこで衝撃的な事実を耳にする。酷く損傷したミラの足は、もう動かないのだそうだ。一度豪快に泣いたせいだろうか。それを聞いた瞬間、わたしは再び泣きそうになった。

『ミラ……』

「案ずるな。足が動かずとも、私は使命をやり遂げる」

『…ダメよ、ミラ。そんなこと言っちゃ、わたし、悲しい…』

ミラのベットに腰を下ろしてミラと視線を合わせる。

『諦めろとは言わない。でも、もうひとりで無茶しないで。ミラが歩けないなら、わたしがミラの足になるから』

「…ヴェリテ。ありがとう、ヴェリテ。お前はいつも私自身を見てくれていたな…それが嬉しいよ。……ありがとう」

『うん。わたしは初めて会った時からミラが好きだから……友達、だから』

ミラの手をぎゅっと握って言う。ミラはまだこんなに温かい。わたしはこの手の温かさに、わたしはいつも守られていたんだ。だからこの温もりをなくさないためにも、わたしはわたしにできる限り、今のミラの力になろうと誓った。

翌日、ジュードの提案で、ジュードの故郷であるル・ロンドへ向かうことになった。なんでも、ジュードの父親がミラみたいに歩けなくなった人を治したことがあるらしいのだ。わたしたちはそれを頼

ることにしたのだ。この街、カラハ・シャルの別名は出会いと別れの街。まるでそれが当てはまるかのように、わたしたちはバラバラになった。エリーゼはここに、ドロツセルローエンと一緒に暮らすことに。アルヴィンは、次の仕事があるから、と見送りもなしに行ってしまった。

『…アルヴィン』

わたし、まだお礼を言っていないのに。この数日、まともに話すことなく過ぎてしまったのだ。少し寂しいと感じながらも、わたしたちは街を出発した。

みんなのことなら、
もう一度信じてもいいかな、
なんて思ってたんだ…

最初はあんなに警戒していたのに

いつの間にか普通に話して、

普通に接してられるようになった

カラハ・シャルルを出発したわたしたちはサマンガン街道と進んでいた。ミラは歩けないために、シャルル家から借りた馬に乗っている。ジュードは馬の綱を持ち、誘導しながら歩いていた。わたしはというと、ミラを後ろから支えるように馬に乗らせてもらっていた。確かにここ最近、ご飯をちゃんと食べてなかったため貧血気味だった。でもそんなこと言ってる場合じゃなかったのに。

「頼ってほしいな、ヴェリテ」

そんなこと言われたら断るにも断れなくなつて、馬に乗ってるわけ
で。勿論戦闘には参加している。ジュードだけに戦わせるわけにも
いかない。そんな中、辺りが段々と曇つてきて、次第にぽつぽつと
雨が降り出した。

「降つてきちゃった。今日は、ここで休もう」

「ああ。任せるよ」

雨宿り出来る小さな洞窟を見つけ、わたしたちはそこで食事や寝床
を整備する。そう言えばジュードの手料理を初めて食べた気がした。
いつも断つて一人分無駄にさせていた記憶が新しい。

『ウソ……おいしい……』

「あはは、ありがとう」

温かいそれは妙に胸に染み込んだ。考えてみればジュードの手料理
だけじゃない。他の人が作ったものを食べるのが初めてなんだ。

『ごちそうさま。ジュード、ミラ。運動がてら近くを見回りしてるわ』

「え、でも、雨降ってるし…」

『あら。二人の邪魔をしようなんてそんな野暮なこと、わたしはしなくてよ』

こっそりジュードに耳打ちすると、彼は真っ赤に顔を染めた。ふふ、と笑えば隣のミラが小さく首を傾げた。それからわたしは出来るだけ濡れないように木の下を伝って辺りを巡回し始めた。

『…』

別に二人の邪魔だからって出てきたわけではない。なんとなく、この景色を一人で見たかったのだ。わたしは雨が好きだ。すべてを洗い流してくれそうな、雨が好き。願わくば、いつそのまま、世界を真っ白にしてくれれば…なんて。我ながら傲慢すぎな考えだと思った。

暫くして雨も小降りになり、わたしはミラたちの元へ帰ってくる。

「ヴェリテ、こっちへ来い。拭いてやるう」

『もう、わたし子供じゃないんだから』

「そう言ってるうちはまだまだ子供だ」

濡れてることに気づいたミラはごしごしとタオルで頭を拭いてくれる。昔もこうやって乾かして……いや、あれはシルフ様にやってもらったのか。あの風は激しかった。

「解いてくれ」

『はい』

いつもの三つ編みをバサツと取れば、銀色の長い髪が僅かに揺れる。バカとお揃いの銀色の髪は結構好きだった。自分で言うのもなんだが、太陽の光に照らされたそれは凄く綺麗に輝いていたから。

「ヴェリテの髪、案外長いんだね。三つ編みだから短く感じるのか……」

『よく言われる…あれ、そのペンダント…』

ミラに頭を拭いてもらいながらジュードを見れば、首に小さく光るペンダントを見つけた。それは先日、ミラがアクセサリー屋の店主に加工してもらっていたガラス玉のペンダントだった。

「わたしがプレゼントしたのだ。友情の証に」

「でも…本当によかったのかな…」

「ヴェリテにも昔やった。指輪、と言っやつだ」

『！ ミラ…？』

確かに昔、ミラから指輪をもらった。ミラが作ったもので、失礼だけれどすごくいびつだった。でも初めて誰かからもらったもので、それが嬉しくて毎日付けていた。

「今思えば、それは私とヴェリテの友情の証だったのだ。いつもお

前がわたしの傍にいた。わたしがお前の傍にいた」

『…嬉しい、ミラ』

ミラはわたしをちゃんと友達として見ていてくれた。わたしも、自覚はなかったけど、ミラを友達として見ていた。それ以上に嬉しいことがあるだろうか。

「さ、もう寝るぞ。明日も早い」

『今日も疲れたしね』

「うん、そうだね」

そう言っただけでわたしは所謂川の字で寝床についた。ジュードが洪ったのは言うまでもない。

それから何日か街道を歩き続けた。貧血も、もうどうってことなかったのだが、ミラが馬から落ちないようにとジュードに頼まれ、わたしはずっと馬に乗っていた。そんなある日のこと。

「今日中には海停につけると思うよ」

「ああ」

『…あれ、何』

わたしの視界に、穴に嵌まったと思われる魔物の姿が目に入った。抜け出そうと必死なそれ。放っておいても大丈夫か、と思って再び前を向いた瞬間だった。

『うわぁ！？』

「なっ！？」

穴から抜け出た魔物が飛んできて、わたしたちが乗っていた馬にお尻から突っ込んできた。ぶっ飛ばされた馬はわたしたちを背中から落とし、逃げて行ってしまった。

「ミラ！ヴェリテ！」

『わたしなら大丈夫！それより前！！』

わたしはすぐに立ち上がり、戦闘態勢に入ると、さっきの魔物が突進してくる。ここで避けたらミラに当たってしまう。そう思ったわたしは短剣と扇を使い、その魔物の攻撃を受け止めた。瞬間、ゴキッ、と嫌な音が耳に響いた。

『ぐっ！』

「ヴェリテ！」

『ジュード、お願い！』

肩越しにジュードを見やり、叫ぶと、ジュードは獅子戦吼で魔物を吹っ飛ばす。隙を見つけたわたしはエナジーブラストを放つ。

『よし！』

「？転泡？！」

続けてジュードが足払いで魔物をダウンさせた。わたしはその間に精神を集中させる。

『?ウィンドカッター?!!』

真空の刃が魔物を切り裂くと、それは絶命した。

「ミラっ!!大丈夫!？」

ミラが無事なのを確認したわたしは、肩を押さえて息を整える。それに気づいたジュードは慌ててわたしに駆け寄ってきた。

「肩、脱臼してるんじゃないの!？」

『うーん、そうみたい…治すの手伝ってもらっていい?』

「え!?!でも、それは…!」

『いーからいーから』

これくらいの痛み、ミラの足に比べればどうってことない。そう思

って、ゴキン、と未だに反対するジュードに入れてもらった、のだが。

『~~~~~!~!~!~!』

「もう！だから言ったのに！」

『っ、ああ、痛かった…』

ぐっぱっ、とちゃんと動くか確かめてから、ぐるっと腕を回す。うん、なんとか大丈夫そうだ。

「え、本当に大丈夫なの…？」

『骨だけは丈夫ですから。それより、困ったことになったわね』

ミラの移動手段である馬が逃げてしまったのだ。するとジュードは少し考え込んでから、覚悟したようにミラを真っ直ぐに見やった。そしてミラに背を向け、彼女を背負う。その行動には彼を見直した。

「お、おい」

「しっかり捕まって」

『んじゃ戦闘はわたしに任せて、ジュードはミラをお願いね』

「うん。仕方ないけど今回は甘えるよ。でもピンチになったら助けに入るから」

『頼りにしてる』

につ、と笑えばジュードも笑う。ミラだけが不服そうにしていたが、やがてミラも観念したように笑った。

少し時間はかかったが、予定通り今日中には海停につくことが出来た。戦闘もなんとかわたしひとりで抜けられたのだが、ちょっと張り切りすぎた。

『肩痛い…』

「無茶するから……ほら、これでオッケー。暫くは大人しくしてて。僕は船があるか見てくるね。ちょっと待ってて」

わたしに腕を動かすなどでもいうように、ジュードに腕を固定された。それからわたしとミラをベンチに残し、ジュードは船の時間を調べに行った。するとミラが懐から何かを取り出した。

『ミラ、それは？』

「ああ、これは…」

ミラが言いかけた直後、聞き覚えのある、嫌に耳に残る声が聞こえてきた。上から降ってきたのはやはり予想通りの人物で。

「ミラ様。ようやく追いつきました。それにヴェリテも！」

『なっ、なんで…！』

「相変わらず可愛いぞ、ヴェリテ」

『ふざけんな』

ガンツと鉄扇で頭をぶつ叩く。

「イバル？どうしてここに？」

「手配書にミラ様を見つけ、心配で馳せ参じました。勿論ヴェリテのことも」

復活が早いこと。

久しぶりに会うバカはやっぱバカだった。いや、純粹すぎるんだろ。普通ならばあんな手配書でミラだということはわかるまい。

「ニ・アケリアを守る使命はどうした？」

「村の者たちもミラ様の力になることを理解してくれました」

「ばかもの！そんなことを言っているのではない！」

『そうよ。わたしが何のためにバカに任せたと思ってるのよ！』

「私は…」

そう言つてミラは立とうと腰を上げたのだが、やはり足が動かなくてその場に倒れこんだ。わたしもバカも慌てて駆け寄る。

『無茶しないで!』

「ミラ様?どうなされたのです?」

バカはミラの足に目を向けた、ミラの足は痛々しく、真っ白な包帯が巻かれていた。さらにわたしに目を向け、固定されている腕を見る。

「…こ、これは」

『あの、イバル…』

説明しようと思ったのだが、うまく口が動かせなかった。暫くじつと見ていたイバルはミラを抱え、ベンチに座り直させる。すると丁度ジュードの声が聞こえてき、やばい、と思った時にはもう遅かつ

た。

バカが来るなんて予想外だ。
いや、でも考えておくべきだった。

わたしはミラのために

今ある力を振るうだけ

それで少しでもミラが

楽になればって、思うの

船の時間がわかったのか戻って来たジュード。その彼に突っかけていくバカ。ミラがそれを止めようとするが、バカは聞かない。どうしてこうタイミングが悪いのかしら。

「いいか。元来、ミラ様のお世話役として、わが身を顧みず務める従者を巫子と呼ぶ。それは誇り高く、尊ばれる」

『…ちよつと、バカ。やめなさいよ』

「それにヴェリテはそんな大切な巫子の一人だ。ミラ様のお言葉とはいえ、それをどこの誰とも知れない輩に任せた俺が間違いだった！さあ、ヴェリテ、ミラ様、行きましよう」

わたしの腕を掴んで、バカはミラの元へ駆け寄る。しかしジュードが静止の言葉をかける。

「僕の父さんなら、ミラの足を治せるかもしれないんだ。それにちゃんと治療すればヴェリテの肩だって…」

「だとすれば！」

バカは双剣を抜いてそれをジュードに突きつけた。

「俺がお連れする」

『イバル！』

わたしが叫ぶも、バカは聞く耳持たない。じっとジュードを目で捕え、逃がさない。

「貴様など、俺から見れば巫子たる資格をもたない偽者だ。立場をわきまえろ！」

「イバルが連れて行くのでもいいよ。でも、僕も行く」

ジュードは突きつけられた剣を手の甲で反らしながら言う。その言葉聞いたバカは鼻で笑って、剣を逆手に持ち替えた。

「危ないので、ヴェリテとミラ様はそこを動かさないでください」

もう我慢の限界だった。何が好き好んで身内と仲間が戦うのを見ていろと言うのだ。わたしは高く鉄扇を振り翳し、勢いよくイバルの頭に落とし、さらに足払いをしてその場に尻餅をつかせる。そして彼の胸倉をぐいっと掴みやる。

『おい。人の話を聞け、人の話を』

「ヴェリテ!？」

『…いい加減にしてよ!巫子ならちゃんとミラの言うことくらい聞きなさい!資格がどうか、役目がどうか、そういうことじゃないでしょ!?!巫子と名乗るなら主であるミラから与えられた仕事をちゃんとこなしてからにしろ!?!?!』

わたしはバカが来てからの短い間に溜まったものを吐き出す。バカもジュードも目を丸くしてわたしを見ていた。

『ここまで言って戦うってんなら気が済むまでやってればいいわ!わたしがミラを連れて行くから!』

そう言って背中を向ければ、パシッ、と手を掴まれる。

「…悪かった、ヴェリテ…」

「僕も、ごめん…ミラ、ヴェリテ…」

わたしは鼻を鳴らしてミラの隣に座りなおす。ふとミラを見れば、

小さく笑ってわたしを見ていた。

「まるで鬼だな、ヴェリテ」

『なっ…もう、ミラったら…』

口を尖らせて拗ねれば、ミラはまた笑った。

「イバル。気に入らないのなら、相手はまた今度する。だから、今はもう行こう」

「ヴェリテに免じてだからな…」

理由が不純だけど、まあいいってことにしておこう。溜息を吐けば、ミラが懷からさっきのものを取り出し、じっと見つめていたのが見えた。

「イバル、お前にこれを託す。誰の手にも渡らぬよう守って欲しい。これは、私の命と同じくらい大事なもの。四大の命も、これにかかっている」

それをバカに手渡すミラ。もしかしてこれがジランドの言っていたカギ、と言っやつなのだろうか。

「そのような重要なお役目を…お任せください！」

「頼む、そして二・アケリアに帰れ」

驚かなくてもそう予想はできたこと。ミラは目を見開くバカを気にせずそのまま続ける。

「お前の使命は二・アケリアを守ること」

「ミ、ミラ様！しかしですね…」

「何度も言わせるな」

ミラの言葉には逆らえず、バカは唇を噛みしめた。わたしだってバカがどれほどミラを慕っているかわかってるつもりだ。それでもバカには村を守る使命がある。押し付けたわたしもわたしなのだが。

「さっさとヴェリテとミラ様をお連れしろ。だが忘れるな！本物の巫子は、この俺だということを！」

「うん。わかってる。絶対ミラは、また歩けるようになるよ。ヴェリテだってちゃんと治して見せるから」

「当然だ！」

わたしとミラはそんなイバルに溜息を吐いた。

ジュードは懐かしそうに辺りを見回していた。ここがル・ロンド。ジュードの故郷だ。嬉しそうな半面、帰ってきたというのになんだか複雑そうな表情も見られた。わたしが声を掛けようとしたとき、ひととき目立つ元気な声が聞こえてきた。

「さあ、まだまだだよ！行けー！」

そちらを振り返れば、車椅子に乗ったわたしと同年くらいの少女と、それを押している小さな男の子と隣で走っている女の子がいた。

「あ！人！」

「きゃ！どいてどいてー！」

わたしたちは無言で一步下がり、車椅子が通り過ぎていくのを見た。男の子が必死で止めようとブレーキを掛けるが車椅子は止まらず、男の子の手から離れて行った。

「うそーっ！」

車椅子に乗った女の子はそのまま海へ飛び込むように落ちて行った。ジュードの顔が引きつったのが見えてしまった。

やがてなんとか海から上がってきた女の子は、その場に座り込んで息を整えていた。車椅子も一緒に引っ張って上がってきたのだ。そ

れは確かに疲れる。

「ごめんなさい。大丈夫でした…か？」

女の子が顔を上げてジュードを目にした瞬間、その目が見開かれる。

「レイア…ただいま」

「なんで、ジュード？え、ええ！何してるの！？」

「いや、レイアこそ…」

レイアと呼ばれた少女は立ち上がってジュードを指さす。が、次の彼の問いに恥ずかしそうに顔を赤く染めた。

「あ、あれはこの子たちがかけっこで競争したっていうから、私を押してハンデつけないと勝負にならないって思ってた…」

「レイアが一番楽しんでみえたけど…」

それはいわずもがな。レイアは動揺したように目を反らした。

「そ、それでさ…ジュードは何してるの？」

「知り合いか？ジュード」

「その、幼馴染なんだ」

『ジュードの幼馴染はパワフルなのね』

あはは、と苦笑いをするジュード。それから彼はわたしとミラを交互に見やる。

「この子はヴェリテで、彼女はミラって言って、なんて言えばいいのかな…」

『ヴェリテ・ハイゼルシーグ。よろしくね、レイア』

「よろしく、ヴェリテ、ミラ」

にっこりと笑った顔は凄く可愛いと思った。それからわたしの腕とミラの足に目をやり、表情を強張らせる。

「え、ちょっと、その彼女の足！それにその腕……大至急大先生に連絡お願い。患者さんが来るって」

レイアがさっきの男の子と女の子にそう指示する。それからレイアが乗って遊んでいた車椅子にミラを乗せ、わたしたちはジュードの家に向かった。そこで出会ったジュードの母親であるう人に案内され、ミラをベッドに寝かせてから、わたしは違う部屋でレイアに治療れることになった。

「よし、これで大丈夫だよ！」

『助かったわ。もう大丈夫』

「いいえ！」

さっきのレイアのドジっぷりを見たせいか、警戒心はなく普通に接せられていた。道具の片付けをしていたレイアは、そうだ、とわたしを振り向く。

「あの、さ、ジュードとはどんな関係…？」

『ただの友達』

「じゃ、じゃあミラ、とは？」

『……友達だとは思っけど？』

「ほんと…？」

『多分』

ああ、なるほど。レイアはジュードのことが好きなのね。もしもししていう彼女をみて微笑ましく思った。

「ありがと！じゃあジュードのどこに行こうか」

『ええ』

病室から出ると、そこにはジュードとジュードの母親、エリンさんの姿があった。どうやら今まで何かあったのかを話そうとしている

ところらしい。しかし、突然叩かれた扉にそれは遮られる。ジュードの寂しそうな顔が嫌に頭に焼きついた。

「ちょっと行ってくるわ。後をよろしくね」

エリンさんは仕事が出来、急いで準備をし始めた。

「え…そんな待ってよ、おばさん！」

「また後で聞くからね、ジュード」

するとジュードは小さく頷き、大丈夫とエリンさんを安心させるように言った。彼女は申し訳なさそうに笑って、治療医を出て行った。それからすぐに、ミラの病室からジュードの父親であるディラックさんが出てきた。わたしちは彼に案内され、診察室に通される。

「患者は足の怪我だけでなく、合併症による免疫力低下も著しい。なぜ無理をさせた」

「…」

「答えなさい！学校で教わらなかったとは言わせん」

「すみま…せん」

ジュードは何も言えず、ただ謝った。

「彼女には体の状態を告知したのか？」

「話したよ。…父さんなら治せるかもしれないって」

「話にならん！」

呆れて言ったディラックさんに、どうして、とジュードは叫ぶ。わたしは目細めた。もしかして治せないともいうのだろうか。

「いいか？ジュード。医療ジントクスは、お前が思うほど生易しい施術じゃないんだ。あきらめなさい」

「でも」

「ジュード！」

ジュードは彼に気おされ、一步下がる。ディラックさんが言うには、医療ジントクスというやつは神経に直接繋ぐもので、苦痛は尋常じゃないらしい。

「それが、父さんの答えなんだね」

「ジュード!？」

「よく…わかったよ」

それからジュードは部屋を飛び出していった。わたしが後を追うと、ジュードが資料室に入っていくのが見えた。もしかして昔のカルテを探そうとしてるのだろうか。そう思っていると、後ろから肩を叩かれた。

『レイア』

「多分ジュードが探してるのはこれだと思っ」

レイアの手には一枚のカルテがあった。わたしとレイアはそれを持ってジュードの元へ行く。それで分かったのは、医療シンテクスは特殊な石を使って治療するものだった。

「…聞いた話だけど、昔その施術を受けた患者さんね。8秒間でやめたんだって。歩くの諦めちゃったんだって。相当辛かったみたい」

不意に話し出したレイアの話を聞いたジュードは視線を下に落とす。

「やっぱりやめた方がいいよ。あの女性を苦しめた拳句に絶望させるだけかも」

「やるよ。それでも」

『ええ。それにミラは苦痛になんて負けない。ミラはそういう人だから』

わたしたちがきっぱりと言うとレイアは目を見開いた。しかしすぐに考え込み、やがて一つのケースを指さした。そこには医療シンテクスに必要なものが入っており、ジュードはすぐにミラの元へ行くことと部屋を飛び出し、それに続いてレイアも飛び出した。

『ジントクス、ね』

ポツリと呟いたわたしの声は誰もいない資料室に響く。少し考えてからわたしも彼らの後を追った。

その言葉に疑問を持ったが、いまはそれに賭けるしかなかった。

わたしはもっと、もっと

強くなりたい

わたしの手で

みんなを守りたい

資料室から出た後、すぐにミラの部屋にやってきたわたしたち。ジュードとレイアはお互い頷いて医療ジントクスのケースを開けた。それを不思議に思ったミラに声を掛けられるが、ジュードとレイアは慌てて口の人差し指を当てた。

「父さんに見つかりたくないんだ」

「なぜだ？」

「今から、ミラに医療ジンテクスの施術をするから」

するとミラの目が僅かに見開かれる。どうやらさっきミラにも、無理、だと言われたらしい。それを聞いてもジュードは作業を続ける。わたしはただ扉の前でその成り行きを見守っていた。

「どっ、ミラ？痛くない？」

施術が終わった後あと、ジュードは心配そうにミラに聞く。しかし必ず来るであろう痛みはおろか、感覚さえ戻ってこない。ふと見ればそれに装着してある石に違和感を感じる。その石、言えばミラが起き上がって石を手取る。

「この石からはマナを感じない。君の父親が医療ジンテクスには精霊の化石を使うと言っていた」

「精霊の化石って！？本当に存在してるの！？」

「そっか。カルテにあった特殊な石って、精霊の化石だったんだ…」

しかもそれは、採掘してすぐに使わなければマナを失ってしまうのだという。その事実を知ったジュードはギョツと拳を握りしめる。

「あれ…でも、フェルガナ鉱山で昔、採れたって聞いたことがあるような…」

「本当、レイア!？」

レイアの言葉にジュードは嬉しそうに詰め寄る。彼女は自分の父親に聞いたことがあるだけらしいのだが。

「ミラ。鉱山へ一緒に行く必要があるけど…」

「世話をかけるが…頼めるか？」

わたしとジュードは大きく頷く。もしも可能性があるなら行くしかない。今はこれに、医療シンテクスに頼るしかないのだ。それからわたしたちは直ぐにフェルガナ高山に向かうことになった。

「あ、あつたあつた！ここが採掘場だよ」

やっと着いた鉱山は長く人が踏み入ってないようだった。それを見る限りレイアの言った通り閉山されていたみたいだ。レイアによると精霊の化石は色がついていて音がするらしい。

「妙だな。作業途中で打ち捨てられているように見える」

辺りのものを見回してミラが言う。確かに無造作に置かれてる道具を見れば、そう感じなくもない。レイアに聞くが、彼女も知らないらしい。

『でも、迷ってる暇なんてなくてよ』

「そうだね！やるしかないんだよ。うん！」

「気合入ってるね……」

「だって、こっち燃えてくるものがあるじゃない！ね、ヴェリテ！」

ふるふると首を振れば、レイアは叫んだ。それがおかしくてわたしは笑う。

「もう！じゃ、誰が早く見つけられるか勝負だよね、もちろん！」

ジュードは呆れたように息を吐いたが、それでもレイアを心配する。しかしレイアは口を尖らせて文句を言う。昔からこのお人好しな性格は変わらないらしい。

「わたしの心配よりも、今はミラの心配でしょ」

につこり笑って、その辺に落ちていた鶴嘴をジュードとわたしに渡

す。

「さて、と。やっぱり見えるとこに都合よくなんてないね」

「ミラは待ってて」

ミラにそう告げてわたしたちは各々探し始める。暫く経った頃、ジュードが精霊の化石を見つけた。しかしそれは小さすぎて医療シンテクスには使えない。わたしたちはその先に道を見つけ、奥へ進むことになった。その先で見つけたのは大きな精霊の化石。しかし急いでその場所に行くと、なぜかそれは無くなっており、代わりに小さな欠片が落ちていた。まるで勝手に移動してしまったような、そんな痕跡があった。

『先、行ってみる？』

その先に通れる道があり、わたしはそつと覗いてみた。この跡、何かが引き摺った跡に見える。

「でも、石が勝手に移動するなんて…」

「ありえないことでも、他に可能性がないなら、真実になり得る」

「？ハオの卵理論？か…そういうことになるだろう」

ジュードは頷いてから、レイアを見やってここに残るよう言うが、レイアは聞かずにさっさと行ってしまった。わたしたちは仕方なく彼女を追う。

「わあ…何、ここ…不思議な場所…」

進んだ先には広い空間があり、そこには大きいものから小さいものまで、沢山の精霊の化石が壁に埋まっていた。神秘的。その言葉が当てはまるかのような場所だった。

「下がれ、レイア！」

突然ミラが叫んだと思ったら、レイアの下の地面が盛り上がり、そこから大きな魔物が姿を現す。その魔物の頭に一際大きな精霊の化

石を見つけた。なるほど、さっき見つけたのはこれだったのか。

「こいつ、額に精霊の化石を持ってる！」

「この魔物。精霊の化石を取り込んで自分のエネルギーにしているのかも！」

『解説はあとでね、優等生君！』

わたしたちが武器を構えると、魔物は長い腕で払ってくる。それをギリギリで避け、わたしはすぐに補助術を掛ける。

『？フィールドバリアー？！！！』

「！ヴェリテ、すごい……」

『レイア、前！！』

レイアがわたしの補助術に目を見開いていると、魔物がレイアに向かって長い腕を振り上げていた。わたしは咄嗟にその腕を切りつける。

「う、ごめん、ヴェリテ！」

『いいから、行くわよレイア！』

「うん！」

合図するとレイアとジュードは共鳴して魔物に突っ込んでいく。わたしは後方で精霊術による援護。流石幼馴染と言ったところか。息はぴったりあっており、魔物の攻撃も何とか最小限に抑えられている。

『ジュード！』

「っ、下がつてレイア！」

魔物は突然地面に潜り込んだ。わたしたちはそれを警戒し、辺りの地面をじっとみる。

「ヴェリテ！そっち！……！」

『!』

レイアが叫んだ直後、地面が大きく揺れる。わたしはバク転で下から突き上げてくる魔物の攻撃を避け、再び武器を構えた後レイアと共鳴する。

『レイア!』

「分かった!」

『「? 衝破十文字?!」!』

瞬迅剣を交差するように繰り出せば、魔物は悲鳴のような声を上げてその場に倒れた。

「やった、今のうちに精霊の化石を!」

「待って、僕が」

「わたしだってできるよ!」

レイアとジュードは精霊の化石ばかりに気を取られすぎた。確かにミラにとって大事なこと。しかし油断は禁物だ。わたしはあらゆる状況を考え、すぐに戦闘に入れるように警戒する。

「やった…」

レイアが精霊の化石を取った瞬間、倒れていた魔物が再び暴れだす。咄嗟にファイアボールをぶつけるが、勢いは止まらずジュードとレイアを吹き飛ばす。

「ジュード！レイア！」

『くそ…っ！』

わたしはふたりを守るように魔物の前に立ちはだかる。

「ぐうつっ！…！」

『ミラっ！？』

突然苦しげなミラの声が聞こえ、わたしは振り向く。どうやらふたりが吹っ飛ばされたとき、精霊の化石がミラの近くへ飛んで行ったようだった。ミラはそれを拾って医療ジントクスに装着していたのだ。

「うつつ……これ以上、好き勝手をさせるつもりはないぞ」

『！ ふたりとも、構えて！！！』

きつと痛いはず。なのにミラは戦おうとしている。ならばミラに無茶をさせないように、わたしたちがそれを援護しなければ。

『？アグリゲットシャープ？！！！！一気に終わらせるわよ！！！！』

「ああ、そのつもりだ！」

みんなの攻撃力を引き上げてから、わたしとミラは共鳴する。この感覚もいつ振りだろうか。しかしすぐに魔物に向かって行く。

「行くよ、レイア！」

「「？エイドオール？！」」

ジュードのレイアの共鳴術技のお陰で、わたしたちの傷が癒えていく。そしてわたしとミラが魔物の懐に突っ込み、ミラと息を合わせるように技を繰り出していく。

『「？フェルリアスロンド？！」』

「「？アサルトダンス？！」」

『「続けていくよ、ミラ！」』

「任せろ！」

『「「？エンシェントフレア？！」」』

激しい爆発と噴き上がる炎が魔物を襲う。やがてその魔物は自分の掘った穴の下へと、重力に従って落ちて行った。

『ああ、もう、疲れた…』

「もう大丈夫かな…」

『多分ね…』

わたしが疲れたように息を吐けば、レイアは穴を見てそう呟く。ふとミラを見れば顔がかなり真っ青だった。

「ミラ、使えたんだね、医療ジンテクス…」

『！ ミラっ！』

ぐらり、とミラが前の目になる。わたしとレイアは慌てて彼女を支えた。出来るだけ負担をかけさせないように、そつと膝の上にミラを寝かせる。

「まったく、よくこんなモノを考えてくれたな…」

ミラは苦しげに言葉を紡ぐ。ミラ曰く痛みは想像以上ではないが、なかなか堪える、ということだった。レイアが申し訳なさそうに謝れば、ミラは小さく首を振った。

「お陰で精霊の化石を手にできた。むしろ礼を言いたい。ありがとう。レイア」

痛くて苦しいはずなのに、ミラは綺麗に笑った。

『さ、帰りましょうか。わたしは帰りの道の安全、確認してくるわ』

そう言ってわたしは来た道を少しだけ戻り始める。さっきの空間から出たところで、わたしは壁にもたれてずるずると地面に座る。

『あ、はは…よかった…』

ミラが立てたことがすごく嬉しくて、わたしはあの場ではどうした

らいいかわからなくてみんなから離れた。そうだ、こんな時は…

『泣けばいいのか…っ』

ほんと、どうしようもないなと思いながらもわたしは涙を流した。
ジュードたちが出てくるまでにはちゃんと止めておかないとな。

いつの間にかわたしは、
こんなにも涙脆くなっていた。
でも仲間のために流れるものなら
いいんじゃないか、って思ったの。

ミラのその強さを

少しでいいから

わたしに分けて下さい…

あれから三週間が経った。帰った時は散々に怒られたわたしたちだったが、後悔はしていなかった。今はミラの体調も回復し、足の痛みもマシに…というか我慢できるくらいにはなったようだ。そして今日はめでたくミラの退院日。わたしたちは治療医の前で彼女を待っていた。

「ミラがこんなに早く退院できるなんて。大先生もびっくりしたん

じゃないかな」

「知らないよ。父さんとは全然話してないし」

鉾山に行った日からさらに親子関係がギスギスしているジュード。わたしには親がいないから、そういうのはわからないけど、なんか直観的にそれはいけないんじゃないかって思ってる。でもジュードの問題だから口は出せないんだけど。

『三週間、か…』

この三週間、一番多かったのはミラのリハビリに付き合ったこと。他にはレイアとお買いものに行ったり、三人で修業しに行ったり、いろんなことをした。でも、なんだろう。楽しいこともあったはずなのに、みんなとバラバラになってからちょっとおかしい自分がいる。物足りないというか、寂しいというか。そんなことを考えていると、治療医からディラックさんが出てくる。

「彼女は支度が済み次第来る」

そう言ってからジュードに歩み寄り、手に持っていた紙をジュードに見せる。それは以前海停や街で見かけたジュードの手配書だった。

「何をした？文面を見る限り、何かを強奪したとも読めるが？」

「奪った？」

『…』

思い出すのは、サマングン海停のこと。

「イバルにあの時渡していた何か…ひょっとして…」

「イバル…？」

確信出来ないためか、ジュードは何でもないと首を振ってディラックさんを見やる。

「それで何？ミラに文句が言いたいの？父さんはミラが嫌いみたいだし」

「やはりお前は子供だ。彼女のことをわかっていない。彼女は…」

言いかけた時、治療医からミラが出てくる。まだ覚束ない足取りで歩いており、段差でよろけて膝をついた。ディラックさんはそんなミラに駆け寄ろうとしたジュードとレイアを引き留める。

「心配は無用だ」

そう言ってミラはふらふらと立ち上がった。ふわり。風がミラの頬を撫ぜる。

「ふう。いい風が吹いているじゃないか。散歩でも楽しもう」

『ええ。いい散歩日和ですね』

「そうだね。海停にでも行こっか。ゆっくり、ね」

わたしとレイアは笑ってミラに歩み寄り、ふらついた彼女をそっと支えた。またミラの隣を歩けることを、わたしはすごく嬉しく思う。

『行くっ、ミラ』

「ああ」

そつと手を背中に添えて、わたしは笑う。やがてジュードもやってきて、わたしたちは海停に向かうことにした。

ゆっくり、ゆっくりと歩いて、やっと海停に辿り着いた。たまにはこういう散歩もいい。海独特の潮の香りが鼻を掠める。わたしはミラと一緒に海を眺めていた。

「さっきの手配書、何したの？」

そんなレイアの声が後ろから聞こえてくる。

「イル・ファンで会ったんだよね？ミラとは。何か関係あるの？」

「ミラ…ラ・シュガル軍の兵器を壊そうとしたんだ」

ミラが気にするように振り向くと、わたしも続いて彼らを見やる。

「黒匣っていうものが使われているから、それから世界を守るのが自分の使命だって」

「黒匣……」

「え？」

「ジュード君！」

レイアの反応に目を細めた次の瞬間、聞き覚えのある懐かしい声が聞こえてきたと思ったら、ティポがジュードに噛みついていて。なんて言ったらいいだろうか。ジュードが………ティポった、でいいや。

「ヴェリテ！ミラ！」

『エリー……！』

「エリーゼ、どうして……」

駆け寄ってきたエリーは嬉しそうに頬を染めてわたしたちを見上げる。

「えと、ね」

「お見舞いに参りました」

エリーの言葉を代用するように、後から現れたローエンが言った。たった数週間離れていただけにこんなにも懐かしく思えたわたし。それほどまでにみんなを仲間だと思っているのだろうか。でも……まだいつもと違うような……気がする。

「ふむ……医療シンテクスというのですか。これでこのわずかな期間に……」

わたしたちがいままでの経緯を話せば、ローエンは興味深そうにミラの足にあるシンテクスを見ていた。

「ねえ、ローエン。しばらくこっちにいるの?」

「ドロツセルお嬢様から、しばらく休むよう言いつけられました。エリーゼさんが、ヴェリテさんとミラさんに会いたいとあまりに申されるもので」

「ぼくたちのせいじゃないぞー。この頃ローエン君がボーツとしてたからじゃないかー」

ローエンの言葉にティポが眉を吊り上げて叫ぶ。逆に彼は眉を下げて笑った。

「らしくないな?」

「いえいえ。私も悩みはいっぱいありますよ?…少し、私も考えるところがありましたね…」

少し俯き加減でローエンは言う。確かにどこかいつものローエンと違う気がした。余程の悩みなのだろう。

「ふむ。ゆっくりと話を聞いてやりたいところだが…」

「僕たち、明日にでもル・ロンドを発つつもりなんだ」

『早い方がいいからね』

「ジュード、ヴェリテ、君たちは…」

「いい加減わかるよ」

『分からない方がおかしいけど』

わたしとジュードは顔を見合わせて笑った。わたしだけじゃなく、この短い間にジュードもミラを理解していた。それほどミラはわかりやすいってことだろう。

「そんな病み上がりの体で…イル・ファンに一体何があるのですか？」

「クルスニクの槍と名付けられた兵器だ。あれだけは…あれがある限り、精霊も人も破滅へと向かってしまう」

「…ラ・シュガルの王様が作ったんですか？」

ミラは頷く。イルファンを指すということはガンダラ要塞へ向か

うということ。そうローエンが呟く。

「あなたをあんな目に遭わせた場所……あなたの大切な人を殺されかけた場所…ミラさん、ヴェリテさん、恐ろしくはないんですか」

「そうだな…私にとって恐怖があるとするならば、それは…使命を果たそうとする志の火が消えることだけだ」

「ヴェリテさん…」

『わたしは、恐いよ。ミラと違って、強くないから。でもね、わたしもミラと同じように使命がある。だからわたしは逃げない』

ミラが貫く使命ならば、わたしはミラの支えにならなきゃいけない。そのミラの火が消えない限り、わたしはミラの隣に在るべきなの。

「なんでミラ君とヴェリテ君がそんなに頑張らないといけないのさー？」

「私はマクスウェルだからな。世界を守る義務がある」

ミラの言葉にジュードとわたし以外は目を見開く。そうか、そうい

えばみんなには、彼女がマクスウェルだということを伝えていないのだった。

『わたしはそのマクスウェルの巫子。ミラの意志はわたしの意志なの。それにミラが何者であろうと関係はないわ。ね、ジュード』

「うん。ミラはミラなんだから」

わたしたちの言葉にミラは嬉しそうに微笑んだ。

「じゃ、外で話し込んでないでもどろっか」

「ああ。そうしよう」

ぐわり、と闇が襲ってきた。暗くて、寒くて、怖い。今にもすべて

を飲み込まれそうな、そんな感覚。手を伸ばしても届かない光。あ、もうだめだ。そう思った刹那、誰かがわたしの手を優しく取った。

「ヴェリテ」

懐かしい、それでいて暖かな声が聞こえてきた。これは夢なのだろうか。ここにいないはずの、彼の声が聞こえた。

「ヴェリテ……」

『アル、ヴィン……』

朦朧とする意識の中、彼の姿を見た。しかしアルヴィンの顔がぼんやりとする。ああ、やっぱりこれは夢なのか。

「熱、あるんじゃないか……？」

『……だいじょ、ぶ……』

夢の中で熱なんて出るわけじゃない。途切れ途切れにそう言えば、彼は一瞬目を見開いてから苦笑いをする。それからわたしの額に手に乗せた。それが妙に心地よくて、わたしは少しだけ落ち着く。

「熱いよ、ヴェリテ」

『ん……そう…?』

小さく呟いたと同時に、意識が飛んでいきそうになった。もう少し、もう少し。そう思っていると不意に彼がベッドから立ち上がった。わたしは無意識にその手を握りしめる。

「！ ヴェリテ…?」

『いかな、いで…アル、ヴィン…』

「…わがままな巫子姫様だな」

わたしに何も言わず行ってしまった罰よ。凄く寂しかった。夢ならそう思っ*て*いいわよね。だって夢なんて直ぐに忘れてしまうもの。

でも、どうしてだろう。次の日の朝、その夢をわたしは鮮明に覚えていた。

どうしてあの夢でアルヴィンに、
行かないでと言ったのだろうか。

夢で見たあなたの姿

どうしてわたしは

嬉しくなっただろう

翌日、わたしは薄っすらと目を覚ます。酷く鮮明に残るのは昨日見た夢。どうしてあんな夢を見たんだろう。ふと握ってもらっていた手に目を向ける。なんでわたしはあの時引き留めたのだろう。しかし夢の中での話だ。考えていても仕方がない。わたしは支度を済ませて部屋から出る。

「あら、ヴェリテさん。おはよう」

『あ、おはようございます、エリンさん』

「そう言えば夜中に高熱出したって聞いたの。大丈夫かしら？」

部屋を出て出会ったエリンさんに言われてわたしは間の抜けた声を出す。

『あの、それ誰から聞いたんですか…？』

「夫からよ。汗もかいていたから着替えさせたのだけど…熱は、もう少しあるみたいね…」

『大丈夫、です…』

ポカン、としていれば違う部屋からジュードとミラが出てきた。わたしはハッとして我に返る。え、あれ、熱出していたって…じゃああれは夢じゃなくて現実…ううん、夢じゃなかったらアルヴィンがいるはずないし、第一わたしがあんなことするわけない。悶々していると、ミラがわたしの肩を叩いた。

「さて、もう行こうと思うが、いいか？」

「え？まだ船が出る時間じゃないよ」

「わざわざ見舞いに来てくれたんだ。出発前にローエンとエリーゼに挨拶しておくべきだろう？」

わたしたちもそれに賛成して、レイアの家、宿屋に来た。中に入ると、丁度二階からエリーとローエンが下りて来ていたところだった。

「おはよう」

「お、おはよう…ございます」

『おはよう、エリー』

にっこり笑うと、エリーは恥ずかしそうに頬を染めた。ミラが頷いて話せる場所へ移動しようとしたとき、またバランスを崩した。それに気づいたローエンが咄嗟に支えると、ミラはお礼を言って長椅子の手摺に腰を掛けた。

「ミラさん、本当に行くのですか？」

「ああ。私には使命を果たす責任がある」

「責任、ですか…あなたは強く気高い。しかし、それが私の古い傷跡を抉るようです」

ローエンは悩むように視線を落とす。その目には何か色々なものが渦巻いているように見えた。

「クレイン様にこの国を救ってほしいと託され、私はなやんでしまった。今の私にできることがあるのだろうか。ナハティガルを止められるだろうかと…」

ガンダラ要塞でのあのやり取り。あれは確かに初対面のものではなかった。ジュードがそれを聞けば、ローエンの口から、友人、と言う言葉が出る。古くからの友であるナハティガルと戦えるのか。それがローエンの悩みだと言う。

「決断に必要なのは時間や状況ではない。お前の意志だ…私たちと共に行かないか？ローエン」

ミラの言葉に俯いていたローエンは顔を上げる。

「悩むのもいい。だが人間の一生は短い。時間は貴重なものだろう。なら悩みながらも進んでみてはどうだ？人とはそういうものなのだろう？」

その言葉にはジュードもわたしも賛成だった。悩んでいても状況もなにも変わってはくれない。なら前を向くのが一番だろう。ローエンはミラの言葉に驚いていたが、やがておかしそくに小さく笑った。

「ふふふ、確かにジジイの時間はとても貴重。立ち止まってはもったいないですね」

「じゃあ……」

「はい。ぜひ同行させてください」

「わ、わたしも一緒に行く……です！」

エリーはわたしの服の裾を掴みながらジュードたちに懇願する。

「ダメだよ。エリーゼはドロツセルさんのところへ帰るんだ」

そう言われたエリーはわたしとローエンを交互に見やる。わたしが苦笑いを返した後、ローエンがエリーの前に跪く。

「エリーゼさん、お嬢様にお伝えください。ローエンはイル・ファ
ンに向かいますと」

「で、でも…」

「サマンガン海停に知り合いの者がいます。すぐに呼び寄せましょ
う」

エリーはぎゅっとわたしの手を握ってきた。それをみたジュードが
ローエンとの話を終わらせ、わたしを見やった。

「ヴェリテもついて行ってあげてくれないかな？」

『え…？』

「聞けば昨日高熱を出したみたいじゃない。まだ顔赤いし、ふらふ

らしてる。倒れちゃ元も子もないでしょ？それにエリーゼもヴェリテと一緒にいたいみたいだし…」

「ふむ。そうだな。ヴェリテなら療養してからでも私たちに追いつくことができるだろう。お前は少し頑張りすぎだ。少し休んで来い」

いや、確かにわたしはワイバーンを使役してるからいけないこともないのだが…高いところ無理なんだってば。勿論わたしはミラたちと一緒に行きたかった。しかしミラに言われてはわたしは言い返すこともできない。眉を下げてエリーと視線を合わせる。

『エリー、わたし、厄介払いされちゃった…なんちゃって』

冗談交じりで言っただつたのだが、エリーはさっきよりも悲しそうな表情でわたしに抱きついてきた。失敗しちゃったかな。そんなことをしていると、出発の時間に近づいてきた。わたしたちは海停へと急ぐ。

出発前にレイアに挨拶してから行こうと思ったのだが家にはいなかったのだ。もしかして見送りに先に海停に行っているのかとも思ったが、そこにレイアの姿はなかった。少し寂しい気がする。

そんな中、心配そうにエリンさんが来たあと、ディラックさんが血

相を抱えて海底にやってきた。

「父さん…ごめん。僕、ミラと行きたいんだ」

「ダメだ！行かせるわけにはいかない。彼女は…お前が関わろうとしてるのは…」

彼がそこまで言いかけた時だった。

「おいおい、俺たちどんな縁なんだよ」

「アルヴィン！？」

アルヴィンの声を聞いた瞬間、なぜか昨日の夢が脳裏に蘇った。慌てて首を振ってそれを消し去る。僅かに顔が熱くなっただのは熱のせいだろう。うん、絶対そうだ。でも、あれ。アルヴィンがここにいるってことは昨日のは現実？でもアルヴィンの態度は変わらない。ここで出会ったのって偶然、よね。

「新しい仕事、クビになっちまってね。その様子じゃ、また行くん

「だろ？俺、前にもらった分の働きしてないぜ」

「来てくれるんだね！」

ジュードが嬉しそうに目を輝かせた直後、突然エリーがわたしの腕を強く引っ張ってアルヴィンに駆け寄る。わたしは止まれなくて、そのままアルヴィンに突っ込むわけで。

『ぶっ！』

「アルヴィン君！。ぼくたち、置き去りにされるー」

「あれ？巫子姫様も？」

「ヴェリテ君は風邪引いたからってー」

「おーい、ヴェリテー…ってこりや大丈夫じゃねえな」

アルヴィンは突っ込んできたわたしの体を支えてわたしの顔を覗き込む。わたしは突然のことに頭がついていかなくて固まっていた。あ、あれ。なんでわたし固まってるんだ。

「エリーゼも十分戦えるし、ヴェリテだって本当は行きたいーって顔してんぜ？なあ、連れて行ってやるうぜ」

な、と右はジュード、左はわたしの肩を抱くアルヴィン。あれ、これってデジャブじゃないっけ。でもあの頃と違って普通に息が来ている。っていうかなんかくらくらしてきた。

「しかし、アルヴィンさん…」

「いざとなりや、ふたりとも俺が守ってやるからさ。頼むよ、ローエン」

「頼むよー、ローエン君ー！」

ローエンがもれなくティポりました。

しかしわたしはそれどころじゃなくて、ふらつ、と視界が揺れた。慌てて近くにいたアルヴィンがわたしを支える。驚いたみんなの声が聞こえた。

「お、おい、ヴェリテ！？」

『…なんか、色々、限界…』

「はぁ!?!」

どうやら熱が上がったみたいだった。また迷惑かけちゃうな、なんて思っ
ていれば、ふわり、と体が浮く。何が起こったのかわからず、わたしは目をぱちくりしていた。

「全く、困った巫子姫様だよ、ほんと」

『……お、ろし、て』

人生二回目のお姫様抱っこ。状況は理解したがうまく言葉が発せなかった。

「あれ? やっぱ無理?」

『そ、そういうわけじゃ……』

ならいいじゃん、とアルヴィンは笑った。いやよくないよくない。なんか知らないけど、絶対によくない。若干パニックになっていると、もうすぐ船が出るとの声が聞こえてきた。

「ティポが取れない以上、しかたあるまい。ヴェリテもこのままに
はしておけんからな」

「OKだってよ。ほら、乗った乗った」

「やったー」

『ああ、もう、好きにして…』

半ば呆れながらわたしは体をアルヴィンに任せた。力を抜けば少し
楽になった気がする。ふとアルヴィンを見やれば、視線に気づいた
彼と目が合う。急に恥ずかしくなって、咄嗟に目をそらすと笑われ
た。

「顔真っ赤」

『……風邪のせいよ』

「わかってますって、ヴェリテ姫」

『誰が姫だ』

今にでも拳を振り上げたかったが、今はかなり身体がダルくてそれは叶わなかった。……どうしてだろう。仕方ないとはいえ、こんな格好なのに安心してゐるわたしがいる。

「この船ってラコルム海停行きだよな。イル・ファンに行くんじゃないの？」

出港した船の上でアルヴィンが聞く。少しましになったため、わたしもみんなと一緒に甲板に出ていた。でも無理をしないようにと座り込んでいる。身体にはアルヴィンがかけてくれた彼の自慢のコート。いいのかしら、これ。

「乗ってから聞く？ ホント、アルヴィンってそういうのこだわらないね」

「俺が来たのは、エリーゼ姫と、わがままなヴェリテ姫のためだからな。どこ行くにも問題ねーんだよ」

「いやーん、うれしー。アルヴィン君は友達だねー」

「お前じゃねーよ」

アルヴィンの言葉に落ち込むティポを見てエリーは笑う。わたしは、

ふとアルヴィンを見上げた。わがまま、ってわたしアルヴィンにわがまを言った覚えはないんだけど。

「ローエン。何故ア・ジュールに向かうのか理由を聞かせてもらえるか？」

「はい。端的に言うと、今のガンダラ要塞を突破するのは不可能だと思われるからです。以前、ミラさんが負傷され、脱出を試みた時、ゴーレムの起動を確認しました」

あの時か、とわたしは思い返すも脱出の時の記憶はあまり覚えていなかった。ゴーレムとは地の精霊術を使った人間の兵器、らしい。それと戦うには、師団規模の戦力と戦術が必要になるのだという。

「けど海路も無理なのにア・ジュールへってことは…」

「ア・ジュール側の陸路を経由してイル・ファンへ向かうというのとかな？」

「ほら、そりやまだ。でもよ、ファイザード沼野はどうすんのよ？」

「そつだよね」

ファイザバード沼野。そこはイル・ファンの北にある広大な沼地で、ガンダラ要塞と対をなす、ラ・シユガル最大の自然要害と言われている。しかし今回、霊勢がめちやくちやで通り抜けられない沼野も、変節風が吹いて地霊小節に入ったため通れるのだという。

「全然わかりません…」

「安心しろ。私もわからん」

『熱で頭回なくなってわたしもわかんない』

火場とか地場とかそんなことを聞かされたけど一回ではよくわからなかった。そんなわたしの頭に手を乗せたアルヴィンは、とりあえず問題なさそうってことでいいんじゃないの？、となんともし分りやすく言ってくれた。と言うかわたしって子供扱いされてる？されてるよね。

「はい。いいってことです。時間もあまり残されていないようなので」

「何がー？なんでー？」

ローエンの言葉にティポが疑問を投げかける。

「みなさんがカラハ・シャルを去った後も。ガンダラ要塞のゴレムは起動したままとの情報を得ました。これは、ラ・シュガルが開戦準備を始めた証と捉えてよいでしょう」

みんなは驚愕する。戦争になったとすればクルスニクの槍が使われるのは一目瞭然。その前に何とか壊さないといけない。ミラの強い意志が伝わってきたような気がした。

またみんなと旅することが、
こんなにも嬉しいことなんて。

わたしは仲間を信じてる

信じてるからこそ

わたしのことも

信じて欲しい

あと少しでラコルム海停というところで、熱も少しだけ下がってきたわたしはうとうとしていた。こんなところで寝たら風邪悪化しちゃうなあ、と思っていた最中、突然叫んだ船員の声でわたしはハツとする。何事かと思い、ジュードとアルヴィンが駆け寄ると、船員が指さす樽の中にレイアがいた。それを見たジュードの顔は今まで以上に引き攣っていた。

「あはは…待ちくたびれてつい寝ちゃった」

船から降りたレイアは腕を伸ばして言う。いないと思ったらこんなところにいたのか。

「そんな問題？すぐに帰りなよ」

「やだよ。わたしだって一緒に行くんだから」

「遊びじゃないんだって」

「知ってる」

ね、と言って初対面であるはずのアルヴィンを振り向く。

「……………誰？」

ああうん、そうなるよね、やっぱり。そんなレイアに、アルヴィン君だよー、とティポが教えると、レイアのアルヴィンの呼び方がアルヴィン君になった。そういうところがレイアらしいっていうかなんというか。

「ね、いいでしょミラ。わたしも一緒に」

「そうだな…理由を聞かせてくれ」

断らないミラに驚いたのはジュード。普段のミラなら真っ先に切り捨てるとでも思ったのだろう。そこまではわたしにはわからないけど。

「鉾山で思ったの。わたしもミラみたいに強くなりたい。ヴェリテみたいに周りをちゃんと見て、周りのことを考えられるようになりたいって」

それにはわたしも目を見開く。わたし、レイアにそんな風に見られていたのか。正直、一か月くらい前のわたしでは考えられないことだった。

「それだけか？」

「そう来ると思った。ちょっと待ってね」

ミラの言葉を予想してか、レイアは自慢げに笑ってポケットから一枚の紙を取り出した。

「細かいことはそれに書いてきたから、見て」

「僕たちと一緒に行く理由を？」

「うん、１００個くらいある」

用意周到なことで。ミラは受け取ったその紙をみて、おかしそうに笑った。

「ふふ、わかた、一緒に行こう。気に入ったよ、人間らしくて。ふふ」

ミラが気に入るということとは余程の理由が書かれていたのだろう。レイアのことだ。ジュードのこととか書いてるんじゃないんだろうかと思って、わたしも小さく笑った。

「さって、お許しが出たところで、みんな、よろしくね」

レイアは高々と片手を上げて、にっこりと笑った。その後、みんなはわたしの体調のことを考えて、今日は宿屋に泊ろうと提案してくれた。正直いつ倒れてもおかしくないほど、頭がくらくらしていたからその提案は凄く助かった。宿屋の部屋に着くなり、わたしは一目散にベッドに寝転ぶ。うつすと悪いので、みんなとは別室にしてみらった。

『あー、もう…風邪なんて何年ぶりだろう…』

確か六年くらい前だったかな。近くの川で遊んでいて落っこちて風邪を引いた。あの時のバカの心配そうな顔は見ていて辛かったな。そう言えばミラもお見舞いに来てくれたんだっけ。それがすごく嬉しくて、無茶して三日は熱が下がらなかったんだった。無茶するもんじゃないな、ほんと。ぐるぐると記憶を巡らせてるうちに、わたしの意識は闇へと落ちた。

翌日、わたしはすっかり元気になり、朝一で海停を出発することになった。ジュードやエリーが心配してくれたが、大丈夫、と笑顔で言えば済々了承してくれた。

「なあ、ここってニ・アケリアの近くじゃねーの？」

「そうなのか？」

海停を出ようとしたとき、アルヴィンがわたしたちを引き留めるかのように言う。

「寄ってかなくていいの？」

「今、村に用はない。何か行きたい理由でもあるのか？」

「いや。みんなおたくを心配して、帰りを待ちわびてるかと思つてさ」

僅かに違和感を感じる。ミラの言葉に棘が入っているような、そんな感覚がした。アルヴィンを見れば、顔色ひとつ変えずに落ち着いて話していたため、あまり気にせずにはいた。

「村を気にかけてくれるのはありがたいが、今は急ぎたい」

「巫子姫様はいいの？」

『わたしは…帰っても、いいことひとつもないから』

「あ…悪い」

村が嫌いなわけではなかったが、それでも帰るには少々抵抗があった。

「では、ラコルム街道を北へ進むとシャン・ドウという街があります。まずはそこを目指しましょう」

「待った。その街道ってラコルムの主ってやばい魔物が出沒するんじゃないか？」

アルヴィンが言えば、ローエンは感心したように頷く。が、その主も霊勢の影響を受ける魔物らしく、地場に入ったこの時期は大人しいらしいのだ。つまり大丈夫ってことだ。

「それじゃ、行こっか」

街道を進み続けて数日。シャン・ドウまでもう少しだろうか。旅を始めたころは、みんなから離れて歩いていたわたしも今では誰かが隣にすることがすごく嬉しい。人ってこんなにも変わるものなのだろうか。かといってみんな以外の人はまだもうちょっと苦手だ。

「ここにおられましたかーっ！！！」

この声は、と眉を潜めた。わたしたちの前に現れたのはバカ。なんでもたこいつはここに来たんだ。あれほと言ったつてのに。

「ミラ様。そのお姿…再び、立ち上がることができたのですね。ヴェリテも無事でよかった」

『わたしのことはどーでもいいわよ。ってかなんでバカはまた…！』

「いや、これは違うんだヴェリテ！ちょ、鉄扇を振り上げるな！！」

「！」

何が違うというんだ、何が。仕方なさ気に鉄扇を下げると、バカはミラを見る。

「ミラ様、足が治ったのであれば、ぜひ村へお戻りください。ミラ様に、そしてヴェリテにまた何かあれば、俺は……」

「私はイル・ファンに向かわねばならん。今は戻る気はない」

「では俺がお供を！」

「おいバカ。わたしを舐めてるな、わたしを」

「ちよつ、まつ……！！」

殴ろうとも思っただが腕を下ろし、鉄扇の上にバカの顎を乗せる。

『あなただけじゃない。わたしもミラの巫子なの。どうしてわたしを信用してくれないの。どうしていつもあんたはミラの言うことを聞けないの。わたしをバカにしてんでしょ』

「そ、そんなことは……！」

「そうだ、イバル。私にはヴェリテも、みなもいる。再び歩けるようになったのも、ヴェリテとこのジュードとレイアのおかげだ。彼らは信頼できる者たちだ」

その言葉にバカは悔しそうに顔を顰める。しかしすぐにわたしの鉄扇を退かせ、バカはジュードを見やる。

「ミラ様とヴェリテを治すという約束は守ったようだな」

「うん。約束通り、ミラを歩けるようにしたよ。ヴェリテの肩ももう何ともない」

「貴様の成果のように語るな！ヴェリテとミラ様のお力に決まっている！くそー！俺が治すはずだったのにいい！」

バカの叫ぶ声は反響して辺りに響く。

「い、いめん」

「そうだ、謝れ偽者っ！謝って、死んでしまえっ！」

『おまえがな』

今度こそ鉄扇でぶっ叩く。わたしの言ったこと、分かっているのかしら。

「イバル、お前には大事な命を与えたはずだ。なぜここにいる！」

ミラが怒ったように言えば、イバルはミラの元へ駆け寄り、……ジヤンピング土下座をした。なんだその土下座の仕方は。

「む、村の守りは忘れておりません。お預かりしているものも誰も知らぬ場所に隠し、無事です！し、しかし、この度はこのようなものが届いたのですっ！」

バカがミラに差し出した手紙にはこう書いてあった。マクスウェルとその巫子が危機。助けが必要。急がれたし、と。

「誰だろう、こんなことしたの」

「さてな…どちらにせよ、間違いだ。危機など訪れて……」

ミラがそこまで言った直後、大きな魔物がこちらに向かって突進してくるのが見えた。みんなは咄嗟にその場から避けるが、イバルだけがその場に残った。

『あんの、バカ!!? エナジーブラスト?!?!』

エネルギーがイバルと魔物の間で炸裂し、魔物はそこから数歩下がる。その隙に間に割り込み、イバルを片手で押しやった。

「ヴェリテ!」

『邪魔!! 下がって!』

わたしがキツパリ言えば、イバルはよろよろとそこから遠ざかっていった。

「こいつがラコルムの主!？」

「なんかめっちゃ怒ってるー!」

「そんなはずは…」

「どんなはずでももうやるしかあるまい!」

みんなは各々武器を構える。わたしは後ろ脚で攻撃してくる魔物を受け止め、間合いを取る。その後すぐにアルヴィンが共鳴してくる。わたしはそれを素直に受け入れた。

「久しぶりに行くか、ヴェリテ!」

『ええ、アルヴィン』

活性化した魔物は思った以上に手ごわく、苦戦しながらもわたしたちはそれを撃破する。久々の激しい戦闘に疲れ、その場にへたりこんだわたしをアルヴィンが支えてくれた。

「大丈夫か？」

『あ、うん…』

「地霊小節に入って地場になったら、おとなしくなるはずじゃなかったのか？」

『…そうか。四大様がいらないから…』

「ああ、そうだ。四大様がお姿を消したせいで、霊勢がほとんど変化しなくなってるんだっ！」

立ち直ったのだろうバカが指をさして言う。

「それじゃ、ファイザバード沼野を越えてイル・ファンに行くのは…！」

「ファイザバード沼野を越える？くくく…はーっはっはっはー！これは笑える。こうなつてはワイバーンでもない限り、イル・ファンへは行けないなっ！だが…巫子であるこの俺とヴェリテはミラ様のお役に立てるぞお！」

バカのその態度に、ジュードが何か方法があるのかと聞くと、得意げに自分とわたしだけ扱えるワイバーンがいると告げた。

『ああ、イバル。悪いけどそれ無理』

「は？」

『わたしとイバルのワイバーン、今日からしばらく旅行に行ってくるって。さつき去り際にそう言ってたわ。残念、ここから歩いて帰らなきゃね』

「え、ちょ…え…？」

わたしの言葉にかなり動揺するバカ。因みにどうでもいい情報だがわたしたちのワイバーンは夫婦である。バカには丁度いい薬でしようね。

『ミラ。この先のシャン・ドウの街に魔物を操る部族がいるの。彼らがワイバーン数頭を管理していると聞いたわ。ね、イバル』

「あ…は、はい…」

につこり笑って言えば、バカは小さく頷いた。悪いけど、毎回こんなじゃいくらわたしでも厳しくするしかできない。バカも変わっ

てくれればいいんだけど…

「行先は決まったみたいだな」

「このままシャン・ドウへ向かいましょう」

『ごめん、先に行つてて』

わたしが言えば、察してくれたみんなはわたしとバカを残して先へ行った。沈黙がわたしたちの間で続く。

『ねえ、イバル。そんなにわたしが信用ならない？』

「ち、違う！！俺はただお前が、ミラ様が心配で…！」

『わたしも巫子なの。自分の身くらいは自分で守れるし、ミラのこ
とだってわたしが守るし、みんなだっている』

「！ ヴェリテ…人嫌いだったお前が、そんなこと言うなんて…」

ぎゅっとイバルを抱きしめれば、彼の目が見開かれるのがわかった。
わかってほしいの。厳しく当たるのだってイバルを思っていること。

『わたしはあなたの、あなたはわたしの魂の片割れ。意志も共有してる。わたしはそう思っているわ。だから、だからわたしに任せてよ、イバル』

「でも、俺は…あいつに負けたくない…」

『それはわかってる。でも信用してくれなきゃ何のためにわたしがミラについて行ったか分かんなくなるじゃないの』

そつと体を離して、ぽんぽん、と数回頭を撫でてからわたしは踵を返した。イバルはわたし以上にプライドが高いからなあ。これで分かってくればいいんだけど。いや、わかってくれる方がおかしいか。あんまりいい方に考えて幻滅するものあれだしな。

「話、終わった？」

少し行ったところで声を掛けられた。

『あれ、アルヴィン…？なんで…』

「なんでって、女の子ひとり残して行けるアルヴィン様じゃないぜ？」

『クサイ』

「酷！」

『でも、嬉しい』

につこり笑って返すと、アルヴィンは面を食らったように目を見開いた。正直な気持ちを言っただけだったが、そんなに驚くことだろうか。首を傾げてアルヴィンを見ると彼は慌てて背を向け、行くぞ、とだけ言っただけ歩いていく。わたしは慌ててその背中を追い掛けている。ただ、

この胸に溢れる感情は、
一体なんなんだろう。

ヴェリテは鈍感っていうか、そーゆー感情を知らないからこんな感じなんです

村全体から嫌われていたからきつと親の愛も知らないと思うんですよ。

ミラとイバルとは普通に接してましたけど、ミラとは友情で、イバルは、あれですよ。

シスコンだけどヴェリテにとっては兄妹愛と言えなかったんです。だってあれは、ね

よかったらチャットの方も見てやってください。

結構情報とかも載ってたり載ってなかったり

<http://ncode.syosetu.com/n0967x/>

二・アケリアを出て

沢山の街や村、人を見て

わたしは色々なことを学んだ

街の近くでわたしたちはジュードたちと合流し、そしてシャン・ド
ウに入る。そこは岩壁に囲まれた街であり、中にはいくつも大きな
像があった。不思議そうに見上げていれば、両肩をアルヴィンに叩
かれる。

「落石があるから気をつけろよ、巫子姫様っ」

『！？ や、やめてよね……』

「まあ最近は大丈夫みたいだけだな」

『もう、いじわる』

口を尖らせて言えば、悪い悪い、とわたしの頭を撫でるアルヴィン。めっちゃ子供扱いされてるし。でもまあ、確かにこんなところじゃあってもおかしくはないだろうが、こんなところだからこそちゃんと整備はしてあって落石はないはず。そう思っても少し怖かった。そんな中、エリーゼがキョロキョロとシャン・ドウの街を見渡す。

「どうしたの、エリーゼ？」

「あれ、ぼく、ここ知ってるよ。ねえ、エリー」

「うん…え、えと…ハ・ミルに連れてかれる時に来たんだと思います…」

以前この辺りにいたのかと聞けば、分からないと答えるエリー。恐い思いをしたのなら覚えていないということがある。きっとエリーはそういう体験をしたんだと思う。

「え、ちょっとアルヴィン君、どこ行くの？」

考えていると、そんなレイアの声が聞こえてアルヴィンを見やる。
彼は用事が出来たからと言ってどこかへ行ってしまった。その背中
を見ていてなんか寂しいと思…………

『っわないわよ！！！！！』

「！？ どうしたのヴェリテ！？」

『え、あ！？いや、なんでもない…』

声が出ていたことにわたしは恥ずかしさを感じて少しだけみんなか
ら離れる。それにしてもなんなのだこの感情は。なんでアルヴィン
がいなくなった途端こんな

「ヴェリテ！！！！」

悶々してると突然ジュードの叫ぶ声が聞こえた。わたしが事態に気づき上を上げば、岩が真つ逆さまに落ちてくる途中だった。

『ウソ……！！！！』

わたしは咄嗟に真横へと飛んで避ける。その岩は先ほどまでわたしがいた場所に、ドオン、と音を立てて落ちた。それを見て冷や汗を垂らす。

「ヴェリテ！大丈夫！？怪我ない！！！？なんでばーっとしてるんだよ！」

『いただだ……！そこつ、そこ痛い……！』

「あぁっ……！ごめん……！」

ぐいつと腕を掴まれてわたしは顔を歪める。飛んで避けた時に腕を強く打ったのか、と振り袖を捲ってみる。赤く腫れたそれを見たジュードはすぐに治療に入る。

『ごめん、ジュード…』

「謝らなくていいよ。僕もヴェリテを助けられなかったから…」

『わたしはもう大丈夫だからさ、レイアの方行ってあげて』

ふい、と首を反らせばレイアは倒れており、ローエンが心配そうに声を掛けていた。それに驚いてわたしに謝ってから、慌ててそちらに向かって行くジュード。正直もう片方の腕も怪我をしていたのだが、レイアの方が重傷だったためそちらを優先してもらった。そんな中、医者の名乗る女性が現れてレイアに駆け寄り、共に治療を始める。

『っ…』

ズキツ、と痛む腕。しかし今はレイアの方が気がかりだ。こういう時回復術が使えないなんて、無能よね、わたしって。

やがて落ちてきた岩の撤去が終わった頃、レイアの治療が終わる。レイアは医者を支えられ、ゆっくりと立ち上がる。大事なくてよかった。

「ありがとう。えっと…」

「イスラよ。気にしないで」

イスラさんは優しいな笑みを浮かべて笑った。

「無茶をするな、レイア」

「まだ座ってた方がいいよ」

「うん…大丈夫。ありがとね、みんな。それよりヴェリテは大丈夫なの？さっきジュードに治療されてたみたいけど」

レイアの視線がわたしに注がれる。わたしはそっと痛む腕を掴んでいつものように笑う。

『うん、もう平気。痛くない、よッ！?!?!?』

「ウソ。まだこっち、怪我してる」

またジュードに腕を掴まれた。なんでバレたんだ、と目を反らせばジュードはわたしの振り袖を捲って治療し始めた。ほんと、面目ない。

「アルヴィン君めー！こんな時に限っていないんだよなー。アルヴィン君ならレイアも助けられて、ヴェリテ君もぼーっとしなくて済んだのにー！」

『どういう意味よそれ』

「年寄りだと思って失礼な。この、この！」

「引つ張らないでー！」

ローエンがティポを掴んで伸び縮みさせる。それをエリーが必死で止める。それが面白くてわたしとレイアは笑った。

「ローエン、何やってんのや…」

「返してー！」

エリーはなんとかティポを奪い返し、ギュッと抱きしめた。それが

らジュードはわたしの治療を終えて、イスラさんを振り返る。

「イスラさん、本当にありがとうございました」

「イスラさんって、いい人ね」

ふたりの言葉に、イスラさんは首を振っていいのよと謙遜する。

「ところであなたたち、この人間じゃなさそうだけど、街には何をしに？」

「ワイバーンを求めて来た。この街なら手に入るかと思ってな」

ミラが言っているとイスラさんはワイバーンがいる場所を教えてくれた。もう一度お礼を言ってわたしたちはその場所へと向かった。

『お話ししましょう』

ワイバーンの元へ着くと、わたしはにっこり笑ってワイバーンに手を伸ばす。さつきティポが茶化したため少し機嫌が悪いようだったが、わたしが話しかければそれもなくなったようだ。すっと手を伸ばせばまるで猫のようにすり寄ってくる。

『いい子』

「すごい…ワイバーンが懐いている…」

そこにこのワイバーンの持ち主であろう人たちがやって来た。わたしとワイバーンのやり取りを見て、彼らは目を見開いている。しかしすぐに表情を変えた。

「君たち、何をするつもりだ？そのワイバーンは我が部族のものだぞ」

「このワイバーンを手に入れたい。どうやって檻を破壊しようか考えている」

『うんミラそれはちょっと大胆すぎるわね』

相変わらずのミラにジュードは溜息を吐いた。

「あの…ワイバーンを貸してもらったことってできませんか？」

「ふむ…」

ひとりの男性がわたしの方を見て悩むように呟く。やがて決心したように彼は顔を上げる。

「私はキタル族のユルゲンス。街が賑わっているのには気が付いたか？実は十年に一度、部族間で行われる討議大会が明日開催される。だが、我がキタル族は唯一の武闘派である族長が王に仕えているため参加できないのだ。伝統ある我が部族が、このままでは戦わずして負けてしまう…」

そこまで言って彼はわたしを見やる。ここまでワイバーンを懐かせることができる人は初めてらしい。それは戦闘でも十分素質があるとみられたのだ。わたしいつもこんなだと思ったんだけどなあ。

「我々の一員として大会に参加してみないか？」

『そうね…参加するならワイバーンを貸していただけるのかしら』

「そのつもりだ。ただし、優勝が条件だ。それに、事前に君たちの力を見せてもらう」

ちら、とミラを見れば小さく頷いていた。ワイバーンを手に入れるためだ。少々時間はかかるが、やるしかないだろう。

『分かったわ』

「でも、部族の大会に、僕たちが出ちゃって大丈夫なんですか？」

ジュードが心配そうに聞くが、問題ないという。彼らによれば、優秀な戦士を連れてくることは部族の地位を高める行為として過去にもあったことらしいのだ。

「おーおー、少し目離しただけで、面白そーなのに首突っ込んじやつて。俺は混ぜてくれないのかあ？」

『！ アルヴィン』

「よ、巫子姫様」

あ、あれ？わたしなんで目反らしてるんだ。

「アルヴィン君、どこいつてたんだよー。こっちは恐怖体験したんだぞー！」

「わりーわりー。けど、なんかあったと思ってすぐ駆けつけたわけだし、勘弁してくれよ、な？」

アルヴィンはそう言って眉を下げて笑う。確かに来てはくれたけどちよっと遅いんじゃないかって思った。もう少し早く帰ってきて欲しかったんだけど。

「仲間か？」

「そうだぜ。これで全員集合」

「では、力を見させてもらう。空中闘技場へ来てくれ」

わたしたちは頷いて空中闘技場へ向かう。そう言えばアルヴィンは

なにをしに行つたんだろう。気になるのもやっぱりまだ警戒してるから……？そんなことを思っていると空中闘技場へと辿り着いた。わたしたちはキタル族が使役している魔物と戦うらしい。闘技場は高い場所にあつたのだが、見下ろさなかつたら大丈夫だ。多分。

「そろそと始めようと思うが、いいか？」

「ああ、始めてくれ」

「それじゃ、私たちは客席で見させてもらつよ」

ガチャン、と向かいの扉が開き、魔物が数体現れた。わたしたちは一斉に武器を構える。ユルゲンスさんたちが客席へ移動したと同時に魔物たちが動き始めた。

『遅れないでよ、アルヴィン！』

「分かってるって！」

『「？蓮舞殺撃破？！！」』

わたしとアルヴィンが放った共鳴術技によつて、最後の魔物が倒される。うん、やっぱりアルヴィンとの共鳴が一番しつくりくる。まあそんなこと言えないんだけど。

「俺たちなんかよくねえ？」

『そうかしら。でも油断は禁物よ』

「巫子姫様はいつも警戒してるねえ」

『それがわたしですから』

につこり笑えば、アルヴィンは困ったように笑ってわたしを見た。どうしてそんな表情をするんだろう。わたしにはそれが酷く悲しいものに見えた。

「いざとなつたら出て行こうと思っていたが、必要なかったか」

「あつたり前だよー！えっへん！」

見定めが終わり、客席から下りてきたユルゲンスさんが言うと、
「テ
イポが自慢げに胸を張った。」

「すまなかった。君を見くびっていたようだ」

「僕だけー！？」

「ははは。誰が見たってそうだよな」

アルヴィンが笑うと、友達をバカにしないで、とエリーは怒ったように頬を膨らました。その後この大会はかつて、部族間の優劣を決めるために相手を殺すまで戦っていた大会だと聞かされる。それを廃止したのは現ア・ジュール王だということも知った。いまのア・ジュールはその王様に守られている。民のことをちゃんと考えている王様なんだと、わたしは思った。それに比べてラ・シユガルのあの王は

「ヴェリテ？」

『！　　なんでもないなんでもない！じゃ、行こうか』

声をかけられたわたしはぐらかすように笑う。わたしたちはユルゲンスさんに宿を用意してもらったため、明日の大会に備えて直ぐに宿屋に向かうことにした。

みんなと一緒なら、
大丈夫だっと思っっているんだ。

まだ頼ることが苦手なヴェリテ
でも頼りにはしてる
あれ、矛盾？

わたしは、どうすればいい

自分の中で沢山の疑問が

ぐるぐると渦巻いている

闘技大会当日。わたしたちは宿屋のロビーでユルゲンスさんたちと会い、今日の予定を告げられた。本戦は参加数の関係で今日一日ですべて行われることになったらしい。闘技場の鐘が鳴ったら闘技場に来てくれと言いついて彼らは行ってしまった。わたしたちはいうと、それまで時間が出来たため自由行動をすることに。わたしはミラとレイアとアルヴィンと落石があつた広場を見に来ていた。何やらミラに気になることがあつたらしい。しかし目ぼしいものはなかったみたいだ。そんなことをしていると、わたしたちは再びイスラさんと出会った。

「ケガの具合はいいようね」

「はい、イスラさんのおかげです」

「あなたももう腕は大丈夫かしら」

『わたしは酷くはなかったですから』

笑って言えば少し離れたアルヴィンがわたしに近づき、わたしの腕を掴んだ。

「おまえ、怪我してたのか…？」

『え？あ、でもジュードに治してもら…』

「なんで黙ってたんだよ」

『ちよつと、なんで怒ってるのよ…』

急に表情を強張らせるアルヴィンに目を細めて問うと、しまった、とでも言うつように腕を離れた。わたしは心配させなくなかったし黙ってただけなんだけど。

『アルヴィン…?』

「…なんでもねえ」

彼はふいつ、と顔を背けた。一体なんだというんだ。そんな中、ふと視線を反らすとわたしたちを見るイスラさんが目に入った。わたしを目が合つと、今度はアルヴィンに目を向ける。

『あの、イスラさん…アルヴィンが何か…』

「い、いえ…」

「かまわないよ、イスラ先生」

知り合いなのかと聞けばアルヴィンは頷く。

「先生には母親を診てもらってるんだ」

『え…?』

「お前の母親を？この街にいるのか？」

「ああ！だからアルヴィン君、街に詳しくあったんだね」

アルヴィンの母親は具合が悪いらしいのだ。彼には父親も兄弟もないため、自分がいない間イスラさんをお願いしているのだという。

「今日はやけに自分のことを話すじゃないか。珍しいな」

「気のせいだろ」

そうは言うが、確かにアルヴィンが自分のことを話すのは滅多にない。これだけ一緒に旅をしているくせにアルヴィンのことは何も知らなかった。

「ただ…治してやりたいだけだよ。それで故郷に連れてってやりたいんだ」

「お母さんの故郷って遠いの？」

「めっちゃくちゃな」

アルヴィンは空を見上げた。まるで母親の故郷が空の向こうにあるかのように、懐かしそうに見ている。わたしは無意識にそんな彼の服の裾を握っていた。

「ヴェリテ？」

『あ、え…いや、なんでもない！』

アルヴィンに名前を呼ばれてパツと手を放す。何故かアルヴィンがどこかへ行ってしまうそうだと、そう感じた。わたしの行為はまるでそれを引き留めるかのようなのだ。それよりわたし、最近無意識の多くないかな…これこそ気のせいよね。

「アルヴィン。手を貸せることがあれば言ってくれて構わないぞ？
なあ、ヴェリテ」

『う、うん…そうね、うん。任せて、アルヴィン』

「ああ、あればな」

わたしたちの発言に少しばかり驚くアルヴィン。きつと最初の頃のわたしとミラなら考えられないものだろうな。そんなことを考えていると、ユルゲンスさんが広場にやってきた。彼もイスラさんもお互いのことを知っていたため、知り合いなのかと尋ねれば婚約者だと教えられる。わたしはなぜだかそれを聞いたときホツとしていた。ミラはそれがよくわかっていなかったためしばらく悩んでいたが、やがてひらめいたように顔を上げる。

「おお、あれか。結婚というやつだな。お前たちも、ネズミのようにたくさん子供をつくるのだぞ」

なんともまあハッキリそういうことを言えるお方で。正直そういうところは凄いと思うよ、ミラ。そんな中、大会開始の鐘が鳴り響き、わたしたちは空中闘技場へと急いだ。そこで合流したジュードたちと世間話と言う名の情報交換をした。ジュードたちの方はエリーが少しだけだが、両親のことを思い出したというのだ。それだけでも十分な進歩だろう。

そして受付を済ませてから数刻、やっとわたしたちの番がやって来た。今回魔物を操って出場しないチームはわたしたちだけらしい。わたしたちは向かい側から現れた相手チームと向きあう。

『さてと、ちゃっちゃんとやりますか、みんな！』

「うん、絶対勝とうね」

「当たり前だ」

各々が武器を構えると、戦闘開始の合図が鳴った。

キタルブロック、決勝進出はキタル族代表に決定だ！

そうアナウンスが聞こえた頃には完全にバテていたわたし。アルヴインの支えがないと立ってられなかった。流石に三連続はキツイ、キツすぎる。なんで休憩ないんだよ。そんなこと言ってももう終わったことだったので色々ときらめた。

「やったー！わたしたち勝ったんだね！」

「なんとかって感じだったけどね」

「なっさけないなあ、優等生は。楽勝だったろ」

『なさけなくてごめんなさいわたしはもう無理ですすみません』

アルヴィンの背に乗りながらわたしが呟くと、悪い、と謝られる。
ああもほんと、エリーでも自分で歩いているのにわたしっいたら本当に情けない。

「なかなか、厳しいものでしたね」

「アルヴィン君はウソツキー。ね、エリー、ヴェリテ君ー」

「うん…ウソツキ…です」

『ウソツキですねー』

「あーはいはい、すみませんねー」

こんなんで決勝大丈夫かな。わたしちゃんと戦えるかな。もうめっちゃ心配なんですけど。

「もっとリラックスしてみなつて。大丈夫だよ。誰もお前を責めねーから」

『アルヴィン…うん、ありがとう』

アルヴィンのその言葉が嬉しくてわたしは小さく笑った。それから食事をするために食堂へ向かうわたしたち。ああ、やっと落ち着ける、と安心する。

「決勝の相手気になつちゃう？」

「うん、それはね」

それぞれの席についたとき、落ち着かないジュードにアルヴィンが声を掛ける。

「ジュード君好みのめっちゃかわいい子だったらどうする？」

「なっ！相手がどんなだって、そんなの関係ないよ」

アルヴィンの冗談に本気で反応するジュード。案外このふたりはいいコンビなんじゃないかって思う。そんなことを思っていると、全員の元に食事が並べられた。そんなとき、ユルゲンスさんにある報告が入る。この間、わたしたちが目の当たりにした落石事故。それは事故ではなく故意的におこなわれたものだったらしく、人為的に破壊された後もみつかったのだという。

「……！食事には手を付けるな！！」

突然ミラが叫ぶ。それを聞いたみんなは食べようとした手をピタリと止めた。瞬間、周りの人たちが次々に倒れていく。それを見たわたしは息を飲んだ。わたしはすでに口にスプーンを咥えており、どうしたらいいか分からなかったのだ。

「ヴェリテ、吐け！！！」

『っ、あ、る…ッッ』

咄嗟に隣のアルヴィンがわたしの口からそれを引き抜き、漱げ！、

とコップに入った水を無理矢理わたしの口に注ぐ。急なことにびつくりしたが、飲まないように気を付け、わたしは軽く濯いでからそのコップに水を吐き出す。汚いとかそんなこと今は思ってられなかった。

「ハッ、は…っ、ハッ、ハッ…っ」

「大丈夫か!？」

「っ、何…っなんなの…っ」

ローエンはそっと倒れた人に近づき、冷静に分析する。独特の木の实のような臭いを持つのはメディシニア。水溶性の毒らしい。これだけ人が倒れているってことはみんなの食事に盛られていたってことなのだろう。勿論わたしの食事にも。

「っ…」

途端に恐怖を覚えた。これも人がしたこと。しかも一番性質の悪い連中。するとわたしの肩を持っていたアルヴィンの手が離れ、彼は凄惨な剣幕で食堂を出て行った。

『アルヴィン、ン…』

「ヴェリテ、無事か!？」

ミラが心配そうにわたしの肩を持って問いかける。わたしはゆっくりと頷いた。

『アルヴィンの、おかげ、だから…』

どうしてだろう。嫌な予感しかない。なんで、どうして行ってしまうの。お願いだからわたしから離れて行かないで。怖い、恐いの…

「ヴェリテ!!!」

ふ、っと視界が真っ暗になった。ミラたちの叫ぶ声が嫌に耳に残っ

た。

あれからどれくらいたったのだろう。わたしは真っ白なベッドの上で目を覚ました。今までのことを思い返してわたしは息を吐く。決勝はあんなことがあったから中止とも考えられる。それにアルヴィンは戻ってきたのだろうか。考えながら部屋を見回せばミラの姿を見つけた。

『ミラ…』

「ヴェリテ…！大丈夫か…？」

『うん…ちょっとパニック起こしただけ…ごめん、迷惑かけて…』

ミラは首を振ってわたしの頭を撫でてから、真剣な眼差しでわたしをみやる。

「この事件の首謀者、お前ならわかるな」

『……アルクノア、よね』

アルクノアとはミラの命を狙い続けているという組織だ。さっきの毒も彼らがミラを狙って仕込んだもの。今までこれほど酷いものはなかった。ミラによればあんなことがあったにも関わらず決勝があるらしいのだ。確かに大切な行事なんだろうが死人も何人か出ているんだ。そんなことでいいのだろうか。そんなことを考えていると、ミラが部屋を出ていこうとしていた。

『ミラ、どこか行くの…?』

「ああ」

『わたしも、行く』

「……後悔するかもしれないぞ」

『え?』

「何でもない。行くぞ」

後悔って、なんだろう。少し疑問に思いながらもわたしはミラの後
に続く。そして辿り着いたのはとある昇降機の前。それに乗ろうと
来たとき、アルヴィンがそこから降りてきた。

『っ！！』

「っと、驚かすなよ」

アルヴィンはミラを見てから、心配そうにわたしを見やる。もしか
して昨日のことを気にしているのだろうか。出来るなら大丈夫と伝
えたいのだが、そんな雰囲気ではなかった。

「ここがお前の家と言っわけか」

「親の、だな」

その言葉に昨日の話を思い出す。確か具合が悪くてイスラさんに見
てもらっているんだっけ。

「勝手に抜け出して悪かったよ。もう宿にもどるからさ」

そう言っミラの横を通り過ぎようとしたアルヴィンだったが、ミラによってそれは止められる。ミラはアルヴィンのコートの襟をつかみ、壁に押し付けた。

「ってえなー。何すんだよ」

「アルクノアのこと、どこまで知っている？」

『え…？』

わたしは目を見開いてミラを見やる。

「アルクノア…？なんだよ、食い物か？」

「ル・ロンドでの夜。ディラックと話していただろう」

「たぬき寝入りしてやがったのかよ。キタネーなあ」

一体なんの話をしているのだろう。わたしはギュツと服を握っていた。少しばかり手が震えている。

「お互い様だ。答える。お前もアルクノアか」

『アル、ヴィン…?』

わたしが目を向けると、アルヴィンは少しだけ眉を潜めた。その表情は酷く悲しいもののように見えた。

「カンベンしてくれよ。俺だってアルクノアの連中に仕事を強要されて困ってるんだ。抜きたいが、そうもいかないんだよ」

「まさか母親を？」

何かを察したのか、ミラはアルヴィンを解放した。

「信じてもらえるのか？」

「お前はウソツキだったな」

「そうそう。だから、何を聞いても無駄だぜ。俺ってそういう人間なのよ」

まるで何事もなかったかのようにいつものアルヴィンに戻る。ミラは少しの間黙ってから足を進める。

「どこ行くんだよ？」

「アルクノアの連中を探す」

「俺も行くよ。仲間だろ？」

「勝手にしろ」

そう言っミラは行ってしまふ。わたしはまだその場を動けずにいた。わたしはどうしたらいい。なんでこんな気持ちになるの。どうして、こんなにも胸が痛いのか。

「ヴェリテ……」

『っ……アルクノアは……ずっと、ずっとミラの命を、狙って、た……』

わたし、それが許せなくて……わたし、わたし……っ」

「……」

『っねえ、アルヴィン…教えてよ……なんでなんにも、教えてくれないの…？わたしたちじゃ力になれない…？わたし…っ』

アルヴィンを信じたいのに。その言葉が口から出なかった。ギユウ、とさつきより力を込めて服を握る。するとアルヴィンがわたしの頭を引き寄せて自分の胸に押し当てる。

「昨日は恐かったよな…おいて行って悪かった」

『っ…なんでよ、ばか……』

アルヴィンをみて言うと、彼は苦々しく笑っていた。わたしはそれ以上何も問えなくて、はぐらかすように彼に背を向ける。それからお互い何も話さず、一緒に先を歩くミラを追った。お願い、願わくばわたしの心をこれ以上掻き乱さないで。

アルクノアと聞いた瞬間、
わたしは彼を疑うべきだった。
なのにわたしは信じたいと、
そう思ってしまったんだ。

なぜ、どうして？

あんなにも人を信用しては、
いけないと決めていたのに。
心は彼ばかりを追いかける。

アルヴィンはヴェリテのことになると必死です（笑）

恐かった

でもわたしは

いまわたしに出来ることを

やらなければ…

隣を歩くアルヴィンに目を向けるが、わたしは直ぐに反らす。どんな顔をしたらいいか分からない。どう話していいか分からない。なんでこんなにも心が揺らぐのだろう。今までのわたしなら迷わず切り捨てていたのに。

「ミラー！ヴェリテ！」

橋のところまで下りてくると、ジュードたちと出会った。どうやらジュードたちに言わずに出てきたらしい。わたしももう少し気を付けるべきだった。

「ヴェリテも！！昨日倒れたのになんで無茶して外にでるんだよ！！！」

『う…ごめん、ジュード…』

でもほんとに何でもないのよ、と言えばまた怒られるわけで。心配かけたのはわかるけど、ちょっと心配しすぎなんじゃないかな。

「まあまあ、そんなに怒るなよ。それより、エリーゼがなんか言いたそうにしてるぜ」

確かにエリーはさっきからそわそわしている。わたしたちがそちらに目を向けると、エリーは遠慮がちに話した。さっきイスラさんがエリーを見た途端、様子が可笑しくなったという。どうしてもそれからイスラさんが気になるらしい。そうなれば彼女に直接聞くし

かない。そう思った直後、闘技場の鐘が鳴り響いた。

「あんたたち、闘技場へ急いだ方がいいんじゃないの？」

「鐘が鳴ったら、大会が始まるのよー」

通りかかった街の人に声を掛けられて、わたしたちは目を見開く。

「もしかして早く行かないと失格になっちゃったり？」

「いいのか？大会の辞退を考えていたのだろうか？」

「迷いながらもやってみるのが人間、そう言うてくださったではないですか」

あんなことがあった後だからやめるべきかも知れないのだが、その言葉はともありがたかった。どんなことがあってもイル・ファンに行かなければならないのだからワイバーンは必要なのだ。

「あの、どうして僕たちが参加者だってわかったんですか？」

ふとジュードが声かけてくれた街の人に聞く。ああ、それはわたしも気になっていた。聞けばこの時期に、よその街の人が集まっていたらそれは参加者が観客に間違いない、とのことだった。

「ジュード…？」

「ごめん。何か頭の中でひっかかっただけで…」

急ごう、とわたしたちは闘技場へ向かった。

闘技場に着くや否や、広場にいたユルゲンスさんにさっきの鐘のことを問いかけるミラ。彼は執行部で急遽決勝戦が行われることが決定したとわたしたちに告げた。さらに突然、前王時代のルールに戻すことにもなったらしい。前王時代のルールは、一対一で相手が死ぬまで戦うというものだ。

「どうする、ミラ？」

「うむ…ワイバーンは必要だ。辞めるつもりはない。が、解せんな」

「何故前王時代のルールで行うことに…」

「やめておけよ」

アルヴィンが口を開くと、みんなは彼を見やる。

「こいつは、おたくの命を狙った、アルクノアの作戦だぜ」

「アルクノアの！？」

「あつれー？なんでアルヴィン君が知ってるのー？」

わたしとミラは顔を合わせる。ミラが、いいのか、と聞けばアルヴィンは背を向けて頭を掻く。

「さっきの礼だよ…それにヴェリテにも……」

悪いことしたし、とわたしにしか聞こえないくらいの声で言った。勿論ジュードたちは何の話が分からず、ミラに問う。

「アルヴィンは…アルクノアと関係している」

「え！？ウソ…でしょ？」

「んー、すまん。仕事頼まれたりしてたんだわ」

まさか、とジュードは疑うよう彼を見ると、慌てて弁解するアルヴィン。

「あれはオレじゃない。じゃなきゃヴェリテを助けてないし、第一、俺も食ってたら死んでたところだぜ？犯人も知らない。仕事つっても、小間使いにされたただけだしな」

アルヴィンはあの時わたしを助けてくれた。あれは彼の本心だと思う。そうじゃなかったらあんな表情するわけない。

「なら、アルクノアの仕事はもうしないって約束してくれる？」

「わかった。誓うよ」

『……うそつき』

さっきの彼の態度から、ほんとうに母親の関係でアルクノアと関わっているのがわかる。だったら簡単に仕事を辞められるわけないじゃない。わたしが彼に聞こえるだけ小さく呟けば、アルヴィンはまた困ったような表情になる。

「アルクノアの作戦はわかるのですか？」

「あ、ああ…俺が聞いた限りじゃ…やつら、決勝のルールを変えて、ミラを殺す気だ。勝ったとしても、疲労困憊になったおたくを客席から狙い撃つ二段構えだよ」

ミラを、殺す。その言葉を聞いたわたしは目を細めた。そんなこと絶対にダメ。ミラ、大会に出ちゃいけない。そう言いたかったのに、わたしの思いは悉く打ち破られる。

「ふ。何とも穴だらけの作戦だな。私が代表で出なければ簡単に挫ける。だが…このくだらん闘いはまってやる。やつらを引きずり出してやるっ」

『ミラっ！！』

「おいっ！正気かよ？なんで…」

勿論みんなはそれを止める。でもミラは、ジュードはそう思っていないようだ、と隣の彼に目を配る。

「ミラを狙って客席に現れたアルクノアを僕たちに止めて欲しい…
…そういうことでしょ？」

ジュードの言葉にミラは頷く。

「普通ならいつ出てくるかわからないけど、今ならおびき出せる…
理にはかなってるよね」

「今ここで手を打っておかないと、次の手を考える時間を与えてしまふ。そうすれば、もっと被害が大きくなる可能性も否定できない」

『だ…駄目よ、そんなの…！！！！』

突然大声を上げたわたしにみんなの視線が集まる。しかしわたしはそれを気にせず言葉を続ける。

『例えそうだとしてもミラを危険になんて遭わせられない！…！ミラやみんなを信じてないわけじゃないけど、それでもわたしは…！』

「ヴェリテ。わたしはお前も信じているんだ。この作戦に乗ってくれないか」

『っ…でも、ミラ…わたし…ッ』

「アルヴィン。ヴェリテの傍にいてやってくれ。昨日、死に直面したのが余程きているらしい。お前になら任せられる」

…ミラの言う通り、わたしは昨日のことが頭から離れなかったのだ。いざとなったら自分に対する死が怖い。大切な人に対する死が怖い。だからミラを殺すという言葉聞いたとき、わたしの中で恐怖が渦巻いた。わたしはそれを抑えることが出来なかったんだ。

『アルヴィン…』

「…離れるなよ、ヴェリテ」

『……………っん』

そして大会決勝戦が始まった。会場が盛り上がっている中、わたしたちは客席でミラを狙っているアルクノアを探している。そんな時、相手の武器から詠唱なしに精霊術が発動されたのが見られた。

『アルヴィン、あれ…』

「黒匣だな」

わたしとアルヴィンが呟いた直後、エリーの悲鳴のような声が聞こえてき、わたしは咄嗟にそちらを振り向く。そこにはふたりの男女がおり、エリーから無理矢理ティポを取り上げていた。わたしたちは慌ててエリーの方へ駆けていく。

「どうした、レイア！」

「ティポがさらわれたの！エリー！ゼもそれを追って！」

『っエリー！！』

「な、っヴェリテ！！！！」

どうしよう、なんて迷ってる暇なんてなかった。ミラなら、ミラならきつとエリーを追いかけると言う。大丈夫、大丈夫だから。だから震え、止まってよ。

ヴェリテがエリーゼを追いかけて行ったあと、場内に黒匣を持ったふたりが入って来て、ミラを襲った。三対一では分が悪すぎると見たレイアとアルヴィンは加勢をしようと走り出す。そんな中、ミラがアルヴィンの名を呼んだ。

「やつらの狙いはお前じゃない、きつと初めからティポだったんだ！客席から狙ってるやるなんてのも、いなかったんだ！俺は知らなかった！」

「お前に任せる！！！」

ミラの言葉に、ピタリと足を止めるアルヴィン。その顔は驚きに満ちていた。

「何…？お前、俺を試して…」

「お前しかない、頼んだぞ！」

「なっ……そう来るかよ…どうなっても知らないぜ」

アルヴィンは必死にヴェリテの背中を追った。前のヴェリテはエリゼに追いつき、手を握って走っている。あいつばかりに無茶をさせてはいけない、と思いながらアルヴィンはスピードを上げる。

「ヴェリテ！エリゼ！」

『！ アル、ヴィン…』

体力なくせに全速力で走ったのだろう。もう彼女の表情に疲れが見えてきていた。それでも走り続けるヴェリテはやはり無茶をしていると思えない。アルヴィンは強く彼女の手を握り、出来るだけふたりに負担を掛けないように共に走る。

「ヴェリテ…アルヴィン…ティポを…っ」

「ああ、わかってる」

『うん…、絶対に取り返して見せるから…』

強がっているつもりのヴェリテだったが、まだ手が震えていた。それはエリーゼにも分かっており、少しばかり心配そうに彼女を見ている。何故こいつがこんなに頑張らなきゃならない。確かにヴェリテはマクスウェルの巫子だ。だがそれだけなのだ。巫子というだけでこんなに頑張ることもないのだから。いや、これはヴェリテのプライドであり、意地なのだろう。頼れと言っているのだが、ヴェリテはいざというときには頼ることを忘れてしまうタイプだ。

「ヴェリテ、大丈夫か？」

『わたしよりエリーを…』

「ヴェリテ、無茶はダメです…！」

エリーゼの言葉に申し訳なさそうに頷くヴェリテ。王の狩場と呼ばれる草原をひたすら走り、辿り着いたのはリーベリー岩孔。ここに

入って行ったのをヴェリテたちは見た。

『行こう』

「はい…」

「まったく…無茶はするなよ、ふたりとも」

「うん」

『努力する』

「若干一名はほんとにわかってんのかねえ…」

まだ少し荒い息を隠しながらヴェリテは進む。はぐれないように、しっかりとヴェリテがエリーゼの手を繋ぐ。

そしてアルクノアを追いかけ続け、やっと最下層まで追い詰めた。そこで見たのはアルクノアのひとりかティポから何かを抜き取っている光景。ヴェリテたちがそちらへ駆けよつとしたとき、不意打ちで黒匣の攻撃がこちらに向かってくる。

『避けられないわけないでしょ!』

「ヴェリテ！」

『！！！！』

ひとは避けたのだが、作業を終わらせたもうひとりが黒匣から精霊術を放ち、それがヴェリテに襲い掛かる。痛みを覚悟して目を瞑ったのだが、なかなか痛みは来ない。そつと目を開けるとアルヴィンの背中が見えた。

『…ア、ル　うああああッ！！！！』

手を伸ばそうとした瞬間、酷い痛みがヴェリテを襲う。しかしヴェリテは倒れなかった。背中にエリーゼを庇い、武器を構える。黒匣から放たれたのは強力な精霊術だ。それをモ口に食らったふたりは、正直立っているのがやっとであった。

「体力ないくせに、ホントよく立ってられるよなあ……」

『わたしが決めて……エリーを追いかけてきたんですもの。責任はきちんと、取らなきゃ……』

「折角庇ってやったのに攻撃受けてるし」

『……もついい、でしょ……』

「ヴェリテ……アルヴィン……っ」

心配そうに声を掛けるエリーに、大丈夫、とにっこり笑ってから、ヴェリテとアルヴィンはアルクノアに向かって行った。

わたしを守る必要はないのに、
どうしてわたしを庇ったりしたの？
わたしの所為で、
もう誰かが傷付くのは嫌なのに。

ヴェリテがアルヴィンの嘘を見抜きつつある（＾o＾）ノ

強くなりたい

ずっと、ずっとそう思ってるのに

前に進めていないんじゃないかって

そう感じていたんだ…

ドサリ、とアルヴィンの体が重力に従って落ち、わたしは膝をついて大きく肩を揺らしていた。もう体力も、マナも使いきって体が動かない。アルヴィンと一緒にひとりには仕留めたのだが、もうひとりには逃げられてしまった。エリー、ごめん。大切な友達を守れなくて。ごめんね、アルヴィン。守ってくれたのに結局攻撃食らっちゃって。ごめん。わたし、ちゃんと戦えなかった。

『はあ、はあ…っ』

エリーは落ちているティポに話しかけた途端、動かなくなった。アルヴィンはあれからまたわたしを庇って怪我をした。わたし、また間違ったのかな。追いかけてこなかったら、こんなことにならなくて済んだのかな…

「そんな、顔、すんなよ…」

『ごめ、ん…わた、し…っ』

「お前のせいじゃ、ない…」

『ごめん…アルヴィンっ』

わたしはぐつと涙を堪える。わたし、なにも役に立ててない。それなのに、なんでそんなこと言うの。そこまで言っただけで目の前が真っ暗になり、ぐら、とわたしの体が倒れる。それを受け止めてくれたのは、アルヴィンだった。

「守ってやれなくて、ごめん……」

わたしが次に目を覚ましたのはリーベリー岩孔から出てからだった。気付けばわたしはまたアルヴィンに背負われており、こんな時だつて言うのに妙に落ち着いていた。

『…アル、ヴィン……』

「！ ヴェリテ、起きたのか」

うん、と頷いて彼の背中から下りる。心配してくれたのか、みんなの表情から安堵の色が見られた。倒れてばかりだなんて、みつともない。

それからみんなに事のあらましを聞いた。ティポが前のティポじゃなくなつたということ。リーベリー岩孔がエリーが育つた研究所だつたこと。アルヴィンがその研究所に侵入したことによってそこが

閉鎖してしまったこと。増霊極のこと。ティポがエリーの考えを読みとって話していたこと。エリーの両親のこと。そしてエリーがなぜその研究所にいたのかということ。一気に聞いたためか、何もかもぐるぐるしてよくわからなかった。でも一番に分かったのはエリーが大きな心の傷を負ったことだ。

『わたしも両親がいない。だけどわたしにはミラがいた。うるさいけど、バカもいた。だからエリーの気持ちはわからないかも知れない。でもね、エリーはもうひとりじゃないのよ』

「ヴェリテ…？」

『わたしが、わたしたちが傍にいる。エリーが望むならこの手を絶対に離さない。わたしが今、エリーのためにできることはこれだけだから…』

「……それでも…わたしは…っ」

少しだけエリーの表情が和らいだ気がする。でもエリーはわたしの手を取ってはくれなかった。悲しい気もしたが、それほどエリーには酷な話だったんだろう。

『わ…っ』

シャン・ドウに帰ろうと歩き始めた時、まだしっかりと傷が癒えていないためかバランスを崩す。そんなわたしの腕をアルヴィンが掴んで止めてくれた。最近かなり気にかけてくれるような気もするけど、気のせいかしら。

『あり、がと…』

「俺より酷い怪我だったんだ。無茶すんな。まったく、あいつら女にも容赦ねえのかよ…」

「手段を選ばない連中だ。おかしいことはあるまい」

今回のことを考えるとこれからもうこういうことが起こるかもしれない。本当はみんなを巻き込みたくはないんだ。

「僕はついてくよ、ふたりに」

「そうだよ！ぜーったいここにいるんだから！」

「こんなとこで降りるわけにはいかないからな」

「おふたりでどうにかしようとは思えないように」

うんもうわたしたちの考えはわかってるって寸法ですね。わたしとミラが顔を見合わせて笑ったあと、わたしたちはシャン・ドウに向かって再び歩き出した。

「ジュード、何か気がかりなのか？」

街に着くなり、ミラが振り返ってジュードを見る。彼はハツとしたように顔を上げた。

「ジャオの話聞いてから様子が変だぞ？」

そう言えば確かに。わたしたちと話していたときはそうでもなかったのだが、いざ黙ると何やらずっと考え込んでいたジュード。そんなとき、向こうからイスラさんが駆け寄って来た。

『っ…………？』

何故か久しぶりに拒絶反応が出て、わたしは一步後ろに下がる。イスラさんがエリーを売った、とそう聞いたからだろうか。それとも

「王の狩り場へ言ったと聞いて、心配していたのよ」

「色々あったけど、とりあえずは無事、かな」

「偶然とはいえ、あなたたちを巻き込んでしまつて、ごめんなさい」

それを聞いたジュードが彼女の前に出る。

「イスラさん…それウソですよね？」

「な、何？私が心配したら変かしら」

わたしは目を細めた。レイアが、どうしちゃったの、と聞けばジュードはイスラさんから視線を外さず話す。

「イスラさんが僕たちと知り合ったのは、偶然じゃないんだよ。決勝が知らせる鐘が鳴った時、この街の人に言われたでしょ。この時期に、よその人間が集まっていたら、それは闘技大会の参加者が観客しかいないって」

そう言われて彼女と会った時のことを思い出す。彼女はわたしたちに、この街に何をしに来たのかと聞いたのだ。ここの人間ならば、あるいは裏がない限りそんなことは言わない。

『アルクノア』

わたしが呟けば、イスラさんの肩が小さく跳ねた。やっぱり、わたしは彼女を黙って見やる。

「あの人たち…ばれないから…平気だって言ったのに……でも、私だってあの人たちに…」

「脅されてたんだよね…弱みがあったから」

弱み。それは子供たちを攫い、売り飛ばしたという仕事のことだろう。ローエンがそう聞けばイスラさんは頷く。その仕事をユルゲンスさんにバラされたくないという一心だったという。

「ユルゲンスは知らないのか？」

「言えるわけじゃないっ！……ユルゲンスはとても純粋な人なのよ」

「なぜ話せないんだ？すでに過ぎたことだろう」

「あなたも女ならわかるでしょ。こんな醜い女を彼が愛してくれるわけない。あのことを知られたら……私は捨てられる」

幸せになりたいだけなの。それが彼女の言い分だった。わたしはそんな彼女の顎を鉄扇で持ち上げる。

「な、何を……」

『全てを隠し通せるなんて思わないことね。幸せになりたいならすべてを打ち明けなさいよ。それですべてを受け入れないやつなんて男の恥だわ。でもユルゲンスさんがそんな男だとはわたしは思わなくてよ』

「……そんなの、わからないじゃない！」

『わからなかったらやめるの？それでおしまい？逃げてるだけじゃ何も始まらないわよ。少なからずあなたは愛を知っている。それを信じないでどうするの』

自分のすべてを打ち明けて、すべてを受け入れてもらって初めてそれが愛になるんだと思う。わたしは愛を知らないからこんなことが言えるのかも知れない。けど、わたしはそうだと信じたいんだ。

「…ふむ。人間の愛というのは難解だな。私には理解できそうにない。どうするかはエリーゼ。お前が決めるといい」

「どうしてわたしなんですか…」

「私たちよりその権利はあるだろう。なあ、ヴェリテ」

『…確かにわたしたちが口を出すことでもないわね…』

でも、と心の中で思っただけエリーゼを見る。しかし目が合うとすぐに反らされた。あんなことの後だから仕方ないとは思っただ、少しキツイな。

「どうしても…いいです」

「どーせ、エリーゼが一人ぼっちなのは変わらないんだから」

エリーが言っと、イスラさんはふらふらと立ち上がってどこかへ行ってしまった。

「それじゃ、ユルゲンスさん探そっか。ワイバーンの話しなきゃね」

あ、でもその前に休まないと、とわたしを心配してレイアが言ってくれたのでわたしたちは宿屋に向かった。

ぱしゃん、と水面が波を立てると同時に身体に痛みが走る。完壁に治ったわけでない傷にお風呂の温かい湯が染みただ。なんとか我慢して湯船につかったわたしはひとつ息を吐く。

「ヴェリテ、傷は大丈夫？」

『うん、なんとか…それよりもエリーもこれば良かったのに』

「仕方ないよ…いまはそつとしておいてあげた方がいいのかも知れない」

レイアもわたしの隣に腰を下ろす。ミラは少し歩いてくるとかって、街に出て行ったし今はレイアとふたり。そう言えばレイアとは最初から打ち解けていたな、なんて思っていたら口が勝手に動いていた。

『レイアはジュードが好きなんでしょ』

「ぶほっ！！！！なななな何をいきなり！！！」

めっちゃわかりやすい可愛い反応をありがとうでございます。レイアはぶくぶく、と湯船に半分沈んでいた。

『あはは』

「むー…」

『ねえ、愛ってなんなのかしら』

ぽつり、と呟くとレイアがわたしを振り向いた。

『わたしも親の愛を知らない。だから男女の愛なんて以ての外…よく、わからないの。でもね、やっぱりお互いのすべてをお互いが受け入れるからこそ、そこに愛が生まれるんじゃないかって、そう思ったの』

「イスラさんのこと？」

『うん…』

彼女はあれで苦しんだと思う。だけどそれはただの自己満足。隠し通してそれで幸せになれるなんてわたしは思わないんだ。

「そっかあ…でもヴェリテもそーゆー年頃だもんねー…確かわたしの一個上だっけ？」

『は？まあ、うん……ってかなんでそこでわたしが出てくるのよ』

「だって恋してないとそんな発想できないよ」

『…恋？誰が？』

「ヴェリテが」

わたしは目を点にしてレイアを見やる。彼女はニヤニヤと効果音が付きそうなほどの笑顔を浮かべていた。

「特別鈍いつてわけでもなさそうだね、ヴェリテ。そう言えば故郷で仲間外れにされてたんでしょ？多分そーゆー環境だったからきつと自分の気持ちかわからないだけなのかもしれない」

『レ、レイア、何言つて…』

「ヴェリテ、こう、胸がドキドキすることとか、胸がモヤモヤすることとかあるでしょ？」

真剣にレイアに聞かれて少し考え込んでみる。パツと浮かんできたのはアルヴィンの顔。その瞬間、一気に顔の熱が上がった気がした。ぶくぶく、とさっきのレイアみたいに湯船に沈めば、今度はレイアに笑われる。

「やっぱ恋してんじゃない」

『いやっ、でも、わたしがするはずないんだ！第一わたしは元々人を信用してなかったし、そんな権利はない』

「権利も何も、恋愛は自由なんだよ！誰かに取られる前に自分のものにしないと！……じゃないとわたしみたいになっちゃうよ？」

レイアは悲しく笑う。わたしでもわかる。レイアが好きなのはジュードで、ジュードはミラのことばかり見ている。それでもジュードのことが好きだというレイアはほんとに健気だと思う。

『でもね、レイア……』

「もうヴェリテってばかわいいーんだから！照れなくてもいいよ！相手はもちろんあー」

『人の話を聞け』

「きゃああ！？ちょ、待つ！あははははは！……」

冗談を込めてレイアをくすぐるわたし。その時のわたしの顔は見たこともないくらい真っ赤だった。これってレイアの言う通り恋なのかしら。もしそうだったらわたしはどうすればいいのだろう。でもこれ以上レイアに聞くのも気が引けたため、わたしはそのままレイアとじゃれあっていた。途中で傷の痛みが限界に來たのでやめたのだが。

ドキドキ、と

高鳴る鼓動が止まらない…

ヴェリテは自覚した模様です^p^

レイアとの絡みが大好きなんです(^o^)

ヴェリテとレイアはきっと姉妹のような関係。

あなたのことばかり考えて

忘れられなくて

溢れるこの気持ちの意味が

やっと分かった気がした

みんなが寝静まってからも、レイアとの話を思い出して眠れなくなつたわたしは外に出る。するとどこかへ向かうアルヴィンの姿があった。また勝手にどこかへ行こうというのか。わたしは気になってその後を追いかけた。辿り着いたのはこの間アルヴィンを見つけた昇降機のところ。この先に一体なにがあるのだろうか。わたしは意

を決して先に進む。

『アルヴィン……』

そこにはとある扉の前に佇むアルヴィンの姿があった。一歩足を踏み出すと、アルヴィンがこちらを振り向く。

「！ ヴェリテ……」

『親の家なんでしょ？』

「……ああ」

『入らないの？』

聞けば苦笑いするアルヴィン。そんな彼がわたしに手を差し伸べる。

「一緒に」

『……いいの？』

頷く間もなく手を取られ、わたしはアルヴィンと家の中に入っている。そこには一人の女性がベットに臥せていた。彼女がアルヴィンの母親なのだろう。

「あら、あなたは…アルフレドの新しいお友達？あの子ったら、折角お友達が来てくれたのにどこに行ったのかしら？」

『アルフ…え？』

わたしは目を瞬く。彼女は何を言ってるんだろうと不思議にアルヴィンを見ると、不意にわたしの手を握る手が強くなった気がした。

「レティシャさん、アルフレドは、幼年学校の寄宿舎じゃないですか」

「ああ、そうだったわね…あの子、きっと泣いているわ。気が弱くて寂しがり屋だから…」

話すアルヴィンの声にはどこか気力がない。どうして目の前に自分

の息子がいるのに見てあげないんだろう。もしかして彼女は

「大丈夫。元気だって手紙が届いてます」

「ええ。休暇には帰ってくるんですって。大きな船で旅をする約束をしたのよ」

「……アルフレドも楽しみにしてましたよ」

「ふふ…あの子、手紙でね、私が泣いていないか心配してるのよ。おかしいでしょう？でも、とっても優しい子なの……」

アルヴィン。あなたは何を抱えているの。どうして何も教えてくれないのよ。母親が病気になって辛いかわけない。さっきだって会うことを躊躇っていたのに。これは同情かも知れない。でも胸がすごく痛くて、辛くて、重くて。

『アルヴィンは、バカ、よね……』

「は…お前の方が、だろ。……泣いてんのか」

『つなわけ、ないでしょ……』

ぐい、と頭を引き寄せられる。ぶっきらぼうだったけど、握ってる手と頭に乗せられてる手から何か温かいものを感じた。

「別にお前に泣いてほしいから連れてきたわけじゃねーんだけどな」

『だから泣いてないってば…』

「そーかよ…早く泣き止めよ」

その優しさが妙に嬉しくて、わたしは暫く泣き止めずにいた。自分のことじゃないのに悲しい。わたしには関係ないはずなのに苦しい。どうしようもなく想いが溢れてきて止まらない。もっと彼のことを知りたい。背負ってるものを少しでも軽くしてあげたい。もっと、アルヴィンに触れたい。これが、恋なの？

「帰るか」

『…うん』

やっと落ち着いた頃、わたしはアルヴィンに手を引かれてレティシヤさんの家を出た。この時間になると辺りにはもう誰もいない。わ

たしとアルヴィンの歩く靴の音だけが辺りに響く。

「俺は、俺たちはただ故郷に帰りたいただけなんだ……」

ぽつり、とアルヴィンが呟いた。

「……だからアルクノアからの依頼も断られない、ってわけ……？ それとも始めからアルクノアだったりして」

「！……それは……」

「……わたしと初めて船に乗った時、研究所から何かを奪ったかって聞いたのも誰かに頼まれたから？」

アルヴィンの足がピタリと止まると、わたしもそれにつられた。そのままわたしはまっすぐに彼を見やる。こちらを見るアルヴィンのその瞳は僅かに揺らいでいて、それでいて悲しそうだった。

「アルヴィンはやっぱりウソつきね」

「ヴェリテ……」

『でも、そんなアルヴィンを信じたいって思ったわたしはやっぱりバカなのかもね』

自分の中でできるだけ柔らかに笑い、するり、と彼の手を離してかわたしは先に宿屋に戻った。顔が赤かったこと、気付かれてなきやいいけど。

「……ほんと、バカだよ……俺、犯罪者にならねえかな……」

翌日、あの後何とか寝れたわたし。今日は朝からユルゲンスさんを探していたのだが、なかなか見つからなかった。ワイバーンのこと、早めに話しておきたいんだけど。

「エリーゼ大丈夫かな」

心配そうにジュードが言えばみんなの視線はエリーに向けられる。昨日から全くといって元気がない。やはりティポのことやあの事実はエリーにとっては辛く悲しいものだったのだろう。するとローエンが考えるように髭を触った後、わたしたちを振り向いた。

「増霊極について少し気にかかることがあるのですが」

わたしたちが振り向けば、彼はそのまま続ける。

「ナハティガルがガンダラ要塞で行っていた実験……あれは増霊極を使用するためのものだったのではないでしょうか」

「増霊極がすでにラ・シュガルにも渡っているというのか？」

ローエンは頷く。増霊極はエリーみたいな子供でも魔物と戦えるようになるものだ。両国の兵が増霊極をもって争えばかつてないほどの惨事が待っているだろう。少なくともナハティガルにはその戦いに踏み切る理由がある。

「クルスニクの槍だね…」

それがある限り戦争は免れないだろう。精霊を守るためにも、人を守るためにもあれは壊さなければならぬものだ。

「おお、戻ったのか！」

わたしたちが話し込んでいると、そこにユルゲンスさんがやって来た。彼もわたしたちのことを心配してくれていたようで、無事で帰ってきたことを喜んでくれる。

「約束のワイバーンの準備できてるの？」

アルヴィンの問いにユルゲンスさんは頷くが、今は戦の雰囲気が高まっているため無許可で空を飛べないことを告げられる。その許可を王もらって来るため、ユルゲンスさんはこれから首都のカン・バルクへ行くらしい。

「ねえ、ア・ジュール王に戦いが起きたら危ないってことを伝えた方がいいんじゃない？」

「王様、評判いいみたいだし、わたしたちと一緒に戦ってくれたりしないかな」

「おいおい、その戦いつて戦争だぞ！？」

「私も直接会って研究所の真意を確かめたいと思っていた…」

ミラもジュードたちの意見に賛同するみたいだった。しかしそれを聞いたアルヴィンは苦々しい表情をしている。それからわたしと目が合うと、その顔は何故か悲しいものへと変わった。

『アル、ヴィン…？』

「いや、なんでもない」

気にするな、と言って彼は視線を落とす。アルヴィンのことは気になったが、ミラが行くと決めたならわたしも行く。それをユルゲンスさんに伝えると、荷物をまとめて来ると戻って行った。

「ねえ、研究所の真意って？」

「エリーゼがいた研究所って、他にもたくさん子供が連れて来られてたらしいんだ」

「ジャオさんが言ってたの？」

ジュードは小さく頷く。

「ア・ジュール王が民を守る存在なら、私の望む答えをもちあわせているはずだ。だが、別の答えをもつのであれば、金輪際やめると誓わせる。どんな手を使っても」

『相変わらずミラらしい』

そこが好きなんだけど、と笑って言えばミラは嬉しそうに笑ってくれた。やがてレイアとローエンはエリーを連れて宿屋においてある荷物を取りに行き、アルヴィンもどこかへ行くと歩き始めた。

「アルヴィン」

そんな彼をミラが呼び止めた。

「よくやってくれた。エリーゼを守ってくれと信じていたよ。怪我は負ったがヴェリテもな」

わたしの名を聞いた瞬間、アルヴィンが肩を跳ねさせた。あれはわたしがドジだったから負った傷なのに、気にしているのだろうか。そう思っていると彼は少し歩を進めてからこちらを振り向く。

「ぼく、約束したから覚悟決めたんだよー、ママ」

まるでミラの発言に居たたまれなくて茶化す様に言った言葉だった。ああもう、どうしてあんな人を好き… そう思った瞬間、カカ、と顔が熱くなるのがわかった。やばい、自覚しちゃったから意識しちゃってるってこと？

「ヴェリテ？」

『え、いや、なんでもない！わたしもちよつと…』

そう言つてわたしは逃げるようにそこから去つた。ジュードたちから少し離れたところでわたしは足を止めて振り返る。わたしが恋をしたつて言つたらミラはどう思うだろうか。そんなことを考えながらみんなが戻ってくるまで街の中をうろろろしていた。

きつとわたしなんか、
相手にされないんだろうな、
なんて思つてしまう自分がいる。

もつと近づけふたり！
そしてヴェリテが泣き虫だwww
あれ、こんなキャラだっけ（笑）
次は首都ですね（^o^）ノ

音もなく降り積もる

真っ白な雪は

全てを埋め尽くしてしまいそう

わたしのこの心まで

首都カン・バルク。そこは辺り一面真っ白なところだった。わたしは生まれて初めて雪を見たのだ。天から舞い降りるそれは、とても儚げで美しい。辺りを真っ白に染め上げる雪にわたしは見惚れていた。

「そんなに雪が珍しい？」

『二・アケリアから出たことなかったから…すごく、綺麗……くっしゅっ』

「あーあー、そんな恰好してるから」

呆れるようにアルヴィンが言う。普段の恰好のまま来てしまったためかなり冷える。正直この地帯の気温がどれほどのものなのか全く理解できていなかった。わたしの服は露出は低いが、動きやすくするために薄いのだ。それが仇になったらしい。

「シャン・ドウもそうだったけど、ここも少し変わった街だね」

「ア・ジュールはラ・シュガルに比べて精霊信仰が強いからな」

「わ、何あれ？」

先に走って行ったレイアの視線の先には不思議なものがあった。それは空中滑車というもので、いくつかの地区をそれでやっているんだそうだ。

「ユルゲンス、ア・ジュール王と会うにはどうすればいい？」

ミラが聞けば、ワイバーンの許可を取るついでに謁見を申し入れてみる、とユルゲンスさんは言ってくれた。ミラは自分でなんとかしようと考えていたが、わたしたちはその好意に甘え、それまで宿を取って休むことにする。

『雪つさが作れるかなー…』

そつと宿屋から抜け出してわたしは近くの雪をかき集める。今は誰も見てないからいいよね。そう思って、ぽんぽん、と雪を固めて拾ってきた木の実と葉っぱで飾りつけをする。手にはちゃんと可愛い雪つさが乗った。

『…可愛い』

「おい」

『うおおー!!?』

いきなり後ろから声を掛けられて、わたしは肩を大きく跳ねさせて驚く。それがアルヴィンだとわかるとわたしは慌てて手に乗った雪

うさぎを隠す。

「だからもうちょっと女の子らしい驚き方をしたらどうなの」

『う、うるさいなっ！！』

「まあいいけど……なーにしてたんだ？」

アルヴィンに聞かれてわたしは目を反らす。こんな子供っぽいところ見られたくない。ただでさえ歳が十も離れているって言うのにこれ以上子供扱いされたくない。

「後ろ、何隠してんの？」

『え、あ、いや、っちょー！！』

有無を言わず手を掴まれて雪うさぎがアルヴィンの目に映る。驚く彼の表情を見て、わたしは真っ赤になって俯いた。

「なにこれ」

『…見ればわかるでしょ…ゆ、雪つさぎ…』

「は…おま、っ…（雪つさぎとか何！可愛すぎるだろ……っ！）」

ああもう笑われた！絶対笑われた！

カカカ、と更に顔が熱くなり、顔を上げることが出来ない。暫くそのまましていると、ふわり、と体に彼のコートがかけられ、え、と言葉が漏れる。

「身体、冷えてんぞ」

そう言って次は手袋を脱いで雪つさぎをもっているわたしの手に自分の手を重ねてくる。どうしていいかわからないわたしはその場に固まっていた。

「手、冷えてる…」

『あ…これ作ってた、から……』

「可愛いな、……………それ」

『え、う、うん…』

やっぱり顔を上げることが出来ない。つていうかこれなんていう拷問？いや、確かにアルヴィンは女の子に優しいからこーゆーこともするんだろつけど…いまのわたしには全くの逆効果なんです。

「あのさ、お前に渡す」

アルヴィンが話し始めた時、宿屋からエリーが飛び出してきたのが見えた。

『え、なに？エリー…』

「は？……エリーゼがどうしたって？」

アルヴィンが宿屋の方を向いたとき、続けてジュードたちが出てくる。寒いだろつとアルヴィンにコートを返し、雪うさぎを手から下ろしてから、わたしたちも急いでエリーを追った。そこから少し行ったところの広場でエリーとジュードたちを見つける。

『どうしたの…?』

「あ、ヴェリテ、アルヴィン…」

そつと声を掛けるとジュードがさっきあったことを話してくれた。
なるほど、と頷いてわたしはエリーとレイアを見やる。

「さっきはごめんね。エリーゼ、ティポのことで寂しい思いしてたのね。ほら、わたしって遠慮なく行っちゃうところあるでしょ。許してよ」

「…いやです…」

「そんなこと言わないで」

ね！とレイアは笑って言うが、背中を向けていたエリーは怒ったようにこちらを振り向く。

「レイアもミラもキライ！友達だと思ったのに！」

「エリーゼ、わたしはただ、あなたが心配で」

「ウソ！わたしのことなんてホントはどーでもいいくせにっ！もう、友達やめるっ！」

エリーがそう言ってわたしの隣を駆けて行こうとしたところを、わたしが腕を掴んで止める。いまにも泣きそうな表情でエリーはわたしを振り返った。

「ヴェリテ…っ」

「エリー。わたし怒ってるのよ」

「え…」

「なんで怒ってるか、わかるわよね？」

視線を合わせて問いかけると、エリーは少しだけ身を強張らせる。

「…友達に酷いこと言ったからよ。みんな心からあなたを心配しているの。それなのにさっきや今の言い方は悪いんじゃないかって？」

「でも……」

『誰もが強いわけじゃない。人の心は脆く、傷つきやすい。その証拠に、レイアはすごく悲しくて、辛い顔をしているわ』

わたしが言えば、エリーはそつとレイアを見やる。悲しくて、辛い、とわたしの言葉を復唱してからレイアにそつと歩み寄る。

「傷、ついたの……レイア……？」

「あ、いや、傷ついたっていうかさ……その、へこんだっていうか……」

「わたし、レイアを傷つけてるなんて……思ってた……」

エリーはギュツと服を握って涙を堪える。わたしはそつと頭を撫で、にっこり笑った。

『エリーは優しい子ですもの。ちゃんとレイアに謝れるわよね』

「……でも、わたし……」

『お互いがお互いを想いあっていれば大丈夫よ、エリー』

わたしの言葉に安心したのか、顔を上げてレイアに向き直る。

「レイア…ごめんなさい。許してくれますか？」

「うん。だけど、これからはエリーゼの言葉でエリーゼのことをもっと教えてほしいな」

嬉しそうにエリーは笑う。ようやく彼女に笑顔が戻った、とわたしも嬉しくなり小さく微笑んだ。そう言えばエリーを追いかける前アルヴィンが何か話そうとしていたな、と思い彼に聞くが、なんでもない、とはぐらかされた。まあ大事なことじゃないんらいいんだけど。

「僕たちはどうしよう？ユルゲンスさんはまだ戻ってこないけど…」

「直接王城に乗り込んでみる？」

「っだから、ユルゲンスさんに迷惑かけちゃダメだってば」

「ダメか…そのアルヴィンの案はしっくりくるのだが…」

相変わらずだな、とみんなは頂垂れた。結局お城の方には行くことになり、わたしたちは門をくぐり階段下の広場にいる。お城の前には人の列ができており、王がどれほど人望熱いかが分かった。

「現在のア・ジュール王は、かつて混乱を極めた国内をその圧倒的なカリスマで統率した人物だと言われています」

「それなら、わたしたちに協力してくれるよ」

「だが、影でエリーゼのような境遇の人間を生み出しているのであれば許せはしない」

ミラの言葉にエリーは笑顔になる。やっぱりエリーには笑顔が似合うな、としみじみ思っていると、ユルゲンスさんが階段を降りてきたのが見えた。彼によればワイバーンの方も許可を取れ、謁見の方はわたしたちの名を伝えたら、逆に王様から会いたいと言ってきたそう。それだけ伝えて、ユルゲンスさんは先にシャン・ドウに帰って行った。

「ふむ、思わぬ歓待だな」

「何かの罨だつたりしないよね？」

「あまりいい予感はありませんね」

「そうかなー。会えないで帰るよりはよかったじゃない」

みんなの言葉を余所に、アルヴィンが考えるように小さくうなった。それに気づいたミラが声を掛ける。

「また隠しごとかアルヴィン？」

顔を上げたアルヴィンはいつものように笑う。

「つたり前だよ。だから俺は魅力的なんだ」

「……ジュード、今のはどういう意味だ？」

「秘密のある男はカッコいいとかいうからね……ははは……」

わたしの胸からは不安が取れなかった。どうしてだろう。みんなが

言う嫌な予感と、もうひとつ、違う嫌な予感がぐるぐると胸の中で渦巻いている。

「さつさと、王様に会いに行こうぜ」

「アルヴィン、ウソはイヤだからね」

「お前たちが俺を信じてくれてるってのは知ってるよ」

そうも言ってくれたのに、決して安心しなかった。わたしは咄嗟に彼の手を取る。アルヴィンだけじゃなくてみんなも驚いたように目を見開いていた。

『……』

「ヴェリテ……？」

『どこにも行っちゃ、ダメよ……アルヴィン………』

「……相変わらずわがままな巫子姫様だ」

数回、わたしの頭を軽く叩いて慰めてくれるアルヴィン。そっと手

を離すと酷く不安になる。わたしの言葉に頷いてくれない彼は、
き
つと

覚悟、してるはず。
それなのにわたしは、
ずっと迷っているんだ。

雪うさぎとかもう可愛い^ p ^ p ^ p ^
そしてアルヴィンがデレたというね w

この純白の雪が

全てを飲み込んで

最初からなにもなかったように

真っ白にしてくれないかな…

カン・バルクの城の謁見の間。ア・ジュール王と会うため、いまわたしたちはそこにいる。謁見の間にはジャオがいて、彼が四象刃のひとりであることが分かった。因みに四象刃とは王直属の戦士である。やがて奥の扉が開き、側近と共に王が現れた。瞬間、ゾクリ、と背中に悪寒が走る。そこにいるだけで存在感、威圧感が溢れている。まさに壮観。わたしたちなんか手が伸ばしても届かぬような存在。この人には、ア・ジュール王にはそれを感じる。

「お前がア・ジュール王か」

「我が字はア・ジュール王、ガイアス。よく来たな、マクスウェル」

ガイアス。確か意味は、世界を牽引する者。確かに彼にピッタリの名かも知れない。

「お前たちは陛下に謁見を申し出たそうだが、話を聞かせてもらおうか？」

側近である彼は、ウインガル。黒き片翼と呼ばれている四象刃のひとり。彼はわたしたちを射るように見て問いかけてきた。

「ア・ジュールでつくられた増霊極はすでにラ・シュガルに渡っています。もし両国で戦争が始まれば、とりかえしのつかない事態になってしまふんです」

「ほう……それを伝えるためにわざわざ来たというのか？」

その威圧感に気おされ、ジュードは少しぎこちなく話す。それに続

いてレイアが一步前に出る。

「それでわたしたち、ラ・シュガルの兵器を壊そうと思ってるんです。それがなくなれば、ラ・シュガル王は戦争が始められないんじゃないかって。協力とか…してもらえ…ませんか？」

最後の方はぼそぼそと聞こえるくらいの音量だった。

「用件はそれだけか？」

「もう一つお伺いしたいことがあります。以前、王の狩場にあったという増霊極の研究所のことです」

その言葉にジャオが顔を伏せる。エリーのことを思っているのだろうか。しかしわたしには知る術はない。

「あの場所に親を亡くした子供を集め、実験利用していたというのは本当か？」

「ふっ、何を言い出すかと思えば。精霊のお前に関係があるのか？」

「私はマクスウェル。精霊と人間を守る義務がある」

さも当然のようにミラはガイアスを見やる。

「精霊が人を守るとは実に面白いことを言ったな」

『それがミラであり、精霊マクスウェル。人に、精霊に仇なすものはすべて排除する』

ふ、とガイアスの視線がわたしに向けられる。その眼光は酷く鋭くて、一瞬でも気を緩めてしまえばわたしはそれに負けてしまいそうだった。

「貴様は王でありながらも、民を自らの手で弄んだ、違うか？」

ミラの問いに、ガイアスではなくウィンガルが答える。その件は全て自分に任されている、と。

「あの研究所に集められた子供たちは、生きる術を失った者たちだった。お前たちが想像するようなことはない。実験において非道な行いはしていない」

「それを信じるというのか？」

「だ、だけど、わたしは……」

何かを訴えようとエリーが言葉を発するが、その後は声にならなかった。彼女を見たウィンガルがジャオに、被験体の娘か、と問えば彼は頷く。

「エリーゼはハ・ミルの村でも閉じ込められていたんですよ。それじゃあまりにも……」

「非道だと？」

その瞳に射抜かれたジュードは言葉を詰まらせる。

「お前は民の幸せはなんなのか、考えたことがあるか？」

「幸せ…?」

「人の生涯の幸せだ。何をもって幸せか答えられるか?」

短い時間で答えるのは難しいだろう。しかしミラは違う。凜とした出で立ちでガイアスを見据える。

「己の考えを持ち、選び、生きること」

「そう。僕もそう思う」

「ふっ。俺は違う」

小さく笑ったガイアスは玉座から重い腰を上げて立ち上がる。それだけで少しばかり部屋の空気が重くなった気がした。

「人が生きる道に迷うこと、それは底なしの泥沼にはまっていく感覚に似ている」

「生きるのに迷う…?」

「そう。生き方がわからなくなった者は、その苦しみから抜け出せ

ずにもがき、より苦しむ。故に民の幸福とは、その生に迷わぬ道筋を見出すことだと俺は考える」

最後の言葉を復唱するようにわたしは呟く。それが深く、重く心に押し掛かる。

「俺の国では決して脱落者を生まぬ。王とは民に生きる道を指示さねばならぬ。それこそが俺の進む道……俺の義務だ」

その姿はまさに王に相応しい。それがガイアス。ア・ジュールを一代で纏め上げた覇王だ。彼は一度目を伏せ、そしてわたしたちを見下ろす。

「お前たちをここに呼んだ理由を、単刀直入に話そう。マクスウェル。ラ・シュガルの研究所から？ カギ？ を奪ったな？ それをこちらに渡せ！」

「断る。あれは人が扱いきれるものではない。人は世界を破滅に向かわせるような力を前に、己を保つことが出来ない」

お前には理解できなかったようにみえるな、とガイアスは目を細めてミラを見る。しかしミラはそれにも屈せず、いつものように笑った。

「ふふ、どれだけ高尚な道とやらを説いたところで、人は変わらない
い 二千年以上見てきた」

ミラの真っ直ぐな瞳はガイアスを捉える。ミラの答えは絶対に変わらない。それはわたしが一番よく知っている。大丈夫、何があってもこの場を凌いでみせる。そう思った直後だった。

「では、あなたに？ カギ？ の所在を聞きましょう」

ウィンガルの言葉にアルヴィンが前に足を進めた。隣にいたわたしの目が大きく見開かれる。

「アルヴィン… ウソ… だよな？」

「… ひどいです」

「…アルヴィン」

「すまんね。これも仕事ってやつなのよ」

わたしは思わずその手を掴んで引き留めた。どうして、どうしてどうして… 振り向く彼に、行かないで、とわたしは願うように何度も首を振る。しかし

「悪い、ヴェリテ」

初めてその手を振り払われた。一気に闇のどん底まで落とされた気がして、わたしはその場に立ち尽くす。まるで頭に鈍器を打ち付けられたように、ぐわんぐわん、とすべてが揺れた。

「アルヴィン。マクスウェルは？カギ？を誰に預けた？」

「…巫子のイバルだ。今頃は二・アケリアでおとなしくしてるんじゃないか？」

なんとなくわかっていたことなのに、どうしても状況を認めること

が出来ない。どうしたらいいのかと纏っていると、奥の扉が開き、露出度の高いスーツに身を包んだ女性が現れる。彼女はアルヴィンを見た瞬間、目を丸くした。

「アル… どうしてあなたが!？」

「よ、プレザ。久しぶり」

色々な意味でもう限界だった。

「プレザ。何用だ？」

彼女はわたしたちがここにいることに戸惑っていたが、ガイアスは、構わない、とプレザを横目で見やる。

「ハ・ミルがラ・シュガル軍に侵攻されました」

「なんですと…」

「村民の大半が捕えられ、ラ・シュガルへ送られた模様。殺害され

た者も多数おります。そしてその場には大精霊の力と思わしき痕跡が多数ありました」

それを聞いたミラはピクリと肩を震わす。四大様が解放されていればミラが感知するはず。わたしも巫子の端くれだ。微かだがわたしにも感じる事が出来る。それが出来ないということは

「まさか、クルスニクの槍の力…ナハティガルは新たな？力ギ？を生み出したのか！？」

そう考えるしか他ないだろう。

「すべての部族に通告しろ。宣戦布告の準備だ。我が民を手にかける者は何人たりと許しはしない！」

この部屋に響き渡るほどの声でガイアスは命じ、彼は奥の部屋へ下がっていった。その後ウィンガルはわたしたちに目を向ける。

「さて、あなたたちはもう用済みになってしまったが…陛下が精霊マクスウェルを得たとなれば、反抗的な部族も従わざるを得ない」

その刹那、わたしは高精度の精霊術を発動させる。

『?ジャツジメント?!?!?!?!?!』

天に光系の陣が展開され、そこから無数の光の攻撃が堕ちてくる。それはわたしたちを囲んでいた兵をすべて蹴散らすほどの力。謁見の間は静寂に包まれてわたしの吐く僅かな息だけが聞こえる。その沈黙を破ったのはティポだった。

「こ、怖…っ!ヴェリテ怖!!!!!!」

「そんな術いつの間覚えたの?!?」

『うるさい!!!!とつと行くわよ!!!!!!』

わたしは一度も振り返ることなくみんなと共に城を後にする。アルヴィン、なんで、どうして、と未だにわたしは現実を受け入れられ

なくて、ただただ無我夢中に走った。

「…やっぱり怒らせちゃったか…」

外の階段を下りると、エリーがギュッとわたしの手を握ってきた。
わたしは不意に足を止める。

「や、やっぱり…アルヴィンはウソつきです……それに、ヴェリテを泣かせました……」

「！ ヴェリテ、泣いてる、の…？」

『違う！！わたしはただ……っ』

覚悟してたはずだったのに、いざとなったら悔しくて、苦しくてどうにもならない。裏切ったって言うのに、あの態度。しかもあの女

……

「事情があるのかとも思いましたが、今回はさすがに」

「アルヴィンをダインザイしろー！引き摺りだせー！」

わたしは空中滑車の門のところまで早足で歩き、閉まっているそれを思いつきり、ガンツ、と蹴る。何度も、何度も何度も。

「ちょ、ヴェリテ！？」

「ヴェリテは凄く勘のいい奴だからこの事態を予想していたのかも
しれない。だがいざとなると受け入れがたいのだろうな」

「そっか、ヴェリテは……」

レイアがそこまで言った時、わたしたちを追いかけてくる兵たちの
声が聞こえてきた。しかしわたしの蹴っていた門は固く閉ざされ、
開いてはくれない。

「5ヶ所の制御石を復帰させれば、ロックを解除できるかもしれない。石にマナを注いでください。石が完全に赤く輝いたら、完了の合図です」

みんなは頷く。ただし全員が近いタイミングでないを解除されないらしいのだ。チャンスは一度だけ。そう覚悟を決めて各々石の前に立つ。出遅れたわたしは力になれそうにないため、ローエンの反対側で待機している。

「いきますよ！」

ローエンの言葉を合図にみんなは一斉にマナを注ぎ込む。まずはローエンが。そしてミラ、ジュード、エリーも完了する。そんな中、レイアだけが遅れている。彼女はそれがプレッシャーになり、思うようにマナを注ぎ込めない。するとミラが助けに入り、ようやくマナが充填される。しかしなぜか扉が開かない。辺りを見回せばわたしの後ろにもう一つ石が現れる。急がないと門が開かないかもしれない。

「ヴェリテさん！」

『ええ、任せて！！』

神経を研ぎ澄ませ、一気にマナを注ぎ込むとそれはすぐに赤く光る。同時に門が開き、わたしたちは空中滑車に乗り込んだ。高いところが恐いわたしは床に縮こまって景色を見ないようにしていた。

わたしにはわかる。

この胸の内に渦巻く、醜くて真っ黒なものが。

ガイアスマジカッコイイ（＾o＾）
アルヴィンをダンザイしろー！（笑）
ティポはイイキャラしてますよね！
ヴェリテは、ね、なんかもう怖い

わたしは怖くなったのだ

あれほど自分が人を

遠ざけていたにも関わらず

大切な人ができると

その人がわたしの前から

いなくなってしまうことが

空中滑車に乗り、広場まで逃げてきたわたしたち。そこで待ち受けていたのはさつき謁見の間で出会ったプレザだった。わたしは、キッ、と彼女を睨み付ける。

「私を置いて先に行くなんて、そんなやつ滅多にいないわよ」

「プレザといったな。まさかガイアスの部下だったとは」

どうやらミラは彼女と知り合いのようだった。そう言えばそんな話を聞いたような気もする。確かキジル海瀑であつたとかなんとか。

「イル・ファンを脱出した私たちは、始めから狙われていたわけか」

「ニ・アケリアじゃ、アルが陛下にあなたたちの情報を売ったのよ」

プレザの言葉に疑問を持つ。じゃあバカにわたしとミラを頼まれたってのもウソで、ア・ジュールのスパイとしてついて来ていたってこと？

「アルヴィンは…最初からあなたたちの仲間だったんだね」

「やめて。あんな男…仲間でもなんでもないわ」

『アルヴィンとどついう仲……？』

「……ふふ、私たちの関係はご想像にお任せするわ」

その口振りでわたしのイライラは頂点に達しかけ、袖に隠している武器を強く握りしめた。

「アルは組織を渡り歩く、根無し草の一匹オオカミよ。誰にも心を許さない。信じた方が悪いわ、お嬢さん」

違う。違う違う違う。確かにアルヴィンはウソばかりだ。でも人嫌いだったわたしを受け止めてくれた。導いてくれた。ちょっとだけだったかも知れないけど、レティシャさんのことだって話してくれた。わたしに心を開いてくれた。

「戦になればクルスニクの槍が、最たる脅威となるのは明白。それがわからぬマクスウェルではないだろう」

そこにウィングガルが現れ、ミラにそう言い放つ。

「お前たちの縄張り争いに手を貸すつもりはない。あれをお前たち人間が手にすれば、持っているのは悲惨な結末だけだ」

「ずいぶん、上から見られたものだな」

目の前の二人は目を細めて武器を構える。それに倣い、わたしたちも武器に手を添えたのだが、直ぐにローエンが止めに入った。

「おやめなさい。戦巧者と名高いあなたでも、その誉、剣で得たものではないでしょう。若さが見誤らせているのでは？」

「イルベルト殿。それがあなたの限界。古い。…故に間違い。……逃げ出す！」

刹那、ウィンガルの髪色が白髪へと変化する。纏っている雰囲気も先ほどとは全く違い、マナも急激に上がった。それは間違いなく増霊極の力。しかも何故が彼の言語が変わって、わたしたちには聞き取れない。

「結局戦うことになるのか」

『いまものすごくイライラしてるの。発散には丁度いい獲物だわ』

「ちょ、ヴェリテ……」

真っ黒に笑えばジュードとレイアは冷や汗を垂らす。

『レイア、手エ貸して!』

「勿論!」

真っ先にレイアと共鳴し、プレザに向かって行く。彼女は大きな本を取り出し、詠唱し始める。しかし遅い。

「? 瞬迅爪?!」

『? フラティワルツ?!!』

「! 早い……!」

プレザは咄嗟に避け、わたしたちから間合いを取る。直後、ジュー

ドの叫ぶ声が聞こえ、わたしはその場から飛び退く。さっきまでわたしがいたところにウインガルの剣が振り下ろされたのだ。

『?イラプション?!』

「!?! 無詠唱で…くっ!」

間一髪でわたしの精霊術を防ぐプレザとウインガル。その隙を逃さず、わたしは蒼破追蓮を繰り出す。だが少し浅かったみたいで、逆に彼らの攻撃を許してしまう。

「ヴェリテ、下がって!」

「?ブルースファイア?!」

『そんなもの、打ち消す!』

プレザの放ったそれにサンダーブレードをぶつけ、相殺するとわたしはレイアを振りかえる。

『やるわよ、レイア！！』

「OK！行くよ、ヴェリテ！！」

合図を交わすと、察してくれたようにジュードやミラたちが援護してくれる。その間にわたしたちは詠唱に集中し、術を放つ。

『灼熱の業火！荒れ狂う水流よ！』

「切り刻め疾風！大地よ咆哮せよ！」

『「？エレメンタルガーデン？！！！！」』

四つの属性の陣が天と地に展開する。そこから無数の四属性の光が現出し、貫くようにプレザとウィンガルを襲う。そのひとつひとつに膨大な威力があり、全てを避けきることのできなかつたふたりはその場に倒れた。

「やってくれたな……」

彼らは立ち上がったわたしたちを見据える。再び武器を構えなおすとブレザが膝に手を付きながら笑う。

「まだ…相手をしてくれるのかしら？」

『あら、まだ発散に付き合ってくれるのかしら』

「怖いお嬢さんね……」

『誉め言葉として受け取っておくわ、おねーさん』

そう言つて剣を突きつけると、ジュードがわたしを止める。微かに聞こえてくる足音に振り返れば、兵たちが広場に向かってきている。

「潮時というわけか」

わたしたちは顔を見合せて街の外へと駆け出し、そのままシャン・ドウへと戻ることにした。

なんとか無事にシャン・ドウには帰って来れたわたしたちだったが、ここにも既に知らせが届いているんじゃないかと警戒する。しかし待つてくれていたユルゲンスさんの様子を見れば、それは無いようだった。安心したわたしたちは追っ手を気にして、ワイバーンで直ぐに発てるかと聞く。

「まあ、できないことはないが：何か急ぐ理由でもできたのか？」

ユルゲンスが聞けば、ティポが口を開こうとし、それを慌てて止めるジュード。それにほっとしたのもつかの間

「急ぐ必要はなくなつたよ」

この声に固く身を強張らせる。みんなが振り向く中、わたしだけは動けなくて彼に背を向けていた。

「やつら、今頃せつせと山狩りでもしてるからな」

「お前が…？手土産のつもりか」

「土産も何も、仲間だろ、俺たち」

どうにも言いようがないものが込み上げてくる。

「なんだよ、信じられないって？お前たちが信じてくれてるって知ってる、そう言っただろ」

アルヴィンは言いながらこちらに歩み寄って来て、そしてわたしの肩をぐっと抱いた。

「まだ俺のこと信じてくれるよな？」

『っ……！……！……！』

途端に頭に血が昇り、ゴスッ！、と肘打ちを食らわす。彼はその場

に蹲って悶える。みんなそんなわたしを見てさも当然のよう頷いていた。

「つてえ…相変わらず容赦ね、え…」

振り返ったわたしを見てアルヴィンはギョツとする。彼だけではない。みんなも目を見開いて驚いていた。

『死ね』

それだけ言っただけわたしは駆け出した。

「…アルヴィン」

「また泣かせた」

「屑」

「ろくでなし」

「女タラシ」

「アル憫さん」

「っあーあーもう！わかりましたよ！！！！追いかけますって！追いかければいいんだろちくしょー！！」

あれだけのことしといて何が、信じてくれるよな？、だ。普通ああした理由と謝るのが先でしょうが。わたしがどれだけ悩んだと思っているんだ。こんなじゃ全部わたしがバカみたいじゃないか。

『アル、ヴィンのっ…バホー…』

「バホーでもなんでもいいよ。っーかこんなとこにいたのか」

ビクッと肩を跳ねさせる。なんで来たんだよ。暫く放って置いてよ。頭ではそう思ってるのに、心がそうは思っていないくて言葉にできなかった。

「……………初めて二・アケリアに行ったとき、俺は社から先にどこかに行った。その時にウィンガルと会ったんだ」

唐突に彼が話し始めた。しかしわたしは振り向かずその場から一ミリも動かない。ただギュッと拳を握りしめる。

『言い訳？聞きたくない』

「っ……あの時は色々考えてたんだ。でも今回は逆にそれが利用できると思ったんだ。ワイバーンの許可がおりたのだって、事前に話を通してたからなんだぜ」

『……』

「あの場で裏切ったフリしてなきゃ、ワイバーンも使えなかったんだよ。だからわざわざシャン・ドウとは真逆に逃げたってウソついたんだ」

そう聞いてなんとか頭では理解できた。でもわたしの本心はどう思ってるか自分でもわからない。信じられない。でも信じたい。信じていいの？そんな思いがぐるぐるとわたしの胸の中を渦巻く。やがてわたしは涙を拭いて彼を振り向き、アルヴィンのスカーフを掴んでぐいっと引っ張った。

「うおっ！？」

『ねえ、あのプレゼッてヒトは、何？』

「は、え…それは…」

『答えなきゃわたしはあなたを軽蔑する』

わたしは確りと彼を瞳に捉える。自分でもわかつてる。これは醜い嫉妬だつてこと。それでもわたしは抑えていられなかった。

「…出会いは俺がラ・シュガルの情報機関に雇われてた時だよ。あいつはア・ジュールの工員として、イル・ファンに潜入中だったけどな」

『で？』

「っ、いや、あのよ…そっからは…ちょっと」

あーあーあーそーですかそーですか。大人の関係つてやつですね。だからわたしには言えないってか。……こんな自分が嫌になつてくる。

『っ』

恋ってこんなにも苦しいものだったの。なんでこんなに想いが渦巻いているの。バカっていうか、もう惨めじゃないの。

「ヴェリテ……ごめん」

『……嫌いだ、バホー』

違う。嫌いなんてウソ。ほんとは好き。いつの間にかこんなにもあなたの存在が大きくなっていてわたしの中で割り切れないようになっていた。でもわたしには、思いを告げる勇気が全くなかったんだ。

もっと強くなりたい
もっと勇気が欲しい

想いを告げられない癖に
嫉妬だなんて、カッコ悪い

ヴェリテの嫉妬です。

嫉妬と思いを告げられない自分の弱さにかなりイライラしてます。

…怖い（＾o＾）

あんなに空高く

飛んだのは初めてで

恐かったけど同時に

その景色に見惚れてしまっていた

わたしはアルヴィンの少し後ろを歩く。わたしはどうしたいのかな。あんなことがあったのに、まだ信じたいってそう思ってる。わたしは彼を嫌いになれないんだ。色々あってぐるぐると想いが渦巻く。

「あ、ヴェリテ！」

宿屋の近くに来たとき、ジュードに声を掛けられる。どうやらみんなここで待っていてくれたらしい。エリーゼとティポはわたしの隣にいるアルヴィンをじと目で見やっていた。エリー、いつの間にそんなに黒くなったの。

『じゃ、ワイバーンとこ、行こうか』

そうやって無理矢理笑えば、ジュードたちは一発ずつアルヴィンの脛に蹴りを入れてから歩いて行った。

「おまえら…ッッ」

なんていうか、うんちよつと楽になった気がした。みんなのおかげかな。小さく笑ってから蹲っているアルヴィンに手を伸ばす。

『さ、行くわよ』

「！…おっ…」

それからワイバーンの元へ来たわたしたち。そこでハツと気づく。そう言えば今から飛ぶんじゃない。低空ならなんとかなるけど、それじゃイル・ファンにはいけないし。どうしよう。

「イル・ファンへ向けて出発するのか？」

「ああ、頼む」

「さすがにラ・シュガル王都に降りるわけにはいかないぞ。近くの街道に降りることになると思う」

それはいいとして、問題はわたしだ。このワイバーンなら使役できるかもしれないけど、なんせ空を飛ぶんだ。パニックになって使役どころではないだろう。しかし行かないわけにはいかない。

みんなの乗るワイバーンが準備ができ、わたしがギュッと拳を握った時、アルヴィンがわたしの頭に手を乗せた。

「行くか」

『は……？』

わたしが間の抜けた声を出せば、アルヴィンは一度目を反らしてからわたしを見る。

「高いところ無理なんだろう？ だったら…」

『一緒に、乗ってくれるの…？』

「…ひとりじゃ無理だろうが。守ってやるよ」

わたしはバツと彼に背中を向ける。トクン、と胸が高鳴った。嬉しかったんだ。裏切られたっていうのに、この想いだけは溢れて止まらない。

『お願い、します…』

そのまま小さな声で言えば、後ろで彼が笑った気がした。

『いやああああ!!怖い!怖い!!!!!!』

「っ、ちゃんとしがみついとけ!」

例え調教されたワイバーンだって初めから従順にはなってくれない。こんな状況じゃなかったらわたしが使役してるのに。わたしはアルヴィンに前から抱きつくような形で乗っている。景色を見ないように目を瞑っているのだが、浮遊感だけはどうにもならない。

「う、わっ!?!」

『きゃあああああっ!!!』

ぐんっ、とワイバーンが一気に降下する。ギュウツと強く彼の服を握りしめ、絶対に落ちまいとしがみ付く。高所恐怖症も本気で治しておくんだったと後悔したけど遅いわけで。

『やだやだやだ！！アルヴィンっ』

「くそっ！！！！」

目を開けられないため確認はできないが、近くからみんなの悲鳴も聞こえてくる。きっと彼らも苦戦しているのだろう。ばさ、ばさ、とワイバーンの激しく羽ばたく音がした後、やっと静かになる。なんとか落ち着いたのだろう。しかしわたしはまだビクビクと警戒している。

「ヴェリテ。目、開けてみるよ」

『っでも…』

「大丈夫だって。手、握っというてやるから」

ギュッとアルヴィンが手を握ってくれてわたしは少なからず安心する。そつと目を開けると、目の前に広がるのは真っ白い雲に青い空、天から注がられる七色の光。それは酷く美しく、幻想的なものでもあった。

『き、れい……』

「ああ……」

わたしはそつとアルヴィンを見やる。景色をじつと眺める彼の横顔に心拍数が早くなるのを感じた。こんなに密着しているため、この心臓の音が聞こえないか心配だ。願わくば、もう少しこのまま……
そう思った直後、アルヴィンが何かに気付いて雲の下に目を凝らす。するとそこからワイバーンとは比べ物にならない程の大きさの魔物が現れた。

「な、なんだコイツは!？」

『ひっ!』

「掴まれヴェリテ!!!」

『きゃあ!!!!』

アルヴィンは直ぐ様ワイバーンの綱を操り、その魔物から距離を取る。こんなところじゃまともに戦えないし、こんな状態のわたしは戦力外。

「このままじゃ落とされちゃう!」

「降りよう!みんな」

『ウソツ!?!』

「ヴェリテ!」

『わわかりましたよ降りればいいんでしょ!もう!!!』 っい
やあああああ!!!!』

わたしがしがみ直すと、ワイバーンを急降下させるアルヴィン。みんなも続くように雲の下へと降りていく。しかしその魔物はわたしたちを追いかけて来て、口から炎の弾を吐き出す。アルヴィンは綱を上手く操り避けるが、一発ワイバーンの身体に食らってしまった。

「なっ」

『ひゃあ!?!』

その衝撃でわたしとアルヴィンが乗っていたワイバーンは下へ下へ

と落ちていく。このままじゃ地面にぶつかる。そう思ったとき、ぐつとアルヴィンがわたしを抱きしめた。

「ぐつ……!!」

『わ……っ!?!』

ドサリ、と地面に落ちた。アルヴィンのお陰で痛いところはひとつもなかったが、彼の怪我が酷い。わたしを守ってくれたのは本心? それとも、また

「無事、か?」

『っ! わたしより自分のことを……!!!!』

「! ヴェリテ……!!」

振り向けばさっきの魔物がわたしに向かってくるのが見えた。とっさに防御態勢に入ったのだが、そんなわたしの前にアルヴィンが立つ。

「がつ！」

『アルヴィン！！！！』

怪我してる癖になんでまたわたしを…

「今は、よそ見してる暇ないぜ！」

「ヴェリテ！アルヴィン！！！」

『っ行くわよ、みんな！！！！』

出てきそうな涙を堪え、わたしは武器を構える。守ってくれたアルヴィンのためにも、わたしが頑張らないと。

「ヴェリテさん、力を貸しましょう！」

『助かるわ、ローエン！！』

みんなが攻撃してる中、ローエンと共鳴し、わたしたちは詠唱に入る。

『鋭き氷の刃よ』

「降り注げ！」

『「？アイシクルレイン？！！」』

空中から近くから氷の刃が現出し、魔物を襲う。さらにレイアとミラの共鳴術技が、アルヴィンの攻撃が命中し、魔物が怯む。その隙にわたしとエリーが共鳴する。

『再生の光よ集え！』

「全ての者に祈りと安らぎを！」

『「？エナジーヒーリング？！！！」』

淡い光がわたしたちを包み込む。完全とは言えないが、みんなの傷が癒されていく。アルヴィンの傷も少しばかりマシになった。しかし魔物は一向に弱まらない。わたしは彼らから距離を取り、剣の切

っ先を魔物に向ける。

『弱点付くのが一番！？セイントバブル？！！』

さっきアイシクルレインを放った時、少しばかり魔物が止まった。
ということは、水か地が弱点。しかもわたしが放った精霊術はビン
ゴ。魔物の動きを止めた。

「行くぞ、ヴェリテ！」

『ええ、ミラ！！』

それを逃さず、わたしとミラは直ぐ様共鳴術技を発動させる。

『舞い踊れ水よ！』

「荒れ狂え！」

『「？アクアウォーリア？！！！」』

殺傷力のある水が踊るように魔物を切り裂く。

『これで終わり！？ジャツジメント？！』

天からの裁きを食らった魔物は悲鳴のような鳴き声を上げて絶命した。ほっとしたわたしは直ぐ様アルヴィンに駆け寄る。

『大丈夫！？怪我は平気！？血、出てない！？』

「お、おいおい、落ち着けて巫女姫様」

『あ、…ごめん……』

慌ててパツと離れると、懐かしい声が聞こえてくる。これはドロツセルの声だ。振り向けばそこには確かに彼女の姿が。そんな彼女にエリーが歩み寄る。

「エリー…どうして？」

「ただいま…です」

「お嬢様」

「ローエン…それにみなさん！？」

ドロツセルはわたしたちを見て目を見開く。変わらない彼女を見てわたしは自然と笑みが零れる。しかし次の瞬間、ふら、とアルヴィンが体勢を崩した。気付いたわたしは咄嗟に彼を支え、顔を覗き込む。

『アルヴィン！やっぱり…っ』

「大したことないと思ったけど…キツイわ」

『っ！なんで無茶したの！！！！』

「守るって、言ったからな」

『何、言ってるの、バカ…』

それからドロツセルの計らいでアルヴィンはシャル家に運ばれた。みんなのお陰でアルヴィンの怪我はなんとか治療でき、今は少し休んでいる。わたしは彼が起きるまでずっとその手を握っていた。どうしてわたしには回復術が使えないのだろう。守って怪我をした彼を見て思うのはやはりそのことだった。

お願い。

わたしを守るなら、
傷付かないでよ。

ワイバーンで暴走しました（笑）
そして叫び声が女の子になったというね（＾o＾）ノ

怖いんだ

想いを告げたら

今までの関係が

壊れてしまいそうで…

好き。それを言えたらどんなに楽だろうか。ずっとこの胸に閉ま
て置くこともできる。でもわたしの想いは大きくて、溢れそうで、
怖い。

そう言えばここはアルヴィンに思いつきり怒鳴った場所だっけ。あ
の時は本当に人が嫌いで近づくことさえまならなかった。それを
アルヴィンが変えてくれたんだ。

「よ、ヴェリテ。ここにいたのか」

『アルヴィン…』

わたしたちは傷ついたワイバーンの治療が終わるまでカラハ・シャールに留まることになった。みんないろいろ思うところがあるみたい。わたしもそのひとりだ。まあわたしの思いは今の状況では不謹慎かもしれないけど。

『もう怪我、平気…？』

「まーたそれ？もう気にすんなって。俺が勝手にハマしただけなんだし」

でも、と俯けばアルヴィンはそつとわたしの頭を撫でる。子ども扱いされてるってわかってても、なぜか凄く安心した。

「最近、精霊術の調子悪くない？めちゃくちや失敗するのよね」

「ああ。まるで精霊様がおらんようになってるみたいだねえ」

ふとそんな会話が聞こえてきて顔を上げる。きっとこれもクルスニクの槍のせい。あれがあるから精霊にも人間にも影響が出ている。

「おーい、なんでもラ・シュガル王のせいで精霊がいなくなってるんだとさ」

『ちょ、アルヴィンっ』

確かにそれは事実なのだがそれをすぐに信じる人はいない。話していた街の人亦然り。精霊はいなくならないと信じているのだ。

「精霊様はいなくならないだよ」

『急に言われて信じる人なんているかどうか…』

わたしが言えば、アルヴィンは辺りを見回しながら話す。

「俺って街の人間にも、お前たちにも信用されてねーからな」

『そんな、こと...』

ないよ、とは言い切れない。わたしはともかくジュードたちはどう思っているんだろう。……ジュードたちは、いいのかな。

「あれま、俺に助けられて、すっかり俺のトリコになったか」

『え』

「へ...？」

アルヴィンの言葉に、かぁーっ、と顔が真っ赤になるわたし。それを見て彼は目を丸くする。しかしアルヴィンは何もなかったようににわたしの頭を撫でた。

「照れちゃって、可愛いのが、巫子姫様」

『！』

そう、よね。からかわただけだし、第一わたしみたいな子供、相手にしてくれるわけない。わかってる。わかってるのに、今にも胸が張り裂けそうで。気付いたら、パシン、とその手を払っていた。

「……ヴェリテ……？」

『アルヴィンの、バカ！大嫌い！死ねばいい！』

我ながら噓つきだなんて思う。

「あ、おい！！！待てって！！！」

くるっと踵を返して歩き出すが、アルヴィンは咄嗟にわたしの腕を掴み、わたしと引き留めた。わたしは振り向かずそのまま俯く。

『……何すんのよ』

「……これ、カン・バルクでお前に渡しそびれたやつ」

『え……っ』

シャラン、と首にネックレスがかかった。それは雪の結晶の形をしていて、よく見れば細かな細工が施されていた。それに軽く触れると、太陽の光でキラキラと七色に輝く。

『アル、ヴィン……？』

「雪、好きって言っただろ？それにお前に似合いそうと思って。そのピアスとも御揃いだし」

そ、つと後ろから左耳のピアスを撫でるアルヴィン。これはドロツセルからもらったもので、いつも肌身離さずつけていたもの。確かに少し似ている。

『……なんで』

「友情の証、なんつってね」

ちよつとでも期待してただなんて、どうしようもないくらい

バカだ。どうしてたった二文字の言葉が言えないの。簡単なことじゃない。

『ありがとう、嬉しいよ』

そう言って笑ってわたしは広場を後にした。心は凄く辛くて、痛くて、悲しかった。きつとさっきの笑顔にもそれが出ていたんだろうな。

「……っ……情けねえ……！」

やがてワイバーンの治療が出来た頃、わたしは再び広場に來ていた。そこにはジュードたちが集まっていたが、アルヴィンの姿がなかった。ほんとに協調性ないよね。

「ヴェリテはどう思う」

『え…？』

ぼーっとしていたためか、話を全く聞いていなかった。

「お前はアルヴィンをどう思う。この先の戦いを共にしていいのか？」

『どーせついて来るなって言ってもついてくるのがあの人のオチでしょ。別にいいんじゃない？』

「ふむ…意外だな。お前はアルヴィンのことを好いているから共にいて欲しいと言うと思ったのだが」

ミラの言葉に、ずさっ！、と数メートル後退り、顔を真っ赤に染め上げる。何故ミラが知っているんだ。というかみんなまで頷いてるし。レイアか、とも思ったけど彼女は必死に首を振っていた。

「人は出来る限り好いている者と共にいたいと思うものだ」と本で読んだぞ、ヴェリテ」

『何の本！？』

「ふふ…後はお前次第だろうが、無理はするなよ。お前の悲しそうな顔は見たくない」

『…ミラ…』

すごく嬉しかった。こんな時なのに、あんなことがあったのに、わたしの心を知ってまで責めないしな。みんな。どれだけお礼を言っても足りないくらいだ。あとは勇気があれば一番なのだが。そんなことを思っていると、やっとアルヴィンが広場に来た。

「あれ、巫子姫様泣いてんの？」

『泣いてない。というか遅い』

「わりーわりー、生理現象だって」

『最っ低』

キッと睨み付けられいつものように笑うアルヴィン。それからわたしの胸元にあるネックレスに目を向けてからこちらに歩み寄ってきた。

「これで全員そろったな。では…」

「待つて…ください！」

ミラの言葉を遮り、エリーがローエンを振り返る。

「ローエン、友達とケンカするのー？」

「…ナハティガルがこうなってしまったのには、私にも責任があります。私は私の覚悟をもって戦います」

その目に迷いはなかった。昔からの友人と戦うのにはきつと勇氣がある。それを決めてしまふローエンはやっぱり大人だ。それからすぐに発つことになり、わたしは再びアルヴィンにしがみついてワイバーンに乗った。

『いーやー！』

「慣れるよヴェリデ…」

『無理無理無理！』

「あーもー……」

慣れたい！慣れたいんだけども！こればかりは無理だ！！昔二・アケリア霊山の頂上から落ちそうになって死にかけてそれから高いところが無理。ミラが召喚したシルフ様に助けられなかったら死んでたんですもの。

「あんま余裕ねーんだけど」

『へ？余裕？まだワイバーンに慣れない、の？』

「なんでもない」

『えっちょっきゃああー！』

急に高度を上げられてわたしは悲鳴を上げる。

「（くつつきすぎだろ……）」

ジュードたちがじと目でアルヴィンを見ていたのはまた別のお話。

やがてイル・ファン近くのバウナウル街道に降りられ、わたしは安心したように盛大に息を吐く。みんなはわたしが落ち着くまで待っていてくれて、そしてイル・ファンへとその街道を進んだ。

「ねえ、あっち！煙が上がってる！」

イル・ファンに着くなり、その現状にわたしたちは目を見開く。辺りには沢山の負傷者がいて、軍兵たちもなにか慌ただしい。そんな中、レイアが向こうの方で煙が上がってるのを見つけた。

「あっちは……」

「研究所だよ！」

『え、それって……』

「ああ。クルスニクの槍は研究所だ。行こう！」

わたしたちは急いで研究所へ向かう。そこには沢山の兵たちが倒れており、医者たちが懸命な治療をしていた。その中にはジュードの知り合いであろう人もいて、その人から研究員の中にア・ジュールのスパイが紛れ込んでいたことを聞く。逮捕しようとしたら実験室を爆発させたらしい。

「ミラ、ガイアスが動き出したんじゃ？」

「急いだ方がよさそうだな」

わたしたちはジュードとミラに続いて研究所へ入る。しかしクルスニクの槍があるう部屋への扉は固く閉ざされており、力では開けることが出来なかった。ミラは悔しそうに表情を歪める。

「すぐそこにクルスニクの槍がありながら……！」

「きつと他に方法があるよ。探してみよう」

ここが開かない限り他の方法を探すしかない。研究所内を進んでいった先で、わたしたちはとある部屋に入る。いくつもある水槽の中には人が入っており、それだけでこれがなんなのか理解する。人体

実験だ。さらにそこにはハ・ミルの村長が倒れこんでおり、苦しもうに声を荒げた後息を引き取った。彼女の最後の言葉を聞いて、ローエンが悩むように顎に手を添える。

「村の人たちが凍りづけにされるとは一体…ガイアスのところで聞いた、大精霊の力でしょうか？」

「あの状態での言葉だから、どこまでアテになるか」

凍りづけにされるといふ恐怖と、マナを抜ききられたことで精神がかなり不安定だったためその話が真実かどうかはわからない。でもそれが事実なら許せることではない。

「そうだ、あれなら…」

考え込んでいると、ふとジュードが高台の装置を目にしながら呟く。わたしたちは梯子を上ってその装置の元へやってくる。するとジュードが手際よくそれを操作し始めた。

「これで何かわかるのか？」

「槍の様子がわかるかもしれない」

そう言つてジュードは作業を続け、そして画面に槍のある場所が映し出される。だがそこには何もなかった。

「クルスニクの槍が消えている。さっきの爆発で破壊されたのか」

『でもそれなら四大様が解放されたのか死んだのかが感知できるはずよ』

「爆破されたのならば残骸が残っていてもおかしくはないはずですし」

そうなればその爆発が起こる前に運び出されたと考えるのが妥当だろうが、どこへ運び出されたのか見当もつかなかった。

「ミラ、見て！記録が残つてたんだ」

画面を見ながらジュードは言う。

「これって、エデさんの言ってたスパイじゃない？」

映し出された映像には一人の少女が映っていた。しかもミラとジュードは会った、というかこの子に襲われたことがあるらしい。さらにその映像を見続けていると、兵に見つかった彼女が何かを取り出し爆破したのが見られた。

「素性がばれて爆破したようだな」

「けど、ア・ジュールのスパイなんだよな？俺なら素性がばれたとしても、自分をこんな危険にはさらさないぜ。敵にしてみれば、死体だって貴重な情報源だからな」

それなら、とジュードは考える。見つかったのは偶然で、以前から槍の爆破を計画してたんじゃないかと。

「この方もクルスニクの槍が、ここには既にないことを知らなかった可能性がありますよね」

「となれば、今頃は運び出した場所へ向かっているか、あるいは…」

「運び出された場所を探してるね」

さっきの少女に問い詰めれば何か掴めるかと考える。爆破されてから半の鐘しか経ってないからまだこの街にいるんじゃないかと、わたしたちは彼女を探すことになった。

ミラの使命。

それはわたしにとっても大切なもの……だよ…

次はアグリアと^p^

自分で書いててアルヴィンとヴェリテの関係がもどかしいwwwwww
うああああwwwwww

悩むな

わたしは巫子なんだ

最後まで

ミラと共に

しばらく街の中を探し回っていると中央広場にある商館の近くにその少女の姿を見つけた。気付いた彼女はわたしたちを振り返る。顔立ちはあどけなく、わたしとあまり歳が変わらないように見えた。

「あんたは……！アハハハハ！ようやくあんたを殺れる日が来た！」

「恨みたつぷりのところを悪いが、聞かせてもらいたいことがある」

「アハハハハ！バーカ。答えるわけないだろ！」

なんというか…個性的な子だな、うん。するとその少女を見ていたローエンが目を細めた。

「あなた…どこかで…ひょっとして…トラヴィス家のナディア様ではありませんか？」

途端に目を見開く少女。トラヴィス家とは六家と飛ばれている貴族のひとつ。彼女はその六家のお嬢様だという。

「あたしはトラヴィスなんて関係ない。あたしは四象刃、無影のアグリアだ！」

四象刃。つまりアグリアはガイアスの命で動いているのだろう。ミラは彼女を鋭い目で見据える。

「お前はクルスニクの槍を破壊しようとしていたのだな」

「あたりだよ、アハ〜！」

「私も同じだ。つまり私たちは敵ではない。槍の運び出された場所を知っているなら教えてくれ」

ミラの言葉に可笑しく笑うアグリア。どうやら教えてくれる気は毛頭ないようだ。

「お願いよ。あなたもあんな危ないもの、壊したいって思うでしょう」

「くせえな…」

ぼつり、とアグリアは呟く。それはレイアに向けられたものだった。

「アハハハハ！決めた〜。槍を壊す前にラ・シュガルに向けて一発ぶっぱなしてやるよ、アハハハハ！」

「何言ってるの、あなた。みんな一生懸命にやろうとしてるのに、どうして邪魔ばかりするの！」

レイアの懸命な訴えにアグリアは腹を抱えて笑う。

「やっぱりくせえよ、お前！」

「何？失礼な人！」

「お前、頑張れば世の中どうにかなると思ってるだろ？アハハハハ！お前からはそんな悪臭がぷんぷんするんだよ」

どうしてだろう。アグリアの言葉が、わたしには酷く悲しいもののように聞こえた。

「がんばることはいいことじゃない！」

「うつせー、ブス！しゃべるんじゃないよー！」

「な、なによー！」

うーん、挑発に乗るレイアもレイアだと思っただけ。とりあえず、戦いは避けられない、と武器を構えたアグリアを見て戦闘態勢に入

るわたしたち。

「あんたにやられた、あの時の痛み。忘れてないからね！」

「話にならない奴だ」

『？セイントバブル?!』

アグリアの足元に大量の水泡が現れ、爆発する。彼女は咄嗟にその場から離れた。

「おまつ、いきなり何すんだよ!!!!」

『あら、手が滑ってしまったわ』

「…いい性格してんな、あんた」

にこつと笑えばアグリアは冷や汗を垂らした。そのまま地面を蹴り、彼女に斬りかかる。

『それって褒め言葉かしら』

「さあね！！！」

キーン、と剣同士がぶつかり合う。もう片方に持った鉄扇を振り上げれば、アグリアは大剣でわたしを押しやり、間合いを取る。

「ヴェリテどいて！！？巻空旋？！！」

「ハッ！甘いな！」

「？瞬迅爪？！！？三散華？！！！」

レイアが攻撃をするも、アグリアに避けられてしまう。続けざまに何度も攻撃をし、互いの武器が何度もぶつかり合う。

『援護するわ！？アグリゲットシャープ？！！ミラ、ジュード！』

「任せて！」

「助かる！！はあああっ！！」

みんなの武器に力を宿らせ、わたしは叫ぶ。レイアの攻撃を受けつつ、アグリアは軽く舌打ちをした。

「ちっ！！？ロギズ・アクセル？！！」

アグリアが地面に刺した大剣を中心に炎の渦が巻く。咄嗟に彼女からは離れたレイアたち。それに続いてアルヴィンとローエンの攻撃がアグリアを襲う。

「？レインバレット？！」

「？ブルースフィア？！！」

その攻撃から逃れたアグリアにわたしとエリーゼの共鳴術技が命中する。

『「？？」レイン？！！」』

「な…っ！！？っ、なんだ、この…ふざけた術は…っ！！！」

『あら、これも立派な戦略、よ！！！！』

わたしは彼女の大剣を弾き、その衝撃でアグリアは地面に倒れこむ。そんな彼女にミラが剣を突きつける。

「あいにく、剣は不得手でな。うっかり手がすべらないよう、よく考えて答えることだ　　槍はどこだ？」

「ちっ…！研究所の地下には秘密の通路があつて、オルダ宮につながつてたんだ」

オルダ宮とはナハティガルがいる城のことだろう。ローエンも昔はあのお城にいたことがあるみたいだったが、そんな通路のことは初めて聞いたらしい。

「まだあるのか？」

「残念。もうつぶされたみたいだよ」

「使えないか…」

ミラがそう呟いた直後、アグリアは何とも言えない動きで逃げている。まるで……いや、やめておこう。

「マクスウェル、あんたもいつかぐちゃぐちゃにしてやるからね！それと、ブス！これだけは言っておいてやる。お前がいくら努力しようが、報われることなんてないんだよ」

「どうしてそんなことあなたに……！」

レイアが言い終わらないうちにアグリアは去って行った。

「オルダ宮か……敵の本陣だな」

「ミラ」

「わかっている。まずは様子をうかがう」

それからオルダ宮へ向かうも、そこはかなり警備が手薄だった。わたしたちはその好機に乗り、正面突破をしてオルダ宮へ入った。

「増援は？」

「大丈夫みたい」

確かにあれだけ騒げばこちらに敵の視線が向くのは間違いない。それなのに辺りは、シン、としている。

「王様のいる場所なのに…不思議です」

「畏かもしれないぜ」

『…それにしてもわかりやすすぎる畏じゃなくて？』

すると今まで考え込んでいたローエンが口を開く。

「すでにラ・シュガル軍はア・ジュールとの戦いに向けて動いているのかもしれませんが」

「戦いが迫ったら王宮の守りは厚くなるんじゃないの？」

ローエンによれば、もともとイル・ファンは南北を要害によって守られてはいるが、決戦都市として作られてはならず、街の内部まで突破されれば敗戦は濃厚らしい。

「ですから、戦時下は兵の大半が街を離れ、海上の防衛とガンダラ要塞に配置されるのです」

つまり開戦が迫ってるってことだ。時間がない、とわたしたちは先に進むことになった。

『……………』

「迷っているのか、ヴェリテ？」

『ミラ……うーん、どうなのかな』

ミラに問われてわたしは悩むように下を向く。

「ヴェリテはヴェリテなのだ。巫子もなにも関係ない。お前が思うようにすればいいよ」

『……ミラ。ありがとう。なんとなくだけど分かった気がする』

「ふふ、そうやって君が笑っていてくれるならわたしは嬉しいよ」

『わたしもよ』

わたし、ミラが大切なもの。そう言えばミラはにっこりと笑って、私もだ、と返してくれた。

やがてオルダ宮内をつなぐ蓮華陣にを使ってわたしたちはナハティガルの元へ辿り着く。佇む彼はわたしたちをじっと見据えていた。

ミラ、わたしね、

ミラのためにいままで生きてきたの。

だからわたしは…

今回は短いですw

次はナハティガルとの戦闘まるまる一話なので^p^

例え力の差があつたつて

わたしは絶対に諦めない

この思いを

最後まで貫き通すから

まるで蛇に睨まれた鼠というか。それほどまでに彼の威圧感がこの空間に満ちていた。でも決してガイアスとは違う。押しつぶされるような重い空気。すべてを支配しようとしているその眼光。しかし誰も怖気づかない。

「来たか、マクスウェル……まさかあの怪我から復活するとは」

「……ナハティガル」

彼は近くにいたジランドに先に槍の元へ行くようにと命ずると、わたしたちに……ローエンに向き直る。

「イルベルト。主である儂に、本気で逆らうのか？」

「私の主はクレイン様、ただお一人だけです」

「ふん。今なら許してやる。儂のもとに戻ってこい！」

その言葉にローエンは答えない。目を伏せて小さく首を振り、改めてナハティガルを見やる。あの頃、あなたの内に見た王の器は、すっかりかげりをみせてしまった、と悲しげな表情を浮かべていた。

「ふん、儂以外に、王に相応しい者など存在はせぬ」

「まだ、わかっていないようだな。人を統べる資質とは何かを」

「資質など王には無縁。王は生まれ出ずる時より王よ」

「だから、民を犠牲にしてもいいと？」

それが自分の権利だ、と高々に腕を広げる。

「精霊も、今に支配してみせよう」

「人も精霊も、あなたなんか支配されたりしないっ！」

支配されてまで生きたいとは思わない。一生牢獄に入れられ、鎖に繋がれて生きているのと一緒に。そんなのはまっぴらごめんだ。

「小僧が…マクスウェルとつるんですっかりつけあがりおって」

「僕のことはなんとでも言ってもいい。でも、ローエンがどれだけ、あなたのことで悩んだのかも理解してあげられないの！？」

「民が悩むなど、当然！貴様らに安穩と生きる権利などない！儂のために命を費やせ！それが儂の民たる者の使命だ！」

ガンダラ要塞の時から変わらない彼の思いの言葉。それに、す、と

ミラが目を閉じ、呆れたように言う。

「救いようがないな」

「時間のムダだったようだな。今、すべてを終わらせてやる」

そう言つてナハティガルが武器を天に掲げた直後、大量のManaがその剣に渦巻いて集う。Manaが凝縮し、力が剣に宿っていく。ナハティガル曰くこれはクルスニクの槍が吸収したManaの部分転用らしい。

「私は、あなたを同じ道を歩む友だと思つていましたが…どうやらもう引き返す道はないですね」

「お前みたいに考えられたら、どんだけ楽だろうな。だけどよ、正直つきあつてらんねーわ。裸の王様さんよ」

『民を犠牲にして何が王か。民がいてこそ、国！守るものをなくして、存続するものはなにもない！』

「こんな人が自分たちの王様だなんて、信じらんない！絶対、変わつてもらつから！」

「ジュードやミラ…みんな……友達を…守ります！」

「やるぞー！敵討ちだー！」

「あなたの野望も終わりだ！ううん、ここで終わりにしなきゃ！」

「覚悟しろ、ナハティガル！」

各々武器を構え、ナハティガルと対峙する。みんなと一緒にならば絶対に大丈夫。ミラの使命のためにも、勝たなければならない。わたしは決めたんだ。

「見せてやる。リーゼ・マクシアを統一する力を！」

絶対に勝って見せるから。

『援護は任せて……？フィールドバリアー？……！』

「そんなもの……！」

わたしが掛けた補助術を破ろうと突っ込んだジュードに大剣を振り翳す。が、ジュードは容易く腕の防具で止める。自分でいうのもな

んだが、それほどまでにわたしの術は強い。

「？獅子戦吼？！！」

懐に入り込んだジュードが獅子の形の闘気を叩きつける。しかし簡単には倒れない巨体。そのまま踏みとどまり、ナハティガルは剣を振り払う。

「ぬるいわ！！！」

『これなら！？アグリゲットシャープ？！！！』

「？アサルトダンス？！」

みんなの攻撃力を高め、続いてミラが剣を振るう。力が宿ったミラの剣は少しずつではあるがナハティガルを押ししていく。その隙にローエンとエリーの魔術が放たれた。

「ぐう！！」

『アルヴィン!!』

「行くぜ、巫子姫様!」

『「? 蒼破瞬翔斬?!?!」!』

アルヴィンの剣と共に青く大きな衝撃波が地を走る。しかしナハティガルの攻撃がそれを打ち消し、そのままアルヴィンを吹っ飛ばす。

『アルヴィン!』

わたしは咄嗟に彼を振り向くが、直ぐにハッとして前を向きなおす。目の前には剣を振りかぶるナハティガルの姿があった。

「あれやるよ、レイア!」

「オッケー!」

「「? 六散華?!?!」!」

それを引き付けてくれるかのように、ジュードとレイアの共鳴術技がナハティガルに命中する。それを無駄にしないため、わたしは精霊術を放つ。

『？エアスラスト?!』

「遅い!!!」

『！ うぁッ!!!』

キンッ、と攻撃を防ぐが、威力が桁違いだったためわたしは空中へ投げ出される。咄嗟に身を翻えし、地面に着地する。瞬間、ゾクリ、とただならぬ力を感じ、ナハティガルを見る。

「王の力を見せてやる!ふん!天上天下唯我独尊!デモンズランス
!!!!!!」

ナハティガルの剣にとんでもない量のマナが宿り、彼はそれを一気に地面へ投げ下ろす。それが地面に突き刺さると、力が暴発したように辺りが爆発に飲み込まれる。

「ヴェリテー！」

『アル、っうわ！』

その爆発がわたしを巻き込もうと来たとき、わたしを庇うようにアルヴィンが前に立つ。その時、リーベリー岩孔でことがフラッシュバックする。わたしは守られたけど、油断していたせいでそれが無駄になってわたしは怪我をした。

「ふん」

嘲笑うかのようなそれにわたしはハツとする。目の前に広がる光景は悲惨なもの。わたし以外のみんなは床に伏しており、ピクリとも動かない。守ってくれた彼も、また。

「あとはお前一人だ、小娘」

『…違う。みんな、まだ戦えるわ…』

わたしは倒れているアルヴィンの頬にそっと触れる。

「そんな力、どこにもない。ただの弱い虫けら共よ」

わたしはギュッと拳を握りしめる。

『みんなは諦めてない！！諦めない限り可能性は十分にある！！
！わたしは、わたしたちはあなたに勝つ！！！』

全てを自分のものにしようなんて可笑しすぎる。人は自由でなくてはならない。誰かに無理矢理従わされて生きてるなんて、そんなの生きてるって言わない。死んでるのと同じよ。

「ならばやってみせろ！！その小さき体で儼に勝つ術などどこにもない！」

『わたしだって、みんなを守る力はあるんだから！！！！！！』

> i 3 2 2 8 4 — 4 0 6 1 <

キン、と頭の中で何かが繋がった感覚があった。そこからじわりと暖かくなってきた、わたしの中に広がる。感じたことのない、強い力。これなら…

『悠久の気高き光の使者よ！全てを浄化し、闇を飲み込め！！！？
フェアリー・ジャッジメント？！！！！』

「何！！？」

優しい光が倒れているみんなを包み込むと同時に、ナハティガルに七属性の光が堕ちる。

「ぐうっ！！！」

火、水、風、地、氷、雷、光。感じたことのないマナの渦巻き。これがわたしの、眠っていた力、なの？

『……光……』

温かい光はわたしまでをも包む。それはわたしがずっと使えたらと願ってきた回復術でもあった。みんなの傷が見る見るうちに、傷なんて最初からなかったかのように綺麗に治る。

「これは……」

「ヴェリテの精霊術、なの……？」

「温かい……」

「これ、すごい……」

「これがヴェリテさんの回復術……」

みんなが立ち上がったのを見て、ほっとすると足から力が抜ける。

「……」

『！ アルヴィ…』

それを支えてくれたのはアルヴィンだった。泣きたいくらいに嬉しかったが、今はそんな場合ではない。再びみんなが戦っている中、わたしは確り自分の足で立ち、ナハティガルを見据える。

「ただの小娘、が…ッ！！！」

『最後の最後まで諦めなければ、例えどんなに確率が低くてもその可能性は100%になるって信じてる。だからわたしは絶対に諦めない』

「そう言うこと。うちの巫子姫様は諦めが悪いからな。おたくが諦めな」

そしてわたしが目配せをすると、ローエンは小さく頷いた。

「これで終わりです、ナハティガル…！！！」

最後のローエンの攻撃がナハティガルに命中すると、彼は武器を落

とし、その場に膝をついた。

「ぐうう…バカ者どもが…：儂を殺せばラ・シュガルはガイアスに飲み込まれるぞ…」

「ですが、王とて罪は償わねばなりません」

ローエンが言うとナハティガル、ガンツ、とその大きな手で玉座を殴る。

「関係あるか！…クルスニクの槍があれば…：儂は絶対の力を……」

「ナハティガル！」

彼の言葉を遮るようにミラが叫ぶ。剣の切っ先をナハティガルに向け、彼女は凜と佇む。その姿はとても美しく、それでいて気高かった。

「人の分を超えた力は世界そのものを滅ぼす。お前も同様だ」

「くっ…」

「ミラ、待って!」

今にも飛び出していきそうなミラを、エリーが止める。彼はローエンの友達だから、ローエンに、と控え目だったが、強い意志を込めてミラに言う。それにローエンは少しだけ微笑み、ナハティガルの元へ一歩近づく。

「ナハティガル……この国には民を導く王が必要です。私もあなたを同じなのです。背負うべき責任から目を背けた」

もう一度、ローエンは彼の名を呼ぶ。

「まさかイルベルト、貴様…」

「私とあなたとで、もう一度ラ・シュガルの未来を…」

「貴様は僕の生み出した業まで背負って…」

「構いません」

ふたりの間で何かを通じ合ったのか、ナハティガルは肩の力を抜き、
少しばかり表情を柔らかくした。

「ローエン……」

なんとなく、なんとなくだけど二人はわかりあえたような、そんな
気がしたんだ。そう思った直後

「ちっ…やれ」

「はい。マスター」

突然天から氷の刃が降り注いだのだ。そのすべてがナハティガルの
体を玉座ごと貫く。思わぬ事態にわたしは咄嗟に口に手を当てた。

「誰だ！」

「まさか狙いは…！」

「クルスニクの槍!？」

わたしたちはローエンを振り向く。その前にはこと切れたナハティガルの姿。

「私は大丈夫。行きましょう」

酷く、ローエンの声がこの空間に響いた。友人を亡くすということ
はやはり辛いものだろう。そういうローエンの表情も酷く悲しみに
満ちていたのだから。

諦めないことでなにかが変わる。
信じることでなにかが変わる。

この旅でわたしが学んだ、
とても大切なこと。

ヴェリテの秘奥義^ p^
活躍?をかけて満足です(笑)

お願いだから

不安にさせないで

ただのわたしの

わがままだけれど…

蓮華陣を使つてわたしたちは槍がある場所へ辿り着いた。しかしそこには何もなかった。研究所と同じように、そこにあったはずの槍が忽然と消えていたのだ。ナハティガルがクルスニクの槍が吸収したマナを部分転用していたため、ここにあったことは明白。しかしすでに運び出されたとなれば場所の特定が難しい。ひとまずわたしたちは宮殿の外へ出ることになった。

「誰だ、貴様ら！」

城外へ出た時、見回りの兵士に見つかり引き留められる。しかしローエンの姿を見て、戦闘意志がなくなる。流石は指揮者と言ったところか。顔が広くて助かった。わたしたちがほっとしたとき、伝令の兵士が向こうから走って来て、ア・ジュール軍の進攻が始まったと告げる。

「戦争が………始まった」

しかも五万の大軍で、現れた場所はファイザード沼野だという。その言葉にローエンは声を上げる。

「バカな！どのようにしてあの地を攻略するつもりなのですか！？
靈勢は変化してないはず！」

「大丈夫なの？兵力はガンダラ要塞や海上に集中してるんでしょ？」

心配そうに呟けば伝令の兵士が、ジランドがすでに新兵器を移送中だと報告する。この伝令はジランドによるものでもあるとのことであつた。

「何やら裏がありそうだな」

「ですが、今はファイザバード沼野へ急ぎましょう」

ファイザバード沼野の南部。そこにラ・シュガル兵の作戦本部があつた。ローエンのお陰で今の戦況を確認できることになり、わたしたちは今選局図を見ている。その中にひとつだけ違うものがあつた。それはジランドが進めている戦略のための部隊だという。

「嫌な予感がしますね…」

「ああ。クルスニクの槍を使つつもりだろうが、自軍に詳細を明かさな理由が見えない」

「…クルスニクの槍はジランドという人がもっていったんでしょうか」

状況から考えればそうなのだろうが、クルスニクの槍の起動に必要な？カギ？はバカに託してあるのだ。だから槍は使われることは無いと思っていた。しかし槍は持ち出され、おそらく使用準備を進めている。それはつまり新たな？カギ？が生み出されたのかもしれない。

「ア・ジュール軍はどのようにして、沼野を行進しているのでしょうか？」

ふ、と視界からアルヴィンが消える。どうしてだろう。また不安が込みあがってくる。わたしはギュッと服を握りしめてから彼を追った。

『あ、あれ…？』

しかしアルヴィンを見失ってしまった。キョロキョロと辺りを見渡

すが誰もいない。ダメ、早くアルヴィンを見つけないと。そんな気持ちで込み上げてくる。

『ア、ルヴィン…っ！』

気が付いたら彼の名を呼んでいた。

「ヴェリテ！」

『！ アル、ヴィン…』

彼の姿を見た瞬間、少しばかりほっと安堵した。アルヴィンはそつとわたしの顔を覗き込む。

「どうした？ 顔色真っ青だぞ」

『アルヴィンが…どこかへ行ってしまうそんな気がして……追ってきたらアルヴィンがなくて…ごめん。変、よね……』

そう言つて笑えば彼は困つた顔で頭を撫でてくれる。でも不安は全く取れなくて、逆に胸が痛くなつてきた。可笑しいね。アルヴィンは目の前にいるのに。

「巫子姫様つてなーんでいっつもそうかなあ……」

『な、何よ……』

「守つてやるつて言つてんのに、どこかへ行くわけないだろ？」

『そ、それはワイバーンの時だけで……！！！！』

「俺はずつとつて意味で言つたんだけど？」

なんでこの人は期待させることばかり言うの。そんなんじゃわたしの心臓がもたない。そんなことを思いながらわたしはアルヴィンを見据える。

『アルヴィン、これ』

そう言つて右手の中指から指輪を取つて彼に差し出す。

「？　なに、指輪？」

『ミラから初めてもらったプレゼント。アルヴィンに預ける』

でも、大切なものなんだろう、とアルヴィンは受け取ろうとはしない。
わたしはふっと笑ってから手のひらにそれを乗せる。

『大切なものよ。だからあなたに預けるの』

「は…？」

『……お願い、持っていて…』

わたしが小さく呟けば、少し間をおいてからアルヴィンはそっとわたしの手のひらからそれを取った。

『ありがとう、アルヴィン』

ちよつとでも心をここに留めておきたい。アルヴィンがどんな人でもわたしは彼が好きなんだ。ほんとは今すぐにでもこの想いを告げたいって思ってる。でもこんな時だし、第一わたしはその勇氣を持ち合わせていない。わたしの心は弱くて脆いんだ。だからアルヴィンがわたしのものを持っていくだけで、ただそれだけで少しだけ近づける気がしたんだ。これから先、何が起ころうともおかしくない。もし、もしわたしが

「ヴェリテ、アルヴィン。行くよ」

『あ、うん。いこう、アルヴィン』

「……ああ」

ジュードに呼ばれてわたしたちは戦地へ向かう。彼らによると、増霊極を使えば自分たちの周りの霊勢を変化させ、沼野を突っ切るこ
とが出来るらしい。それに頼ってわたしたちは進む。

「思ったより視界が悪いね。敵がどこにいるか全然わからないよ」

「迂回して、安全なルートを探すか？」

ううん、とジュードは首を振る。時間がないのだ。このまま直線に駆け抜ける方が断然早い。

「恐れるな。今、最も恐れるべきは人間と精霊の命が脅かされることだ」

『うん、わたしたちはわたしたちにできることをやろう』

「行こう、みんな」

ミラの言葉でどれだけ助けられることか。不思議と不安や恐怖もなくなっていた。これがミラなんだ。

「クルスニクの槍を破壊する！」

わたしたちはミラに続いて走り出す。目の前に兵が現れてもわたしたちは臆さない。

「止まるな！！」

わたしたちは一気に戦場を駆け抜ける。しかしその途中でラ・シュガル兵にも刃を向けられたのだ。ジランドからの命らしい。

「くっ！結局ラ・シュガル兵と戦うのか！」

彼らの殺意は明白だった。わたしたちは仕方なく武器を構える。

「私たちが殺そうとしてます。ジランドは感情的な軍師のようですね」

「勝つために手段は選ばない。んなやつはいつもそんなもんだろ」

「戦争に勝つことのみが目的ではないのかもしれないかもしれんな」

確かにそうだ。でなければここまでするはずがない。ジランドは一体なにを考えているというのだ。

「なんか嫌な感じするよ！」

「うん、槍の元へ急ごう！」

「一気に蹴散らすぞー!!」

ミラに続いてわたしたちは戦いの中を突っ切る。両軍の間でも、わたしたちとの間にも激しい戦いが起きている。そんな中、ミラは誰よりも先に敵を斬っていく。彼女の背中を守らないと、そう思ってたわたしはミラの近くの兵たちを精霊術でぶっ飛ばす。

「てめえが死んだら、人間も精霊の命も脅かされる。どうしてその矛盾を無視していられるのかね……」

『え、矛盾……?』

「いいや。それよりちゃんと前見とけよ、巫子姫様……!!」

『っわかってる……!!』

しかしいくら振り切っても兵はわたしたちを追ってきて、進んだ先の兵にも邪魔をされる。

「まだ来るの！？つでも、僕が！」

「おい、無理しすぎじゃねえか？下がってろって！」

「できないよ！」

ジュードはミラの援護に回る。さっきから彼は少しばかり全力すぎる。わたしがミラのフォローしなくても大丈夫なくらいに。

「アルヴィンの言う通りだ。槍まではまだある」

「僕は大丈夫だよ！それよりもミラは前だけ見ていて！お願い！！」

言いながらひとり、またひとりと敵を倒していくジュード。そんな彼にミラは笑う。

「ふむ…ありがとう。私は心強い友を得た」

「他は僕がフォローするからね、ミラ！」

「お前…」

『アルヴィン！！！！』

ハッとしたわたしはエナジーブラストでアルヴィンに襲い掛かろうとしていた兵を吹っ飛ばす。そしてそのまま背中を彼に預ける。

『この調子じゃまだまだ来るわね。エリー、大丈夫かしら』

「は、はい！」

「ぼくたちだつてやるぞー！」

「ヴェリテについて行きます…！」

直ぐ後ろのエリーに声を掛ける。ローエンやレイアが彼女を守ってくれていることに安心し、わたしは前を向く。

『？ ロックブレイク？！……っダメね、一向に減らないわ』

「ちっ！うじゃうじゃ沸いてきやがって！あと少しだったのに…！」

『まるで蛆虫みたい』

「おま、いや、表現は合ってるかもしれないがそれはちょっと……」

『女の子らしくないって？上等……！』

につと笑って、前方の敵にホーリーランスを放つ。兵は一掃され、わたしたちは走り続ける。

「はあ、はあ……あとちょっとだ！」

「大丈夫ですか。ジュードさん！」

ジュードの疲労は激しいものだった。どうしてジュードがここまで頑張るんだろう。ただ巻き込まれただけの医学生ってだけなのに。

「これが戦争なんだね」

「はい。戦争は若者の命を奪い、先を生きたものを置き去りにする。若者の残すべき未来に彼らはいません」

「行こう！そんな戦いは早く終わらせなきゃ！！」

「参りましょう！槍の運ばれた丘はもうすぐです。あとひとぶんばりです！」

確かにこの戦争は止めるべきだ。例えどんなことがあっても、絶対に。

「ったく、次から次へと！！いい加減にしろっての！！」

『あら、もう根を上げるのかしら』

「んなわけねえだろ！！行くぞ、ヴェリテ！」

『遅れないでよ、アルヴィン！！！！』

大丈夫。疲れなんてどうってことない。それにみんなのフォローがある。ナハティガルと戦った時みたいに諦めなければ可能性は100%になるって信じて進む。

「もう！しつこい！！」

「レイアさん！単独で突っ込むと包囲されますよ！！」

「ミラ、このままじゃまずいよ！」

「かといって引くわけにはいかない！！なんとか押し切るんだ！」

仲間がいるから頑張れる。今までだってそうだった。だからこの状況だって乗り越えられる。

「大丈夫か、ヴェリテ！」

『大丈夫よ。ミラたちが頑張っているのにわたしだけ弱気でいられるもんですか！』

「流石巫子姫様。頼りにしてるぜ」

『任せて、アルヴィン！』

あとちょっと。もう丘はすぐそこだ。

「走れ！！！」

『これで最後！！？ジャッジメント？！！！！』

アルヴィンが叫んだと同時にみんなは走り出し、わたしがジャツジメントを放つ。天から光の裁きが堕ち、少しばかり辺りが静かになった。

『今のうちに！』

わたしたちは一気に走り抜け、先へと進む。この調子だつたらなんとかなるかも。そんなことを思いながら足を止めずに槍の元へと向かった。

ひとりひとりの力は
弱いかも知れないけど、
みんなが力を合わせたら

それは大きく、強い力となる。

ヴェリテとアルヴィンはもう早くいちゃいちゃすればいいのに
もうすぐ槍の元へ！

今のわたしたちは

止まることを許されない

聳え立つ壁があろうとも

打ち破ってみせるから

戦場を突っ切った先に四象刃の姿があった。兵たちに囲まれていたが、彼らの力は圧倒的に勝っていた。しかも全力ではなく軽く兵たちをあしらっていたのだ。あれが四象刃と呼ばれる者たち。

「来たか。マクスウェル」

気付いたウィンガルが振り返る。

「やはり戦場でまみえることになった、か。悲しい時代だのお」

「山狩りは楽しかったわ、アル」

「そいつはよかった」

そう言えばアルヴィンは彼らにウソをついてわたしたちを逃がしてくれたんだっけ。彼らには悪いけどあの時はほんとうに助かった。

「ジランドを討ったの？」

「答える義理はないな」

「ならば話を変えましょう。道を開けろ！」

「うふふ。冗談でしょ？」

ブレザの言葉に、やはりそう簡単には通してはくれない、かと小さく呟く。

「槍は破壊する。それでこの戦いはお前たちの勝利だろう。何故それで満足できない?」

そのミラの問いかけに、陛下の望みだ、とジャオが言う。彼、ガイアスにとってこの戦は通過点に過ぎないらしい。

「ここで争えば、あなたたちも命を落とすかもしれない。王を支える者がいなくなるのですよ!」

ローエンの言葉にも彼は耳を貸さない。その上ウィンガルが逆にローエンのことを責めたてる。ナハティガルの独裁を許したのはあなただ、と。

「ローエンは悪くないよ。悪いのはナハティガルだ」

「国にとって個人の是非など関わり合いのないことだ」

「…どついつと？」

「導く指導者がいなければ民は路頭に迷うだけ、と言っている」

なら、今からでもローエンが、とジュードは彼を振り向くが、ローエンは首を横に振る。

「そう簡単にはいきません。私などしょせんは一介の軍師。王にはふさわしい器が必要なのです」

ガイアスにはその器がある。そう言いたいのだろう。その証拠に彼は、民を導くための道をこの先に見出したのだという。

「槍は我らが、陛下の力として貰い受ける！」

そんなこと、マクスウェルが、ミラが許すはずはない。

「何度も言わせるな。クルスニクの槍は渡さない。どんな理由があ

ろうつも、だ！」

「ミラの…マクスウェルの思いは邪魔させない！」

『そのためにここに来た！今更引き返せるわけないでしょう！！』

刹那、ウインガルの髪色が変化する。以前カン・バルクで見たあの状態だ。本気、と言うことなのだろう。

「来るぞ！」

「じゃあねえな」

「みんな、油断しないで！」

各々武器を構えて頷く。こんなところで足止めを食っているわけにはいかない。何としても押し通る。

「娘っ子は下がるがいい！」

「下がりません！」

エリーは詠唱しながらハッキリと言う。その目に宿る意志は強いものだった。

「死んでも知らないわよ」

「酷いこというなよ」

「あなたに言われたくないわ!!」

プレザとアルヴィン。こんな時なのにどうしてもわたし嫉妬してしまふ。今は何もないと思っているのに、なんでこんな気持ちになるんだろう。でもそんなことを考えていられる程彼らの力は落ちぶれてはない。

「退いてもらうぞ！槍への道は、この手で切り開く！」

『あなたたちなんか邪魔はさせない!!』

今までにないの激しい戦闘。先ほどの疲れが出ているためか、みんなも苦戦している。もう一度あの術を使えたらと思うのだが、どう

も上手くいかない。

戦力の分散。それが目当てでわたしたちは分かれて戦うことになった。わたしはアルヴィンと共にプレザと対峙する。

『くっ！！』

「？ドラゴネス・ハンド？！」

「させるか！！」

プレザの攻撃を受け止め、わたしは剣を振るう。それをサポートするかのようにアルヴィンが銃で攻撃する。

「ヴェリテ、行け！！」

『ふっ！！』

アルヴィンが振り回した大剣を足場にし、わたしはプレザに突っ込んでいく。キンツ、とガードされれば、そのまま一回転し、地面に着地する。

「あれから強くなったのかしら」

『当たり前でしょ。でなきゃここまで来れないわよ』

直ぐに武器を構えなおして彼女に向かって走る。いつものように踊るように剣を振るい、相手を翻弄させる。プレザにはわたしの動きは捉えにくく、何度か後ずさる。

『? グランドダッシャー?!』

「無詠唱でこの威力…っ」

『まだまだ行くわよ!!--』

続けざまに精霊術を繰り出す。二対一だからといって油断はできない。周りに気を配りつつも確実に相手の体力を削っていく。

「? エアリアルバレット?!!--」

アルヴィンのフォローによってなんとかプレザの攻撃も避けられている。やがて彼女が少し体勢を崩したのを見逃さず、わたしはアルヴィンを振り返る。

「ヴェリテ！」

『アルヴィン！』

互いの名前を呼び合ってわたしたちは共鳴する。

『「？襲爪雷斬？！！」』

「もういっちょ！！」

『舞い踊れ！！』

『「？蓮舞殺撃破？」』

わたしとアルヴィンの怒涛の攻撃にプレザは膝をつく。さらにそこへアルヴィンの秘奥義が放たれる。

「? エクスペンタブルプライド?!」

飛び上がって銃を連射し、その後銃と剣を合わせて突進し、爆発を起こす。それでプレザは地面に倒れる。

チャ、と大剣を肩に担ぎ、こちらを見てウインクするアルヴィンに胸が高鳴った。ってそんなこと思ってる場合じゃない。わたしは首を振ってアルヴィンとプレザを見据える。

「悪い。遺言訊くつもりないから」

『アルヴィン...』

「.....分かったよ」

そう言っただけで突きつけていた銃を下ろすアルヴィン。それを見たプレザが小さく笑う。

「怖い怖い。そうやって、生きてくのよね。お嬢さん、そうやって

弄ばれて、いつかは捨てられるのよ」

『それでも、わたしは信じているから。信じたい、アルヴィンを。わたしを救ってくれた人だから』

「ヴェリテ……」

「…そう、あなたは」

ブレザがそう呟いたとき、ドサリ、とジャオとウィンガルが倒れるのが見えた。どうやらみんなも決着がついたようだ。連戦続きだったため、マナもあまり残っていないが言っている暇はない。

「クルスニクの槍まであと少しだ」

『…行こう』

この世のすべての人の為にあれば破壊すべきだ。わたしたちは槍の元へ走る。そこでわたしたちを待ち受けていたのはガイアスだった。

「そうか……。ウィンガルたちは敗れたか」

「やはりあなたも戦場に赴いていましたか」

「無論。これは俺の道だからな」

「答える、ガイアス」

ミラがガイアスに歩み寄り、何故クルスニクの槍を手に入れようとするのかを問いかける。

「すべての民を守るためだ。力はすべて、俺に集約させ管理する」

「それはただの独占にすぎない。結果、お前も、守るべき民も槍の力が災いし、身を滅ぼすだろう」

「俺は滅びぬ。弱きものを導くこの意志がある限りな」

す、とミラが目を細めた。

「…お前はひとつ重要な事実から目を背けている」

「なんだと？」

「お前がいくら力ある者であっても、いつかは必ず死ぬ。そのあとはどうなる？人の系譜の中でお前のような者がもう一度現れるのだろうか？」

表情は見えないがガイアスの肩がピクリと跳ねた。ミラは気にせずそのまま続ける。

「遺された者たちは過ぎたる力をもてあまし、自らの身を滅ぼす選択をする……それが人だ。歴史がそれを証明している」

「……ならば俺が、その歴史に新たな道を標そう」

振り返った彼がミラをその瞳に映した。揺るぎない真っ直ぐな瞳。確かにそこには覚悟や思いがある。でもそれは

「……ガイアス。やはりお前も人間だな」

「ふ、そうだ。人間だからこそ俺にはリーゼ・マクシア平定という野望がある。お前は、ただの欲望と捉えるのだろうか」

そう。ただの人間の欲望でしかない。それでもガイアスは貫き通そうとしているのか。

「最後だ、ガイアス。槍は渡さない。どうしても退かないか？」

「退かぬ！」

チャ、と太刀を構えるガイアスの鋭い眼光がわたしたちを射ぬく。その威圧感に負けず、ジュードがミラの隣に並んで目の前のガイアスをじっと見る。

「あなたならもしかしたらって思った…でも、クルスニクの槍だけは絶対壊さなきゃダメだと思う！」

「ええ。クルスニクの槍は悲しみを生み出すものです」

「悲しいのは終わらせないといけないんだから！」

「そうです！ミラはいつも正しいんです！」

「うん！ぼくたちはミラの味方だもんね！」

『ミラの使命の邪魔はさせない。たとえそれが、ガイアス王。あな

ただとしても!』

「まあ、そういつことらしいぜ?」

わたしたちは各々武器に手を掛ける。これ以上誰にも好き勝手はさせない。

「ゆくぞ!」

「来い!」

ガイアスに譲れないものがあるように、こちらにも譲れないものがある。わたしたちはずっとクルスニクの槍を破壊するために旅して、戦って、生きてきたんだ。

わたしはわたしの意志で、ミラと共に最後まで戦うから。

取りあえずここまで！

戦闘ネタが尽きてきた
やばいぞわたしwwww
^ p ^ p ^ p ^

大切な人たちを守りたい

わたしはわたしに

出来ることをやるだけ

気を抜いたらすぐに倒れてしまいそうだった。それほどまでにガイアスは強い。何度も交じり合う剣。これだけの人数でかかっても彼は退かない。寧ろわたしたちが押されているようなものだった。

「はぁ あぁ あぁあー!!」

『くうッ!!』

ガイアスの放った衝撃波が地を走る。なんとか持ちこたえたわたしたちは武器を構えなおしてガイアスを見た。

「たいした強さだ」

「お前たちも、さすがと言っておこう。だが！クルスニクの槍は必ず手に入れる！」

そう言って翳した太刀にマナを集めるガイアス。渦巻くそのマナに強大な力を感じた。

「さらばだ！」

来る、と身構えた時、どこからか二振りの剣がガイアスに向かって飛んでくる。すぐに反応した彼は二つとも太刀で弾いた。

「何者だ！」

『！ あれはイバルの……！！あいつツ、また何をしに……！！！！』

天にバカの使役するワイバーンを見つけ顔を歪ませる。そこから槍の元に降りたバカを見て、さらに眉間に皺を寄せた。あいつが関わるとややこしくなるんだよ。ってかなんでまた来たんだ、あのバカは。

「ミラ様！本来のお力を取戻し、その者を打ち倒してください！」

そう言うバカの手にはクルスニクの槍の？カギ？がある。わたしたちはもう呆れるしか他なかった。でもここでクルスニクの槍を起動してもいいのだろうか。何か、嫌な予感がする……

「はははっ！どうだ偽者！お前との違いを見せつけてやる！」

そのまま振り返って？カギ？を槍の起動装置に差し込んだ後、ガシヤ、と槍の先端が開かれる。

「どうだジュード！この俺が本物の巫子だっ！四大様のお力が、今よみがえる！」

『あんの、バカ！！また何を考え……！！？』

わたしが一步踏み出した時、急に体の自由が奪われた。

『う、は……っあ……これ、は……ッ……！』

体の中のマナを吸い取られている。そう感じた。周りのみんなやガイアスも苦しそうに呻く。わたしたちのマナが槍に吸収されているのだ。

『つく……は……ッ』

そのマナが槍に集まり、陣が展開される。途端に、違う、と感じた。何がとは上手く言えないけど、とにかく違う。その感覚が当たったように、槍から放たれたエネルギーは天高く打ち上げられ、バキン、

と何かが壊れる音が辺りに響いた。

『…………』

一瞬、時間が止まったような気がした。え、と呟くと今度は強い風が吹き付ける。それが止むとわたしはじつと空を見上げた。

「そんな…破られてしまった」

『ミ、ミラ…？』

ふと呟いたミラをわたしは振り返る。

「そうか…そういうことだったのか！ 槍は兵器などではなかった」

いつもの冷静なミラはそこにはいない。まるで自分が過ちを犯してしまったかのように、ミラは声を震わせる。刹那、背後で爆発が起こる。それは雲の向こうから発射された何か。ファイザード沼野

が炎に飲み込まれる。

『ふ、ね…』

「なっ…！」

再び空を見上げた時、わたしたちの目に映ったのは空を飛ぶ船。この国の技術ではこんなものあり得ない。

「どういうことだ…！」

十隻、二十隻、数えられない程の船がこの空に浮かんでいる。

「ついにやった。くくく…くはははは！」

高々に笑う声が聞こえ、わたしたちは丘の上を見やる。その姿を見た瞬間、アルヴィンが一步前に出た。

「ジランド！どうなってる」

「あれが、ジランド！？」

以前見た彼とは打って変わったその出で立ち。わたしたちは目を疑う。

「ジランド…お前！」

アルヴィンが彼に銃を向けた時、氷の刃がアルヴィンを襲った。これってナハティガルの時にも

「ハ・ミルをやったのは貴様らか？」

「そう俺の精霊、このセルシウスがな」

ジランドは何かを取り出し起動させると、そこから精霊が現れる。

感じるその力はまさに大精霊クラスのもの。

「精霊セルシウスだと……？そのような名、聞いたことも……」

セルシウス。何故かその名に懐かしさを持つ。いや、ミラが知らないのあれば気のせいだろう。

「我が民を手にかけて……許しはせん」

ガイアスが刀を振ろうとするが、空に浮く船から攻撃が放たれわたしたちの近くに落ちてくる。さらにそこから黒匣を携えた何人もの兵士が下りてきた。

「アルクノアのジランドさんですね？」

「ああ、そうだ。あれが例の女だ」

アルクノアと聞いたミラの目が見開かれる。

「貴様がナハティガルに黒匣を伝えたのか？」

ミラが叫ぶが、ジランドはおかしそうに笑うだけ。そしてミラを殺すなど周りの兵士に命令すると、彼らは丘の上から滑り降りてきてわたしたちに銃弾を連射する。

『うわぁッ！！』

わたしたちは黒匣から放たれた術の爆風で後ろへと吹っ飛ぶ。慌てて体勢を立て直し、わたしは前を見やる。するとミラに銃を向けるアルヴィンに氷の刃が向かって行くのが見えた。わたしは迷わなかったんだ。

『アルヴィン！』

「なっ、ヴェリテ！」

『うぐっ！！』

咄嗟に身体が動いた。ミラに銃を向けていたのに、どうしてかアル
ヴィンのことが先に頭に浮かんだ。ミラのことを守らなきゃいけな
いのにな、おかしいよね。

ドサリ、とヴェリテの体が落ちる。何故、どうして、とアル
ヴィンは混乱する。ヴェリテの大切な奴に銃を向けたのに、どうし
て自分なんかを庇ったんだ、と。

「おい、ヴェリテ……！」

「アル、ヴィン……だいじよ、ぶ……？」

「お前……っ……！」

へらり、と笑えばアルヴィンは顔を顰める。そんな顔しないでよ。
まだわたしは大丈夫なんだから。

『ほら、立てるよ……だから、っ』

ここから離れよう、と続けるつもりだったが痛みで言葉が途切れる。

「痛むんだろ。無理すんな」

『ちよつとだけ。それよりエリーを…!』

エリーの方へ視線をやれば、彼女を連れて行こうとする兵士たちの姿。エリーを助けようとミラが向かって行くが、ガイアスがミラを気絶させ肩に担ぐ。

「ガイアス!」

「お前たちとの決着はあとだ。やつらの狙いはマクスウェルのようだ。ここは退け」

ガイアスはジュードにミラを預け、見事な太刀裁きで兵士たちを蹴散らしていく。

「何をしている!退けと言ったぞ!」

わたしは、ぐっ、と体を起こす。逃げる前にエリーを助けないと。そんなわたしをアルヴィンが支えてくれる。

『アルヴィン…!』

「守るから」

『!!!!!!
…うん』

わたしとアルヴィンはエリーの元へ走る。途中、兵士が邪魔をしてきたが、アルヴィンがすべて退けてくれた。ふと、エリーの方を見ればジャオが彼女を助けており、それを見たわたしはほっと胸を撫で下ろす。さっきまでは敵だったというのに、なぜか今は敵意も何も感じなかったのだ。

「ヴェリテっ!」

『もう少し…!』

アルヴィンに手を引かれながらわたしは走る。ズキズキと痛む身体を気にしている暇なんてなかった。

『エリー！』

やっとたどり着けば、血を流すジャオがいて、エリーは彼を見て涙を流していた。

「エリーゼのこと、頼んだぞ」

その目は酷く優しく、そして悲しそうでもあった。わたしは無意識に一步下がる。これは拒絶反応で、ではない。死に対する恐怖でわたしは後ずさっていた。

「ヴェリテ」

ぐっ、とアルヴィンがわたしの肩を抱く。犠牲なんていや。でも、それでもあの目はもう覚悟をし切った目だった。わたしたちにはど

つすることもできない。

『行こう、みんな…』

わたしたちは走り続ける。ここから逃げなきゃ。なんとしてでも。
そんなときだった。

『え…っ』

ぐらり、とわたしの体が傾く。地面が崩れ、わたしはそこに落ちようとしていた。

「……！ ヴェリテ……！」

『アルヴィン…っ』

気付いたアルヴィンが手を伸ばす。届け、とわたしも精一杯手を伸ばした。奇跡的にその手は届き、彼の手としっかり繋がった。しか

し崩れた地面の周りは脆く、アルヴィンのいた場所も一気に崩れ落ちてしまった。

「ちっ！」

『！』

流沼に吞まれる刹那、アルヴィンがわたしを庇うように強く抱きしめた。

守ると言ってくれた、
あなたの言葉が優しかった。

次はイチャイチャさせる予定
あくまで予定（＾０＾）ノ

どうしてわたしをそんなに

優しく、強く

抱き締めてくれるの…？

ザパツ、と水面から上がるアルヴィン。その手には気を失ったヴェリテが抱かれていた。いつも結っている髪は解け、長い髪が濡れた頬や身体にへばり付いている。どれくらい流されたのだろうか。この地帯は気温が低く、雪も降っている。早く、早く、とアルヴィンは歩を進める。このままじゃ凍え死ぬ。どこか寒さを凌げる場所は、と冷原を歩き続ける。ぐったりとしたヴェリテの顔は青白く、体は冷たい。

「くそッ……!!」

そんなアルヴィンの前に魔物が現れる。ヴェリテをぐっと力強く抱きしめ、アルヴィンは銃を構えた。

「邪魔……っすんな!!!!!!」

急げ、早く、と頭の中で警鐘が鳴る。あの戦いで体力もマナも消費しきっているヴェリテだ。危険な状態の彼女をいつまでもこんな寒い中に晒しておくわけにはいかない。

「……っ……あそこ……!」

しばらく冷原を歩き続け、ひとつの洞窟を見つけた。洞窟ならば寒さを凌げる、とアルヴィンは負担を掛けないようにヴェリテを確り抱え、そこへ向かって駆け出す。

「ここなら…なんとか…っ」

少し奥へ行ったところでヴェリテをそつと地面に下ろし、寒くないように自分のコートを掛ける。しかし火も何もない氷の洞窟はそれでも冷え、水で濡れた体は急激に体温を奪って行く。

「ヴェリテ……」

彼女を自分の膝の上に乗せ、ギュウ、と強く抱きしめる。触れ合う頬は冷たくて、本当に生きているのかってくらいヴェリテの顔は青白い。死なせない、絶対に。願うようにアルヴィンは彼女の手に分の手を絡める。

「目、覚ませよ……」

そう言って額にひとつキスを落とせば、繋がれた彼女の指がピクリと動く。ゆっくりだが、薄っすらと目を開けるヴェリテ。

「ヴェリテ、俺のことわかるか？」

『……ア、ル…ヴィ…？』

途切れ途切れに紡がれた名に、少しばかり安堵する。彼女は寒さに身じろぎ、アルヴィンに体を寄せてきた。

『寒、い……』

「悪い…こんなところしか見つけれなかった」

頬に張り付いた髪を退けてやり、そつと頬に手を添える。辺りには焼けるものは何もなく、火を付けるものさえない。あるのは互いの体温のみ。

「嫌かも知れないが、温まるまでこうしておくから」

『……嫌じゃ、ないよ……』

ヴェリテはそう言って力なく笑う。小さく、嬉しい、と聞こえたのは気のせいだろうか。

『じじ、どじ…』

「さあな…ずいぶん流されたみたいだけど…」

『わたしたち、だけ…?』

その質問に頷けば、悲しそうに眉を下げるヴェリテ。アルヴィンはヴェリテを安心させるように優しく微笑む。

「あいつらなら大丈夫だろうよ。信じようぜ」

『そう、ね……』

まだ弱弱しい彼女の声。眠ってはいけまいと思っているのか、ヴェリテが何度か目を瞑ったり開けたりを繰り返している。

「寝てろ」

『でも……』

「俺がずっと傍にいてやる」

『……うん』

囁けばやがて、すう、と寝息を立てるヴェリテ。少しでも温まったのだろうか、先ほどより顔色は良くなっていた。

「お前はまだ、こんな俺を信じてくれるのかよ……」

ぽつりと呟いた言葉は誰にも聞こえることなく消えた。

夢、だったのかな。目を開けるとそこにはアルヴィンの顔があつて、彼の腕はわたしを力強く抱きしめていて、大きくしっかりとした手

はわたしの手と絡まっでいて。トクン、トクン、とアルヴィンの心臓の音が間近に聞こえていた。

『ん、う…』

身を刺す冷たい空気。思わずわたしは目を覚ます。ぼんやりとした視界を直そうと、何度か目を瞬きさせる。すると段々とはっきりしてきて、一番にアルヴィンの顔が瞳に映った。

『ア、アルヴィン…！？』

まるで夢で見た状況。いや、夢ではなかったのだ。確かにアルヴィンは目の前にいて、抱きしめられていて、手と手は繋がっている。少し違うのは彼が寝ていること。

『…そうか』

わたしは流沼に落ちて、それから多分この近くまで流されてアルヴ

インがここまで連れて来てくれた、んだろう。絶対迷惑かけたわよね、と思ってそつと彼の顔を覗きこむ。

『アルヴィン…』

もうちょっといいかな、とわたしはアルヴィンに身体を預ける。こっぴどいっているとすごく安心する。でもドキドキが止まらない。もっと、触りたい。

「…ヴェリテ…？」

『！』

やがて上から声が聞こえてきたと思えば、アルヴィンが目を覚ましていた。わたしが慌てて離れようとする、ぐっ、と抱きしめる力を強くされ、それは叶わなかった。

「大丈夫か…？」

『う、うん…大丈夫…』

心臓の音が早い。わたしが小さく頷けば、腕の力は緩くなる。ほつとしたのだが、どこか残念な気も、……する。そんなことを思いながらもわたしはそつと彼から離れた。

『アルヴィンこそ…大丈夫なの？寒かったんじゃ…』

自分にかかっているコートに目を向けてわたしは言う。すると再び力強く抱きしめられた。急なことにわたしは目を見開く。

『ア、アルヴィン！！？』

「こうやってお前を抱きしめていたからぜーんぜん平気」

『う、え、あ、その、えつと……ッッ！！！！』

今までこんなことなかったからどうしていいかわからなくてパニックになっていた。とりあえず心臓がバクバクと脈打っていて顔がすごく熱くなるのが分かった。

「悪い悪い。ヴェリテ、歩けるか？」

『っわ、わたしは大丈夫…』

「なら少しこの中を歩こうと思う。ここにいてもどろろすることまできねえし、どうせならあいつらを探さねえか？」

『…そうね、それがいいかも』

確かに立ち止まっていたって何も始まらない。前に進む方が何倍もいい。わたしはコートをアルヴィンに返し、ゆっくり立ち上る。

『あれ、髪…』

ふわり、と長い髪が頬を撫でる。今気づいたけど髪留めがなくなっている。鬱陶しいけど仕方ないか。それにこの寒さじゃこの方が少しは暖かいし。

『じゃ、行こうか』

「おう…（何も聞かねえのかよ…）」

わたしたちは奥へ奥へと進む。洞窟の中はシンと静まっていて、たまに魔物の啼く声が聞こえてくるくらい。こっちの道であっているのかな、と思い始めた頃、わたしたちは広い空間へ出た。そこにはジュードとエリーとティポ。それに見慣れない女性がいた。

「ヴェリテ！」

気付いたエリーが一目散にわたしに駆け寄ってくる。わたしは彼女を受け止め、ぎゅう、と抱きしめた。

『エリー！よかった……無事だったのね』

「ヴェリテも…無事でよかった、です…」

「心配したよーヴェリテー！！」

ふたりの言葉が嬉しくてわたしは小さく微笑む。ティポに噛まれたけど、まあいつものことで。ここにいることはみんな流沼に

呑まれたのだろう。なんというか、わたしの仲間は幸運の持ち主たちだと思った。

「アルヴィン…」

「よ、優等生。君は会うたびに美人を連れてるな」

その言葉にムツとしながらもわたしはジュードの隣にいる女性に目を向ける。するとジュードは今までの経緯を話してくれた。彼女はミュゼといい、ミラの命令でジュードのもとへ来たらしい。それからジュードもこの洞窟へ入り、エリーと出会ってここまで来たんだろっだ。

「しかし、精霊ってのはみんな美人か？」

その辺にあつた石を投げてやった。勿論気づかれずに。見事頭に当たったそれはなんともいい音がした。

『あら、どうしたのアルヴィン？』

「いや、なんか頭に石が…」

「ヴェリテ……」

ジュードにはバレていたみたいで、わたしはアルヴィンに見えないように舌を出す。しばらく気にしていたアルヴィンだったが、やがて何もなかったようにミュゼを振り返る。

「よろしくな、アルヴィンだ」

『ヴェリテよ。よろしく』

「はい。こちらこそ」

なんだろう。あんなことがあったからかな。ちょっとしたことでもなんか…まあ、何もないし…いい、のかな。

「とにかくもつと先に進むか。他の連中も無事に逃げてるといいんだけど…」

『なら、行こうか』

「あ、ああ……」

わたしがにつこり笑って言えば、アルヴィンは少し眉を潜めてジュードとエリーを振り返る。

「ヴェリテが何も聞いてないのなら僕たちも何も聞かないよ」

「なんだそれ……」

「最初にヴェリテが聞くべきなんです……！ヴェリテが何も言わないなら……わたしも、何も言いません……」

『あはは、なーに言ってるの。聞きたけば聞けばいいのよ？わたしは耳を塞いでおくから』

聞かないんじゃない。聞きたくない。その気持ちをわかってくれたのかジュードたちは首を振った。ほんとうは聞かなきゃいけないことなんだろうけど……ここを出るまでに考えておくか。

やがてわたしが歩き出そうとすると、エリーが控え目気味にわたしの服の裾を引っ張った。

『どうしたの？』

「ヴェリテ…ヴェリテは…どうしてジャオさんがわたしを死んじやつてまで助けてくれたか、わかりますか…？」

『…わたしの答えじゃきつとエリーは満足できないかもしれないかもしれないよ？』

わたしの言葉に、でも、と俯くエリー。困ったわたしは小さく息を吐いてから話し出す。

『…そうね。罪悪感、責任感…そういうものもあったかもしれない。でも本当にエリーを守りたかったから守ったんじゃないのかしら』

「そう、なんでしょうか…」

『さあ。いまはもう、憶測でしかものを言えないから』

そう言って苦笑いすると、エリーはわたしだけに聞こえるくらいの声で謝った。そんな彼女の頭を数回撫でる。

『行きましようか、エリー』

「はい…」

「エリーゼ…元気出してよー…」

立ち止まるエリーの手をそつと取り、みんなが無事であることを願って、わたしたちは先を目指した。

夢じゃないと知ったとき、わたしは凄く嬉しかったんだ。隣に彼がいる。それだけで心が温まった。

イチャイチャ?させてみました(^o^)
取りあえずは満足してます(^o^) /

わたしはまだまだ

知らないことばかりで

ちゃんとミラの役に

立っているんだろうか…

洞窟を出て、ザイラの森を抜けた先に教会があつた。その近くにはカン・バルクの城がある。成程、こんなところまで流されていたのか。じつと城を見上げてた時、後ろからわたしたちを呼ぶミラの声がした。わたしは弾けるようにそちらを振り向く。

『ミラ！』

わたしとエリーは直ぐにミラに駆け寄り、抱きつく。よかった。ミラたちも無事だったんだ、と安心したわたしはそつと離れてミラと笑いあう。そんな中、ミュゼがミラに話しかける。

「ミラ」

「む？誰だ？初めて見る者だが…」

わたしはその言葉に疑問を持つ。ミュゼはミラの命でジュードのところへ来たと言っていた。そんな彼女はミラの姉だと名乗ったのだ。それなのに会ったことも、話したこともないなんておかしすぎる。ミラだって姉なんていないって言ってるし。かなり矛盾しているよ
うな…

「どういふこと、ミュゼ？」

「私も話をするのは初めてです。けれど私たちは同時にこの世に生を受けた精霊であることは事実」

『確かにあなたは精霊。でも、言葉だけじゃあ姉の証明にはならない』

わたしが言うと、ミュゼは笑う。

「うふふ。そんなに警戒しないで。姉と偽ってミラを騙す意味など精霊にはないでしょう。だってミラはマクスウェルなのだから」

『どうかしら？マクスウェルだから、ってこともあるわ。人間がミラを狙うように。隙を狙って…バーン、なんてね』

銃を撃つ真似をして言えば、少しばかりミュゼとわたしの間の空気が冷えた気がした。にっと笑ったわたしは次にジュードを見やる。

『ジュード君はお人好しだからねー。すぐに誰でも信じちゃうから』

「それは……」

『ごめんなさい、冗談よ。…まあ考えてみれば、得なんてないかもしれないわね』

でも、とわたしはミュゼを改めてみる。警戒しておいてそんなことは無い。それはわたしの専売特許だ。いざとなったらわたしがミラ

を守ればいい。

「ふむ……では、なぜ、ジュードの前に現れた？」

「うふふ、あなたの彼を思う強い感情が私を彼のもとに召喚させたのよ」

「そんなこと……あるのでしょうか？」

エリーが不思議そうに問いかけると、どうだろうか、とミラは呟く。

「確かに私も、夢で声を聞いたりはするが……」

そこまで言った時、教会の扉が開き、ウィンガルが現れる。わたしたちは咄嗟に身構えるがウィンガルには戦意がなかった。

「話はあとにしておこう」

ウインガルがわたしたちに告げた時、城から鐘の鳴り響く音がした。直後、ここまで聞こえてくるように、ジランドの声が街に響き渡る。その演説は演技だと思わざるを得ないほど胡散臭かった。

「ふざけた男だ。ジランド…。黒匣などを使って人や精霊に害をなしながら！」

「…もう、あの者たちを討つしか道はないのではないかしら？」

ミラは頷く。しかしどうすればいいのだろうか、とアルヴィンを振り返る。彼は腕に鳥を止まらせ、手紙を読んでいた。

『きっと今の彼に聞いても何も答えてくれないでしょうね』

「ヴェリテ…」

『いいの。…大丈夫』

本当は全部知りたい。アルクノアのこと、アルヴィンのこと。でもいまのわたしには彼からすべてを聞き出す術なんて持ち合わせてはいない。待つしかないんだろう。

「ガイアスはヤツらに抗うのだろうか？」

ミラがウィンガルに問いかけるが、彼は黙って背中を向けて教会の中へ入って行った。

「誘っていますね…わざと私たちの前に現れるとは」

「僕たちを試しているの？」

「畏…とか？」

レイアが心配そうに言う。けど、畏だとしたら分かりやすすぎではないだろうか。そう思っていると、わたしの隣にアルヴィンが並んだ。

「…行こうぜ。ケリつけるんだろ？」

その声色にはいろいろな感情が混ざっていた。怒り、悲しみ、不安、

苦しみ、焦燥、嫌悪、後悔、虚無。気のせいだと思いたかったが、
そうもいかない。わたしはそつとアルヴィンの顔を覗きこむ。

『アルヴィン？』

「もう裏切らない…約束する」

「……信じろというのか？」

ミラの目が細められる。

「ジランドは許せねえ。頼む……俺にジランドを殺らせてくれ。次
にもし裏切ったら、迷わずお前の剣を俺に突き立ててくれてもいい。
だから、俺も一緒に行かせてくれ」

ふ、とミラの視線がわたしに向けられる。その瞳はわたしに決める
と言っているかのようにだった。

……わたしは信じたい。確かに今まで散々裏切られてきた。でも、
それでもアルヴィンはわたしを助けてくれた。わたしの言葉を、み
んなの言葉を信じてくれた。だからわたしも、信じる。そう決めた
わたしは小さく頷く。

「……いいだろう」

「悪い…サンキュな」

そう言って背を向けるアルヴィン。ミラがわたしに決めさせてくれたのは嬉しかった。わたしが彼を好きだということも知っていてという気遣いからかもしれない。けどそれ以前にミラは、わたしが迷っていたことも、きつとお見通しだったのだろう。だからわたしに任せてくれたんだと思う。

「さて、ガイアスたちの思惑も確認せねばな」

そう言っミラはわたしの頭を撫でてくれた。ちゃんとわたしのことを見てくれてるミラが、わたしは大好きだ。ちゃんとわたしのこ

そしてわたしたちは教会の中に踏み込んだ。そこにはガイアスとジヤオが抜けた四象刃の姿があった。

「来たか」

わたしたちを見てガイアスが呟く。相変わらずの威圧感に少しばかり押される。そんな中、ウィンガルがアルヴィンへと視線を向けた。

「……結局その男を信じるというのか。意外と甘いな。マクスウェル」

『あなたにどうこう言われる筋合いはない』

「ふん……」

アルヴィンだって大切な仲間。いままでわたしたちを何度も助けてくれたんだ。信じて何が悪い。

「私たちをここへ導いた狙いはなんだ？」

「我らはヤツらと雌雄を決すべく、立つ。お前たちが勝手にヤツらに挑むというのならそれはそれでいい」

「だが、その前にお前には話してもらっぞ。お前がひた隠しにしてきた断界殻のことをな」

聞き覚えがない言葉にわたしたちはミラを見る。巫子であるわたしにもない。断界殻とは一体：　じつとミラを見ていると、彼女は決心したように目を瞑り、息を吐いて天を仰ぐ。

「今から二千年前：このリーゼ・マクシアはわたしの施した精霊術、断界殻によって閉ざされた世界として生まれた」

つまりこの世界はミラにつくられた世界、ということなのだろうか。ミラはそれを精霊と人間を守るためだったと言う。

「閉ざされた、といったな。それでは断界殻の外にはまだ世界が広がっているというのか？」

「うむ。その世界をエレンピオスという」

『エレンピオス……』

もしかしてアルヴィンが懐かしそうに空を見上げていたのは、断界殻の向こう側にあるそのエレンピオスが自分の故郷だから…？

「だが、クルスニクの槍について私は大きな思い違いをしてしまった。やつらはナハティガルに兵器と伝え、謀り、断界殻を打ち消す装置をつくっていたのだ」

「打ち消すだと……？それに何の意味がある？」

ガイアスの問いにミラは、わからない、と首を振る。

「断界殻を打消し、エレンピオスにマナを還元する算段でもしていたか……」

「ちがう……」

ぽつり、とアルヴィンがそう呟いた。みんなは彼を振り返る。

「アルクノアはただ……帰りたいただけだ。生まれ故郷のエレンピオスにな」

『帰りたい、かった……？』

「この世界に閉じ込められた二十余年…そのためだけに動いてきた。断界殻をぶち破る方法を見つけるか、断界殻を消すか……」

やっぱりアルヴィンは向こうの世界の人間。不意にそう思った。そのアルヴィンの言葉にミラが続けるように話し出す。

「断界殻を消すためには生み出した者を排除しなければならない」

「…アルクノアがミラの命を狙ったのはそのためだったんだね」

黒匣を壊していたからじゃなかったんだ。わたし、十六年もミラと一緒になのに何も知らなかった。知りたかったのに。

「解せんな…ジランド、何を企んでいる？」

「え、どういうことですか？」

ガイアスの言葉にエリーが首を傾げる。アルクノアの目的とジランドの行動はそぐわないのだ。本来の目的のためならエレンピオスか

ら軍を呼び寄せる必要なんてなのだから。

「リーゼ・マクシア統一…？俺たちは…そんなことを望んじやない」

『アルヴィン…』

きつとアルヴィンもエレンピオスに帰りたかったただけなんだ。
帰る。その言葉にチクリと胸が痛んだ。

「ジランドは断界殻がある今の世界のあり方を、何かに利用しようとしているのかもしれないな」

ウィンガルの言葉に、バツ、とアルヴィンが何かを思いついたように顔を上げる。

「そうか、異界炉計画だ…」

『異界炉計画？』

わたしは彼の言葉を復唱する。

「通称、精霊燃料計画。まだ俺が向こうにいたガキの頃、従兄が話していたのを覚えてる。黒匣の燃料である精霊を捕まえるって話があるってな」

精霊の罫い込み。それがジランドの狙いというわけだろうか。しかし、それはおかしい、とジュードが頭に指を、トン、とついて考え込む。

「精霊だけなら、あんなウソつく必要ない。ジランドは……」

そこまで言って、ハッ、としたジュードはわたしたちを振り向く。

「靈力野をもつ僕たちも一緒にリーゼ・マクシアに閉じ込めるつもりだよ」

わたしたちも資源とされる。ジュードの考えが正しければそう言うことだ。辿り着いたそのひとつの可能性に、バカけてる、とガイアスは顔を顰めた。

「多分ジラントは海上にあるアルクノアの本拠地に戻ってる。エレンピオス軍も来てるんだ。船で近づくにも厳しいぜ」

「では、カン・バルクに停泊している、連中の船を奪うのはどうかと」

ものすごくハッキリしてる提案だ。しかしそれしか手はないと考えるわたしたち。

「よし！明日決行する」

そう言つて彼は踵を返して奥の部屋に向かって行く。それをジュードが、一緒に戦ってくれるんでしょう、と引き留めた。だがガイアスはそれを両断する。

「マクスウェルが勝手に断界殻をつくりだし、我らをこの世界に閉じ込めている事実…これも知った以上は捨て置けん。お前たちとはまた争うことになるかもしれぬ」

『ねえ、王様。理由もなしにミラがそんなことするわけないでしょう？』

「何…」

『あなたが民を守るように、ミラだってただ守るために断界殻を作ったんじゃないの。それを勝手に作っただけの、閉じ込めただけの、文句を言いすぎではなくて？』

わたしの態度に周りのみんなはポカンとし、四象刃さえも目を見開いていた。

『ミラはただ、守りたかっただけ』

「……ふ、面白いことを言う。お前、名は？」

『ヴェリテ。ヴェリテ・ヘイゼルシーグ』

「覚えておこう。行くぞ」

そう言っで彼らは去って行つた。ふう、と息を吐けばみんなに注目されてることに気づき、わたしは少しばかり頬を染める。

「ヴェリテ…」

『あはは…だつてミラは悪くないんですもの。ね、ミラ』

「…ふふふ、ありがとう、ヴェリテ」

『まあ情報の共有させたつてことは、彼らも手が足りないのでしょうね。言い方はあれだけど、わたしたちをアテにしてくれてるのかもしれないし』

につこり笑つて言つと、みんなもなんとなくだけどわかつてくれたみたいだった。ちょっと出しやばりすぎちゃったけどね。ガイアス、怒つてないかな…

わたしもミラみたいに、
精霊も人も守れたらいいなあ。

次はラブラブさせます＼(^o^)/
早くくっつけ二人！

ちょっとしたことも

わたしはあなたを意識して

期待しちゃうの

夜、わたしはベッドを抜け出して教会の外へ出た。はらり、ひらり、と雪が舞っている。相変わらず綺麗な真っ白な景色。相変わらずこの景色がわたしは好きだ。手に雪が落ちると、体温ですぐに溶ける。それもまた儚く切ない。願わくばこの雪が、わたしの心を埋め尽くしてくれないだろうか。思いに耽って雪を見ていると、ふわり、と肩に何かがかかる。確か前にもこんなことがあったよね、と思い振り返るとそこにはやはりアルヴィンの姿。

「風邪、ひくぞ」

『そうね』

「何してんだ、こんなところで」

『雪、好きだから』

そう言つて彼にもらつたペンダントにそつと触れる。これは流されなくてよかった。友達の証、だけどアルヴィンにもらつたものだから。

「…なんでお前は何にも聞かねえんだよ」

『聞いたら教えてくれるわけ？』

彼の顔を見ず言えば、それは、と言葉を流る。わたしはそのまま空を見上げた。

『答えてくれるならとくに聞いている。聞きたいこといっぱいあるもの。でも答えてくれないならアルヴィンから話してくれるのを待

つわ
『

「ヴェリテ……」

それしか方法がないもの。そう言っでわたしは笑う。すると後ろから彼がわたしを抱きしめてきた。でも力は弱弱しかった。

「……母親が死んだんだ」

きつと昼間の手紙のことなのだろう。何かあったとはおもったのだが、まさかレティシャさんが死んだなんて。

『なんで泣かないの……っ』

「……泣けねえんだよ……」

『じゃあ、代わりに……わたしが、泣いてあげる、から……っ』

母親が死んで、ジランドにも裏切られて、きつと自分には何もない。そう思ってるんじゃないだろうか。流れる涙がアルヴィンの腕に落

ちた。

「…ヴェリテ…」

『何…わっ！』

名前を呼ばれたと思ったら、ぐるっ、と回転させられ、今度は前から抱きしめられる。今日は一体どうしたのだというのだ。ほんと心臓がもたないのですが。

「…お前、なんで俺のことそんなに信じてくれんの」

『……アルヴィンがわたしを信じてくれるから』

そう言えば、そうか、と短く返ってくる。

『逆になんでアルヴィンはわたしのこと信じてくれるの？』

「…お前が俺のことを信じてくれるから」

『何それ』

真似っただけじゃん。小さく笑えば、アルヴィンのわたしを抱きしめる力が強くなる。

『痛いよ、アルヴィン…』

「…うん…」

『子供か』

しかし好きな人にこうも密着されてはどうしていいのかわからなくなる。ってかなんでわたしなんだ。かなり嬉しんだけど。

「…あつたけえな、ヴェリテ…」

『そりゃどうも』

こんなアルヴィンを見たのは初めてで、貴重だなあなんて思いつつも、慰めるようにそっと彼の頭を撫でる。

「最初は嫌ってたくせに…なんで俺のこと嫌いにならねんだよ…」

『……嫌ってもいいの?』

「……………だから予想外の反応しすぎなんだって」

『予想外の行動する人に言われたくないわよ』

抱きしめるとか今までなかったくせに。こっちだって戸惑ってるんだから。期待していいの?

刹那、凍てついた風が強く吹く。寒いから教会の中へ入ろう、とわたしたちは正面の入り口へ向かった。

『みんな、もう寝たかしら』

「ああ、多分な…」

広間の椅子に座って話す。でも彼との距離が少し遠い。

『ファイザバード沼野から流されて、寒い冷原を歩いて、わたしたちは寒い洞窟の中、ミラたちは厚い洞窟の中を進んでここまで来たんだものね。そりゃみんな疲れてるわよね』

「その割に巫子姫様は平気だな」

『あら、これでも疲れているのよ？ただ、眠れないだけで…』

昼間の話のこととか、いろいろ考えていたら眠れなくなつて、わたしは外に出た。と言っても、考えは全然まとまらなかったのだが。

『アルヴィン』

「ん？」

『落ち着いたらでいいからさ、髪留め買つてよ』

「髪留め……？」

『今までの謝罪と反省を込めて。高いのがいい』

「おま…っわーったよ…」

えへへ、と笑うとアルヴィンがわたしの手に自分の手を重ねてくる。ビックリしていると、そのまま少しだけ距離が縮んだ。

『アルヴィ』

「黙ってる」

じっと見つめられて、カカカ、と顔が熱くなる。暗い場所だからバれないと思うが、何せこの距離だ。バレているかもしれない。

「ヴェリテのこと、絶対に守るから。これだけは約束する。裏切らない」

『……ふふ』

「何だよ……」

『知ってるよ。だってずっとアルヴィンはわたしのこと守ってくれた。それに関しては、約束、破ったことないじゃないの……だから、信じてる』

ワイバーンの時も、カラハ・シャルルの時も、オルダ宮の時も、フアイザバード沼野の時も…ううん、アルヴィンはそれ以前からわたしを守ってくれていた。変わったのだってアルヴィンがきっかけを作ってくれたからだ。それがあつたからわたしは彼に惹かれたのかもしれない。いや、きっとそうだ。でも

「ヴェリテ…」

『それにアルヴィンは、ほら…友達、だから。友達の証。ね？』

チャリ、とペンダントを指に引っ掛けて、笑って見せる。するとアルヴィンの表情が少しばかり変わった。

「っんな辛そうな顔して笑って、友達、なんて言っても説得力ねーんだよ、バカヴェリテ」

『バ…おふっ！？』

バカって何よ、と言いつ返そうと思ったのだがアルヴィンに長いスカーフを顔に被せられ、代わりに変な声が出る。その直後、スカーフ越しにわたしの唇に何かが当たった。

『…………』

思考回路が停止した。一体何が起こったのだろう。一瞬では理解できなくて、わたしは固まっていた。ボケっとしていると顔にかけられたスカーフが取られる。

『えっ？え…？』

「おやすみ、巫子姫様」

なんか妙に満足そうなアルヴィンの表情が目には焼き付いた。彼が去っていった、誰もいなくなった聖堂。パタン、と扉の閉まる音がしたあと、やっと状況を理解したわたしの頭。

『つつ………?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

言葉にならない声が出る。口を押えたわたしは顔が真っ赤になるのを感じた。

い、今のは何！？わたし何されたの！？キ…キスされた！！？いや、あれはキスと言えるんだろうか！いやいやそうじゃないって！！！なんであんなことしたの！？またからかわれたの！？

とりあえず頭の中はパニックになっていた。

落ち着け、落ち着けわたし。アルヴィンはタラシだからおやすみのあいさつなんだよ、きつと。多分こうやってほかの女の子にも……自分で言ってて悲しくなってきた。

『寝よう………』

ふらふらと覚束ない足取りで部屋に戻り、わたしは寝ることを決めた。寝たらきつと色々と楽になる。多分。そう思って意識を無理矢理闇に落とした。

翌日。眠れたのは眠れたのだが、しっかりとアルヴィンの顔を見ることが出来ない。でもアルヴィンは何もなかったように振る舞っているし、やっぱり顔が赤かったのがバレてからかわれただけなんだろうか。

「空中に停泊している艦へはどのように攻め入るつもりなのですか？」

「城に繋いであるワイバーンを使う」

ま、またワイバーン！？と思っていたのが顔に出ていたのか、アルヴィンが、ぽんぽん、とわたしの頭を撫でる。あんなことがあったばかりだからそういうことされるとほんとどう反応したらいいかわからなくなるんだけど。

「城まではどうする？」

「俺の城に向かうのに策を弄するつもりはない」

「大通りから突破する」

無茶だ、とジュードは言うが彼らは退くつもりはないようだ。

「ジュード、お前のなすべきこと、わかっているか？」

「うん。ミラを勝たせる……それが僕のなすべきこと」

その言葉にガイアスが少し笑った気がした。そして彼らは行ってしまう。教会の脇から市街に続いている道がある、と言い残して。

「教会の脇を抜けて、裏道から市街へ入り、そこからは屋根伝いで城を目指しましょう。そして、空中戦艦奪取と共に城と兵たちを奪い返すのです。彼らは揺動を買って出てくれたんですよ」

なんともわかりにくい言い回しだ。

わたしたちは苦笑いをしてから城を目指した。雪の積もった屋根の上を慎重に進んでいく。その途中、ガイアスが大通りで兵士と戦っている姿を発見する。

「みんな、伏せて」

ガイアスとウィンガルの剣、プレザとアグリアの精霊術。どれもが飛び抜けていてエレンピオス兵を圧倒する。

「ガイアス、強いですね」

「すごい人だよな」

「ジュード、後ろだ！」

「え！？」

ミラが背後の屋根の上に兵を発見すると、下にいたガイアスが衝撃波をここまで飛ばしてきて兵を斬った。あんな人と一度は戦ったなんて、すこし身震いがする。

「さ、俺たちもさっさと行こうぜ」

「うん」

わたしたちはミラを先頭に着々と城へと向かって行く。城前の広場に着けば、ガイアスたちが苦戦しているのが見えた。助けた方が、と言うレイアにミラは首を振る。

「私たちが向かえば、彼らの揺動が無駄になる。任せるしかない」

ふ、と視線を戻せば、カン・バルクの住人やアジュール兵たちがガイアスを援護しようと武器を構えてやってきていた。

「あんなに人望があるんだ」

「お前の役目は……ミラを勝たせることなんだろう？」

そしてわたしたちはワイバーンの檻のもとへとたどり着いた。一番にアルヴィンがわたしに手を差し伸べる。

「行くぞ、ヴェリテ！」

『うん、アルヴィン!!』

わたしは迷わずその手を取る。後でちゃんと昨日のことを聞かなくちゃ。あんなことされたら嫌でも意識しちゃう。ねえ、アルヴィン。わたし、期待してもいいのよね。

ぎゅっと握られた手を、強く握り返してみた。

ラブ ラブ イチャイチャ ^ p ^ p ^ p ^
アルヴィンの不意打ち成功（笑）

わたしは醜いんだ

こんなにモヤモヤしている

想いを告げることが

怖がっている癖に

どうして、嫉妬なんて…

わたしたちは空に停泊している船へと降り立つ。また叫んでいたのは言わずもがな。頬を撫でる風が一際冷たい。摩く長い髪を片手で押さえながらわたしはアルヴィンの手をギュッと握る。ここは宙に浮いているため高所恐怖症のわたしにはちよつとキツイ。ワイバーンほどではないのだが。

「艦橋を掌握しよう」

「船尾のあれじゃないか？」

アルヴィンがそれっぽいものを見つけて言うと、敵に侵入されたぞ、と兵たちが叫ぶ声が聞こえてきた。わたしたちは一斉に身構える。

「ヴェリテ。俺のサポートしろ。ちゃんと手、握っというてやるから」

『わ、わかった…！』

額くとアルヴィンは銃で応戦し、わたしは扇と精霊術で兵たちを退けていく。しかしこの少人数で乗り込んだのだ。これだけで敵をすべては倒しきれない。

「ちょっとちょっと、さすがに多くない！？」

さつきから減っているどころか増えているのだ。このままではこちらの体力が先に切れてしまう。

「二手に分かれよう。一方が艦橋でも辿り着いて、この船を地上に降ろすんだ」

わたしとアルヴィンは手を止めず、ジュードを振り返る。

「確かに。そうすりゃガイアたちの支援もある。ここの敵もどうにかなるな」

「問題は誰が行くかですね」

『それはジュードが決めて！』

精霊術を放ちながら言えばジュードは大きく頷く。ジュードは攻撃を続けながらミラに行つてと叫ぶ。そんな時、空から聞き覚えのありすぎる、笑う声が聞こえてきた。

「はーっはっはっは！俺の地獄耳で話は聞かせてもらっただぞ」

ワイバーンから飛び降りてきたのはやっぱり予想通りの人物。だがかつこ悪い着地の仕方だった。こんな奴にあの子が使役されてるなんて悲しいわ、ほんと。地獄耳っていうのもバカ的能力じゃないし。

『何だ、生きてたの。死んだかと思ったのに』

「相変わらずあいつに容赦ねえよな、巫子姫様は」

飛び起きてきたバカに呆れるように言ったが、内心は安心していただけ。ひとりになるんじゃないかって思ってたから。ひとり、か。

「おい、偽者！貴様の出番などない。ここからは俺の独壇場だ！」

「イバル！うん、お願い！」

ジュードがそう言えば、バカは目を見開いてから歯を食い縛る。

「くぬぬ……なぜ貴様は俺の活躍に嫉妬しないっ！」

「あ………なら、やっぱり僕が。イバルは見てていいから」

なんともまあいい笑顔で言うことで。案の定バカはそれに乗るわけです。

「はっ！お前に活躍の場などない。どけい！」

近くにいた兵を蹴り飛ばして、なんと艦橋の側面にある柱にしがみついて登っていく。さながらそれは

『ゴキリ』

「ヴェリテ。気持ちはわかるけどそういう発言やめろ。あとその目も」

半眼でバカを見ていたらそう指摘された。だってもう、ね。恥ずかしいじゃん。やめて、ほんと。

「ってか優等生。ずいぶん、扱い上手くなったんじゃない？」

「もう、とっさに思いついたんだよ」

この短期間であそこまであしらうなんてさすがだと思つよ、本気で十六年一緒にいるけどわたしでも難しいから、あれを操るのは。

「でも、ミラとヴェリテのこと言わないんだね」

「ジュードが気になるのだろう。それで力が発揮されれば文句はない。さて、やるぞ！」

ミラの言葉を合図にわたしたちは再び武器を構える。それから少しして、バカが艦橋を掌握したという放送が響く。兵たちも怖気ついたのかそれ以上は攻撃してこなかった。

「イバル！この船を地上に降ろして！」

「貴様に言われなくともわかってる！」

そう言って迷いながら見つけたボタンかレバーか知らないが、それ

を起動させた瞬間、甲板にあつた機械が動き出した。しかもそれはわたしたちを狙っている。

「ヤロー、何をしゃがつた！」

『イバルの、バホー！！！！』

「仕方のない奴だ…ヴェリテ」

『はい、あとでしばいときます』

キツと艦橋を睨み付けた後、みんなで協力して戦い、最後にわたしがジャツジメントを食らわせなんとか再起不能にした。ほんと、なんでこんな面倒なことになるんだ。わたしが、ふう、と溜息を吐いた直後、ガイアスたちが船に降り立った。

「ここまでだ！この船は完全に我々が掌握した」

ウィンガルが合図を送ると、ア・ジュール兵たちがエレンピオス兵たちを拘束し始める。

「ガイアスたちだけで、どうにかなったのかもね…」

ジュードはそう呟いて床に座り込んだ。わたしもまた、力が抜けてアルヴィンに支えられていた。何度空を飛んでも高いところはなれない。めっちゃ怖い。

「ヴェリテ、大丈夫だったか！」

『どこからどうみてそうおもう……！』

ガンツ、と一発鉄扇で殴ってやる。お前のせいだお前の。あれがなければもっと早くこの船を下りられたものを。バカはこぶができた額をさすりながらわたしを支えているアルヴィンに目を向けた。

「おっお前！ヴェリテから離れる！！なんて破廉恥な……！」

「いや、破廉恥も何も肩抱いてるだけなんだけど。そうしないとヴェリテ立てねえし」

「ならば俺が変わる！来い、ヴェリテ！」

『え、イヤ』

キッパリそう言えばバカはショックを受けたようにわなわなと震えだす。

「なんでだー！！！！」

『暑苦しいあんたよりアルヴィンの方がいい』

「俺のどこが暑苦しい！俺はいつでもクールだろうが！！！」

『ねえコイツもうこっから落としていいかな？いいよね？答えは聞いてないけど』

「落ち着けヴェリテ。どうどう」

このシスコンめ。お前にもジャツジメントを食らわせてやろうか。そんなことを思っていると、作戦成功だ、と言うガイアスの声が響き渡った。やっと船を降りられる。

「頑張ったな、ヴェリテ」

え、と上を向くと同時に額にキスされるわたし。

「お、おまつ…お前！！ヴェリテに何をsあべしつ！！！」

とりあえずうるさいバカを黙らせてからわたしは顔を真っ赤にして俯いた。これは子ども扱いされただけよね。ご褒美のキスとかそんな感じで。…アルヴィンの本当の気持ちかわからない

あの後船から降りたわたしたちはカン・バルクの城に来ていた。無事城も取り返せたみたいでよかった。流石はガイアス率いるア・ジュール軍。出発までには時間がかかるらしく、わたしたちはそれまで休むこととなった。

『アルヴィン、どこかな…』

それからずっと彼を探し回っているのだが、まったく見当たらない。多分城からは出ていないと思うんだけど。そう言つて中央をうろろしている、ひとつの通路にアルヴィンの背中を見つけた。

『アル…っ！…！…！』

しかしプレザの姿を近くに見つけてわたしは慌てて柱の陰に隠れた。あ、あれ？何してんだろ、わたし。

「よ、ぶらぶらしてていいのか？」

アルヴィンからプレザに声を掛けたみたいだった。それでわたしはそこから動けずに立ち尽くしていた。

「そうやって気安く話されると、気分悪いんだけど？」

「怒るなって、ひさびさにこうやって一緒に戦ってるんだからよ」

わたしはギュツと拳を強く握る。やっぱり二人は一緒にいたことがあるんだ。何も話してくれないからわかんないよ、アルヴィン。

「あなた……いつか殺してやるわ」

「物騒な話すんなって、また、前みたく仲良くやろうぜ」

ズキン、と胸が痛む。なんでそんなこと言っの。仲良くって、どういう意味。

「あなたのおかげで、私の仲間が何人死んだか忘れたのかしら」

「……………昔の話はよそうぜ」

「私だって、敵に捕まって……どんな目にあっただと思ってるのよ……」

どうしよう。アルヴィンが遠くに感じる。ドクン、ドクン、と胸が脈打って、今すぐここを離れたいのに動くことが出来ない。

「あの頃はあなたのいる場所が私の居場所だった……二度と、私に期待させないで……もう……捨てられるのはゴメンよ」

なんとなく悲しそうなプレザの声色。ああ彼女もアルヴィンのことが好きだったんだ。……嫌だ。取られたくない。

「プレザ。すぐに来てくれ。ラ・シュガル兵との編成について意見が欲しい」

「ええ、行くわ」

プレザはウィンガルに呼ばれて行ったみたいで少しばかりほっとした。でも、それでもわたしはそこを動くことが出来なかった。

「仲間に頼られちゃって……あるじゃねーか。居場所……」

アルヴィンのその寂しそうな声を聞いた瞬間、何かが込み上がって

きて、わたしはそこから駆け出した。その足音でアルヴィンが振り返ったのに気付かずに、わたしは城の外へと飛び出す。

わたし、やっぱり醜い。ただ話してただけなのにわたしは嫉妬していた。それに、期待して、捨てられる、というプレザの言葉が脳裏に焼き付いて離れない。わたしもきつと期待だけして、この想いも告げられず、ただ儚く消えていくんだ。

「ヴェリテ！！！！」

今のわたしを誰にも見せたくなくて街の裏道に入り込もうとした時、パシッ、と腕を掴まれる。振り向かなくてもわかる。アルヴィンが追いかけてきたんだ。

「は…、はっ…お前…さっきの聞いて、たのか…？」

息が切れている。全力で走ってきたんだろうか。

「おい、ヴェリテ」

『何で来たのよ』

つい、そう口走ってしまった。息が切れるほど全力で走って追いかけて来てくれたのが嬉しいのに。胸の内に渦巻く黒いものがわたしを惑わす。

「何でって…お前が逃げてくように走っていくから……って、とりあえずこっち向けよ」

『嫌。放って置いて。わたしに触らないで』

うん。追ってきてくれてありがとう。すごく嬉しい。そんな簡単なことがなんで言えないんだろ。思ってもいないことがどんどん口から出てくる。

「んなこと言っただってな…」

『アルヴィンはいいわよね、いつも気楽で』

「は…?」

『へらへら笑って、裏切ったと思ったならノコノコと帰ってきて何もなかったようにまた笑って、それでまた平気でわたしたちを裏切って！……！』

違う。違う違う違う違う。そんなことを言いたいんじゃない。なんでアルヴィンを傷つける言葉ばかり出てくるのよ。

「ヴェリテ……」

『わたしたちは本気であなたを信用していたのに』

「それは悪かったって思ってるよ……だから……」

『もう裏切らない？わからないじゃない。だってアルヴィンはウソつきだもの。いつかまた絶対に裏切る。バカにしてるの？』

閉じろよ、わたしの口。やめて、やめてよ。わたしはアルヴィンを信じているのに。信じるって言ったのに。

『アルヴィンなんてさっさとどっか行っちゃえばいいんだ』

「ヴェリテ」

『さっきの会話、昔、結構プレザと仲良かったみたいじゃない。いつそのことあの人のところに戻っちゃえば？そうしたら』

そこまで言っただけは民家の壁に強く押し付けられた。ぶつけた背中が、掴まれた腕がかなり痛い。

「何で泣いてんだよおい」

『泣いて、ないわよ…！』

「どっちがウソつきなんだよコラ」

ああ、やっぱり怒ってるよね。酷いことばかり言った。これで嫌われたら自業自得なのに。

『……………』

「どっか行けとか、プレザのとこ戻れとか、本気で思ってるわけ？」

わたしはただ黙り込む。何も言えなかった。今更訂正したって遅いって、そう思ったから。するとわたしの腕を掴む彼の力が少しばかり強くなった。

『っ……』

「何で逃げたんだ」

『……言いたくない……』

「あれだけ言い放題言っただけはおかしいんじゃないの？」

確かにそうかもしれない。酷いこといっぱい言っただけ肝心なところはなんにも言わないなんておかしいよ。それでもわたしのプライドが許してくれなくて。わたしは反らしていた顔をバツと上げる。

『うるさいなあ！放って置いてって言っただけでしょう！！？なんでそうしてくれないのよ！……！……！……！』

その言葉と一緒にぼろぼろと涙が零れ落ちた。

『アルヴィンなんて嫌いよ！！大っ嫌い！！！！』

そう言った直後、わたしは声を発せなくなっていた。彼との距離が縮まったのだ。その距離、零センチ。アルヴィンの髪がわたしの顔を擦り、長い睫毛がすぐ近くにある。途端に理解した。わたしはキスされているのだと

> i 3 2 4 4 5 — 4 0 6 1 <

違う。

わたしが言いたいことは、
こんなことじゃないのに…

やっ
ち
ま
っ
た
([^]
o
[^])
)

好き

大好き

あなたを、愛してる

なぜ、どうして、と頭の中が混乱する。なんでわたしなんかにキスするの。今のわたしの脳内はそんなことでいっぱいだった。逃れようとも押し付けられる力が強くて振り解けない。ぐっ、と唇が強く宛がわれ、抵抗することを許されない。

『ん、ふ…あ、っ』

逃さないというように、するり、と舌が口内に侵入してくる。わたしはただされるがままだった。次第に何も考えられなくなって、すべてを彼に委ねる。わたしの腕を掴んでいた手はいつの間にか絡められ、もう片方の手は腰に回されてわたしを引き寄せる。やがて息が苦しくなってきたわたしが小さく悲鳴を上げると、それに気づいたアルヴィンがそつと唇を離す。名残惜しく銀色の糸が唇同士を繋いだ。

『はっ、は…っ、アル、ヴィ…っ』

とろん、とした目で彼を見れば、ぎゅう、と力強く抱きしめられる。何が何だか分からなくてわたしはただ立ち尽くしていた。

「…お前はずっと俺のことを信用してくれた。ずっと、一番近くにいてくれた」

弱弱しく、背中越しに声が聞こえてくる。

「気付いたんだ。俺はお前の傍にいたいって。……でも俺は汚れているから、お前みたいな綺麗な奴の隣にいけないんじゃない」

かつて思ってたんだ」

『……………』

「けど、もう抑えきれねえんだよ…っ！..!」

『アルヴィ、ン』

わたしが彼の名を呟くと、まるで甘えるようにすり寄ってくるアルヴィン。

「好きだ。ヴェリテ」

『え……………』

その言葉に耳を疑う。だってアルヴィンはいつもわたしを子ども扱いしてたじゃない。さっきだってプレザとよりを戻したいから仲良くしようって言ったんじゃないの？

「惚れた女が泣いてんのに、放って置けるわけねーだろーが……………」

『っ……………』

「好きなんだ…だから、…大嫌いとか、言うなよ……」

喉の奥が熱くて、うまく声が出てくれない。零れ落ちる涙が止まってくれない。この胸の内に渦巻く感情が大きく膨らんで、そして溢れ出る。

『い、めん…』

> i 3 2 4 8 8 — 4 0 6 1 <

頑張つて絞り出した言葉がそれだった。わたしは下ろしていた腕をそつとアルヴィンの背中に回して力いっぱい抱きしめる。

『いめん…ごめんね…っ』

「違う。そんな言葉が聞きたいんじゃないねえ…」

『っ……………好、き…』

もう何も怖くなかった。わたしは今まで溜めこんできたこの気持ちを思いっきり彼にぶつける。

『アルヴィンが、好きなの……！大好き……っ』

「ヴェリテ……」

『ずっと、ずっと好きだった……！！大嫌いなんで、ウソだからっ』

「じゃあ何で逃げたのか、教えて」

『わたし、嫉妬してた……っ！ふたりが話してたのを聞いたとき、どうしようもないくらいに……！アルヴィンはプレザとよりを戻したいんじゃないかって思ってた……っ！気持ちを伝えきれないのに、嫉妬なんて……っ、凄く醜いよ……ッ……！こんな姿、見られなくなかったの……っ』

「ならどっか行けっつのは？」

『そんなのウソっ……！！どこにも行かないで、っいなくならないで……！！わたしの傍にいてよ……！！』

「ちゃんというよ、ヴェリテ」

『離さないで……』

「絶対に離さない」

そっとお互いが離れて見つめ合う。潤んだわたしの目にアルヴィンの顔が映り込む。ブラウンの透き通った瞳と視線が絡み合う。ああ、わたしはやっぱりこの人が好きだ、と改めて思った。

『好きです…大好き…っ』

「俺もだ、ヴェリテ」

そっとなれる互いの唇。さっきとは違い、優しくて深い口付け。アルヴィンはこんな醜いわたしでも好きだと言ってくれた。あんなにいっぱい酷いこと言ったのに、許してくれた。わたしを、受け入れてくれた。

大好き。大好きよ、アルヴィン。どれだけその言葉を紡いでも足りないくらい、わたしの頭の中はアルヴィンでいっぱいだった。

「ヴェリテー！アルヴィンー！」

そんな中、私たちを探すジュードたちの声が聞こえてきた。どちらからともなく唇を離したわたしたちは顔を見合わせて笑い、行こうか、と裏道から出て城への坂を上がって行った。

準備が出来たわたしたちは再び船に乗り込む。そこにはア・ジュール兵の他に、ラ・シユガル兵もいた。ローエンが集めてくれたらしいのだ。さらにバカもそこにおり、繋がれているわたしとアルヴィンの手を見て顔を顰めていた。いや、だってこうしないと怖いし。それにアルヴィンとが一番安心するから。

「陛下、みなに一言を」

ウインガルがそうガイアスに申せば、彼は兵たちをぐるりと見回す。

「かつて俺たちはリーゼ・マクシアの覇権を争い、互いに剣を向けた。だが、この戦いはこれまでとは一線を画するものだ。敵の本拠

地、ジルニトラの場所はすでにわかっている」

凜としたガイアスの声が響く。

「臆するな、我が同胞よ！信頼せよ、昨日までの敵を！我らの尊厳を再びこの手に！」

ガイアスの言葉に士気が上がる兵士たち。確かに彼こそ王に相応しい器をもっている。そう、わたしは感じた。

「船を出せ！」

ウィンガルがそう命じた時、リーゼ・マクシア全域に高出力の魔方陣の展開を感知した、と報告があった。直後、体の中のマナを無理矢理抜かれている感覚に陥る。

『つつ……！』

「この感覚は…！？」

「クルスニクの檣のマナ吸収機能を世界中に向けて使ったんだ！」

それは燃料計画が始まったという合図でもあった。そんな中でもガイアスは中心となり、魔方陣の影響を受けない高度まで船を飛ばした。

『はあ……』

「大丈夫か、ヴェリテ……」

『マナを抜き取られた上、高いところってというのが結構キツイ……』

後ろからアルヴィンに支えられているわたしは力を抜いて体を預ける。いい加減慣れなきゃなんだけど。

「無理はすんなよ」

『ありがと、アルヴィン』

につこり笑うと、アルヴィンはわたしの頬にキスする。それだけで真っ赤になるわたし。またからかつてるに違いない。頬を押さえてアルヴィンを見れば、彼もまた笑っていた。

「なあ、ヴェリテ…」

『何、アルヴィン』

囁かれたあと、ぎゅう、と抱きしめられて首筋に顔を埋めてくるアルヴィン。僅かに垂れる髪が当たり、少しくすぐったかった。

「好きだ」

『…うん、知ってる』

どうしたの、と聞けば、なんでもない、と返された。

『…変なアルヴィン』

「悪い…（手に入れた途端、お前が消えてしまいそうだと感じた、

なんて言えるかよ…）」

ふわり、とわたしの銀色の髪が揺れる。それを見たアルヴィンがポケットからひとつの包みを取り出した。

『これは…？』

「髪留め。買えって言ったろ？出発の前にちよこつと行ってきた」

『…本当に買ってくれたんだ』

「冗談で言ったのか」

『うん。でも、ありがとう。嬉しい』

その中には確かに頼んだ高価そうな髪留めが入っていて、わたしは申し訳なく笑う。結ってやるよ、とアルヴィンはわたしの髪に手を伸ばし、器用に三つ編みを結っていく。今度は取れないように、としっかりきつく縛ってもらった。

「可愛いぜ、ヴェリテ」

『そ、そんなこと、軽々しく言わないでよ、恥ずかしい……っ！いつもの髪型に戻っただけでしょっ』

「可愛い……キス、していい？」

『っ！！ば、バカ！！』

くいつ、と顎を持ち上げられる。吸い込まれそうなその瞳を見ていたら、段々とアルヴィンの顔が近づいてきた。

「逃げないってことは、いいってことだよなあ、巫子姫様？」

『う、るっさいな……』

「否定はしないのな」

『っ……うるさい……』

……いいよ、と呟けばアルヴィンは目を見開いたが、すぐにまた距離を縮めてくる。やがて唇が触れるか触れないかくらい近づいたとき、複数の足音が聞こえて慌てて離れるわたしたち。息を切らしてやってきたのはジュードとレイアだった。

「ヴェリテ、アルヴィン君！ジルニトラに空中戦艦の艦隊が集結しつつあるって…！」

『それって…！』

そこまで言った時、大きく船体が揺れた。わたしたちは急いで甲板へと向かう。そこから見えたのは天に高く昇る光の柱。

「ジユード、今のつて！？」

「クルスニクの槍みたいでした」

さっきの光の発信源はジルニトラで間違いない、とウィンガルは言う。あの光は確かに天を貫いていた。つまりまた断界殻に穴が開いたということなのだろう。だけど前見たく船は入ってこなかった。

「集めたマナをエレンピオスに送った感じじゃなかったか？」

「アルヴィンの考えは正しかったんだね」

「最悪な現実だけは、ウソにならねえつてのが皮肉だよな」

わたしは、ぎゅっ、と繋がれている手を強く握る。燃料計画。それが現実のものとなっているのだ。そんな時、敵の船が接近しているという報告が入る。そして次の瞬間、敵船はわたしたちの乗っている船に体当たりしてきた。

『うわっ！？』

「ヴェリテ！！」

ぶつかった衝撃でバランスを崩すと、慌ててアルヴィンが助け起こしてくれた。

「さっそく、お出ましか」

敵の船から乗り込んできた兵士たちをみてミラが言う。わたしたちは直ぐに武器を構えて彼らを迎え撃つ。しかし何度倒しても全くキリがない。

やがて船がガイアスの命令によってジルニトラに突っ込むと、わた

したちは船からジルニトラへ飛び移った。やっと高い場所から降りられたわたしは普段の調子を取り戻す。次々と敵を斬っていくが、やはり数は減ってくれない。するとミュゼが鬱陶しさを感じたのか、強大な力で空に浮いていた船を一掃させた。

『お、おふ…』

「ミュゼ、すっい…」

どうやらさっきのがミュゼの本来の力のようだ。確かに凄かったのだが、同時に何か妙なものを感じた。一瞬だったのでよくわからなかったのだが。そしてミュゼは、ここで力を貸すと言ってわたしたちと別れた。ミラに、忘れないでね、あなたはマクスウェルなのよ、と言いついて残して。

大丈夫。

あなたが傍にいるから、

わたしはもう何も怖くない。

やっつくつ、いたよね

これからラブラブしてください＼(^o^)/

…いや、どうなるかはわからないんですけどwwww

わたしたちだって

精霊だって

みんな生きたいんだ

ゆっくりしている時間はない。敵の増援を防いでいる間が好機ということで、わたしたちと、ガイアスたちとで二手に分かれることになった。双方の目的は同じ。ジラードとクルスニクの槍だ。

「俺も手を貸しましょう、ミラ様、ヴェリテ」

そんな中バカが現れた。またか、とわたしは呆れる。もう帰ってくれないかな、ほんと。

「お前、まだいたのかよ？」

「邪魔だから、こっち来んなー」

タイプが言えばバカは、自分はガイアスにつこう、と高々に笑った。

「ジャオの抜けた穴でも埋めてもらおうか」

「余裕っ！」

指を刺してドヤ顔で言うイバルだったが、ガイアスたちに冷めた目で見られ怖気づく。どうせ足を引っ張るに決まっているのに。

「偽者！貴様には負けんぞ！それとお前！！ヴェリテには手を出すなよ！」

「ありや残念。巫子姫様はもう俺のモンだから」

ぐいつ、と腰を抱かれて頭にキスされる。それを見たバカはショツクを受けたようにわなわなと震えだす。わたしはというとこんな大衆の面前で俺のモノ宣言されたため、今まで以上に顔を真っ赤に染め上げた。

『アアアアアルヴィン!!?』

「なーに真っ赤になってんの。俺たちもうそんな浅い中じゃねーだろ?」

「貴様アアアア!!!よりにもよって俺の妹にあんなことやこんなことをするなんてエエエ!!!」

『もう!勘違いさせないで!!!!』

未だにぎゃーぎゃー騒いでるバカをアグリアが首根っこを掴んでガイアスを追いかける。そんな中、ふ、とブレザがアルヴィンを見ていることに気づいた。

「アル…」

「なんだよ？」

「……いえ、なんでもないわ。それと、そんなに睨まなくても取ったりしないわよ、お嬢さん」

『！！？』

え、わたし睨んでた？あれ、そんなつもりはなかったんだけど。わたしが眉間に皺を寄せていると、ミラがわたしの頭を撫でてくれた。

「私たちも行くぞ、ヴェリテ」

『う、うん！』

ミラに続いて船内に入ると、そこには敵が待ち受けていた。素早く倒せば、床に何かが落ちているのを見つけ、レイアがそれを拾う。

「何これ？」

「通信機か？」

貸してみる、とアルヴィンはレイアの持っていたそれを受け取って
いじり始めた。

『つつしんき?』

「連絡を取り合うのに使うんだ」

『手紙みたいなもの?』

「それより楽なもん」

やがて調整が終わったのか、その通信機から声が聞こえてくる。ど
うやら船内の侵入者を一名確保したらしいのだが…　そこから聞
こえて来た声はあのバカのものだった。

「ヴェリテ」

『はい、あとでしばいておきます』

あんのバカ。

「捕まっただ。助ける？」

『あいつはあれでも強いから大丈夫よ。ね、ミラ』

「ああ。すべてを終わらせてからでいい」

ミラが言い終わると同時に船が大きく揺れた。わたしとミラは天を仰ぐ。

「精霊がまた大量に消滅した…」

『精霊の悲鳴が聞こえる…』

「クルスニクの槍を使っただってことか」

急がないと、とわたしたちは船内を奔走する。無駄に広くてたまに迷いつつも着実にクルスニクの槍のもとに近づく。とある一室で大きなシャンデリアを見つけ、エリーとレイアはそれに駆け寄る。

「すごい…」

「わ、お城みたい！」

ゆらゆらと揺れるシャンデリア。これが戦艦だとは到底思えない。わたしたちがそれを見上げていると、隣のアルヴィンが懐かしそうに話し出す。

「このジルニトラは二十年前、エレンピオスの海を旅した旅客船だ。二十年前に断界殻の一部が破れた時にこっちに来ちまったんだ」

「二十年前か……エレンピオスの軍勢に断界殻の一部が破られた時だな」

「そんなことがあったの？」

しかしどうやって破ったというのだろうか。それに関してはミラも知らないと言を振る。

「クルスニクの槍のオリジナルをエレンピオス軍が開発したんだ」

アルヴィンが知っているかのようにそう呟き、歩き出す。わたしは置いて行かれないようにとその後が続いた。

「聞いた話だ。今あるクルスニクの槍は、それをマネしてつくったもんじゃない」

「それって精霊が欲しかったから？」

「エレンピオスは黒匣に支えられて発達した世界だ。黒匣と精霊は文明の要なんだよ」

そう離すアルヴィンに、どうしてやめなかったのか、とエリーが聞く。

「…黒匣がなけりゃ、何もできないんだよ、俺たちは」

そこまで言って、ピタリ、と足を止める。

「俺たちに霊力野とやらはねーのよ」

「え、そうなの!？」

「だから、精霊術は使えない。マナを操るなんてマネできねんだ」

この世界は精霊術なしでは不便な世界だ。それを使えないエレンピオスの人たちは黒匣に頼るしかなかったのだろう。

それからわたしたちは封鎖線を解除するために左右の発動機を止めて、そして先へと進んだ。

「ご苦労なこった」

一際広い部屋。そこにジランドとクルスニクの槍があった。わたしたちはじつと彼を見据える。

「わざわざ…マクスウェルを連れて来てくれるなんてな」

そして彼はアルヴィンを見やる。

「アルフレド・ヴィント・スヴェント。裏切った理由を聞かせてもらおうか」

それがアルヴィンの本当の名前、なのだろう。彼はキツとジランドを睨み付けて一歩前へ出る。

「簡単だよ。あんたが昔から大嫌いだっただけだ」

「一生、リーゼ・マクシアで過ごす覚悟ができたようだな」

「こいつがいるなら、俺はどこでだって生きて見せる」

そう言っただけでわたしを見るアルヴィン。こんなときだって言うのに、わたしはその言葉を嬉しく感じた。

「くくく」

ジランドが怪しく笑った直後、氷の刃がわたしたち向かって飛んで

くる。咄嗟に飛び退き、避けるみんな。 しかしわたしにだけそれは飛んでこなかった。

「なっ…どうやった!？」

「微精霊の消滅は感じていない!どういうことだ??」

「ジランドオ！」

アルヴィンが銃で彼を撃つが、銃弾は氷の盾によって防がれる。そこにいたのは

『セルシウス…』

わたしがその名を紡ぐと、彼女はピクリと眉を動かす。そして次にセルシウスが放った氷の刃はアルヴィンに向かって飛んで来た。一か八かでわたしが彼の前に立つと、それは跡形もなく消えた。

「な……」

『やっぱり。…何故、わたしに攻撃しないの』

「……それは」

そう言った直後、ジランドがセルシウスの顔を引つ叩く。

『！！』

「俺の許可なく、口を動かすな」

「はい、マスター」

その境遇を見たレイアが、どうしてそんな人に従っているのかと問う。するとジランドは笑ってセルシウスの頭に手を乗せた。

「道具は主人に仕えるのが当然だろう？」

「精霊と人は一緒に生きていくものでしょ！それを道具だなんて！」

「こいつは精霊だが、ただの精霊とは少々違う。こいつは、源霊匣だ」

聞きなれない言葉にジュードが聞き返す。

「増霊極を使い、精霊の化石に眠っていたセルシウスを再現した。こいつは、精霊術自体が形をなした存在だ」

「源霊匣のマナをお前自身が術として使ってるのか!？」

だから道具だ、とジランドは笑う。例えそうでも、精霊なのは間違いないんだ。それに彼女は、なぜか懐かしい。

「ティポのデータを盗ったのは、このためだったんですか!？」

「お嬢さん。あんたには感謝してるぜ」

源霊匣が生まれたのも、リーゼ・マクシアが燃料になったのもティポのせいだ。まるでそう捉えられる言い方でジランドは言う。

「あなたという人は!」

「？指揮者？ ジジイの出る幕はもうないぜ？それとも踊り足りないのか？」

「ええ。ジジイは、しぶといのが売りですので」

ローエンは剣を抜き、切っ先をジランドへ向けた。

「我が友を弄んだこと、決して許しません」

「僕たちは負けない！絶対！」

「ふん。なんの力も野望もないくせにのぼせ上がってるてめえを見ると。ムカついてヘドがでるぜ。場違いなガキが！」

「あなたみたいな人が、力とか野望とか口にしないでよ！僕は、あなたが間違ってるのを知ってる！」

ぐっ、とジュードは拳を握って構える。

「最早お前などと語る口はもっていないが…最後にひとつだけ問おう」

お前とジュードたちの違いが分かるか、とミラは目を細た。それに
ジランドは嘲笑うだけだった。

「知るかよ」

「だろうな。だからお前は愚かものなのだ」

ミラは剣を構える。

「そろそろ、マナの定時搾取のお時間だ。マクスウェル、お前だけは生かしてやる」

さらに、それとそっちの小娘もだ、とジランドがわたしを指さした。

「ヴェリテ!？」

『わたしが、何で…』

「お前が精霊に愛されているからだ」

精霊に愛された者。ミラにも、ミュゼにもそう言われた。そんなにこの力がいいものなのかわたしにはわからなかった。

「オルダ宮でお前の力を見た時、俺は確信した。精霊に愛されたその力。俺の計画に必要な不可欠」

だが、と銃に弾を込めてみんなに突きつける。

「他は皆殺しだ！」

みんなは一斉に武器を構える。わたしも迷ってる暇なんてなかった。

「リーゼ・マクシアの精霊と人は私が守る！」

『精霊がわたしを愛してくれているなら、わたしはそれに応える！』

「この力は精霊と人のために！」

「ジランド、僕はお前を許さない！」

「片を付けてやるぜ、ガキ共！」

「こっちもそのつもりだぜ、ジランド！！」

ミラがジランドへ向かって行くが、それをセルシウスが邪魔する。

「マスターはやらせません！」

「どけ、セルシウス！」

「気を付けて、ミラ！」

「セルシウスさんはただものではありませんよ！」

「俺が完成させた究極の力だ。この威力味わって死ぬがいい！」

どこまでも道具扱いするやつだ。そんな人許せない。例え源霊匣だとしても、ちゃんと意志をもって生きているのだから。

『セルシウス！！あなたが精霊で、わたしを愛してくれているなら、わたしの心に応えて！！』

「！！！！」

わたしの心からの言葉に僅かに反応するセルシウス。

「ふん！言葉など無意味！！こいつは道具なんだからな！！」

『違う！！セルシウスも他の精霊と変わらない！！今ここに存在しているわ！！』

わたしはセルシウスの動きについて行き、彼女の前に立ちはだかる。

『わたしも、精霊を守りたい…！』

「！ 守る…」

『ミラみたいにはいかないかも知れない。でも、わたしにできることは全部やる！わたしに、力を貸して、セルシウス…！』

「……そうか、あなたは…」

そう言っでセルシウスはわたしの差し出した手をそつと取った。氷の大精霊だというのに、その手はとても温かった。

「セルシウス、お前……なっ！」

ジランドが持っていた源霊匣にヒビが入り、そして音を立てて割れ、それで現出していたセルシウスは姿を消した。コン、と源霊匣から落ちたセルシウスの精霊の化石がわたしの元へと転がって来る。

675

『もし、わたしにあなたを蘇らせる力があるなら……お願い』

わたしはそれを拾って自分のマナを注ぎ始める。

「させるか……！」

「ヴェリテ！」

阻止しようとしたジランドがわたしに向かって銃を撃つが、アルヴインがそれを大剣で弾く。

『アルヴイン…！』

「早くしろ。お前ならきつと…」

ザッ、とみんながわたしを守るように、わたしとジランドの間に立つ。

「僕たちが守るよ、ヴェリテ！」

「ヴェリテ、やって見せろ」

「頑張つて、です！」

「応援してるからなー！」

「ヴェリテさんはマナを注ぎ込むことに集中してください！」

「こっちは私たちがフォローするからね！」

『…分かった!』

頷いたわたしはそのまま続ける。みんなはわたしを守って戦っている。

早く、集中しろわたし。もう少し、もう少しだ。お願い、セル
シウス…　そして手に持つ精霊の化石が眩しく輝いた。

命を吹き込むように、
わたしはマナを注ぎ込んだ。

セルシウス様＼（＾ｏ＾）／
わたしはセルシウスさん好きですよ（＾ｏ＾）
死なせません

ミラが守ったように

わたしも守りたいんだ

人も、精霊も…

やがて光が止むと、そこにはセルシウスが立っていた。その姿は少し変わってはいるが彼女に違いない。すう、と目を開けたセルシウスはゆっくりとわたしの足元に跪く。

「あなたのおかげで私は再び現出することができました。わたしの命はマスターの為に」

『ヴェリテよ、セルシウス。わたしはあの人みたいに道具として扱

わない。わたしはあなたと友達になりたいわ』

「友……ああ、ヴェリテ」

わたしがもう一度手を差し出すと、彼女はそれを迷わず取った。

「小娘が……！」

『道具として扱うあなたとは生きていけないらしくてよ？』

「私はヴェリテと共に！」

ザッ、とセルシウスと背中を合わせてジランドに向き合う。それに続いてみんなも武器を構えなおした。

「終わりだぜ、ジランド」

「く……っ！ようやく源霊匣を生み出せたのに……くそ……」

「あなたの目的はせいぜい向こうの奴らに恩売って、のし上がるためだろ。源霊匣とやらに何の意味があるっていうんだ」

アルヴィンの言葉にジランドは口を開く。

「源霊匣は黒匣とは違い、精霊を消費せずに強大な力を使役できる」

だから、人と技術に溢れたエレンピオスには必要なんだ、と続ける。

「エレンピオスは精霊が減少したせいで…マナが枯渇し、消え行く運命の世界だ」

「異界炉計画にそのような意味があつたとは…」

「そんなの黒匣を使い続けたあなたたちの自業自得じゃない…」

ふ、とわたしはジランドの足元に落ちている壊れた源霊匣に目をやる。それは黒い稲妻のようなものが走っており、途端に不吉なものを感じた。

「源霊匣が広まれば、エレンピオス人もマナを得られる」

「今更何を…二千年前、黒匣に頼る道を選んだのはお前たちだ」

「俺じゃねえ！」

確かにそう決めたのは二千年前の人たちだ。しかしそれにすがり続けてきたのも事実。もっと他に方法がなかったのだろうか。そう考え込んだ時、ジランドが苦しそうな声を上げた。

「がああ…！」

黒い稲妻がジランドの体中を奔っていた。それを見たセルシウスがそつとわたしに耳打ちしてくる。

「源霊匣で大精霊クラスの私を使役した代償だ…」

『！ そんな…』

「私にもどうすることもできない。すまない、ヴェリテ」

わたしは首を振ってジランドに向き直った。セルシウスのせいじゃない。でも、ただ、見ていることしかできないなんて。

「俺が死んでもリーゼ・マクシアの運命は変わりなしねえ！お、俺たちの計画は断界殻がある限り、続けられるぞ…ザマあみやがれ」

そしてジランドはこと切れた。

『セルシウスが教えてくれた…これは代償だ、って…』

「力を得るためとはいえ…高い代償だ」

命と引き換えても、この計画を成功させたかったんだろう。

「これは返してもらっぜ。ジランドール・ユル・スヴェント……叔父さん」

アルヴィンがジランドの腰に携えてあつた金色の銃を取り、そう
呟いて、そつ、と彼の目を閉じさせた。その直後、後ろの扉が開き、
ガイアスたちがやってきた。

「すでに決していたか」

「一足先にな」

「でもなんだか、これじゃ…」

ジュードの気持ちはわかる。でも

「リーゼ・マクシアのためにもアルクノアの野望は挫かなければな
らないんだ」

そう言つてミラはわたしに目配せをする。わたしは頷いて床に設置
してある機械を操作した。そこから淡い光が放たれ、マナが解放さ
れる。ミラは精神を統一すると、陣を展開し、四大を召喚した。

「お前たち、無事で嬉しいぞ」

『お久しぶりです、四大様』

わたしはそつと頭を下げてからミラの後に続いた。

「マクスウェル」

「こればかりはお前でも邪魔はさせない。ヴェリテ、お前も手を貸せ。破壊する」

『ミラの御心のままに』

ミラは四大に、わたしはセルシウスにマナを注ぐ。彼らが準備を整えたその時、辺りに地鳴りが響いた。刹那、わたしたちは何かの力に押しつぶされ、床にひれ伏す。

『っな、なに、これ…！』

重く重力が押し掛かって動けない。

「ぐぬぬぬっ！この程度の術、破ってみせる」

ガイアスの言葉に何かをひらめいたジュードが顔を上げる。

「そうだ。クルスニクの槍を使うんだよ。あれは術を打ち消す装置なんだっ！」

「槍、か…」

しかし槍にはマナがもう残っていない。するとローエンがここにいる全員がマナを振り絞って槍に注げば、と提案する。渋るものもいたが、それしか方法がない。でもマナを自分から捧げるなんて命の危機に関わることだ。

『……………行こう、ミラ』

ミラがやるうとしてることは分かる。だからわたしも覚悟を決めた。

「ああ…」

ミラはわたしの覚悟を感じてくれたのか、何も言わなかった。

「はあああっ！」

『ああああっ！』

わたしとミラは気力で立ち上がる。重い足を動かしながら、わたしたちはクルスニクの槍へ続く階段を上っていく。

「マクスウェル…ヴェリテ…槍を起動させろ」

「ミラ…」

「ヴェリテ…」

わたしはミラの手にそつと手を添える。ミラと一緒にだから、平気。

そう自分に言い聞かせるように。

「わざわざみなが死ぬ危険を冒す必要はない」

『無茶するのはわたしたちの専売特許だからさ』

ぐっ、と力を入れて起動装置の前まで何とか辿り着くわたしたち。

「ダメだ…ダメだよミラ！」

「おいヴェリテ！！何言ってるんだよ！」

ジュードとアルヴィンが叫んだ時、バシッ、と床にひびが入る。
早くしないと、このままじゃみんなが…

「なんでだよ！！ミラはその手で世界を…人々を守るんじゃないか？
たの？まだなすべきことが残ってるじゃないか！」

「断界殻が消えれば…アルクノアの計画は完全に潰える。そうだろう？」

ジュードは必死にミラに訴えかけるが、ミラはそう言ってアルヴィンを見やる。

「っけど…お前は！」

『ミラだけにやらせるつもりはないわ……これはずっとわたしが決めていたことだから』

「ヴェリテ！！！」

わたしは巫子としてミラに仕えたあの日から、最後までミラと共に、
つて決めていたんだ。それは十分にミラも理解してくれている。わ
たしの覚悟がどれだけ強いかも、知っていてくれる。

『ごめんね、セルシウス。友達になってくれたばかりなのに……ち
よっとわたしに付き合ってくれないかしら』

「ああ…ヴェリテに生かされた命だ。私はお前のために力を振るお
う」

怖くないよ。そう自分に言い聞かせる。

「ヴェリテ…私はどうやら失うことを恐れたみたいだ」

『うん。わたしも、おんなじ…自分が死ぬことより、みんなを失う方が怖いの』

「…ああ、そうだな」

思いは同じだから。わたしたちは笑いあい、そしてクルスニクの槍を起動させる。

「やだ、ミラ…ヴェリテ…」

「ミラ…ヴェリテ…」

「ダメー!!」

「ミラさん…ヴェリテさん…」

みんなの声が聞こえる。そして、大切な人の声も

「ヴェリテ：お前、俺のこと好きじゃなかったのかよ！俺に言ったあの言葉は全部ウソだったのか！？！？」

「ウソじゃないよ。わたし、死ぬつもりはないから」

「っそんな言葉が聞きたいんじゃない！こっち向けよ、ヴェリテ！……」

大好きな人の顔を見たら、この胸に渦巻く気持ちも少しは軽くなるかな。わたし、笑っていられるかな。

『好きよ、アルヴィン。だーいすき』

「な、んでだよ……」

わたしは最後まで振り向けなかった。ただただ、隣のミラの手を強く握っていたんだ。死ぬわけじゃない。でも死ぬ覚悟があるくらい危険なことなんだ。

「ヴェリテ」

『泣かないよ、ミラ』

「知っている」

わたしはギュッと拳を握る。

『わたし、ミラの分まで生きたいな……っまた、会えるよね、ミラ』

「当たり前だろ。わたしはマクスウェルなのだから」

『うん……そう、よね』

ぼたり、と何かが零れ落ちた。

ごめんアルヴィン。ほんとはずっとずっと一緒にいたいよ。一緒に色んな所にも行きたい。もっとあなたに触れていたい。でもね、それでも、ミラを見捨てることはできないんだ。十六年間、わたしを支えてくれた人だから。

もし、もしわたしが生きていたら、また笑ってくれるわよね。

『「はあああああ！」』

わたしたちはマナを一気に開放する。それはクルスニクの槍に吸収され、そして光が放たれる。最後にアルヴィンがわたしの名前を叫ぶのを耳にして、わたしは意識を闇の奥深くへと落とした。

ミラ、大好き。

ミラが守った世界を、

わたしも守りたいんだ。

ヴェリテを大変な目に遭わせてみた（＾o＾）ノ

ヴェリテエ
……

なんでだよ

なんで、どうして

お前は…

あれから何日たったのだろうか。よく覚えていない。今、隣にいるはずのお前はいない。お前の綺麗な笑顔がもう見れない。俺の名を呼ぶ声が聞けない。一緒に隣を歩くことさえ叶わない。　気づけば俺はミュゼと取引きしていた。あいつらを、ジュードたちを殺せばエレンピオスに帰してもらえる。俺にもう、それしかなかったんだ。

「何でも受け入れて…そういうのがムカつくんだよ！」

俺はジュードに銃を突きつける。撃てば俺は帰れるんだ。小さい頃からずっとそればかりを夢見てた。それなのに手が震える。

「ダメ！」

部屋に入ってきたレイアが俺の腕に飛びつく。俺は直ぐにそいつを振り払い、銃に弾を詰め直す。だが、起き上がったレイアが体当たりしてきて、俺は銃を取り落した。

「レイア！」

ジュードは覚束ない足取りでレイアに連れて行かれる。俺は舌打ちをし、床に散らばった銃を弾を拾い上げた。あいつらを殺せばいいんだ。ただそれだけだ。段々とイライラが募っていく。

小屋を出てあいつらを追いかけると、バレンジの木にかかっていた橋の上に上ろうとしていた。俺はふたりを追い、梯子を上って銃をぶっぱなす。

「見つけたぞ」

「ジュードは殺させない！わたしが守るの」

「逃がさない。もう無駄だ」

「そんなことない！もう目を覚ましてよ！っヴェリテがこんなこと望んでと思うの！？」

「お前に何がわかる！！！何もかも無駄なことだったんだよ！」

そつだよ。何もかもが。ヴェリテが、ミラが命を賭けたのだって無駄だったんだ。断界殻は消えてない。いつまでたっても空は赤いまままだ。エレンピオスも見えない。ヴェリテは

「……………無駄死に…？」

「そんなことない！だって！まだみんな生きてる！エリーゼだってローエンだって。ガイアスたちだってきつと……わたしたちも生きてるじゃない！」

「……それで、どうすんだ？あいつはもういないんだぜ？ヴェリテはもう目を覚まさない！！！」

「まだ可能性はあるじゃない！！！！」

「そんなもの無いに等しいじゃねえか！！！！」

あの日、ヴェリテはミラと共にマナをクルスニクの槍に注ぎ、ジランドの罟を打ち破った。ミラは死んで、ヴェリテは生きているものの、所謂植物状態になった。目覚める可能性はゼロに近い。こんなじゃ死んでるのと同じじゃねえか。無駄死になんだよ、全部。

武器を弾いた俺はレイアと突き飛ばし、ジュードに銃を向けた。それでもジュードは逃げようとしな

「ダメエ！！」

何度止めようたって敵うわけねえだろ。再びレイアを振り払い、威嚇するように床を銃で撃つ。そこから崩れるように橋は落ちて行った。

「もう、ヴェリテの声が聞けねえんだ！！！！」

好きだったんだ。

「もうあいつの笑顔が見れねえんだ！！！」

愛していたんだ。

「俺たちはただの人間だ！あいつらのようにはできない！！！」

強い心を持つちゃいないんだ。

「っ！！！」

俺はふたりを追いかけるように橋から降りる。お袋が死んで、ヴェリテがあんな状態になって、俺にはとうとう何もなくなった。もう何も、ないんだ…

「…え？」

気付いた時には俺はレイアに向けて銃を放っていた。

「レイア！」

頭の中がわけ分かんねくらいにぐちゃぐちゃで、自分が何をやったのかも理解できなかった。ゆっくりとジュードが俺を振り向いたときに、やっと思考がつながった。

「アルヴィン！！」

「ジュード、お前がつ！」

どうしようもない気持ちが俺の胸の中に渦巻いて、今更弁解してももう遅くて。俺はただがむしゃらにジュードに向かって行った。

「なんで！なんでなんだ、アルヴィン！」

「何をいまさら！！俺はこっぴどくやっただろーが！！」

ああそうだ。俺はいつだってそうだった。自分の都合の言いようにしか物事を持っていけねえんだ。裏切って裏切って裏切って。それが俺の生き方なんだ。昔から何も変わっちゃいねえ。

「わからないよ！！」

「わかれよ！！お前が目障りだったんだよ、ずっと！頼むから消えてくれよ優等生！いつもみたいに受け入れる！！」

「受け入れられるわけないだろ、こんなことで！」

さっきまで殺せとか言ってたやつが何ほざいてやがんだよ。なあ、なんでもいいから殺されてくれよ。今の俺にはそれしかないんだからさ。

「？魔神閃光断？！！！！」

「！！　？集中回避？！」

「甘いぜ、優等生！！！」

「！？　ぐあ！！！」

何度も、何度もあいつに会いに行った。この国随一の回復術でも意識は戻らない。真っ白な顔で、ずっと苦しそうな顔をして眠ってたんだ。そんなの見て、目覚めるなんて誰が思うんだよ。

「？我流紅蓮剣？！」

「くっ…！！！」

今まであいつらが頑張ってきたことは、全部無駄なことだったんだよ。あいつらがいなくなっただけじゃねえか。

「これで終わりだ！？エクスペンダブルプライド？！！！！！」

「うわぁああぁあ！！！！！」

ただ見殺しにしたらじゃねえか。

俺は、ガチャ、と倒れたジュードに銃を突きつける。

「……」

「俺はエレンピオスに帰る」

「……」

なんでなんも言わねえんだよ。何とか言えよ。まだヘタレてんのかよ優等生。

「……っ！……！」

その沈黙に我慢できなくなって、ガンツ、とジュードの顎を蹴り上げる。

「お前のそういうところが……ガキのくせに諦めのいいところに食わないんだよ！」

「しょうがないじゃないか！ミラ、いないんだ！ヴェリテだって目を覚まさない！！もうどうしていいか……僕……」

「お前だけだと思ってんのかよ！」

何言ってやがんだよこいつ。自分のことしか考えてねえのかよ。

「あいつを犠牲に……ヴェリテをあんな風にしてまで生き延びたのに……」

「ミラとヴェリテにもらった命……僕たちのしなきゃいけないことはこんなじゃないのに……」

「じゃあ……何すりゃいいんだよ！」

何も、ないんだ。

「ヴェリテが目を覚ますことなんてもうないかもしれないんだ！！！！」

「っ、そんなのわからないだろ！！！」

「なんでそう言い切れんだ！！！」

たった数パーセントのちっぽけな可能性に賭けられるわけないだろーが。

「アルヴィンはヴェリテの言葉を忘れたの！！！？最後の最後まで諦めなければ、例え確率がゼロに近くてもその可能性は100%になる？　そう言ってたじゃない！！アルヴィンが信じてあげないでどうするの！？」

「っ！」

あいつ、ヴェリテがオルダ宮で言った言葉だった。ヴェリテが最後まで諦めなかったから、俺たちはナハティガルに勝てたと言っても過言じゃない。

「ヴェリテは一番アルヴィンに信じてもらいたんだよ！！！」

っそれがなんだってんだよ…

「ミラだってもういない！どうするかなんて僕たちが考えなきゃ」

「どうやって！」

思わずジュードの胸倉を掴むが、すぐに押し返される。

「誰も決めてくれないんだって！誰も…もう僕たちのやることに責任なんてとってくれないんだ」

「責任……」

「ミラは…偽者の使命に生きたとしても…ヴェリテがその使命についていったとしても…それでも…自分の命を賭けて責任をとったんだよ」

それでも、それでも俺は

「できるできないかじゃない……やるかやらないかだよ」

「お前に……！っ何でお前が……なんで！そうやって先に行くんだよ！」

俺はいたたまれない気持ちになる。

なんでお前はそんなに大人なんだよ。なんで俺よりあいつの気持ちをわかってんだよ。なんで、どうして

「……っ！……！」

パン、と乾いた音が辺りに響いた。

イル・ファンにある病院の一室。そこにヴェリテはいた。真っ白な

ベッドの上にその姿があつた。彼女の癖のある長い髪がシーツに散らばって、時折、窓から吹く風で僅かに揺れる。枕元には俺がプレゼントした髪留めが置いてあつた。

「ヴェリテ……俺、バカなことしたんだ……」

そ、つと頭を撫でてやる。白い肌は透き通るようで、まるで雪のようにお前が儚く消えていきそうだと感じた。俺の感じていた不安は、これだったのか？

「悪い……あれほどお前を泣かせたってーのに、また俺はあいつらを裏切っちゃった……」

ヴェリテの悲しそうな顔が脳裏に蘇る。不安そうで、辛そうで、今にでも泣きそうなヴェリテの表情が。早く目エ覚まして、いつもみたいに怒ってくれよ、と願いながら、きゅっ、とヴェリテの手を握る。

「なあ、ヴェリテ……お前がもう目を覚まさないかもって聞いたとき、俺は諦めてたんだ……」

格好悪いよな。お前はいつも俺を信じてくれてたのに、肝心な時に俺はお前を信じることを忘れた。

「……一番俺に信じてもらいたい、か……」

最後の最後まで諦めなければ、例え確率がゼロに近くてもその可能性は100%になる。そうやってお前はいつも前を向いていた。俺には到底できないこと、だろうな。

「……好きだ、ヴェリテ……ごめんな」

小さく囁いて軽く唇にキスを落とした。どうかお前が早く目覚めるように、と願いを込めて。すると少しだけ彼女の表情が緩んだ気がしたんだ。

お前が俺のすべて…

アルヴィン視点です^p^
キャラ視点で書くのは
苦手なのでおかしなところや
矛盾点があれば報告して
くださるとありがたい！
取り敢えずかけてるところまでは
upしたのでこれからまた
書き進めます（<|>）

ミラみたい

ヴェリテみたい

前に進まなきゃ何も変わらない

声が、聞こえる。わたしを呼ぶ声。でも、真っ暗で何も見えない。自分がどこにいるのかもわからない。ただ闇の中を無我夢中に走るだけ。声のする方に走っても、全く終わりは見えない。誰か助けて。一人は嫌なの。暗いところはもう、嫌

その後、アルヴィンと戦った後、僕はレイアとエリーゼとローエンとでイル・ファンへ来ていた。ローエンから、ガイアスがここで大規模な動きを始め、その度にミュゼに襲われているのだがそれを退けているらしい、という話を聞いた。ヴェリテのお見舞いにも行こうと思っていたところだったから丁度良かった。ガイアスとの

話を終えた僕たちはそろってヴェリテの病室を訪れる。そこにはまだ目を覚まさないヴェリテの姿。さながらそれは、眠り姫、とでもいえようか。それほどまでに眠るヴェリテは綺麗だった。

「来たか」

「セルシウス。ずっと来れなくて、ごめん」

僕たちの前に現れたのは氷の大精霊であるセルシウス。あの時、セルシウスが自分のマナをヴェリテに注ぎ、なんとか命を繋いでくれたのだ。

「……ヴェリテは、まだ……」

「……全くだな」

そう、と視線を落とせばレイアが僕の肩に手を置く。

「……例えば確率がゼロに近くてもその可能性は100%になる、だよ、ジュード」

「そうですね…信じましょう」

「ヴェリテ……」

「何で目、覚まさないんだよー……」

みんな悲しそうにヴェリテを見やる。ミラと一緒に命を賭けて僕たちを守ってくれたんだ。ちゃんとお礼を言いたいのに。

「…アルヴィンも来たのかな」

「多分…ちょっとだけだけどヴェリテの表情が落ち着いてる気がするんだ」

なんとなく、かもしれない。でもそう感じたんだ。

そろそろ行こうか、とヴェリテの病室を出ようとした時だった。小さく唸る声が耳に届いた。それはみんなにも聞こえていたらしく、慌てて振り返る僕たち。

「ヴェリテ…!?!」

直ぐに彼女のもとへ駆け寄る。もう一度声を掛けると、ピクリ、と指先が動く。しかしそれ以上は何もなかった。

「…ジュード。ヴェリテは自分を連れて行って欲しいんだそうだ」

「え！！？な、何言って……」

「私はヴェリテと特別な契約を交わしている。だからわかるのだ」

セルシウスはヴェリテの髪をそつと撫でた。

「ヴェリテは気づいていたんだ。ミラがマクスウェルじゃないってことも、ミラの使命が偽者だったことも」

僕たちは目を見開く。知っていたなら何でもそのことを言わなかったんだろう。何でミラを止めなかったのだろう。そんな中でひとつの答えにたどり着く。

「…ミラは、ミラだから…」

「え？」

「ヴェリテは一度もミラをマクスウェルとして見なかった。ミラをひとりの人として見ていたから……ヴェリテはミラの想いについて行ったんだ」

例えマクスウェルじゃなくてもミラはミラ。使命が偽者だったとしてもミラはそれを貫き通した。ヴェリテはそんな彼女を支えるのが使命だったから…

「何も言わなかったんだ」

「ミラさんはきっと自分の使命が偽者だったとしてもやめるつもりはないとヴェリテさんはそう思っていたんですね」

「憶測だけど、ね…」

ヴェリテにとってミラはずっと大きな存在だったんだ。きっと僕が思ってたよりも、ずっと。

「ねえ、どうするの？こんな状態のヴェリテを連れて行くなんて…」

「…そう、だけど…」

「戦いになれば私も参戦しよう。それがヴェリテの望みだ」

今から行くところはとても危険な場所だ。ミュゼに会えるかも知れない、とガイアスに言われて海停に行くところだった。

「わたし、ヴェリテと一緒にいきたい…！」

「ヴェリテがぼくたちを守ってくれたように、ぼくたちでヴェリテを守ればいいんだよ…！」

エリーゼとティポがヴェリテの傍に駆け寄ってそう訴える。

「…うん、そうだよね。僕たちで守ろう」

「女性の頼みならば断われませんね」

「もー、しょうがないなあ」

と、言うことでヴェリテを病院から無断で連れ出してしまった僕たち。後でこつぴどく叱られるんだろうけど、今のヴェリテは手続しても外出させてくれないわけで、これが一番手っ取り早かったんだ。……レイア曰くね。

「またこんなこと……」

「ほら、ヴェリテ落とすよ、ジュード!!」

「わ、わかってるよ……!」

流石に車椅子まで持ち出すわけにはいかなかったので僕とローエンが交代で背負うことになった。そしてガイアスの乗った船に僕たちも乗船する。そこでミラのことをすべて話した。

「そうか…エサとはな」

「うん。だから、本物のマクスウェルに会って、僕は真実を知りたい」

「マクスウェルの居場所……考えられるとしたら精霊界か、セルシウス」

「いや、今は？世精ノ途？という場所にいと聞いたことがある」

誰もがセルシウスを振り返る。

「人間界と精霊界を繋ぐ唯一の途だ。しかし私もそれ以上の情報は持っていない」

精霊界。確か精霊が住む世界、だったよね。人間界と精霊界を繋ぐ途と言うことは、もしかしたらこちらからいけるんじゃないだろうか。ただ、それがどこにあるか

「ニ・アケリアにある、霊山は知っているか」

そうセルシウスが話し出す。

「あそこは色々なものが集う場所。強力な魔物もいれば、微精霊たちの声も聞こえる」

「もしかすると、そこに…」

「ああ。あるかもしれない…と、まあヴェリテがそう言っているのだが」

「…ヴェリテには俺たちの声が聞こえているのか」

セルシウスの言葉にガイアスは問うと、彼女は首を横に振った。

「正しくは感じている、だ。今のヴェリテには声は届かない。しかし心は届く。わたしもヴェリテの想いによってここに召喚されているのだ」

「想い……もしかしたら強い気持ちがあればヴェリテは目覚めるかも…？」

「可能性はある」

そのためにはやっぱりアルヴィンと会わなきゃいけないのかも。でもどこにいるのかわからないし、探すにもこの広い世界のどこを探せばいいかなんて見当がつかない。

「ねえ、とりあえずその二・アケリアに行ってみない？」

「待て。船は槍の引き上げ場へ行くまで引き返せないぞ」

その言葉にほんとに残念そうにするレイア。でも慌てても何も始まらないと思う。ミュゼに会う可能性だってあるし。

「ガイアスさん、さきほどの異界炉計画を止めるという話。クルスニクの槍を使い、エレンピオスへ侵攻されるおつもりなのでは？」

「すべてはリーゼ・マクシアのためだ」

「待って、槍を使うにはたくさんのマナが必要だよ」

あの槍のせいでミラはマナを使い切って死んでしまったんだ。そんな悲劇はもう、起こしちゃいけない。

「無論、人と精霊が犠牲になることは本意ではない」

「迷っているんですか？なら…」

「だが、誰かがやらねばならないのも事実だ」

僕はガイアスをじっと見る。その目には何か、計り知れない何かがあった。

「ガイアスも…想いを守ろうとしてくれるの？」

「そうかもしれない…いや、そうなのだろう。俺の中でも、あれだけ大きな存在となった女は初めてだったからな。それから…ヴェリテもまた、ミラと同じ強い想いを持っている」

ミラなら、ヴェリテならどう考えるかなんてすぐにわかった。

「だったら、エレンピオスのことも考えるべきだよ！」

「エレンピオスの心配だと？リーゼ・マクシアの人と精霊が犠牲になるかもしれぬ今、この現実に！」

「どっちかが犠牲になるとか、そうじゃないと思うんだ…」

きつと、そう言うよ…ふたりなら。だってふたりともどんな人や精霊でも大切に思っているんだ。

「断界殻をなくしてみんなを助ける。僕はそうしたい」

「お前…」

例え生きる世界は違えども、同じ人間だつてことには変わらない。

「報いたいのか？死ぬやも知れぬ危険に飛び込んだヴェリテに、命を投げ捨てて、お前を守ったあいつに」

「うん」

「変わったな」

ふ、と僕を見るガイアスの目が変わった気がした。

「ジュード、お前は俺のもとで…」

「陛下。まもなく到着します。ご準備を」

言葉を遮られたガイアスはやがて頷いて去って行った。彼は何を言いたかったのだろう。しかし僕は深く追求することができなかった。そしてジルニトラが沈んだと思われる地点で、クルスニクの槍の引き上げが行われる。その直後、大きく黒い何かが一隻の船を襲った。それは以前見たことがあるものでもある。ミュゼの力だ。

「ミュゼ、やめろ！」

気付いたミュゼがすごい速さでこちらに飛んでくる。僕たちは一斉に戦闘態勢に入り、迎え撃つ。

セルシウスの助けもあり、なんとかミュゼに深手を負わせ、確保した。

「ミュゼ…君はどうして！」

僕は息を整えてそう叫ぶ。

「私は…私は…私はリーゼ・マクシアを、守っているだけよ…」

「…！君の…リーゼ・マクシアを守るって何なの？」

「知るわけないでしょう！」

知らないって…じゃあなんでそこまで
現れてミュゼに問い掛けた。 と思った時、ガイアスが

「命じた者がいるな」

それがきくとマクスウェルなのだろう。

「ミュゼ、教えて。マクスウェルは世精ノ途にいるんですよ」

それを聞いたミュゼの表情が一変し、捉えている兵を吹き飛ばした。

「マクスウェル様をどうしようというの！」

ミュゼの言い様。セルシウスの言う通り、本物のマクスウェルがいるんだ。失言だったのか、ミュゼの顔色が変わる。

「ミュゼ！マクスウェルはこんなことをホントに望んでいるの？」

「当たり前よ！これを望んでおられたのですよね！さあ、マクスウェル様！この者たちを裁く命を！」

手を高々と上げ、叫ぶミュゼ。セルシウスはヴェリテを守るように、僕たちも身構える。だが、ただ波と風の音が聞こえるだけで、何も起こらなかった。

「どうなってるんですか……」

「わかりません」

「見捨てられたか、ミュゼよ」

セルシウスが言った直後、ミュゼは逃げるように飛んで行き、その後をワイバーンでガイアスが追う。それから僕たちも行こう、と二・アケリア近くのイラート海停に向かった。

ふたりの想いを、
無駄にしたくない

ジュード視点でした^p^

矛盾点などあればご報告くださるとうれしいです…！
案外キャラ目線って難しいですね…orz

信じるよ、ヴェリテ

君が目覚めることも

世界を救えることも

海底に着いた僕たちは急いで船から降りる。こっちに向かったはずのガイアスとミュゼの姿はなく、辺りはシンとしていた。すると突然、ア・ジュール兵が僕たちを囲んだ。僕は構えながらもウインガールを向き直る。

「ちゃんと理由、聞かせてくれるんだよね？」

僕の問いにただ、危険だからだ、と答えるウインガル。それは僕たち、じゃなく、僕が、だという。

「ジュードさんをマクスウェルに会わせたくない、そうなのですね？」

「……」

「僕がガイアスの邪魔になるから？」

ウインガルは答えてくれなかった。絶対に逃がすなと兵に命じて彼も行ってしまう。僕はどうしたらいい。ミュゼたちを追わなきゃ。でも、そう思っていた中、セルシウスが一人の兵を吹っ飛ばした。

「ヴェリテに触れるな」

それに続いてローエンやエリーゼ、レイアまでが辺りの兵を蹴散らした。僕がポカンとしていると、ローエンが追いかけますよ、とみんなを見回した。

「でも、どこ行ったのかな」

「ひとつだけ思い当たるでしょうか？」

「ニ・アケリアの霊山ですね！」

「はい。賭けるしかありません」

そんなみんなに、やるならタイミングを合わせようよ、と言えば、半目で見られる僕。どうやら僕が悪いみたい。迷っていたからかな……。

「行こう、ジュード」

それから僕たちはニ・アケリアへ向かった。途中、雨が降ってきて、濡れないようにとセルシウスが氷のヴェールを僕たちの頭上に張ってくれた。ヴェリテが風邪を引いても困るので凄くありがたい。

やがてミラの社に着くと、そこにはイバルの姿があった。色々なことがあったけど生きていてよかったと、安堵する。きっと彼が死んだらヴェリテだって悲しむから。

「イバルさん。ガイアさんとミユゼさんがこちらに来ませんでしたか？」

イバルは僕の背中にいるヴェリテに目を向けてから、僕に視線をやった。

「二人だけじゃない。ウィンガルも霊山へ向かった。　　待て。やつはこうも言っただぞ」

僕を見るその視線が一際鋭くなる。

「ジュードが来るかもしれないが、好きにして構わないとな」

「同じ黒じくめ同士、大目に見てやるつもりだったのに。ゆるさないぞー」

「ふふふ、ガイアスに見放されたか、ええ？」

ウィンガルの独断だということはなんとなくわかる。でももしかしたらガイアスもそう思ってるのかもしれない。

「イバル、わかって欲しいとは言わない。けど、今は君と争ってる時じゃないんだ」

「黙れ！」

「ジュードは…ミラの想いを、ヴェリテに想いを遂げるためにここに来たんだよ！」

「そんなこと、どうだっていい！」

レイアの言葉にイバルはぐっと拳を握りしめる。

「ジュード、どうしてお前が！お前ばかりが！」

もう、ただでは通してくれないみたいだね。ミラのこと、ヴェリテのこと、イバルは凄く大切だったんだ。気持ちにはわからなくてもいい。でも僕たちは引き返すわけにはいかないんだ。

「みんな、先に…」

行つて、と言おうとしたのだが、ローエンが言葉を遮った。レイアやエリーゼも先に行く気はなさそうだ。

「ハッ！サシの勝負も受けられないのか！腰抜け！」

「さつき、ジュードが言いました。今は争つてゐる時じゃないって」

「そうよ！ジュードには、わたしたちにはやることがあるの！」

「それを邪魔するようでしたら…私たちがお相手するのは当然、でしょう？」

ありがとう、みんな。

「通してもらつよ！イバル！」

「上等だ！」

イバルが叫んだ直後、社の向こうからワイバーンが現れた。彼の使役するワイバーンなのだろう。僕はセルシウスにヴェリテを預け、拳を構えた。

「決着をつけてやるぞ、ジュード！」

「僕は偽者でいいよ！だからそこを退いて！」

「本物など偽者など、もう関係ない！俺はお前に勝てれば、それでいいのだ！！」

「本気で言ってるの、イバル！！」

「ああ、これ以上ないほどになあ！！！！」

確かにイバルの目は本気だった。言葉で言っても彼は折れてはくれない。全力で屈服させるしかない。

『

』

その時、微かだったけどヴェリテの声が聞こえた気がした。天に光属性の陣が展開し、イバルに向かって光が降り堕ちる。

「ヴェリテ！！？」

振り返るがヴェリテが起きた様子はない。もしかして無意識に術を放ったというのか。けど好都合。そう思って僕はイバルに向き直った。

「？殺劇？！」

「ぐっ！！！」

イバルを吹き飛ばし、集中回避で素早く回り込んで連撃する。

「この...っ！？」

「？舞荒拳？！！！」

「ぐあああっ！！！」

ガードしきれなかったイバルは双剣を振り落とし、地面に伏つた。悪いけど、今は時間を取ってる暇はなかったんだ。

「どうして……どうして俺は勝てないんだ！クソー……！」

イバルは通り過ぎようとした僕に向かって再び叫ぶ。

「俺はミラ様を守る使命を持った巫子！俺は特別だ！特別なんだ！」

「……イバルも僕も、まだ特別な存在じゃない」

ピタリと足を止めて僕は言う。思い出すのはミラのこと、ヴェリテのこと、ガイアスのこと。

「僕はどうかしたら三人のように、特別になれるのか知りたい」

「貴様などになれるか……ミラ様を見殺しにした、ヴェリテをそん

な風にしたお前が！！！」

その声は今にでも泣いてしまい様なほど、震えていた。

「あの時、僕が特別な人間だったら、ふたりとも助けられたかもしれない　ごめん、イバル」

また悔しそうに顔を顰めるイバル。しかし、す、と表情を悲しそうなものに変え、顔を俯かせた。

「……霊山は社の先だ」

「イバル？」

「さっさと行け！俺の前から消えろ！」

「イバル！」

去って行こうとした彼にセルシウスが声を掛ける。何かを感じたのか、イバルは立ち止まった。

「ヴェリテからの伝言だ。 わたしも好き。ありがとう、イバル
だそうだ」

「！！ ヴェリテ、お前、…っ」

「ヴェリテはちゃんとお前のことを見ている。お前がヴェリテのことを、ずっと見ていたようにな」

「……ヴェリテ……っ！！！！」

何かを言いかけたイバルだったが、言葉を飲み込んで社から去っていった。何故かその背中に妙なものを感じた。もしかしたら

「イバル、もう来ないんじゃないかな……行こう」

「え？待って、ねえ、どうして？」

よくはわからない。でも、もう会えないんじゃないかって、そう感じたんだ。

「ねえ、セルシウス。さっきの術……」

「ああ。ヴェリテのものだ。しかし意識は戻ってはいなかった……きつと兄に対する想いだけでつかっていたのだろう。まあ無意識というやつだ」

「そっか……いつもはあんな態度だけど、ヴェリテはイバルのこと嫌いじゃなかったもんね」

兄弟がいない僕にはわからないかも知れないけど、きつとすごく深い絆があるんだと思った。

それから僕たちは社の奥にある扉から霊山へと踏み入った。ここはヴェリテのトラウマがあった場所だ。大丈夫かな、とそつとヴェリテの顔を見やる。

「心配するな、ジュード。ヴェリテはどこまでもついていくと言っている。このまま登ろう」

「うん、わかった」

セルシウスが言うなら、と多少時間はかかるが、ヴェリテに負担を掛けないようにと僕とローエンとセルシウスで協力しながら蔦や崖

を登っていく。無茶はしたくないけど、ヴェリテの気持ちにもちゃんと応えてあげたいんだ。

途中、戦っているガイアスとミュゼを目撃しながらも僕たちは頂上へとたどり着いた。そこにはアグリアとプレザがいて、その先に歪んだ空間があった。そして

「ウソ…」

「お前たち…だったのか」

「アルヴィン！どうして…」

アルヴィンがいた。アルヴィンは僕の背中にいるヴェリテを見て少しばかり顔を顰めた。

「つどうしてヴェリテを連れてきた…！」

「これはヴェリテの意志だ。私にはヴェリテの想いが聞こえる。お前に対する気持ちもな」

「……………」

セルシウスの言葉に驚くアルヴィンだったが、すぐに目を伏せ唇を噛みしめた。僕はヴェリテを岩壁にもたれさせるように座らせてから、アグリアたちに向き直る。

「また敵同士になれるなんて、喜んでいいのかしら？」

「アハハ！またあんたたちをいたぶれるなんてサイコー！」

「悪いけど、今度こそ死んでもらうわ」

「そうはいきません。私は、ジュードさんをマクスウェルに会わせなければならぬ」

ローエンの力強い声色に僕は彼を見やる。

「あなたがガイアスさんたちを特別と感じたのは…、あの三人が真に大人たる生き方をしているからです」

ミラもガイアスも、そしてヴェリテも、いつも遠くに感じていた存在だった。それが大人だということなのだろうか。

「アハハハ！ジイさんはしてねーけどな！」

「お恥ずかしい話、そうなのでしょう。そしてアルヴィンさん、あなたも」

「俺が…」

ふ、とアルヴィンは俯く。

「ご託はもういいよ、ジジイ！あんたは先にヘブンリーしな」

言いながらアグリアが詠唱を始めと、アルヴィンが僕たちの間に立ちただかった。僕たちは目を見開く。それと同時にプレザの驚く声が聞こえた。

「いや、俺はただ……」

「おい、ニイちゃん！どけ！退かねえと……後ろの女を先に殺るぞ……！」

アグリアの視線がヴェリテに注がれる。

「っやめろ！！！！」

ニツ、と笑ったアグリアの目標がヴェリテに定まり、炎がヴェリテに向かって行く。しまった、と振り返った時にはヴェリテのすぐ近くにまでそれが迫っていた。

「ヴェリテー！！！！！！！」

アルヴィンが叫んだ、その刹那。

『　　？アクアレイザー？』

透き通った声が辺りに響くと同時に、アグリアの炎をかき消すかのように、高圧の水流が放たれた。

ふわり、とヴェリテの振り袖が揺れる。前に翳した手で顔は見えなかったが、翡翠の瞳が僕たちを真っ直ぐに捉えていた。

その瞳はとても強くて、
何ものにも屈しない輝きがあった。

なんとか、なんとかここまで来ました…orz
キャラ視点は難しいです…
もうすぐマクスウェルと対峙しますね！

ひとつ、またひとつ、と

わたしの周りに

光が増えていった

ずっと、ずっと暗い中を走り続けた。周りには誰もいなくて、寂しくて、独りで。どれだけ前に進んでも光がない。あるのは真っ暗で、深くて、底なしの沼みたいな、闇。わたしを引きずり込んで、心までを飲み込んでしまいそうな暗黒。

怖い、怖いよ。誰か助けて。

どんなに叫んでも誰にも届かない。手を伸ばしても誰も掴んでくれ

ない。残ったのは虚無感。わたしには何もない。頼る人も、頼ってくれる人も、信じる人も、信じてくれる人も。小さな頃からずっとひとりで、人間なんて大嫌いだった。簡単に人を信じちゃいけない。信じたらそこで終わりなんだ。

違うよ。

ふ、とそんな声が聞こえてきた気がした。真っ暗闇にひとつの人影が映る。それは？わたし？だった。

感じて　？わたし？　あなたはひとりじゃないから。

？わたし？が手を伸ばしてくる。わたしはその手と自分の手をそっ
と合わせた。不思議とそこから暖かくなってきて、次第に？わたし
？の感情がわたしの心を包み込んだ。

わたしは、知っている。

そうだ。わたしはこの暖かさを知っている。ずっと今まで感じてきたものじゃないか。ずっと傍にあったものじゃないか。手を伸ばせば触れられるところにそれはある。決して届かないものじゃないんだ。

ほら、感じてみて。

す、と目を閉じて精神を統一すると、懐かしいものが感じられる。そうだ。あの頃からわたしはひとりじゃなくなった。いつも誰かが傍にいた。いてくれたんだ。わたしの周りにはいつも温かい光があった。決して消えることのない、永遠の燈火。

わたし、思い出したの。

使命のためには自らの身の危険を顧みない一途なミラ。自分が大変なことに巻き込まれたのに他人のことばかり心配する、お節介なジュード。人見知りでなかなか人に馴染めないエリーゼ。その立ち振る舞いは紳士のようなけど、時々変なジョークを言って場を和ませてくれるムードメーカーのローエン。レイアはお転婆でせっかちで、それでいてお人好しだけど明るくてこっちまで元気にさせられる。

それで

わたしに手を差し伸べて、わたしを導いてくれた人。どこか飄々としていて掴めないけど、それでもいざというときは頼りになって、優しくて。いつもわたしを守ってくれた、アルヴィン。

行こう、あっちへ。

行きたい。今すぐみんなのところへ、帰りたい。

わたしは？わたし？の手を取る。もう離れたくないんだ。離したくない。こんな暗闇なんて、わたしがかつ消してやる。

？わたし？にらできるはず。思い出して、あの感覚を。みんなを守りたいと思った、あの時を。

誰も傷ついてほしくない。仲間がいない世界なんて、もういまのわたしには考えられない。わたしには、みんなが必要なんだ。

『悠久の気高き光の使者よ！全てを浄化し、闇を飲み込め！！！？
フェアリー・ジャッジメント？！！！！』

優しい光がわたしを包み込み、暗闇全体に七属性の光が墮ちる。するとある一点に、バシッ、とヒビが入った。わたしはそこ目がけて短剣を振り下ろす。

『壊れろおおお！！！！！！』

パリイイイン　と、闇が砕け散る。それと同時に、わたしの名を呼ぶあなたの声が聞こえた。

「ヴェリデー！！！！！！」

動く、とわたしは直ぐ様手を前に翳す。その手にマナを集め、水のイメージを巡らせ、放つ。

『　　？アクアレイザー？』

バシュウツ、と音を立てて炎が消える。わたしの翡翠の目はここに
いるすべての人影をしっかりと捉えた。

『……………』

す、と手を下ろし、岩壁を伝ってゆっくりと立ち上がる。しばらく
身体を動かしてなかったためか、ふらり、と視界が揺れた。顔を上

げてみんなを見回せば、信じられない、という表情をしている。

「お、前……」

か弱いアルヴィンの声が聞こえた。

ずっと聞きたかった愛する人の声。もっと、聞きたい。わたしの名前を、呼んで。わたしは、ここにいますよ。

『…おはよ』

にっこりと笑ったわたしのもとにアルヴィンが駆け寄って来て、わたしはぎゅうっと強く抱きしめられた。

「っ……」

『……痛いよ……』

「ヴェリテ……」

『なあに…アルヴィン……』

久々に触れる彼の温もり。懐かしいと感じる彼の香水の匂い。擦るブラウンの髪。わたしを呼ぶ愛しい声。わたしはずいぶん長く眠っていた気がする。

そんな中、攻撃に気づいたわたしは直ぐに防御壁を張った。

「ヴェリテっ！」

『甘いわよ、アグリア』

「ちっ…」

『感動の再会って場面でもないわね』

わたしはアルヴィンから離れて、軽く腕を伸ばした。うん、大丈夫。ちゃんと動けそう。

『状況、よくわかんないけど、みんながどうしたいか理解した。そ

こ、通してもらっわよ、アグリア、プレザ！」

「ハッ！さっきまでグース力寝てた癖に生意気いってんじゃねーぞ
！」

「通すわけにはいかないわ、お嬢さん」

ザッ、とみんなが戦闘態勢に入る。わたしの近くにはセルシウスの姿もある。ずっと傍にいてくれたのね、ありがとう。

『行くわよ！？アグリゲットシャープ？！！』

みんなの攻撃力を上げてから一気に畳み掛ける。息の合ったわたしたちの攻撃はふたりを圧倒し、深手を負わせた。

『？ジャツジメント？！！』

最後にわたしの精霊術が直撃し、ふたりは地面に膝をつく。久々の戦闘だったため、少し疲れた。セルシウスはわたしの身体のことを気遣ってか、姿を消した。そう言えばわたしのマナで現出してたん

だっけ。

「アル……」

その声に、ピクツ、と肩を跳ねさせるアルヴィン。

「たった数日間だったけど……あなたといられて幸せだった……」

「プレザ、俺は……」

ぎゅっ、とわたしはアルヴィンの袖を掴んだ。何も言わないで。行かないで、と想いをこめて。放っていったわたしが言えた義理じゃないけど。それを見たプレザが小さく笑った。

「よかった……アルヴィン。居場所……あなたにも、ちゃんとあるじゃない……」

直後、プレザたちがいる岩場が崩れ始める。隣のアールヴィンはそれ

をみて戸惑っていた。このままだと

『っ！！！！』

わたしは咄嗟に駆け出す。そしてギリギリで彼女の手を掴んだ。

「なっ……！？」

驚くアルヴィンの声が後ろから聞こえる。

「お嬢さん……どうして……」

『……わたし、一方的だけど……勝手に、あなたのこと……っ嫌ってる。
でも、死ぬのは、ちょっと違う気がする………生きてよ、プレザ
……っ』

怖い怖い怖い怖い。手が震える。やばい。このままじゃ手を離してしまえそう。どうして。どうしてプレザはわたしの手を握り返して

くれないの。

「……ありがとう、ヴェリテちゃん。でも、もう、ダメみたい……」

『ウソ！ちゃんと手を握ってよ！！っアルヴィン！！！！』

わたしの声にハツとしたアルヴィンがわたしの支える。お願いだからそんな悲しそうな顔しないで。諦めたような顔しないで。

「プレザ……」

「……ごめんなさい」

アルヴィンが手を伸ばした時、小さく呟いたプレザがわたしに殺気を向けて詠唱を始める。それを見たアルヴィンが咄嗟にわたしの体を引き寄せた。

『あ、っ……！！！！』

「……！！！！」

その反動でわたしの手からプレザの手がすり抜けてしまう。最後に
本当のプレザの笑顔を見たような気がした。

『……………』

助かる道はあったのに、どうしてあんなことをしたのかも、なんで
あんな風に笑ったのかも、わたしにはわからなかった。コッソ、と
アルヴィンに身体を預けて、小さく震えるわたし。

「怖い、のか…………？」

『…………前、言ったでしょ…………頂上で、落ちかけたって…………それと、
さっきの…………プレザたちが、被って…………』

だから助けたんだと思う。アグリアの方も折角レイアが掴んだのに、
離されたみたいだった。

『プレザ……笑ってた……、アルヴィン……』

「……ああ……」

そう言うと再び強く抱きしめられる。

『お願い……名前、呼んで……』

「……ヴェリテ」

『っ、もつと……』

「ヴェリテ……ヴェリテ……っ」

わたしを呼ぶあなたの声がわたしの心を落ち着かせてくれる。ごめん、ごめんね。わたし結局アルヴィンの傍にいれなかった。離れて初めてわかったんだ。

『もう、離れない……離したくない……っ』

「ああ、約束だ……」

もう失うのは嫌なの。目の前で命が奪われるのを、見たくない。手を離すのは嫌…

それからわたしは今まであったことを全部聞いた。ミュゼが二・アケリアを襲ったこと。ミラのこと。ジュードとアルヴィンが戦ったこと。ガイアスのこと。イバルのこと。そして今からマクスウェルに会いに行くということ。

「大丈夫か、ヴェリテ」

『うん、大丈夫……それより、一緒に、来てくれるよね、アルヴィン』

ジュードたちから話を聞き終えたわたしは座り込んでいるアルヴィンに、す、と手を差し伸べる。それを見たアルヴィンはきょとんとし、そして少しばかり眉を下げてジュードたちを見てから、やがてわたしの手を取り跪いた。

「姫の仰せのままに。俺はあなただけの傭兵ですから」

そう言つてわたしの手の甲にキスを落とした。クサイ台詞だつてわかつてゐるのに、どうしようもなく彼が愛おしくて。でもそれでも今はそんな時じゃないから、わたしはジュードたちを振り向く。

『ごめんね。わたし、我が儘で』

「ううん。ヴェリテが笑顔ならそれでいいよ」

「私も大丈夫だよ、ヴェリテ！」

「気にしてなどいません」

「わたしも…笑つてるヴェリテが好き、ですから……」

「でもほんとは嫌なんだよー」

「ティ、ティポ！」

慌ててティポの口を塞ぐエリー。仕方ないよね。エリーは正直で素直な性格だから。ほんと、わたし変わったな。

「行こう、みんな」

ジュードの言葉に頷いたわたしたちは歪みの前までやってきた。そこから底知れない精霊の力を感じた。

「奇跡的な霊勢ですね。わずかな変化で入り口が消えてしまいそうです。さまざまな偶然がこの場所を作り出したのでしょうか」

「精霊術を使う時の魔方陣に似てる」

「あ、言われてみれば」

確かに近しいものを感じた。でもなんだろう。それよりもずっと、わたしの力に似ているような…似てないような。悩んでいるとアルヴィンがわたしの肩に手を置いた。

「んなことより、ガイアスとミュゼの戦いで消えちまう前に行った方がいいかもな。俺から行くよ」

『何言ってるの。みんなで行くのよみんなで！ほら！』

わたしは一番に走り出し、その中に飛び込んだ。めっちゃ恐かった。

だって崖から飛び降りるようなものでしょう、あれ。死ぬかと思っ
た。まあちよつと変な感じはしたけど特に何ともなく、妙な空間に
辿り着く。直ぐにわたしに続いてアルヴィンたちもやって来た。

「おまえなあ！ちよつとは警戒しろよ！」

『あら。危ないものだったらもつと最初から警戒していてよ？』

「…はあ、つたく、心配するつつってんだよ…」

アルヴィンは頭を掻いてそう言う。わたしは小さく笑って、ありが
とう、と囁いた。そしてわたしたちは奥を目指す。きっとこのどこ
かにマクスウエルがいるはずだから。

手を伸ばせば、
触れられる距離にあなたがいる。

外面的には平気そうだけど

内面的にはめっさ恐いんだよ

あ、高所恐怖症の話ね ^ p ^

毎回コメント見る度によによ

してますありがとうございます！

わたしたちは

ただ前に進むだけ

止まることを許されない

奥へ奥へと進んでいき、わたしたちはとある空間へ出た。上を上げば空があり、下を見れば水面のような地面。ただどその上にわたしたちは立っている。辺りには疎らに歯車のようなものが地面に刺さっており、複雑に絡み合ってるものもあった。それを見回していると、ふ、と視線を感じ、わたしたちは振り向く。

「私が作り出した人間界と精霊界を繋ぐ唯一の途、世精ノ途」

そこにいたのは髭を長く生やした老人。世精ノ途というのはこの空間の名前なのだろう。

「あなたが…マクスウェル？」

ジュードが問いかければ彼は頷く。

「いかにも。私が精霊の主マクスウェル。ここまで来る人間がいるとは」

「あなたに聞きたいことがあるんだ」

ミラのことを教えてほしい。誰もがそう思っていた。どうしてミラがマクスウェルの身代わりにされていたのか、とわたしたちは問う。

「なるほど、お前たちがミラに供した者たちか」

「…僕はミラと出会って旅して…そして色々考えた…力のこと、なすべきこと…そしてミラが…ミラが…ミラが死んで…僕はようやく気付けた。僕がほんとうにやりたいこと！やらなきゃいけないことに！」

「…なんだそれは？」

ジュードは一步踏み出してマクスウェルを見据える。

「断界殻をなくして、リーゼ・マクシアもエレンピオスも助ける」

「なんと愚かな！外には黒匣があふれている。リーゼ・マクシアを滅ぼすつもりか！」

マクスウェルは一息置いてから、そうか、と再び話し出した。

「あやつの意図を読めずにおったが…今確信した……ミラが使命を忘れ、あのような真似をしたのはすべてお前たちのせいだったのだな！」

『違う！ミラは使命を忘れてはいなかった！！』

「何が違おうか。そして此度…お前たちは断界殻を消し去り、世界を滅ぼそうとしている」

わたしの言葉を耳にせず、マクスウェルはこちらを睨み付ける。話を聞いてと訴えるジュードの声もマクスウェルは聞かない。

「この破壊者どもめ！我が世界より消えよ！」

『消えない！！わたしたちにはやるべきことがあるから！！』

「分かっているのか！お前たちのやろうとしていることの意味が！」

みんなが武器を構える。

「わかっておりますとも。だからです！」

「だから、あなたにミラのことを聞きたかったの！」

「…リーゼ・マクシアの真実や、どうしてミラがエサといわれたのかをな」

しかしマクスウェルは答えない。それで何かが変わるのか、と見定めるようにわたしたちを見やる。

「そんなのわからないよ！でも、知らないままじゃ何も変わらないのはわかる！」

その言葉に彼は目を伏せ、やがてぼつりと話し出す。

「二千年前、この世に黒匣が登場した。精霊が死に、自然が絶え、人間も消えゆく運命の道へと進み始めたのだ。そこで黒匣から隠れるために、救えるだけの精霊、動物……マナを生み出せる人間たちを連れ、わたしはリーゼ・マクシアをつくり、籠った」

この世界はエレンピオスが滅びるまで降りることのない箱舟だと続けた。

「で、エレンピオスが滅びるのを待てって…か？」

「それがわたしたちと精霊さんを救う唯一の方法…なんですか」

マクスウェルはさも当たり前のように頷く。でもそうするとこのまじやエレンピオスの人たちが死んでしまふ、ということになる。

「私は、黒匣がやがて滅亡をもたらすと、同胞であつた人間に伝えさせた」

それでも人間は黒匣を捨てなかつたから今のエレンピオスがあるのだろう。

「それだけではない。奴ら精霊が絶滅しかかっていることを知ると、このリーゼ・マクシアを襲つた」

マクスウェルの言っていることは、二十年前、断界殻に穴が開いたときのことだと理解する。

「そこでここを離れられぬ私の代わりにミュゼを生み出し、敵殲滅の役目を与えた」

「だが、不運にもその時リーゼ・マクシアに入り込んでしまった奴らがいた……」

それがアルクノア。彼らはマクスウェルの追跡を逃れて潜伏したらしい。

「それ故、私は一計を案じた。彼の者たちは私の命が消えれば、断界殻も消えると知っている。ならば、その命をエサとすれば潜んだ獲物を釣り上げることができる、とな」

わたしはピクリ、と指を動かす。まさか、そのエサがミラだったということなのか。わたしの想いを代弁するようにマクスウェルからその真実が突きつけられる。

「あいつ、自分が偽者だなんて知ってたのか？」

「抜かりはない。私の言葉を植え付け、己がマクスウェルだと信じ込むよう育てさせた」

じゃあ、マクスウェルにとってミラは

「我が使命のための歯車」

ギリツ、と唇を噛みしめると、血の味が口の中に広がった。二十年もあなたの代わりにミラが戦っていたのに、なんとも思っていないのか。

「ふん。やはり変わらぬ。知ったところでお前たちがすることはいつも感情に任せて理解できないものを消し去ろうとするのだ！」

『あなたが精霊の主……？笑わせる……！』

わたしの言葉にマクスウェルの目が細められる。わたしはミラが大好きだった。そんなミラを……

『あなたなんかよりミラの方がずっと、ずっと精霊の主に相応しかった……！人も、精霊も、平等に助けようというミラの想い……！わたしはそんなミラに惹かれてここまで来た……！そんなミラを否定するあなたは、許せない……！』

「…お前にひとつ教えておいてやろう」

想いをぶつけるように叫ぶと、つい、とわたしに冷たい目が向けられた。

「十六年前、私はあるものを生み出した。精霊と人間が混ざりあう者を」

「精霊と、人間…？」

それを聞いたわたしの胸が、ドクン、と跳ねた。なんだろう。聞いてはいけない気がする。

「代々マクスウェルの巫子を務めると言われる家系に、双子の兄妹が生まれることとなった。その際にひとりの赤子に精霊の加護を捧げたのだ」

ダメ、聞いちゃいけない、と頭の中で警鐘が鳴っている。

「可笑しいとは思わなかったのか。何故ミラを自分と同じように感じたのか。何故無詠唱で力が使えるのか」

『…違う……』

「何も違うことは無い。お前の中には四分の一、特別な精霊の力が宿っているのだ。ミラと共に使命を遂行させるため、私が今のお前を」

一際心臓が大きく跳ねた。

『っ違う！！わたしは…っ、わたしは…！！！！！！』

わたしはわたしの力でここまで来た。ミラのため、仲間のためにここまで来たんだ。わたしは

『……作られた、人間……？』

ふ、と視界が揺れた。そうだ。確かに初めてミラと会った時、わたしは同じようなものをミラに感じた。さらに以前ミュゼに、わたしとあなたは似たような感覚があると言われたことがある。

「っヴェリテ！！！！」

「巡り踊れ地水火風、深奥に集いて我が鉄槌となれ！エレメンタルメテオ！」

ハッ、と気づいたときには遅かった。マクスウェルの攻撃を直に受けてしまい、わたしは後方へ吹っ飛ぶ。他のみんなもガードしきれなかったようで、地面へ倒れこんだ。

「わからんな。なぜ齒車をこのような者どもに狂わされたのだ」

「何言ってるの！」

「ミラとヴェリテはずっと変わらなかったよー！」

「バカな！」

ジュードたちは、ぐっ、と体を起こす。

「わからないんですか!？」

「そうだ!あなたは間違っている」

「何？」

アルヴィンがそつとわたしを抱き起してマクスウェルを見据える。

「おたくさ、本当にミラたちの親?ヴェリテは四分の一らしいけど」

「ええ、知らないようですね。ミラさんとヴェリテさんに限ってそのようなこと...」

「なんだ、お前たち!」

震えるわたしの体を、アルヴィンが支えてくれる。みんなの瞳には綺麗で強い想いが宿っていた。

「ミラが、ヴェリテが使命を見誤るなんて、みんな、ないって知ってるんだ!」

「では、あの行動はなんだというのだ。断界殻を消すなど使命ではない！」

「ミラは、ヴェリテは、みんなを助けるために命をかけたんだ。自分の心に従って、懸命に生きたんだよ！あなたのためなんかじゃない！」

ふ、と体の力が抜けた気がした。みんなはミラが、わたしがどんな存在でも受け入れてくれる。そんなこと、わかりきったことだったじゃない。

「戯言を！」

マクスウェルが叫んだ刹那、再び四属性の攻撃がわたしたちを襲う。やはり精霊の主と言うだけのことはある。力じゃかなわない。でも諦めるのだって、イヤ。

「何度立っても同じことよ！お前の命運は尽きた！もう終わったのだ！」

薄れる意識の中、ジュードが立ち上がっているのが見えた。

「何が終わったっていうんだ！あなたが決めることじゃない！」

「バカものめ！今のお前は立っているのがやっと。もう私に抗う力などないではないか！」

どれだけ攻撃を受けようと、ジュードは倒れない。彼はミラにもらったペンダントをぎゅっと握りしめる。

「…あるよ。僕は知ってる」

「なんだと？」

「諦めることを、僕は諦めない。ミラが、ヴェリテが教えてくれたことだ」

コツ、とジュードはマクスウェルに向かって歩き出す。なんとか起き上がってみる彼の背中には、いつのまにか大きくなって、頼もしいように感じた。

「理解できん…こやつ……き、消えよ！」

襲い来る激しい攻撃の中、ジュードは走る。

『最後の、最後まで…信じて、ジュード』

す、と目を閉じれば、感じられる。ジュードの想い、みんなの想い、そして

『ミ、ミラ…』

目を開ければ、懐かしい彼女の後姿。気高く、凜とした温かい感じ。間違いなくそれは、ミラだった。

わたしは、
わたし、だよな…

あとがきにちよつと自分なりにまとめ。
分かりにくいかもしれないですが
一応こんな感じに考えていました
箇条書き。

46（後書き）

- ・ヴェリテはマクスウェルに精霊の力を宿された人間。
- ・人体の四分の一は精霊の成分で構成されている。
- ・セルシウスが攻撃しなかったのも中の特別な精霊の力があつたから
- ・実はヴェリテだけ未熟児だったのだが精霊の力によって何事もなく生まれてきた。
- ・ミラの使命を手伝うように想いを植え付けたが、ヴェリテの自我が強くてそれは開花しなかった。
- ・ヴェリテは自分の意思でミラに付き添っていた。
- ・マナが特別なのも精霊と人間が混ざり合っているから。
- ・霊力野はもと人並み以上に発達していた。
- ・精霊の力がなくても普通に極力な術が使えてたと思う。
- ・回復術が使えないのはそのふたつの性質がマナを乱していたから。
- ・どっちかで言えば人間。
- ・因みにハーフではない。
- ・その精霊の力は

つてとこでまた次回に

ごめんなさいなんか自分でも分からなくなってきた
無茶振り設定ですね、はい。

だが貫き通す（、・・・）キリリッ

大丈夫

みんながいるから

戦える

目の前にいるのは、死んだと思っていたミラの姿だった。ウソ、と口元を押さえてわたしは涙を流す。幻じゃないよね。ちゃんと、そこにいるんだよね、ミラ。

『っミラ…っ』

ミラは一度こちらを振り向いてわたしを目にし、にっこりと笑った。それからジュードに歩み寄り、何も言うな、と人差し指を彼の口に当ててから、キツ、とマクスウェルに向き直った。

「すべてのものの未来を守るのが、マクスウェルの使命ではないのか？」

その声、その言葉、そのしぐさ。覚えてる。忘れるわけがない。

「なぜ…こんなことが… 四大が謀ったというのか…」

「迷ったな。それでは本来の力が出ないぞ」

直後、四大様の力によって傷がすべて癒された。わたしたちは顔を見合わせて頷き、ミラたちの元へと駆け寄る。

「き、きさま！」

チャ、とミラの刀の切っ先がマクスウェルに向けられた。

「さあ、ジュード。いくぞ！」

「うん！ミラ！」

わたしたちは各々武器を構える。恐れるものはなにもない。ミラがいる。みんながいる。それだけでわたしたちは強くなれるんだ。

『ミラ！』

「ついて来い、ヴェリテ！！」

『「？ラスターテンプレーション？！！」』

相手の弱点属性に反応し、武器に弱点属性の力が宿る。わたしとミラは踊るように敵を斬りつけていき、最後に無属性の大爆発を起こさせる。

「くう！！」

みんなの息の合った攻撃がマクスウェルを押ししていく。しかし彼から強い力を感じたわたしは直ぐにその場から離れた。

「結晶せよ、根源たる元素！メテオストーム！！」

無属性の巨大な力がわたしたちを襲う。このままじゃやられてしまう。わたしは、すう、と精神を統一させると、自分の中のマナをコントロールし、一気に放った。

『悠久の気高き光の死者よ！全てを浄化し、闇を飲み込め！！！？
フェアリー・ジャッジメント？！！！！』

七属性の光がマクスウェルの術を打ち消した。さっきの術で傷ついたみんなも回復し、再び彼に向かって行く。わたしたちは間違ってた。なんかいらない。すべての人を、精霊を助けないから断界殻を消すんだ。

『アルヴィン！』

「行くぜ、ヴェリテ！！」

『「？衝破十字字？！！！」』

やがてわたしとアルヴィンの共鳴術技でマクスウェルの動きが一瞬止まった。わたしは咄嗟にミラを振り向いて彼女の名を叫ぶ。するとミラに膨大なマナが集まってくのが感じられた。

「始まりの力、手の内に！我が導となり、こじ開ける！スプリームエレメンツ！」

各属性攻撃を繰り出し、トドメに四大属性の魔法陣から術を一斉砲撃する。それでマクスウェルの動きを完全に止めた。

『「ミラー！」』

戦闘が終わった直後、わたしとレイアとエリーは堪らなくなってミラに飛びついた。

「ヴェリテ、エリーゼ、レイア」

ああ、やっぱりミラだ。ここにいる。わたしたちの前に来てくれる。ちゃんと、触れられる…

「これほど嬉しいことにまた出会えるとは。長生きしてみるものですね」

「信じられねえ……けど、現実なんだよな」

「元気そうだな、二人とも」

ローエンとアルヴィンに向けてミラが言う。そして次にジュードに目を向けた。

「お帰り、ミラ」

「ただいま」

それからわたしの頭を、ぽんぽん、と撫でてくれた。すると倒れていたマクスウェルが起き上がるのが視界の端に映り、わたしたちは身構える。

「わからん…なぜだ…四大……どういつつもりだ」

その言葉に反応した四大様たちがマクスウェルの周りに現れる。

「すまぬ。俺はもう我慢ができなかった」

「うん。だから僕たちミラを助けちゃった。精霊界に連れて行つてね」

「そのような指示、出してはおらぬ」

「盟主。私たちに心があるように誰しもそれをもっています」

「道具扱いするのはダメだし。それが世界のためでもー」

さらに、ふわり、とセルシウスがわたしの隣に降り立った。そしてマクスウェルを見上げる。

「おまえ…セルシウスか…」

「私が今ここにいるのも彼らのおかげ。道具扱いされていた私を救ってくれた。彼らは世界を滅亡させようなどとは考えていない」

四大様とセルシウスの言葉を聞いたマクスウェルは黙り込んだ。

「マクスウェル、私の使命はあなたのものだったが、同時に私のものでもあった…」

「自らの意思……お前の心が決めた答えだというのか」

「うむ。そしてまた、ヴェリテもな」

ミラはわたしを横目で見やる。ふと思ったんだ。ミラはわたしのこ
と、知ってたんじゃないかって。最初からじゃないと思うけど、き
っとわかってたんだろう。

「あなたの言う世界は、ただ存在するためだけの世界に感じた。でも、それは生きるとは言わないんじゃないかな。僕は、僕たちは生きたいんだ」

生きられない世界なんて、わたしたちは要らない。生きられる、存在できる世界が欲しいんだ。

「それもお前の行動を解せぬ原因か。人の心は時として難解よ。それをないがしろにした結果、道をあやまったということか」

マクスウェルは、す、と目を開けわたしたちを見据える。

「……断界殻を解こう」

「本気なのか!？」

「断界殻を解けば、断界殻を形成していた膨大なマナを世界中に供給することができる」

そうすればしばらくの間世界中の精霊を守ることができ、数十年の猶予は稼げるという。それを聞いた四大様とセルシウスは笑って姿を消した。

「ありがとう。マクスウェル　考えるから！エレンピオスもリゼ・マクシアもみんな一緒に生きる方法を！」

ジュードがそう言った直後

「この世界の神に等しい座を降りるというのか。マクスウェル」

ガイアスの声が響いた。そちらを振り向けばガイアスがこちらに向かって歩いてくる。彼はミラとわたしを見た後、マクスウェルを見上げた。

「答える。マクスウェル」

「人の心に振り回されるのに、いいかげん疲れたのだ」

「お前がリーゼ・マクシアの神の座を降りるのであれば、俺がそこに座ろう」

その言葉にマクスウエルが目が細められる。

「ただの人間がマクスウエルになるだど？ 笑い話よ。貴様など資格を持たず」

「資格の有無ではない。資格を持った者だけが認められる話だ。お前がやらないのであれば、俺がやる」

「その話、私も認めるわけにはいかないな」

ミラが言うが、お前たちに認められる必要はない、と両断する。そして彼が見ると言わんばかりに指を刺すと、その先の空間が裂け、クルスニクの槍が現れた。その上にはガイアスと戦っていたはずのミュゼの姿。

「断界殻を消すなんてヒドイ！」

「マクスウエル、貴様は世界の礎となれ」

その言葉を合図にミュゼがマクスウェルをクルスニクの槍の先端に
磔にする。

「ミュゼ、来い」

ガイアスに呼ばれ、ミュゼは彼のもとへと降り立つ。そしてガイア
スはミュゼの胸の辺りにできた空間に手をつ込み、そこから剣を
抜きだした。

「これこそ、ミュゼの持つ力、時空を切り裂く剣だ」

その剣に宿る力。なんとなく、なんとなくだけどわたしと同じよう
なものが感じられた。

「俺は死んでいった者のためにもエレンピオスへ行く！お前たちは
リーゼ・マクシアで大人しくしているっ！」

ガイアスが剣を振るい斬撃を繰り出すと、それはわたしたちの後ろの空間を切り裂いた。強い引力がわたしたちを引きずり込もうとしている。

『っ エリー！』

わたしは咄嗟に近くのエリーに手を伸ばす。飛ばされないよう、エリーを抱えて地面にすがりつく。

『大丈夫、エリー！？』

「はい、なんとか…！」

「ヴェリテ！エリーゼ！」

きつとあそこに引き込まれたらもう二度とここには戻ってこれない気がする。そんなの、ダメ。

そう思った瞬間、頭の中で何かが繋がった。咄嗟にわたしは短剣に自分のマナを纏わせる。今のわたしの力なら、いける。

『はぁッ！！！』

斬撃を繰り出し、ガイアスが斬った反対側の空間を斬り裂いた。そこに小さい切れ目が入り、そして一気に大きな穴が開いた。

『よし！』

「何、どうなってるの！？」

自分でもよくわからなかったけど、これでいいんだと思う。近くに出来たためか、わたしの斬った空間の引力の方が強く、そちらに引っ張られる。わたしはエリーとして、かり手を繋いで立ち上がるとみんなに向かって叫ぶ。

『わたしを信じて！』

一番に頷いてくれたのは手を繋いでいるエリーだった。そしてわた

しは迷わずエリーと一緒にその空間へと飛び込んだ。

「っあいつ、また勝手に…!!」

「行くよ、アルヴィン！」

「え、ちょ、待てって…！」

仕方ないな、と溜め息を吐いてから、アルヴィンたちはヴェリテたちの後を追った。

自分が何者か、
わからなくなってきた…

ヴェリテが使ったのはエターナルソードの力ですね、はい。
つまりヴェリテの中の精霊の力は、オリジンのもの。多分
精霊の王と言うことで、精霊たちが慕ってたらしいです。
でも人間の立場的にミラに仕える者として生まれたから、ヴェリテ
＜四大。

余計わかりづらいですかね（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683x/>

交わる無限の哀色世界～テイルズオブエクシリア～

2011年10月10日15時39分発行